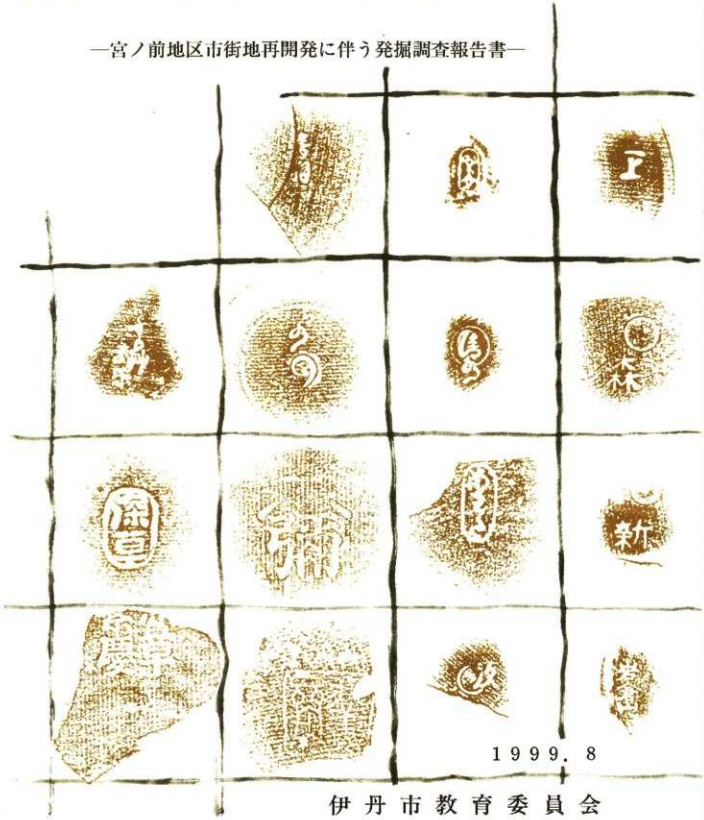
有岡城跡・伊丹郷町Ⅵ

—宮ノ前地区市街地再開発に伴う発掘調査報告書—

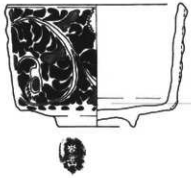


1999. 8

伊丹市教育委員会
大手前女子大学史学研究所

有岡城跡・伊丹郷町Ⅵ

—宮ノ前地区市街地再開発に伴う発掘調査報告書—



1999. 8

伊丹市教育委員会
大手前女子大学史学研究所

序

昭和62年（1987)、伊丹市の市街地再開発事業実施の前提として発掘調査が開始されてから13年、これに関する出土遺物の整理に並行して、平成５年度より報告書の刊行に向けての作業を始めてから、すでに６年を経過している。報告書は『有岡城跡・伊丹郷町』の名で平成７年３月に第１冊としてⅣを刊行し、以後隔年ごとに継続して本冊すなわちⅥをもって完了の運びとなった。

当初わが大手前女子学園が伊丹市から委託を受けたのは、市街地再開発事業の一環をなす発掘調査であったが、これと密着する伊丹郷町と有岡城跡との関係にはまだ不明な点が多く、これを解明しておく必要から、まず学内に有岡城跡調査委員会が設けられた。これには学園の藤井健造理事長が非常な熱意を示され、当時大学長であった日比野丈夫が委員長を委嘱された。平成２年度から学内に設立された史学研究所文化財調査室がその事業を受けつぎ、有岡城跡と伊丹郷町の調査に当たることになったのである。

伊丹は京都より西国に向かう西国街道の要地で、中世には伊丹氏の居城として知られたが、やがて織田信長の部将荒木村重が占拠し、実力をもって摂津の守護となり、天正２年（1574）伊丹城を有岡城と改名した。しかもその城廓は本丸・侍屋敷はもとより、町屋までも土塁をもって取り囲んだ、惣構えといわれる日本築城史上、画期的なものであった。当時ここを訪れたポルトガルの宣教師ルイス・フロイスは、その著『日本史』の中でこれを紹介し最高の讃辞を捧げている。ところが天正６年（1578)、荒木村重は突如信長に対して反乱を起こし、猛烈な攻撃を受けて翌年落城した。城郭は徹底的に破壊され、今日わずかに残っているのは、本丸（主廓）の一部のほか、惣構えの北端、猪名野神社（北の砦)、南端のひよどり塚砦が確認されるに過ぎない。今日の伊丹郷町は天正７年（1579）の落城後、主として惣構えの西側につくられ発展したものなのである。ここは伊丹の商工業地域としてもっとも早く発達し、町並も整備された。さらに近世になると酒造業が栄え、銘酒の産地として遠く関東にまで販路を拡張した。従って地下からは醸造用の米蒸しかまどや、大規模な倉庫のあとなども発見され、零細な出土品からもその裕福であった生活ぶりが想像されるのである。もともと日本では中近世都市の発掘は行われた例が少なく、この点からも今回の調査はとくに意義が深かったものと確信している。

調査開始いらい、発掘作業、報告書の作成、刊行はすべて兵庫県および伊丹市教育委員会の指導のもとに、本学の藤井直正教授が総括し、大手前栄養文化学院助教授川口宏海、前川　要（現富山大学人文学部助教授）がこれに当たった。現場の作業、報告書の作成、編集には、本学卒業生から成る調査員を中心に史学科学生が献身的に活動した。終わりに臨んで、今は亡き大手前女子学園理事長藤井健造先生、現理事長福井秀加先生、現大学長米山俊直先生に限りなき謝意を捧げるものである。

平成11年８月

大手前女子大学史学研究所長　日比野丈夫

例　　言

1．本書は、兵庫県伊丹市による宮ノ前地区市街地再開発事業に伴って、伊丹市宮ノ前１丁目・２丁目において実施した、有岡城跡伊丹郷町遺跡の発掘調査の報告書である。

2．現場における調査は、大手前女子大学史学研究所所長日比野丈夫（大手前女子大学前学長）を委員長とする「有岡城跡調査委員会」を組織し、大手前女子大学史学科教授藤井直正を調査担当者として、大手前女子学園が伊丹市の委託による事業として実施した。なお、これにかかる経費は委託料として伊丹市より支出を受けた。

3．本書に収めた調査は、第51次調査（昭和62年９月８日から昭和63年３月31日まで）の一部。第63次調査（昭和63年７月29日から昭和63年10月31日）の一部。第78次調査（平成元年６月23日から平成元年８月31日）の一部。第83次調査（平成元年10月17日から平成元年11月30日）。第86次調査（平成２年２月13日から平成２年３月13日）である。

4．現場における調査は、調査担当者である藤井直正の管理・指導のもとに、主任調査員として、川口宏海（大手前栄養文化学院助教授）・前川　要（当時、大手前女子大学研究嘱託、現在、富山大学人文学部助教授）、が専従した。また、調査員として、伊藤裕子・小笠原（旧姓荻野）典子・角田あゆみ・山上（旧姓熊田）真子（現在尼崎教育委員会嘱託）および事務員として谷田久美子・平井千保ら、大手前女子大学卒業生諸君の参加・協力を得、調査補助員とした。これら参加者の名簿は別項に掲げた。

5．調査資料並びに出土資料の整理作業は、川口宏海・前川　要と、その指導のもとに、調査員として赤松和佳・小出匡子・渡辺晴香・佐藤由美・大石　真、調査員補として石黒（旧姓岡松）弥恵・中村祐子によって、現場終了後、逐次、これも多数の学生の協力を得て進めてきた。

　資料整理および本報告書作成に向けての作業は、改めて平成５年度より６カ年継続事業の一部として伊丹市教育委員会より委託を受けた。

6．本整理作業の作成は、整理担当者毎にまとまった調査域を２年毎に３回に分けて順次報告することとしているが、今回の報告は、その内のⅢ期分にあたる。

7．本報告書の作成は企画段階で藤井直正の指導・助言のもとに、原稿の執筆と編集の作業には出土資料の整理にあたった主任調査員及び調査員の全員が担当し、学生諸君多数の協力によって進めた。原稿の執筆分担については、目次に明記した通りである。また、第51・63・66・164次調査貝類の分析については富岡直人氏（岡山理科大学理学部講師）にお願いし、玉稿を賜った。第51次調査の骨の分析については、沖田絵麻氏（岡山理科大学大学院修士課程）にお願いし、玉稿を賜った。第51次調査の埋甕に残存する脂肪の分析については中野益男（帯広畜産大学生物資源化学科）、中野寛子氏・長田正宏氏（㈱ズコーシャ総合化学研究所）にお願いし、玉稿を賜った。扉図版解説（岩倉焼陶器筒型碗）については岡佳子氏（大手前女子大学講師）にお願いし、玉稿を賜った。

8．遺構写真は川口・前川・小笠原・角田・山上、遺物写真は、小出・渡辺・佐藤がそれぞれ撮影した。

9．一般的な土壙については、予算の都合上個別遺構図を掲載しなかった。よって、遺構全体図（付図）と主要遺構一覧表（表６）を参照していただきたい。

10．遺構表示記号は、奈良国立文化財研究所の用例に従ったが、一部独自のものを使用した。

　ＳＡ　柵，ＳＢ　建物，ＳＤ　溝，ＳＥ　井戸，ＳＩ　胞衣壷，ＳＫ　土壙，ＳＰ　柱，ＳＳ　礎石，

SU　埋桶，SV　甕，SW　埋甕，SY　水琴窟，SX　その他

11. 位置の掲載は、平面直角座標系Ⅴによる。建設省基本点・基準点・および伊丹市公共基準点（旧市立社会経済会館前の水準点№14の最新水準値、昭和53年のO.P.＝16.640mを用いてT－8まで引き、後に順に水準値を与えた）を使用し、記載している数値は、X・Yともm単位で、水準はO.P.(大阪湾中等潮位）である。

12. 遺構の色調については、『新版・標準土色帖』(農林水産技術会議事務局昭和51年)、遺物については、『新版・標準土色帖』と『日本色研色名帖』((財)日本色彩研究所）を併用し、全て肉眼観察によって比定した。本文の遺構図のうち、壁面土層図は1/60、建物は主に1/120、埋甕・埋桶は1/10・1/20・1/40、その他は1/60・1/30にした。

また、壁面土層図については、焼土層、炭火物層、漆喰、コンクリート、石・瓦のスクリーントーンを使って表した。

13. 遺物の絵付けにおいては、赤色（朱色）、薄朱色、桃色、緑色、黄緑色、茶色、黄色、青色、紫色、黒色、金色のスクリーントーンを使って表した。瓦質土器は断面に　のスクリーントーンを使って表した。

本文中の遺物図のうち屋瓦は1/4、銭貨は1/2、大型製品は1/6・1/8、その他は1/3にした。

14. 現場における発掘調査の実施に当たっては、伊丹市再開発事務所関係者諸氏、および平成9年度から約3カ年にわたる資料整理に至るまで、伊丹市教育委員会生涯学習部・文化財担当各位の指導と助言を得たほか、株式会社染ノ川組、西村興業株式会社、写測エンジニアリング株式会社、イビソク株式会社の協力、その他多くの機関と多くの人々の援助を受けた。

さらに、大手前女子学園藤井建造前理事長（平成3年2月10日逝去)、現福井秀加理事長、大手前女子大学日比野丈夫前学長、現大手前女子大学米山俊直学長、企画・運営委員会諸先生には、調査の進行から本報告書の刊行に至るまで指導・助言と各方面にわたってご配慮を得た事を付記する。

15. 今回の報告書作成にあたり、多くの方々、および機関のご協力、ご教示を賜ったが、ここに、関係各氏の芳名を載せ、謝意を表する。なお、敬称は略させて頂いた。

石川　道子（伊丹市立博物館）
大橋　康二（佐賀県教育庁）
沖田　絵麻（岡山理科大学大学院修士課程）
鹿取　秀雄（日本貝類学会評議委員）
久保　和士（大阪市文化財協会）
鳴谷　和彦（堺市立埋蔵文化財センター）
鈴木　裕子（日本考古学協会員）
田中　賢人（三田市教育委員会）
長田　正宏（㈱ズコーシャ総合化学研究所）
中野　益男（帯広畜産大学）
乗岡　　実（岡山市教育委員会）
堀内　秀樹（東京大学遺跡調査研究室）
森村　健一（堺市立埋蔵文化財センター）
稲垣　正宏（財団法人滋賀県文化財保護協会）
岡　　佳子（大手前女子大学）
小長谷正治（伊丹市教育委員会）
紀平　　肇（清風学園）
小坂　浩一（伊丹市役所再開発部都市再開発事務所）
下村　節子（財団法人枚方市文化財研究調査会）
鈴田由紀夫（佐賀県立九州陶磁文化館）
富岡　直人（岡山理科大学）
中野　寛子（㈱ズコーシャ総合化学研究所）
中野　雄二（波佐見町教育委員会）
藤原　友子（佐賀県立九州陶磁文化館）
村上　伸之（有田町歴史民俗資料館・有田焼参考館）
和島恭仁雄（伊丹市立博物館）

本 文 目 次

序……伊丹市教育委員会教育長　乾　一雄…… i
序……大手前女子大学史学研究所所長　日比野丈夫…… iii
例　言 …… v

第1章　調査の経過……（藤井）…… 1

第2章　調査方法……（川口）…… 4

第1節　調査区割と図面割 …… 4
第2節　基準点と水準点の設置…… 4
第3節　調査の方法 …… 4

第3章　調査の成果…… 6

第1節　有岡城跡・伊丹郷町遺跡の時期区分について …… 6
第2節　第51次調査B－1－2区 ……（赤松）…… 6
1．基本層序 …… 6
2．第3次面の遺構と遺物 …… 6
3．第2次面の遺構と遺物 …… 10
4．第1次面の遺構と遺物 …… 10
5．ま と め …… 11
第3節　第51次調査B－1－3区 ……（赤松）…… 12
1．基本層序 …… 12
2．第3次面の遺構と遺物 …… 12
3．第2次面の遺構と遺物 …… 18
4．第1次面の遺構と遺物 …… 20
5．ま と め …… 23
6．第86次調査トレンチ調査 …… 25
第4節　第63次調査B－4区……（赤松）…… 27
1．基本層序 …… 29
2．第4次面の遺構と遺物 …… 29
3．第3次面の遺構と遺物 …… 34
4．第2次面の遺構と遺物 …… 40
5．第1次面の遺構と遺物 …… 45
6．ま と め …… 51

図・表目次

（調査方法）

第１図　５ｍ方眼割図 …… 4
第２図　有岡城跡・伊丹郷町調査区割図 …… 5

（第51次調査Ｂ－１－２区）

第３図　調査地点位置図 …… 7
第４図　Ｂ－１－２区南壁土層図 …… 9
第５図　Ｂ－１－２区西壁土層図 …… 9
第６図　ＳＫ754（１）・ＳＶ01（２・３）・ＳＫ734（４）出土遺物 …… 10

（第51次調査Ｂ－１－３区）

第７図　Ｂ－１－３区南壁土層図 …… 13
第８図　Ｂ－１－３区東壁土層図 …… 15
第９図　ＳＤ05遺構図 …… 16
第10図　ＳＫ223（１・２）・ＳＫ242（４・５）・ＳＫ220（３・６～11）出土遺物 …… 17
第11図　ＳＤ04遺構図 …… 18
第12図　ＳＫ192（１）・ＳＫ138（２～８・11）・ＳＫ200（９・10）出土遺物 …… 19
第13図　ＳＢ01遺構図 …… 20
第14図　ＳＢ02遺構図 …… 21
第15図　ＳＢ03遺構図 …… 22
第16図　ＳＫ91遺構図 …… 23
第17図　ＳＫ217（１～11）・ＳＫ91（12）出土遺物 …… 24
第18図　ＳＵ01・02遺構図 …… 25
第19図　ＳＵ02（１）・ＳＫ33（２）・ＳＫ70（３）・第１次面包含層（４）出土遺物 …… 25
第20図　第86次トレンチ調査Ａトレンチ東壁土層図 …… 26
第21図　第86次トレンチ調査Ｂトレンチ東壁土層図 …… 26

（第63次調査Ｂ－４区）

第22図　Ｂ－４区北壁土層図 …… 27
第23図　Ｂ－４区東壁土層図 …… 30
第24図　ＳＢ04遺構図 …… 30
第25図　ＳＰ214（１）・ＳＰ222（２）出土遺物 …… 31
第26図　ＳＫ236（１～３）・ＳＫ260（４）出土遺物 …… 32
第27図　ＳＫ260出土遺物 …… 33
第28図　ＳＥ04遺構図 …… 34
第29図　ＳＥ04出土遺物（１） …… 35
第30図　ＳＥ04出土遺物（２） …… 36
第31図　ＳＷ07遺構図 …… 37
第32図　ＳＷ07（１）・ＳＫ156（２～５）・ＳＫ196（６～８）出土遺物 …… 38
第33図　ＳＫ135出土遺物 …… 40
第34図　ＳＢ05遺構図 …… 41
第35図　ＳＹ02遺構図 …… 41
第36図　ＳＵ01遺構図 …… 41
第37図　ＳＷ06遺構図 …… 42
第38図　ＳＹ02（１）・ＳＷ06（２）出土遺物 …… 43
第39図　ＳＵ01（１～４）・ＳＫ69（５～９）出土遺物 …… 44
第40図　ＳＫ69出土遺物 …… 45
第41図　ＳＫ70（１～５・７～９）・ＳＫ71（６・10）出土遺物 …… 46
第42図　ＳＫ93（１・２・４・５）・ＳＶ01（３）出土遺物 …… 47
第43図　ＳＢ01遺構図 …… 48
第44図　ＳＢ02・03遺構図 …… 48
第45図　ＳＹ01遺構図 …… 49
第46図　ＳＹ01出土遺物 …… 49
第47図　ＳＷ05遺構図 …… 50
第48図　ＳＷ01・02・03・04遺構図 …… 51
第49図　ＳＷ05（１）・ＳＷ03（２）・ＳＷ04（３）・ＳＷ02（４）出土遺物 …… 52

（第63次調査Ｂ－６区）

第50図　Ｂ－６区東壁土層図 …… 55
第51図　ＳＢ05遺構図 …… 56
第52図　ＳＥ02遺構図 …… 56

第53図　ＳＥ01遺構図 …… 56
第54図　ＳＥ02（１～11・18）・ＳＫ115（12）・
ＳＥ01（13～17）出土遺物 …… 57
第55図　ＳＵ02遺構図 …… 58
第56図　ＳＸ109遺構図 …… 59
第57図　ＳＡ01遺構図 …… 60
第58図　ＳＶ05・06遺構図 …… 61
第59図　ＳＤ06遺構図 …… 61
第60図　ＳＫ60（１・２）・ＳＫ63（３～５・12）・
ＳＫ81（６～９）・ＳＤ06埋土（10・11）
出土遺物 …… 62
第61図　ＳＫ71出土遺物 …… 63
第62図　ＳＢ04遺構図 …… 64
第63図　ＳＶ01・02・03遺構図 …… 66
第64図　ＳＷ05遺構図 …… 67
第65図　ＳＷ06遺構図 …… 67
第66図　ＳＷ05（１）・ＳＷ06（２）出土遺物… 68
第67図　ＳＢ02遺構図 …… 70
第68図　ＳＢ03遺構図 …… 70
第69図　ＳＩ07遺構図 …… 70
第70図　ＳＷ01・02・03・04遺構図 …… 71
第71図　ＳＶ02（１）・ＳＫ47（２～４）・ＳＫ49
（５・６）・ＳＩ07（９・10）・ＳＷ04掘形
（７・８）・ＳＷ04（11）出土遺物 …… 72
第72図　ＳＷ01出土遺物 …… 73
第73図　ＳＷ02（１・２）・ＳＷ03（３・４）
出土遺物 …… 74
第74図　ＳＫ14（１～７）・表採（８）出土遺物 … 75

（第78次調査Ｂ－７区）

第75図　Ｂ－７区西壁土層図 …… 79
第76図　Ｂ－７区南壁土層図 …… 79
第77図　ＳＤ04遺構図 …… 80
第78図　ＳＤ03遺構図 …… 81
第79図　ＳＵ01・02遺構図 …… 81
第80図　ＳＤ04（１・２）・ＳＤ03（４・５）・ＳＫ
10（６・７）・ＳＫ12（３・８～10・12）・
ＳＵ02（11）出土遺物 …… 82

（第83次調査Ｂ－９区）

第81図　Ｂ－９区北壁土層図 …… 85
第82図　ＳＤ17遺構図 …… 86
第83図　ＳＤ17（１）・ＳＫ97（２）・ＳＫ98
（３～７）・ＳＫ100（８～10）・ＳＫ93上層
（11）出土遺物…… 87
第84図　ＳＶ01・02・03遺構図 …… 88
第85図　ＳＶ03（１）・ＳＫ45（２～５・７・８）・
ＳＫ24（６・９・10）出土遺物 …… 90
第86図　ＳＫ17（１～４）・ＳＵ01掘形（５・６）・
ＳＵ01（７）出土遺物 …… 91
第87図　ＳＢ01遺構図 …… 91
第88図　ＳＵ01遺構図 …… 92
第89図　ＳＤ01遺構図 …… 92
第90図　ＳＤ01埋土出土遺物 …… 93

（第83次調査Ｂ－10区）

第91図　Ｂ－10区北壁土層図 …… 96
第92図　Ｂ－10区東壁土層図 …… 97
第93図　ＳＤ13遺構図 …… 97
第94図　ＳＤ14遺構図 …… 98
第95図　ＳＫ87遺構図 …… 99
第96図　ＳＤ07・10遺構図 ……100
第97図　ＳＤ13（１～４）・ＳＤ14（５～７）・
ＳＫ87（８～11）・第４次面精査時（12）・
ＳＵ03（13・14）・ＳＵ04（15・16）・
ＳＫ58（17）出土遺物 ……101
第98図　ＳＡ01遺構図 ……102
第99図　ＳＩ02遺構図 ……102
第100図　ＳＵ02遺構図……103
第101図　ＳＩ02（１・２）・ＳＵ01（３）・ＳＵ02
（４）・ＳＫ38（５・６）・ＳＫ41
（７～11）出土遺物……104
第102図　ＳＷ01遺構図……105
第103図　ＳＷ01出土遺物……106

（第86次調査Ｂ－11－１区）

第104図　Ｂ－11－１区西壁・北壁土層図……109

第105図　ＳＤ08遺構図……111
第106図　ＳＤ07遺構図……112
第107図　ＳＤ05遺構図……113
第108図　ＳＤ06遺構図……113
第109図　ＳＤ05（１・２）・ＳＤ06（３）・ＳＤ07（４）・ＳＤ08（５・６）・ＳＫ71（７・８）・ＳＫ45（９～11）出土遺物……114
第110図　ＳＥ02遺構図……114
第111図　ＳＵ01・02遺構図……115
第112図　ＳＵ03遺構図……115
第113図　ＳＥ02（１～６）・ＳＵ02（７）出土遺物……116
第114図　ＳＵ03（１～４）・第１次面精査時（５）出土遺物……117
第115図　ＳＤ04遺構図……118
第116図　ＳＤ04掘形（１・２）・ＳＤ04埋土（３）・ＳＫ17（４～10）出土遺物……119
第117図　ＳＫ20出土遺物（１）……119
第118図　ＳＫ20出土遺物（２）……121
第119図　ＳＫ03出土遺物（１）……122
第120図　ＳＫ03出土遺物（２）……123

（第86次調査Ｂ－11－２区）

第121図　Ｂ－11－２区北壁土層図……126
第122図　ＳＡ01遺構図……127
第123図　ＳＫ16（１）・ＳＫ17（２）・ＳＤ06（３・４）・ＳＫ05（５～８）出土遺物……128
第124図　ＳＵ03遺構図……129
第125図　ＳＤ06遺構図……129
第126図　ＳＸ01・02・03・04・05・06遺構図…130
第127図　ＳＫ12（１～７）・ＳＸ05（８）出土遺物……130

（第86次調査Ｂ－12区）

第128図　Ｂ－12区北壁・東壁土層図……135
第129図　ＳＶ01遺構図……137
第130図　ＳＥ02・03遺構図……137
第131図　ＳＰ12（１・２）・ＳＶ01（３）・ＳＥ03（４～７）出土遺物……138
第132図　ＳＥ02出土遺物……138
第133図　ＳＹ01遺構図……139
第134図　ＳＹ01出土遺物……139
第135図　ＳＫ66出土遺物……141
第136図　ＳＫ132（１～６）・ＳＫ94（７・８）出土遺物……143
第137図　ＳＥ01遺構図……144
第138図　ＳＥ01出土遺物……144
第139図　ＳＩ04遺構図……145
第140図　ＳＩ05遺構図……145
第141図　ＳＵ01遺構図……146
第142図　ＳＵ02遺構図……147
第143図　ＳＷ01遺構図……147
第144図　ＳＷ02遺構図……147
第145図　ＳＩ04（１・２）・ＳＩ05掘形（３）・ＳＩ05（４・５）・ＳＷ01（６）・ＳＷ02（７）出土遺物……148
第146図　ＳＤ01遺構図……149
第147図　ＳＤ01掘形（１）・ＳＤ01埋土（２）・ＳＫ02（３～５）出土遺物……150
第148図　ＳＫ30（１～３）・ＳＫ39（４～11）出土遺物……151
第149図　ＳＫ24（１～４）・ＳＫ31（５・６）出土遺物……152
第150図　ＳＫ06（１～19）・表採（20）出土遺物…155

（伊丹郷町出土遺物の分析結果）

表１　貝類出土遺構一覧表……158
第151図　貝類出土遺構の調査地点……158
第152図　イヌ出土部位……160
第153図　解体痕のある骨……161
写真１　イヌ遺存体ほか……165
写真２　解体痕のある骨……166
写真３　解体痕のある骨……167
表２　第51次調査Ｄ－２区ＳＤ401出土　イヌ・ネズミ類部位別一覧表（１）（２）……168
表３　有岡城跡・伊丹郷町イヌ骨格計測値…169
第154図　第51次調査Ｂ－１－１区第２次面……170
表４　試料の残存脂肪抽出量……171

第155図　試料中に残存する脂肪の脂肪酸組成…172
第156図　試料中に残存する脂肪のステロール組成 ……172
表5　試料中に分布するコレステロールと
　　ステロール割合……173
第157図　試料中に残存する脂肪の脂肪酸組成
　　樹状構造図……173
第158図　試料中に残存する脂肪の脂肪酸組成
　　による種特異性相関……174

（結語）

第159図　伊丹郷町古絵図（1）（八木哲浩1982年）…177
第160図　伊丹郷町古絵図（2）（八木哲浩1982年）…178
第161図　B－1－2・B－1－3・B－6・
　　B－7・B－11－1・B－11－2区
　　遺構変遷図（1）……179
第162図　B－1－2・B－1－3・B－6・
　　B－7・B－11－1・B－11－2区
　　遺構変遷図（2）……180
第163図　B－4・B－9・B－10・B－12区
　　遺構変遷図……182
表6　主要遺構一覧表（1）～（4）……186
表7　各調査区主要遺構年代表（1）（2）…190
表8　遺物計測遺構一覧表……195
表9　Ⅲ―2ａ期遺構　碗・皿比率……197
表10　伊丹郷町遺物計測基礎データ（1）～（6）…202
第164図　B－6区SE02・B－12区SK66
　　産地別・用途別構成比グラフ（1）…208
第165図　B－4区SK69・B－6区SE01
　　産地別・構成比グラフ（2）……209
第166図　B－9区SK98・B－12区SE03
　　産地別・用途別構成比グラフ（3）…210
第167図　B－4区SE04・B－2－1区SK479
　　産地別・用途別構成比グラフ（4）…211
第168図　D－6区SP507・B－2－1区SK461
　　産地別・用途別構成比グラフ（5）…212
第169図　D－6区SK428・B－2－1区SK455
　　産地別・用途別構成比グラフ（5）…213
第170図　表紙図版の刻印配列図……217
表11　表紙所載刻印一覧表 …… 218
写真4　古清水色絵孔雀羽根文筒茶碗 …… 219
写真5　刻印 …… 219

付　　図

付図1　第51次調査B－1－2区遺構全体図
付図2　第51次調査B－1－3区遺構全体図
付図3　第63次調査B－4区遺構全体図
付図4　第63次調査B－6区遺構全体図
付図5　第78次調査B－7区遺構全体図
付図6　第83次調査B－9区遺構全体図
付図7　第83次調査B－10区遺構全体図
付図8　第86次調査B－11－1区遺構全体図
付図9　第86次調査B－11－2区遺構全体図
付図10　第86次調査B－12区遺構全体図

図 版 目 次

図版１　有岡城跡・伊丹郷町遺跡航空写真
１．昭和23年
２．昭和36年
図版２　第51次調査Ｂ－１－２区遺構（１）
１．第51次調査Ｂ－１－２区第３次面全景
２．第51次調査Ｂ－１－２区第２次面全景
図版３　第51次調査Ｂ－１－２区遺構（２）・遺物（１）
１．第51次調査Ｂ－１－２区第１次面全景
２．ＳＶ01
３．ＳＫ754
４．ＳＫ754・ＳＶ01・ＳＫ734
図版４　第51次調査Ｂ－１－３区遺構（１）
１．第51次調査Ｂ－１－３区第３次面全景
２．第51次調査Ｂ－１－３区第２次面全景
図版５　第51次調査Ｂ－１－３区遺構（２）
１．第51次調査Ｂ－１－３区第１次面全景
２．ＳＤ05
３．ＳＤ04
図版６　第51次調査Ｂ－１－３区遺構（３）
１．ＳＢ01
２．ＳＢ03
３．ＳＵ01・02
４．ＳＫ91
５．ＳＫ70・ＳＫ192
６．ＳＵ03
図版７　第51次調査Ｂ－１－３区遺物（１）
ＳＫ223・ＳＫ242・ＳＫ220・ＳＫ192・ＳＫ138
図版８　第51次調査Ｂ－１－３区遺物（２）
ＳＫ138・ＳＫ200・ＳＫ217・ＳＫ91・ＳＵ02・ＳＫ33・ＳＫ70・第１次面包含層出土遺物・第２次面包含層出土遺物
図版９　第63次調査Ｂ－４区遺構（１）
１．第63次調査Ｂ－４区第４次面全景
２．第63次調査Ｂ－４区第３次面全景
図版10　第63次調査Ｂ－４区遺構（２）
１．第63次調査Ｂ－４区第２次面全景
２．第63次調査Ｂ－４区第１次面全景
図版11　第63次調査Ｂ－４区遺構（３）
１．ＳＢ04
２．ＳＥ04
３．ＳＷ07
４．ＳＢ05
５．ＳＹ02
６．ＳＵ01
図版12　第63次調査Ｂ－４区遺構（４）
１．ＳＷ06
２．ＳＫ69
３．ＳＢ01
４．ＳＢ02
図版13　第63次調査Ｂ－４区遺構（５）
１．ＳＢ03
２．ＳＶ01
３．ＳＷ05
４．ＳＹ01上面
５．ＳＹ01下面
６．ＳＷ01・02
７．ＳＷ03・04
図版14　第63次調査Ｂ－４区遺構（６）
１．ＳＷ01・ＳＷ02・ＳＷ03・ＳＷ04
図版15　第63次調査Ｂ－４区遺物（１）
ＳＰ214・ＳＰ222・ＳＫ236・ＳＫ260
図版16　第63次調査Ｂ－４区遺物（２）
ＳＥ04・ＳＷ07
図版17　第63次調査Ｂ－４区遺物（３）
ＳＫ156・ＳＫ196・ＳＫ135・ＳＹ02・ＳＷ06・ＳＵ01
図版18　第63次調査Ｂ－４区遺物（４）
ＳＫ69上層・ＳＫ69・ＳＫ70・ＳＫ71・ＳＫ93・ＳＫ44
図版19　第63次調査Ｂ－４区遺物（５）
ＳＹ01・ＳＷ05・ＳＷ03・ＳＷ04・ＳＷ02・ＳＰ

214・ＳＰ222・ＳＰ223・ＳＫ186・ＳＫ70
図版20　第63次調査Ｂ－６区遺構（１）
１．第63次調査Ｂ－６区第４次面全景
２．第63次調査Ｂ－６区第３次面全景
図版21　第63次調査Ｂ－６区遺構（２）
１．第63次調査Ｂ－６区第２次面全景
２．第63次調査Ｂ－６区第１次面全景
図版22　第63次調査Ｂ－６区遺構（３）
１．ＳＰ105
２．ＳＥ02
３．ＳＥ01
４．ＳＵ02
５．ＳＸ109
６．ＳＡ01
７．ＳＶ05・06
図版23　第63次調査Ｂ－６区遺構（４）
１．ＳＤ06
２．ＳＵ01
３．ＳＢ04
４．ＳＶ01・02・03
５．ＳＷ05
６．ＳＷ06
７．ＳＢ01
８．ＳＢ01・02
図版24　第63次調査Ｂ－６区遺構（５）
１．ＳＢ03
２．ＳＩ07
３．ＳＷ01・02・03・04
図版25　第63次調査Ｂ－６区遺物（１）
ＳＥ02・ＳＥ01・ＳＫ115・ＳＫ60・ＳＫ63・ＳＫ60下層・ＳＫ81・ＳＤ06
図版26　第63次調査Ｂ－６区遺物（２）
ＳＫ81・ＳＫ63・ＳＫ71・ＳＷ05・ＳＷ06・ＳＶ02・ＳＫ47・ＳＫ49
図版27　第63次調査Ｂ－６区遺物（３）
ＳＫ47・ＳＫ49・ＳＷ04掘形・ＳＩ07・ＳＷ04・ＳＷ01・ＳＷ02・ＳＷ03
図版28　第63次調査Ｂ－６区遺物（４）
ＳＫ14・表採遺物・ＳＫ47・ＳＫ18・ＳＫ15
図版29　第78次調査Ｂ－７区遺構（１）
１．第78次調査Ｂ－７区第４次面全景
２．第78次調査Ｂ－７区第３次面全景
３．第78次調査Ｂ－７区第２次面全景
４．第78次調査Ｂ－７区第１次面全景
５．ＳＤ04
６．ＳＤ03
７．ＳＵ01
８．ＳＵ02
図版30　第78次調査Ｂ－７区遺物（１）
ＳＤ04・ＳＤ03・ＳＫ10・ＳＫ12・ＳＵ02・ＳＫ16
図版31　第83次調査Ｂ－９区遺構（１）
１．第83次調査Ｂ－９区第４次面全景
２．第83次調査Ｂ－９区第３次面全景
図版32　第83次調査Ｂ－９区遺構（２）
１．第83次調査Ｂ－９区第２次面全景
２．第83次調査Ｂ－９区第１次面全景
図版33　第83次調査Ｂ－９区遺構（３）
１．ＳＤ17
２．ＳＤ03
３．ＳＫ100・98
４．ＳＶ01・02・03
５．ＳＢ01
６．ＳＢ02
７．ＳＵ02・01
８．ＳＤ01
図版34　第83次調査Ｂ－９区遺物（１）
ＳＤ17・ＳＫ98・ＳＫ100・ＳＫ93上層・ＳＫ97・ＳＶ03・ＳＫ45
図版35　第83次調査Ｂ－９区遺物（２）
ＳＫ45・ＳＫ24・ＳＫ17・ＳＵ01掘形・ＳＵ01・ＳＤ01埋土
図版36　第83次調査Ｂ－10区遺構（１）
１．第83次調査Ｂ－10区第４次面全景
２．第83次調査Ｂ－10区第３次面全景
図版37　第83次調査Ｂ－10区遺構（２）
１．第83次調査Ｂ－10区第２次面全景

2．第83次調査Ｂ－10区第１次面全景
図版38　第83次調査Ｂ－10区遺構（３）
1．ＳＫ87焙焙出土状況
2．ＳＤ07
3．ＳＤ10
4．ＳＡ01
5．ＳＩ02
6．ＳＵ02
7．ＳＷ01
8．ＳＷ01下層
図版39　第83次調査Ｂ－10区遺物（１）
ＳＤ13・ＳＤ14・ＳＫ87・第４次面精査時・ＳＵ03・ＳＵ04・ＳＫ58・ＳＩ02・ＳＵ01・ＳＵ02下層・ＳＫ38
図版40　第83次調査Ｂ－10区遺物（２）
ＳＫ41・ＳＷ01・第２次面精査時
図版41　第86次調査Ｂ－11－１区遺構（１）
1．第86次調査Ｂ－11－１区第２次面全景
2．第86次調査Ｂ－11－１区第１次面全景
図版42　第86次調査Ｂ－11－１区遺構（２）
1．ＳＤ05・07・08
2．ＳＤ06
3．ＳＥ02
4．ＳＵ01・02
5．ＳＤ04
6．ＳＵ03
図版43　第86次調査Ｂ－11－１区遺物（１）
ＳＤ05・ＳＤ06・ＳＫ71・ＳＤ07・ＳＤ08・ＳＫ45・ＳＥ02・ＳＵ02・ＳＤ04掘形・ＳＤ04埋土・ＳＫ17
図版44　第86次調査Ｂ－11－１区遺物（２）
ＳＫ17・ＳＫ20・ＳＫ03
図版45　第86次調査Ｂ－11－１区遺物（３）
ＳＵ03・第１次面精査時・ＳＫ04
図版46　第86次調査Ｂ－11－２区遺構（１）
1．第86次調査Ｂ－11－２区第２次面全景
2．第86次調査Ｂ－11－２区第１次面全景
図版47　第86次調査Ｂ－11－２区遺構（２）
1．ＳＡ01・ＳＤ08
2．ＳＵ03
3．ＳＤ06
4．ＳＸ01～06
図版48　第86次調査Ｂ－11－２区遺物（１）
ＳＫ16・ＳＫ17・ＳＤ06・ＳＫ05・ＳＫ12・ＳＸ05
図版49　第86次調査Ｂ－12区遺構（１）
1．第86次調査Ｂ－12区第２次面全景
2．第86次調査Ｂ－12区第１次面全景
図版50　第86次調査Ｂ－12区遺構（２）
1．ＳＶ01
2．ＳＥ02
3．ＳＥ03
4．ＳＹ01
5．ＳＫ66
6．ＳＫ132
7．ＳＥ01
8．ＳＩ04
図版51　第86次調査Ｂ－12区遺構（３）
1．ＳＩ05
2．ＳＵ01
3．ＳＵ02
4．ＳＷ01
5．ＳＷ02・03
6．ＳＤ01
7．ＳＫ30
8．ＳＫ39
図版52　第86次調査Ｂ－12区遺物（１）
ＳＰ12・ＳＶ01・ＳＥ03・ＳＥ02・ＳＹ01・ＳＫ66
図版53　第86次調査Ｂ－12区遺物（２）
ＳＫ66・ＳＫ132・ＳＫ94・ＳＥ01
図版54　第86次調査Ｂ－12区遺物（３）
ＳＩ04・ＳＩ05掘形・ＳＩ05・ＳＷ01・ＳＷ02・ＳＤ01掘形・ＳＤ01埋土・ＳＫ02・ＳＫ30・ＳＫ39
図版55　第86次調査Ｂ－12区遺物（４）
ＳＫ39・ＳＫ24・ＳＫ31・ＳＫ06
図版56　第86次調査Ｂ－12区遺物（５）
ＳＫ06・ＳＫ08・表採

調査参加者名簿

◆外業の部

大手前女子大学	高比良　恵	橋本　和美				(20期生)
	磯辺　敦子	川嶋由紀子	後藤　直美	庄司　啓子	菅井　京子	
	武田　和代	坪田　晴子	二川ひとみ	西村　美紀	(21期生)	
	石田　有紀	石永　光	浦部　綾子	鮫島　直美	(23期生)	
大阪産業大学	山口　裕					
大阪教育大学	片木　靖典	佐々木　六	中川　久志	藤田　宏樹	山下　照雄	
大阪商業大学	松田　研					
大阪電気通信大学	高塚　正也					

◆内業の部

大手前女子大学	柏木　明子	古瀬由賀子	田守　恵子	毛利　直美	(30期生)
	網野　都	岩田　朱美	小國　真季	佐々木加奈	鈴木　里味
	濱川真由美	町田奈緒子			(31期生)

第１章　調査の経過

伊丹市街の中核となっている旧伊丹郷町の区域内において計画された「宮ノ前地区市街地再開発事業」は、最後まで取り残されていたＢ－１地区の一部での家屋の立ち退きと発掘調査が平成10年度に完了し、ようやく大詰めを迎えることになった。

昭和62年（1987）に、この市街地再開発に伴う発掘調査が開始されてより13年を経たが、その間、大手前女子大学は伊丹市の委託を受けて、これに参加・協力してきた。当初は大手前女子学園有岡城跡調査委員会（委員長、日比野丈夫前学長）を組織してこれに当たり、平成２年度以降は、学内に設けられた史学研究所文化財調査室（室長、藤井直正史学科教授）の業務とし、有岡城跡・伊丹郷町調査部が担当して作業を進めてきた。

とくに調査資料と出土遺物の整理、および報告書の作成・刊行については、平成５年度より６ヵ年継続事業として、改めて伊丹市の委託を受けて以後作業を続け、すでに平成７年３月に『有岡城跡・伊丹郷町Ⅳ』、つづいて平成９年３月には『有岡城跡・伊丹郷町Ⅴ』を上梓した。本冊はその後を承けて本来なら本年の３月に刊行する予定であったが、平成10年度に上記のようにＢ－１区での石橋家住宅を中心とする区域の発掘調査がはじまり、市教育委員会の要請によりスタッフ全員がこれに従事することになったため、契約変更によって平成11年度上半期まで繰り越すことになった。

本冊に収録した調査の詳細は下表の通りである。

次　数	区　域	面　積
第51次調査	Ｂ―１―２	32.0㎡
第51次調査	Ｂ―１―３	603.0㎡
第63次調査	Ｂ―４	220.0㎡
第63次調査	Ｂ－６	130.0㎡
第78次調査	Ｂ－７	24.0㎡
第83次調査	Ｂ―９	73.8㎡
第83次調査	Ｂ―10	94.62㎡
第86次調査	Ｂ―11―１	177.0㎡
第86次調査	Ｂ―11―２	77.3㎡
第86次調査	Ｂ―12	284.0㎡

本冊、すなわち『有岡城跡・伊丹郷町Ⅵ』の刊行をもって、６ヵ年計画にもとずく事業が完了することになった。

なお、「宮ノ前地区市街地再開発事業に伴う発掘調査」の中で本学関係者が参加した現場でⅣ・Ⅴおよび Ⅵに収録されていない区域が若干残っている。これらについては、平成７年度における文化会館の改築に伴う調査（第155次）、平成10年度における石橋家住宅敷地とその周辺の調査（第199次）の資料整理と合わせて「伊丹郷町調査研究会」(代表、藤井直正）が引き継いで実施することになっている。従って本冊は、長年にわたってこの事業を進めてきた大手前女子大学史学研究所にとっては、その名を冠した最後の記念すべき報告書である。

事業に取り組んで以来13年の間、主任調査員として現場における発掘調査と、爾後における資料・出土遺物の整理に当たってきたのは、川口宏海（大手前栄養文化学院助教授）と前川　要（富山大学人文学部助教授）の両名であるが、前川君の富山大学赴任後は川口君が中心的役割を果たしてきた。

そして、その指導のもとにあって、本学史学科の卒業生を調査員とし、つねに在校生をもって調査チームを編成して作業を進めてきた。過去13年間における調査員および参加学生の名簿は各冊に掲げているが、本冊の作成に中心となって活躍しているメンバーのほかに、在学当時に本学での調査に参加し、卒業後は伊丹市教育委員会生涯学習部に属して文化財の仕事に従事させてもらっている者をふくめて、こうした人材が育ったことも調査の成果の一つということができるのである。

こうしたことを合わせ、長い年月の間、私たちの活動に対して暖かく見守っていただき、ご指導をいただている市教育委員会の関係各位に、この機会に改めて御礼を申し述べておきたい。

「他ならぬ伊丹市のことだから、できる限り協力するように」と、調査開始当時、所信を述べられた故藤井健造前理事長の精神を継いで、福井秀加現理事長の深いご理解と、これを帯してご指導をいただいた日比野丈夫前学長（現在史学研究所長）のもとに微力ながらも精一杯進めてきた事業であった。内にあっては考古学コースを履修する学生にとって得難い実習・演習の場であり、外にあっては関西地方では数少ない近世城館・都市遺跡の実践例として学界の評価を得ている。とくに近世の伊丹は、酒造業で知られ在郷町として独特の歩みをつづけてきたが、伊丹市教育委員会による伊丹郷町全域の発掘調査の成果を合わせると目を見張るものがある。

折しも、平成10年９月30日から10月４日にかけての５日間、兵庫県においては全国生涯学習フェスティバル「まなびピア兵庫'98」が神戸市を中心に明石・芦屋・西宮・尼崎・伊丹・川西・宝塚の阪神間８市を会場に趣向をこらした催しが実施された。

伊丹市ではその一環として文化財に重点をおき、大手前女子大学との共催で次の三つの事業が行われた。

1．岡田家住宅の解体修理現場見学会

2．白雪酒造長寿蔵ミュージアムを利用しての伊丹郷町出土遺物の展示会

3．文化財シンポジウム「酒の町いたみ」の開催

このうち、３のシンポジウムは、平成10年10月３日（土）、アイフォニックホールを会場として開かれ、乾　一雄伊丹市教育長、福井秀加大手前女子学園理事長の挨拶にはじまり、次の５氏による講演があった。

近世伊丹の酒造業	種智院大学教授	吉田　元
掘り出された酒造と町人のくらし	大手前栄養文化学院助教授	川口宏海
古文書にみる町の姿	伊丹市立博物館館長	和島恭仁雄
町人の暮らしと文化	神戸深江生活文化史料館副館長	大国正美
近世都市伊丹の町政と自治	神戸女子大学教授	今井修平

このあと、藤井の司会により各講師をまじえての討論に移りさまざまの話題が提示された。ホールがほぼ満席の参加者を迎え、好評裡に幕を閉じた。

有岡城跡・伊丹郷町の発掘調査は、昭和50年度における国鉄（現在のＪＲ）伊丹駅前の整備に伴う調査を第１次として、以後足かけ24年、すでに200次を越えた。

昭和54年には、主郭の現存部分と、惣構えの北端に当たり、現在猪名野神社の境内となっている“北の

砦"、および南端に位置する"鵯（ひよどり）塚砦"と、惣構えの外郭線が「文化財保護法」によって史跡に指定された。線による惣構えの指定は異例のことであるが、これが有岡城の廃絶後に残存し、伊丹郷町として発展する基礎となったのであり、埋蔵文化財包蔵地として周知され、その後における発掘調査を義務づける法的措置となっている。

今年、平成11年は指定20周年に当たり、市教育委員会では、秋にこれを記念する講演会とシンポジウムの開催が企画されている。これに加え、伊丹郷町の一かくに位置し、店舗部分・住居部分・酒蔵をふくめて、これも国の重要文化財に指定されている岡田家住宅の解体修理が近く竣工する。その東隣りには、再開発区域から移築した石橋家住宅（市指定文化財）が建つことになっていて、既設の柿衛文庫と伊丹市立美術館と地つづきに一大文化ゾーンができ上がることになっている。

過去十数年にわたって進められてきた伊丹郷町の調査資料と出土遺物は、尨大な量に上るのであり、都市遺跡としての伊丹郷町の情報はこれまでの調査・研究によって十分に蓄積されているということができる。今後さらに、長期的展望の上に立って進めて行くと同時に、その成果を広く公開する必要を痛感するのである。近く完成する岡田家住宅と石橋家住宅は、それ自身が持っている価値に加えて、その空間の利用は上記の目的を達成する上において好個の場所といえるのである。市教育委員会ではすでにその整備・活用計画が作成されているが、これまで十数年にわたって「有岡城跡・伊丹郷町の発掘調査」にかかわりを持ってきた者としては、その計画をささえ、側面から協力することが責務であろう。

西暦2000年に当たる平成12年度から、大手前女子学園は大手前学園に、大手前女子大学は大手前大学に生まれかわろうとしている。めまぐるしくうつり変わる現代社会にあって、いま大学教育は岐路に立っているが、目前に迫る21世紀を新しい衣いと内容で迎えようとしている、わが学園・大学のすがたである。

その変革の一つとして伊丹キャンパスに男女共学の大手前大学社会文化学部が創設される。人間環境学科と社会情報学科が設置される予定であるが、"地域に貢献できる人材の育成"がモットーとして掲げられている。

改めて述べるまでもなく、私たちがこれまで続けてきた「有岡城跡・伊丹郷町の調査」は、すでにこれを先取りし、この事業を通して地域に貢献し、また貢献できる人材を育ててきたのである。

西宮キャンパスの文学部は、こちらも人文科学部と改称されるが、新しく開設される社会文化学部と協調し、できる限りの知恵と力を結集して、より広域の調査研究活動の展開を模索したいと思う昨今である。

（藤井直正）

第２章　調査方法

第１節　調査区割と図面割

有岡城跡・伊丹郷町遺跡は、南北約1.7km、東西0.8kmを測る広大な都市遺跡である。したがって、昭和61年に行ったＪＲ伊丹駅の第23次調査の際に、遺跡全体の調査区割と図面割を設定した。その後の調査はすべてこれに従っている。

調査区割は、国土座標の第Ｖ系のＸ＝－134.400m、Ｙ＝＋99.800mを北西の基点とし、50m方眼を大区画の上位の区割りとして、東西横列をＡ・Ｂ・Ｃ～Ｘ、南北縦列を１・２・３～36とし、Ａ１、Ｂ２などと呼称することにした（第２図）。さらに、その中の最小単位を５ｍグリットとし、50m大区画の北西隅から東西横列をａ・ｂ・ｃ～ｊ、南北縦列を１・２・３～10とし、ａ１，ｂ２などと呼称することにした。したがって、最終的に各５ｍグリットは、Ａ１－ａ１、Ｂ２－ｂ１などと呼称することにした（第　図）。

図面割については、調査区割および伊丹市の１／500の道路台帳との整合性を考えて、同じ上記の座標値を基点にして設定した。詳細は、既刊の発掘調査報告書『有岡城跡・伊丹郷町Ⅱ』(伊丹市教育委員会・大手前女子大学史学研究所　1992年)、『有岡城跡・伊丹郷町Ⅳ』(同前　1995年）を参照されたい。

第２節　基準点と水準点の設置

現地調査にあたっては、調査区域を囲む道路に開口トラバースポイントを設け、随時これより調査区内に５ｍメッシュ杭を設置した。ポイント設置は、㈱イビソク、㈱写測エンジニアリング社に委託した。

水準点は、伊丹市公共基準点の旧社会経済会館（現・伊丹第一ホテル北館）前の№14の最新値、昭和53年のＴ．Ｐ．＝16.640mを基準とし、大阪湾岸であることを考慮して、Ｏ．Ｐ．(大阪湾中等潮位）換算（Ｔ．Ｐ．＋1.3m）して使用することとした。

第３節　調査の方法

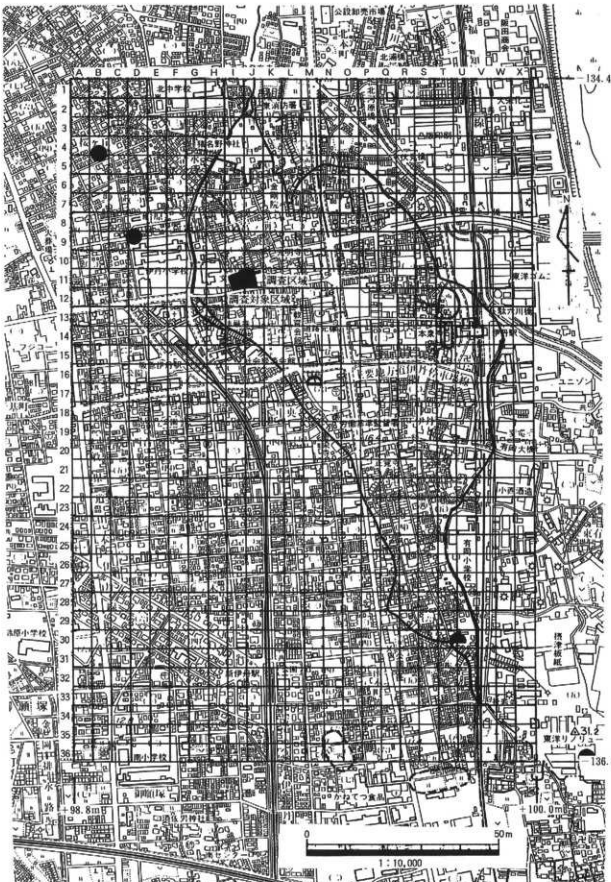
第１図　５ｍ方眼割図

現地調査にあたっては、時間的制約から最上層のまでの土層を機械によって掘削し、以下は人力による遺構掘削を行った。

平面図は、狭い調査区は、Ｓ＝1/20手書き図面とＳ＝1/40平板測量図面を作成し、広い調査区は、航空測量会社に委託してアドバルーンおよびクレーン・ミニチュアヘリコプターによる航空測量を行って、Ｓ＝1/20、Ｓ＝1/100の図面を作成した。断面図は、Ｓ＝1/20の手書き図面を作成した。

遺構写真撮影は35mm小型、６×７版中型、５×７版大型カメラにより、随時行った。全景写真には、固定ローリングタワー５～６段を１～２基設置して行った。

整理作業は、コンテナ箱にして約700箱にのぼる出土品を対象としている。作業は、平成９年４月から、平成11年８月まで行った。



第2図　有岡城跡・伊丹郷町調査区測図

第３章　調査成果

第１節　有岡城跡・伊丹郷町遺跡の時期区分について

有岡城跡・伊丹郷町遺跡の遺構・遺物の様相は、基本的に中世～近世初頭の在城期（Ⅰ・Ⅱ期）と近世の伊丹郷町期（Ⅲ期）および近代（Ⅳ期）期に大別できる。伊丹郷町期（Ⅲ期）は、さらにⅢ－１～３を細分できる。また、それぞれはさらにａ・ｂの小期に区別することができる。従って時期区分は次の通りとなる。

Ⅰ期　　伊丹城期（～天正２年・1574年）

Ⅱ期　　荒木村重の有岡城及び池田之助（元助）の後期伊丹城期（天正２年・1547～天正11年・1583）

Ⅲ期　　近世の在郷町・伊丹郷町期（天正11年・1583～明治時代中頃）

－１期　16世紀末～17世紀中頃

ａ　16世紀末～17世紀初頭

ｂ　17世紀前半～17世紀中頃

－２期　17世紀後半～18世紀後半

ａ　17世紀後半～18世紀初頭

ｂ　18世紀前半～18世紀後半

－３期　18世紀後半～19世紀後半

ａ　18世紀後半～19世紀初頭

ｂ　19世紀前半～19世紀後半

Ⅳ期　　近代（明治時代中頃以降）

以下の調査成果では、調査面の古い順に記述を進めるが、遺構の所属時期についてはこの時期区分を用いて表記する。

第２節　第51次調査Ｂ－１－２区

Ｂ－１－２区は、猪名野神社参道西側、Ｂ－６区の北側に位置する。『天保十五年（1844）伊丹郷町絵図』（第159図）によると、「北少路村」にあたり、『元禄七年（1694）柳沢吉保領伊丹郷町絵図』（第159図）には、庄屋太郎左衛門と記された地点に相当する。調査面積は32㎡である。

１．基本層序

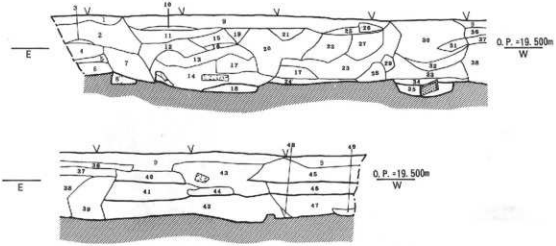
遺構面は、既存建物の解体時の撹乱のため、遺存状態が悪く、大きく見て３面検出した。地山直上層に一部ではあるが、17世紀前半頃の遺物を含む包含層（第４図第24層・第５図第22層、現地表面より60㎝下）がみられる。その層より20㎝上方に、第２次面の基盤となる整地層にぶい黄褐色砂質土層（第４図第42層、現地表面より45㎝下）、その上に、第１次面の基盤となる整地層褐色粘質土層（第４図第41層現地表面より30㎝下）を検出した。

２．第３次面の遺構と遺物

第３次面では、三和土は検出されなかった。遺構も少なく、調査区西側に数ヵ所みられただけである。

J
K
L
X=-134,850
X=-134,900
X=-134,950
Y=+99,300
Y=+99,350
宮ノ前一丁目
B-11-2区
B-1-2区
B-6区
B-7区
B-11-1区
B-1-1区
D-6区
D-4区
D-2区
D-2-2区
Aトレンチ
B-10区
B-12区
B-1-3区
B-1-4区
B-9区
Bトレンチ
B-4区
B-3区
B-5区
B-2-2区
B-2-1区
B-8区
A-2区
A-3区
A-5区
B-13区
A-4区
0
1:500
50m
国道寺本・伊丹線

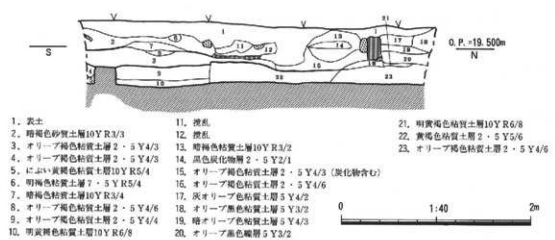
第3図　調査地点位置図



1．オリーブ褐色砂質土層2・5Y4/6
2．暗オリーブ褐色砂質土層2・5Y3/3
3．オリーブ褐色砂質土層2・5Y4/4
4．にぶい黄褐色粘質土層10Y R4/3
5．黄褐色粘質土層10Y R5/8
6．黄褐色粘質土層2・5Y5/4
7．暗褐色粘質土層10Y R3/3
（1～5㎝大の石多く含む）
8．黄褐色粘質土層10Y R5/6
9．表土
10．黒褐色砂質土層10Y R2/3
11．暗褐色砂質土層10Y R3/3
12．褐色砂質土層10Y R4/4
13．オリーブ褐色粘質土層2・5Y4/4
14．黒褐色粘質土層2・5Y3/2
（炭化物・遺物多量に含む）
15．褐色砂質土層10Y R4/4
（炭化物含む）
16．暗オリーブ褐色砂質土層2・5Y3/3
17．オリーブ褐色粘質土層2・5Y4/3
18．黄褐色粘質土層2・5Y5/4
19．にぶい黄褐色砂質土層10Y R4/3
20．にぶい黄褐色砂質土層10Y R5/4
（炭化物・遺物含む）
21．オリーブ褐色砂質土層2・5Y4/6
22．暗オリーブ褐色砂質土層2・5Y3/3
23．黄褐色粘質土層10Y R5/6
24．黄褐色粘質土層10Y R5/8
25．褐色砂質土層10Y R4/4
26．暗褐色砂質土層10Y R3/3
27．にぶい黄褐色砂質土層10Y R5/4
28．黄褐色砂質土層2・5Y5/3
（炭化物含む）
29．明褐色粘質土層7・5Y5/6
30．撹乱
31．黄褐色砂質土層2・5Y5/4
32．暗褐色粘質土層10Y R3/3
33．にぶい黄褐色粘質土層10Y R5/4
34．オリーブ褐色粘質土層2・5Y4/6
35．黄褐色粘質土層2・5Y5/4
36．にぶい黄褐色砂質土層10Y R4/3
37．暗褐色砂質土層10Y R3/4
38．褐色粘質土層10Y R4/4
（炭化物多量に含む）
39．明褐色粘質土層7・5Y R5/6
（炭土含む）
40．にぶい黄褐色砂質土層10Y R4/3
41．褐色粘質土層10Y R4/4
42．にぶい黄褐色砂質土層10Y R5/3
43．撹乱
44．明黄褐色粘質土層10Y R6/8
45．暗褐色砂質土層10Y R3/3
46．オリーブ褐色粘質土層2・5Y4/3
47．オリーブ褐色粘質土層2・5Y4/4
48．明黄褐色粘質土層10Y R6/8
49．にぶい黄褐色粘質土層10Y R5/4

0　1:40　2m

第4図　B－1－2区南壁土層図



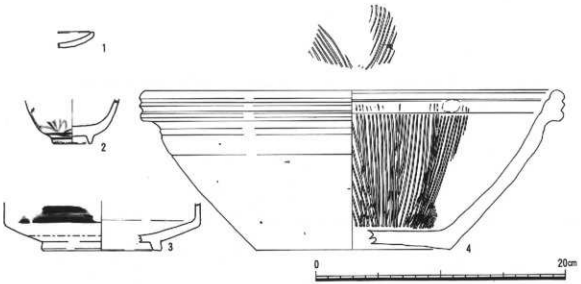
1．表土
2．暗褐色砂質土層10Y R3/3
3．オリーブ褐色粘質土層2・5Y4/3
4．オリーブ褐色粘質土層2・5Y4/3
5．にぶい黄褐色粘質土層10Y R5/4
6．明褐色粘質土層7・5Y R5/4
7．暗褐色粘質土層10Y R3/4
8．オリーブ褐色粘質土層2・5Y4/6
9．オリーブ褐色粘質土層2・5Y4/4
10．明黄褐色粘質土層10Y R6/8
11．撹乱
12．撹乱
13．暗褐色粘質土層10Y R3/2
14．黒色炭化物層2・5Y2/1
15．オリーブ褐色粘質土層2・5Y4/3（炭化物含む）
16．オリーブ褐色粘質土層2・5Y4/6
17．灰オリーブ色粘質土層5Y4/2
18．オリーブ黒色粘質土層5Y3/2
19．暗オリーブ色粘質土層5Y4/3
20．オリーブ黒色粘土層5Y3/2
21．明黄褐色粘質土層10Y R6/8
22．黄褐色粘質土層2・5Y5/6
23．オリーブ褐色粘質土層2・5Y4/6

0　1:40　2m

第5図　B－1－2区西壁土層図

SK754

SK754は、調査区北西隅に位置する（表6）。平面形は楕円形を呈し、長さ0.57m、幅0.37m、深さ0.31mを測る。



第6図　ＳＫ754（1）・ＳＶ01（2・3）・ＳＫ734（4）出土遺物

第６図－１は、土師質土器皿である。胎土の色調はlight gray orange（10ＹＲ8/4）を呈する。小片だったため観察するのは難しいが、調整は、体部内面はナデ調整、体部外面は未調整である。遺物が少量で廃棄時期の検討は難しいが、この遺構の上面で確認した遺構（ＳＫ726）年代が18世紀末～19世紀前半と考えられることから、Ⅲ－２ｂ期に属すると思われる。

３．第２次面の遺構と遺物

第２次面は、調査区中央から西側を中心に遺構を検出した。この面でも建物に結びつく遺構や三和土は確認できなかった。また、この面の遺構からは、遺物は出土しなかった。

４．第１次面の遺構と遺物

第１次面は、三和土や礎石などは検出できなかったが、調査区全体に多数の遺構を検出した。検出した遺構の年代観は、18世紀前半～19世紀後半のものが中心であった。なお、北東部のＳＥ01は、現存する石積井戸であり、調査対象からはずした。

ＳＶ01

ＳＶ01は、調査区中央やや西側より検出した（表６・図版３）。竈である。残存状態が悪く底部のみだが、１基の燃焼室を確認した。平面形は楕円形を呈し、長さ0.93m、幅0.73m、深さ0.45mを測る。

第６図－２は、肥前磁器染付碗である。高台径2.7cmを測る。体部外面に描かれている文様は、草文と思われる。また、呉須の発色は悪く黒色を帯びている。高台畳付は露胎である。大橋康二氏の編年（大橋1988年）のⅣ期に属する。３は、京焼系陶器鉢である。高台径（推）9.5cmを測る。高台脇まで残っており、筒型タイプの器形だと思われる。体部外面に鉄釉で刷毛目文が描かれている。また、高台脇から下部は無釉で、見込みには２か所目跡を残す。その他には、京・伊賀・信楽焼系鉄釉土瓶や堺焼擂鉢が出土している。

出土遺物から概観すると、18世紀後半～19世紀初と考えられ、Ⅲ－３ａ期に属する遺構である。

ＳＫ734

ＳＫ734は、南壁沿いの東側より検出した（表６）。南半分は調査区外へ延びる。平面形は隅丸長方形を呈

し、長さ1.31m、検出幅0.52m、深さ0.14mを測る。

第6図－4は、埋焼擂鉢である。これ以外は遺物は出土しなかった。大きさは、口径（推）32.8cm、器高12.7cm、底径（推）15.4cmを測る。色調は赤橙色を呈する。口縁部外縁帯の張りがやや大きいタイプである。外面調整は、底部際から口縁部外縁帯直下まで回転ヘラケズリを施している。内面体部の擂目は11本単位である。ロクロは左回転である。白神典之氏分類（白神1990年）のⅡ類に属する。よって、18世紀後半～19世紀初頭と考えられる。Ⅲ－３ａ期に属する遺構である。

５．ま と め

Ｂ－１－２区は、調査面積が小さいことと、既存建物の解体時の撹乱が激しかったため全体の様相をあまり把握できなかったが、18世紀前半～19世紀後半の遺構を確認した。検出した遺構は、時代を通して廃棄土壙が中心であった。この調査区の南側に接しているＢ－６区で、Ⅲ－３ａ期の三和土を検出した。この三和土は、竈屋のような上屋にともなうものと考えられている。しかし、Ｂ－１－２区ではこの続きを確認できなかったが、この竈屋と同時期と思われるＳＶ01を１次面で検出している。このＳＶ01は、Ｂ－６区で検出した三和土の北端から１ｍのところに位置し、この建物と関係するものかもしれない。その他の時期は、周りの調査区でも裏庭空間だったと考えられており、Ｂ－１－２区でも同様だったと思われる。Ⅳ期以降は、昭和三十六年以前にＢ－１－２区の南側に路地が作られ、当調査区には既存建物が建てられたと思われる。

このように、調査区が狭く全体を掴むのは難しかったが、周りの調査区と同様の遺構の変遷が想定できた。

第３節　第51次調査Ｂ－１－３区

Ｂ－１－３区は、猪名野神社に通じる宮ノ前商店街から西側に延びる小道に面している。『天保十五年（1844）伊丹郷町分間絵図』（第159図）によると、「井筒町」にあたることが分かる。『元禄七年（1694）柳沢吉保領伊丹郷町絵図』（第159図）では、庄屋太郎左衛門の敷地と、庄屋太郎左衛門を屋敷主とし、住人塩ウリ作兵衛とその東側の糸引きくの屋敷地に相当する。また、当調査区は昭和63年試掘調査でＥトレンチとしてトレンチ調査を行っており、中央よりやや南側の遺構は同報告書（藤井直正他『有岡城跡・伊丹郷町Ⅳ』1995年）を参照していただきたい。

１．基本層序

遺構面は３面である。地山面は、Ｏ．Ｐ．＝19.000mを測る。地山直上に、黄褐色系土層（第７図第６層・第30層、現地表面より1.8m下）、その上層に、享保十四年（1729）の火災層（第７図第14層・第44層、現地表面より1.5m下）がみられた。その上には、18世紀代の遺物を多く含む整地層（第７図第42層、現地表面より１m下）、その上層に第１次面の三和土（第７図第８層・第55層、現地表面より0.15cm下）が堆積する。調査面積は603m²である。

２．第３次面の遺構と遺物

第３次面では、調査区西側より、16世紀中頃～16世紀後半の伊丹城期から有岡城期にかけての溝を検出した。この時期の遺構は、土壙が数カ所検出した。そのほかに、調査区北東部で柱穴を数ヵ所検出した。遺物は出土しなかったが、上面の遺構年代から17世紀代と考えられ、復元は不可能であるが、この頃には掘立柱建物などが建っていたと考えられる。また、Ⅲ－３期に属する遺構を検出しているが、本来は１次面に属するものである。

ＳＤ05

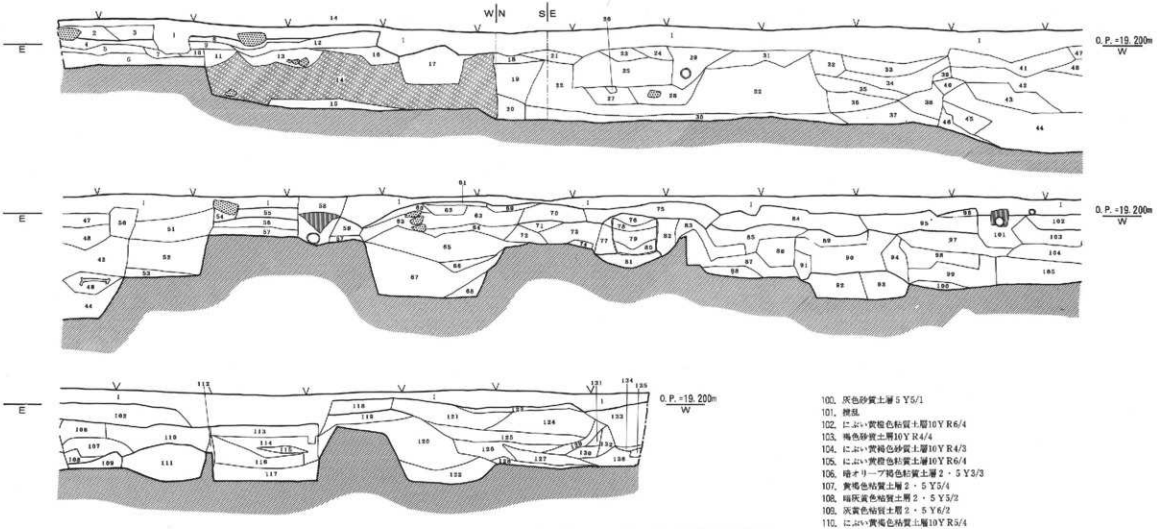
ＳＤ05は、調査区西側を南北に延びる溝である（第９図・図版５）。検出長7.55m、最大幅５m、深さ0.5mを測る。この溝は、調査区外に続いており、北側は、今回報告する第86次調査Ｂ－11－１区ＳＤ08、南側には前回報告した第51次調査Ｂ－３区ＳＤ06（藤井直正他『有岡城跡・伊丹郷町Ⅴ』1997年）につながる。断面形は、両端が緩やかに傾斜し、自然の落ち込みのようであるが、Ｂ－３区の調査結果から人工的なものと考えられている。埋土は、褐色系の土層が数層堆積する。溝底はＢ－11－１区ＳＤ08はＯ．Ｐ．＝＋18.700mを測り、ＳＤ05はＯ．Ｐ．＝＋18.500mであり、Ｂ－３区ＳＤ06ではＯ．Ｐ．＝＋18.600mである。このことから、ＳＤ05で深く落ち込むが、流路方向は北→南と思われる。

出土遺物はなかったが、Ｂ－３区ＳＤ06より、瀬戸・美濃焼の大窯編年Ⅱｂ期（井上1992年）に属する天目茶碗や大海茶入、間壁忠彦氏の編年（間壁1990年）Ⅴ期に属する備前焼擂鉢が出土しており、16世紀中頃～16世紀後半と考えられる。Ⅰ～Ⅱ期に属する。

ＳＫ242

ＳＫ242は、調査区の中程やや北側に位置する（表６）。平面形は円形を呈し、直径0.61m、深さ0.41mを測る。

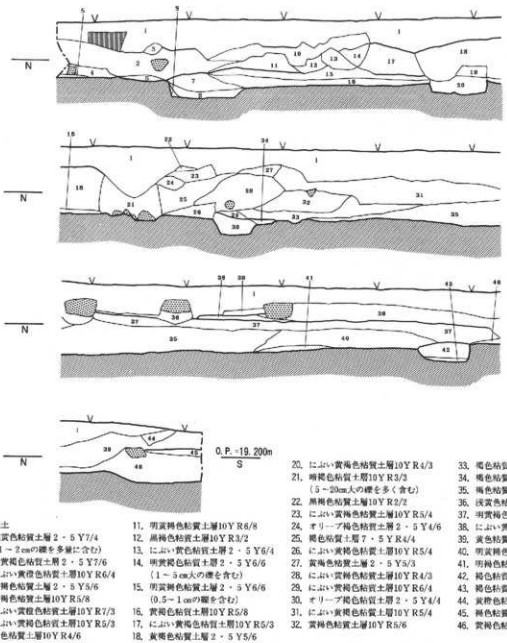
第10図－４は、中国製青花皿である。口径（推）9.1cm、器高２cm、高台径５cmを測る。高台は、いわゆる「蕎笥底」で、口縁部がやや内湾するタイプである。口縁部には口錆がみられ、高台畳付は露胎である。



1. 表土
2. 黄褐色砂質土層２・５Y5/6
3. 黄褐色砂質土層２・５Y5/4
4. オリーブ褐色砂質土層２・５Y4/6
5. オリーブ褐色砂質土層２・５Y4/4
6. 黄褐色粘質土層10Y R5/6
7. 黄褐色砂質土層２・５Y5/3
8. 明黄褐色砂質土層２・５Y6/6
9. 黄褐色砂質土層10Y R5/6
10. 黄褐色砂質土層２・５Y5/6
11. 黒色炭化物層10Y R2/1
12. にぶい黄褐色砂質土層10Y R4/3（１㎝大の礫・炭化物を含む）
13. 暗褐色粘質土層10Y R3/3
14. 黒褐色炭化物層10Y R2/3
15. 灰黄褐色粘質土層10Y R5/2
16. にぶい黄褐色砂質土層10Y R4/3（１～２㎝大の礫を含む）
17. 赤褐色粘質土層10Y R3/2
18. 灰黄褐色砂質土層10Y R5/2
19. 明黄褐色粘質土層10Y R6/8
20. オリーブ黄色砂質土層５Y6/4
21. 黄褐色砂質土層10Y R5/6
22. 黒褐色炭化物層10Y R2/3
23. オリーブ褐色土層２・５Y4/3
24. にぶい黄色粘質土層２・５Y4/4
25. にぶい黄褐色粘質土層10Y R4/3
26. 黄褐色砂質土層２・５Y5/3
27. 灰色粘質土層７・５Y4/1
28. 灰色粘質土層10Y 4/1
29. 攪乱
30. 黄褐色土層２・５Y5/6
31. オリーブ褐色砂質土層２・５Y4/3
32. 暗灰黄色砂質土層２・５Y4/2
33. 明黄褐色砂質土層10Y R6/6
34. 暗褐色砂質土層10Y R3/3
35. 暗灰黄色粘質土層２・５Y4/2
36. 黒褐色炭化物層２・５Y3/2
37. オリーブ黒色炭化物層５Y3/1
38. 暗灰黄色砂質土層２・５Y4/2
39. 黄褐色砂質土層２・５Y5/3
40. 黒褐色砂質土層２・５Y3/2
41. オリーブ灰色砂質土層10Y 6/2
42. 暗灰黄色土層５・５Y5/2（遺物多量に含む）
43. 暗灰黄色砂質土層２・５Y4/2
44. 黒褐色炭化物層２・５Y3/1
45. 暗灰黄色粘質土層２・５Y4/2
46. 明黄褐色粘質土層２・５Y6/6
47. にぶい黄色砂質土層２・５Y6/4
48. オリーブ褐色砂質土層２・５Y4/3
49. オリーブ黒色砂質土層５Y3/1
50. 黄褐色粘質土層２・５Y5/3
51. 暗オリーブ褐色粘質土層２・５Y3/3
52. オリーブ灰色粘質土層10Y5/2
53. 黄褐色粘質土層２・５Y5/6
54. オリーブ褐色砂質土層２・５Y4/6
55. 黄褐色砂質土層２・５Y5/6
56. オリーブ褐色砂質土層２・５Y4/3
57. 黄褐色砂質土層10Y R5/8
58. 攪乱
59. オリーブ褐色砂質土層２・５Y4/6
60. にぶい黄色砂質土層２・５Y6/3
61. オリーブ褐色粘質土層２・５Y4/4
62. にぶい黄褐色砂質土層10Y R4/3
63. 暗褐色砂質土層10Y R3/4
64. 褐色砂質土層10Y R4/4
65. にぶい黄褐色粘質土層10Y R4/3
66. 黄灰色粘質土層２・５Y4/1
67. 褐灰色粘質土層10Y R5/1
68. 明黄褐色粘質土層２・５Y6/6
69. 褐色砂質土層10Y R4/4
70. 暗オリーブ褐色砂質土層２・５Y3/3
71. オリーブ褐色砂質土層２・５Y5/3
72. 暗褐色粘質土層10Y R3/4
73. 黒褐色砂質土層２・５Y3/2
74. 明褐色粘質土層７・５Y R5/8
75. 暗褐色砂質土層10Y R3/3（炭化物・0.5㎝大の礫を含む）
76. 暗褐色砂質土層10Y R3/3（0.5㎝大の礫を含む）
77. 暗灰黄色土層２・５Y4/2
78. 黄褐色粘質土層２・５Y5/4
79. 黄褐色粘質土層２・５Y5/6
80. オリーブ褐色粘質土層２・５Y4/6
81. 褐灰色粘質土層10Y R4/1
82. 暗灰黄色粘質土層２・５Y4/2
83. にぶい黄褐色粘質土層10Y R4/3
84. 黒褐色砂質土層２・５Y3/2
85. にぶい黄色粘質土層10Y R5/4
86. 褐色粘質土層10Y R4/4
87. にぶい黄褐色粘質土層10Y R5/4
88. にぶい黄橙色砂質土層10Y R6/3
89. 黒褐色土層２・５Y3/2（炭化物多量に含む）
90. にぶい黄褐色粘質土層10Y R4/3
91. 灰黄褐色土層10Y R4/2
92. にぶい黄褐色粘質土層10Y R5/3
93. 灰黄色粘質土層２・５Y6/2
94. オリーブ褐色粘質土層２・５Y4/3
95. 暗褐色砂質土層10Y R3/4
96. 明黄褐色粘質土層10Y R6/8
97. 暗灰黄色粘質土層２・５Y5/2
98. 灰黄褐色砂質土層10Y R4/2
99. 灰黄褐色粘質土層10Y R5/4
100. 灰色砂質土層５Y5/1
101. 攪乱
102. にぶい黄橙色粘質土層10Y R6/4
103. 褐色砂質土層10Y R4/4
104. にぶい黄褐色砂質土層10Y R4/3
105. にぶい黄橙色粘質土層10Y R6/4
106. 暗オリーブ褐色粘質土層２・５Y3/3
107. 黄褐色粘質土層２・５Y5/4
108. 暗灰黄色粘質土層２・５Y5/2
109. 灰黄色粘質土層２・５Y6/2
110. にぶい黄褐色粘質土層10Y R5/4
111. 淡黄色粘質土層２・５Y7/4
112. 明黄褐色粘質土層10Y R6/8
113. 黄灰色粘質土層２・５Y6/8
114. 黒褐色粘質土層２・５Y3/2
115. オリーブ褐色砂質土層２・５Y4/3
116. 黄褐色粘質土層２・５Y5/6
117. 暗褐色粘質土層10Y R3/3
118. 明赤褐色砂質土層２・５Y R5/8
119. 暗褐色粘質土層10Y R3/4
120. オリーブ褐色粘質土層２・５Y4/6
121. にぶい黄褐色粘質土層10Y R4/3
122. 暗灰黄色粘質土層２・５Y5/2
123. 明黄褐色砂質土層２・５Y6/6
124. 褐色粘質土層10Y R3/4
125. 暗オリーブ褐色砂質土層２・５Y3/3
126. 黄褐色粘質土層10Y R5/6
127. 暗灰黄色粘質土層２・５Y4/2
128. 明黄褐色粘質土層10Y R6/8
129. にぶい黄褐色粘質土層10Y R5/4
130. オリーブ褐色粘質土層２・５Y4/4
131. 暗灰黄色粘質土層２・５Y4/2
132. 黄褐色粘質土層２・５Y5/4
133. にぶい黄褐色粘質土層10Y R5/3
134. 黄色砂質土層２・５Y7/8
135. 黒色粘質土層２・５Y3/1
136. 明黄褐色砂質土層２・５Y7/6

0　1:40　2m

第７図　Ｂ―１―３区南壁土層図



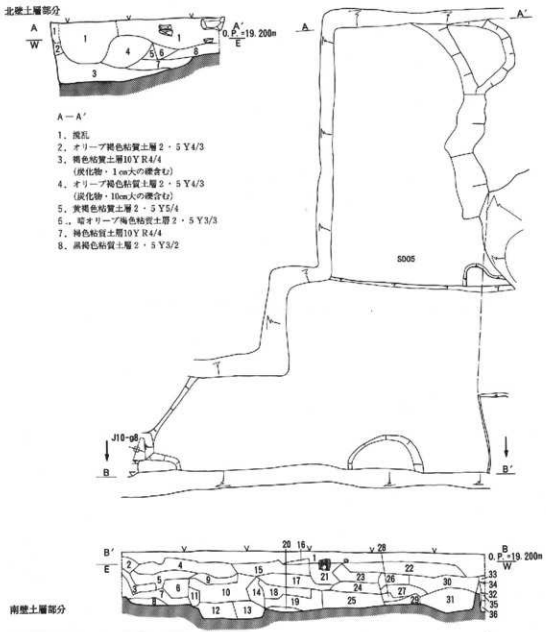
第8図　B－1－3区東壁土層図

見込みの文様は、二重圏内に雲流麒麟文が描かれている。小野正敏氏の分類（小野1982年）の染付皿C群Ⅳ類に属する。5は、丹波焼擂鉢である。底径（推）14.8cmを測る。内面の擂目はヘラによる一本引きである。外面体部の調整は、指頭圧調整後に軽くナデ調整が施されている。底部は未調整である。岡崎正雄氏（岡崎1989年）の分類の3ａ類に属する。

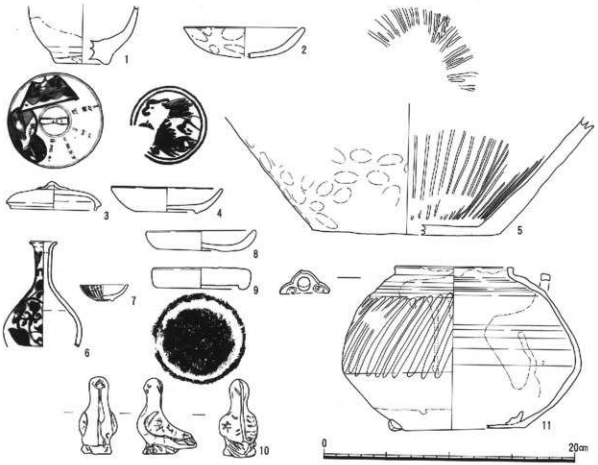
出土遺物を概観すると、16世紀中頃～16世紀後半と考えられ、Ⅱ期に属する。

ＳＫ223

ＳＫ223は、調査区北東隅に位置する（表6）。平面形は不整形を呈し、長さ3.29m、幅1.4m、深さ0.2m


北壁土層部分
A
W
A'
E
0.P.=19.200m
A—A'
1、撹乱
2、オリーブ褐色粘質土層2・5Y4/3
3、褐色粘質土層10YR4/4
(炭化物・1cm大の礫含む)
4、オリーブ褐色粘質土層2・5Y4/3
(炭化物・10cm大の礫含む)
5、黄褐色粘質土層2・5Y5/4
6、暗オリーブ褐色粘質土層2・5Y3/3
7、褐色粘質土層10YR4/4
8、黒褐色粘質土層2・5Y3/2
SD05
J10-o8
B
B'
南壁土層部分
B—B'
1、表土
2、暗褐色砂質土層10YR3/3
3、にぶい黄褐色粘質土層10YR4/3
(炭化物含む)
4、黒褐色砂質土層2・5Y3/2
5、にぶい黄色粘質土層10YR5/4
6、褐色粘質土層10YR4/4
7、にぶい黄褐色砂質土層10YR5/4
(炭化物・0.5cm大の礫含む)
8、にぶい黄橙色砂質土層10YR6/3
9、黒褐色土層2・5Y3/2
(炭化物多量に含む)
10、にぶい黄褐色粘質土層10YR4/3
11、灰黄褐色土層10YR4/2
12、にぶい黄褐色粘質土層10YR5/3
13、灰黄色粘質土層2・5Y6/2
14、オリーブ褐色粘質土層2・5Y4/3
15、暗褐色砂質土層10YR3/4
16、明黄褐色粘質土層10YR6/8
(炭化物・0.5cm大の礫含む)
17、暗灰黄色粘質土層2・5Y5/2
(炭化物・0.5～2cm大の礫多量に含む)
18、灰黄褐色砂質土層10YR4/2
19、灰黄褐色粘質土層10YR5/4
20、灰色砂質土層5Y5/1
21、撹乱層
22、にぶい黄橙色粘質土層10YR6/4
(1～5cm大の礫含む)
23、褐色砂質土層10YR4/4
24、にぶい黄褐色砂質土層10YR4/3
25、にぶい黄橙色粘質土層10YR6/4
26、暗オリーブ褐色粘質土層2・5Y3/3
27、黄褐色粘質土層2・5Y5/4
28、暗灰黄色粘質土層2・5Y5/2
29、灰黄色粘質土層2・5Y6/2
(瓦片を含む)
30、にぶい黄褐色粘質土層10YR5/4
31、浅黄色粘質土層2・5Y7/4
32、明黄褐色粘質土層10YR6/8
33、黄灰色粘質土層2・5Y6/8
34、黒褐色粘質土層2・5Y3/2
35、黄褐色粘質土層2・5Y5/6
36、暗褐色粘質土層10YR3/3
0
2m

第9図　SD05遺構図



第10図　ＳＫ223（１・２）・ＳＫ242（４・５）・ＳＫ220（３・６～11）出土遺物

を測る。

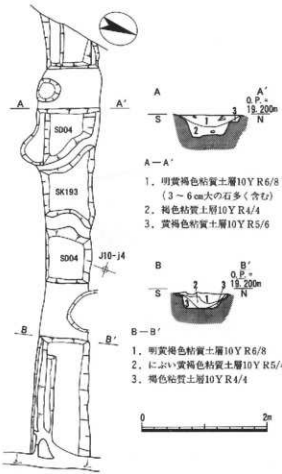
第10図－１は、唐津焼碗である。高台径（推）4.5cmを測る。腰部がやや張りのあるタイプで、口縁部は恐らく、外側に折れるものだと思われる。また、全体的に荒い成形である。内面から外面体部にかけて灰釉が掛けられている。大橋康二氏の編年（大橋1989年）Ⅱ期に属する。２は、土師質土器皿である。口径9.8cm、器高2.5cmを測る。調整は、内面は不定方向にナデ調整、外面は指頭圧調整が施されている。

出土遺物を概観すると、17世紀初頭と考えられ、Ⅲ－１ａ期に属する遺構である。

ＳＫ220

ＳＫ220は、調査区の北壁沿い中程に位置する（表６）。平面形は不整形を呈し、長さ3.58m、幅1.98m、深さ0.38mを測る。18世紀後半～19世紀初頭の遺物が多量に出土した遺構である。

第10図－３・６・７は、肥前磁器である。３は、染付蓋物蓋である。口径6.6cm、器高2.3cmを測る。外面の文様は、肩・洲浜形の区画割文内に山水文と、「満相何度・曼陀四・火□破□・西岸苦」の吉祥句がみられる。６は、染付瓶である。口径２cm、残存高8.5cmを測る。口縁部はラッパ状に広がり、体部が膨む。外面の文様は、菊唐草文が描かれている。７は、白磁紅皿である。口径3.9cm、器高1.3cm、高台径1.4cmを測る。型押し成形で外面底部は無釉である。３・６・７は、大橋康二氏の編年Ⅴ期に属する。８～10は、土師質土製品である。８は、皿である。口径（推）8.8cm、器高1.7cmを測る。口縁部内外面はヨコナデ調整、内面体部はナデ調整、外面底部は指頭圧調整を施している。川口宏海氏の分類（川口1997年ｂ）ＩＴ（伊丹郷



第11図　ＳＤ04遺構図

町期）２型式Ａ類に属する。９は、焼塩壺蓋である。口径7.5cm、器高1.8cmを測る。型づくり成形で、内面に布目痕がみられる。小林謙一氏の焼塩壺の編年（小林1992年）Ⅶ～Ⅷ期に属するものと思われる。10は、鳩形ミニチュア製品である。合わせ型による成形で合わせ目をヘラケズリ調整している。ところどころに赤色釉がみられ、全面に塗られていたと思われる。底部には直径1.2cm、深さ2.8cmの穿孔がある。11は、京・伊賀・信楽焼土瓶である。口径9.4cm、器高9.6cmを測る。器形は算盤玉型を呈し、外面体部には、ヘラ状工具で斜線文様を陰刻している。内面体部から外面体部にかけて鉄釉が施され、外面口縁部から肩部には、黒色釉を掛けている。内面底部・外面底部は無釉である。

出土遺物を概観すると、18世紀末～19世紀前半と考えられ、Ⅲ－３ａ期に属する遺構である。

３．第２次面の遺構と遺物

第２次面では、三和土・礎石は検出されなかった。主に、18世紀後半～19世紀初頭の遺構を中心に検出した。

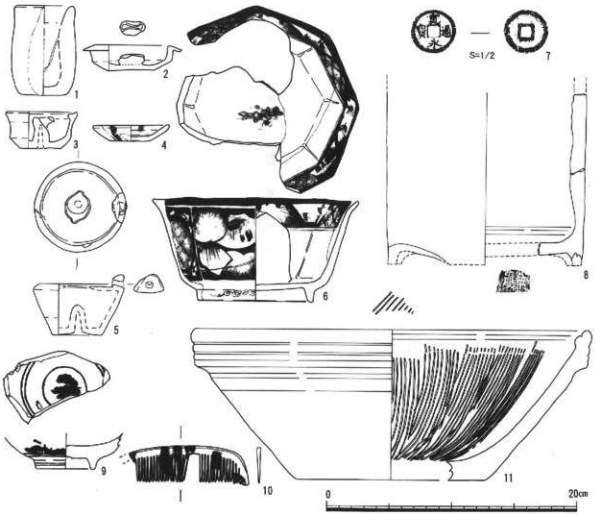
ＳＤ04

ＳＤ04は、調査区北東隅で検出した（第11図・図版５）ＳＤ04は、東へ続いており、今回報告するＢ－７区ＳＤ03・Ｂ－11－１区ＳＤ05がそれにあたる。検出長6.65m、幅0.8m、深さ0.35mを測る。埋土は３層で、褐色系土層が堆積していた。この溝は、『元禄七年（1694）柳沢吉保領伊丹郷町絵図』（第159図）でみられる住人塩ウリ作兵衛と、その東側の糸引きくの屋敷地の北端のラインに一致すると思われたが、一致しなかった。また、ＳＤ04からは出土遺物はなかったが、Ｂ－７区ＳＤ03の埋土から17世紀前半～17世紀後半頃の遺物が出土したことから、17世紀後半には埋め戻されたと思われる。このことから、絵図でみられる敷地境は、17世紀後半には替えられていたと考えられる。また、このＳＤ04から南側では多くの遺構を検出し、調査区北東部は裏庭的空間だったと思われる。Ⅲ－１ｂ期～Ⅲ－２ａ期に属する。

ＳＫ192・第１次面ＳＫ70

ＳＫ192は、調査区南壁沿いの東隅に位置する（表６・図版６）。平面形は不整形を呈し、南端は調査区外へ続く。検出長4.36m以上、幅3.31m、深さ0.89mを測る。埋土は１層で、黒褐色の炭化物層が堆積していた。焼土処理土壙である。以前おこなった第43次Ｅトレンチ試掘調査（藤井直正他『有岡城跡・伊丹郷町Ⅳ』1995年）でも西側の一部（第２次面ＳＫ40）が確認されており、その時に遺物が多量に出土した。また、この遺構の直上の遺構ＳＫ70も検出状況から同遺構と考えられる。よって、出土遺物の説明も同時にしたいと思う。遺物の年代観から享保十四年（1729）の北少路村の大火災の際の処理土壙と思われる。

第12図－１は、土師質土器焼塩壺である。口径4.5cm、器高7.2cm、底径3.9cmを測る。両角まり氏の形態分類（両角1992年ｂ）にもとづくと、器形は丸底で、口縁部の先端が尖った筒状を呈し、口縁部に弱い括れ



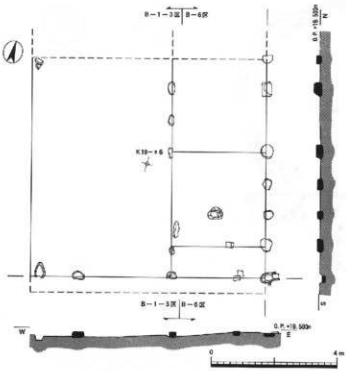
第12図　ＳＫ192（1）・ＳＫ138（2～8・11）・ＳＫ200（9・10）出土遺物

のあるもの。造形痕は、粘土の接着痕がみられないタイプで、工具痕は、口縁部にナデ調整、内面体部から底部に布目圧痕のあるものにあたり、よって、Ｂ－ｇ－イ類に属する。第19図－３は、肥前磁器染付碗である。高台径３㎝を測る。見込みと外面体部にコンニャク印判によって文様が施されている。大橋康二氏の編年Ⅳ期に属する。ほかに、土師質土器皿や火災に遭った壁土などを検出した。Ⅲ－２ａ期に属する遺構である。

ＳＫ200

ＳＫ200は、調査区中央のやや東側に位置する（表６）。平面形は不整形を呈し、検出長2.08m以上、幅１m、深さ0.43mを測る。焼土処理土壙である。この土壙の続きも第43次試掘調査の際に確認されている（第３次面ＳＫ13）。出土遺物の年代観から17世紀末～18世紀前半と考えられ、この遺構も遺物の年代観から享保十四年（1729）の北少路村の大火災の際の処理土壙と思われる。

第12図－９は、肥前磁器染付碗である。高台径（推）4.6㎝を測る。外面に松文、見込みにも二重圏線内に松文が描かれている。高台畳付は露胎である。大橋康二氏の編年Ⅳ期に属する。10は、鞦甲製櫛である。残存長9.6㎝、幅2.9㎝を測る。深川形を呈する。歯は密にみられ、解櫛である。歯は２㎜間隔で、１㎝内に３～４歯あり、このことから総数は38歯と数えられる。Ⅲ－２ａ期に属する。



第13図　ＳＢ01遺構図

ＳＫ138

ＳＫ138は、調査区北壁沿いやや中程に位置する（表６）。平面形は不整形を呈し、検出長1.12m以上、幅0.79m以上、深さ0.3mを測る。

第12図－２は、京・伊賀・信楽焼土瓶蓋である。口径7.9cm、器高２cm、底径7.7cmを測る。内面全体に灰釉が掛けられているが、外面は無釉である。３・５は、乗燭である。３は、土師質土器である。口径5.6cm、器高３cm、底径3.3cmを測る。全体に黒色釉が掛けられ、芯立ては体部成形後、ハリツケしており、中央の穿孔に灯芯痕が残存していた。また、底部から内面の芯立てに向かって、直径0.5cm、深さ２cmの穿孔がみられる。５は、軟質施釉陶器である。器高4.9cm、底径４cmを測る。体部外面には灰釉が掛けられているが、外面底部は無釉である。内面には高さ３cm、基部径２cmの芯立てがみられる。そのほかには、壁に掛けられるように、釘穴部が付けられている。４は、柿釉灯明皿である。口径６cm、器高1.3cmを測る。器形は楕円形を呈し、口縁部の一部に段がみられ、粗っぽい成形で、外面底部には右回転糸切痕がみられる。内面には透明釉が掛けられているが、外面底部は無釉である。また、口縁部内外面に一カ所灯芯痕がみられる。６は、肥前磁器染付八角鉢である。口径（推）16.4cm、器高8.3cm、高台径8.8cmを測る。外面体部に扇形区画割文内に山水文と柳文、洲浜形区画割文内には草文が描かれているものと、円形区画割文内四方樽文を描いたものを交互に描いている。内面口縁部には、窓絵に笹文・海浜船文・四方樽文が描かれている。また、体部には焼継痕がみられ、高台畳付は露胎である。大橋康二氏の編年Ⅴ期に属する。７は、寛永通寶である。銭径2.4cm、厚さ0.13cm、重さ3.15mを測る。裏は無文であり、『寶』の第18・19画が「ス」となっており、古寛永と思われる。８は、深草焼風炉である。底径（推）13.4cmを測る。深草焼は、山城国深草（京都市伏見区）に位置する。胎土には赤土が練り込まれており、体部外面は丁寧にミガキをかけているが、内面は未調整である。足はハリツケ後、丁寧にミガキが施されている。高台内に「深草宗慶」の刻印がみられる。11は、堺焼擂鉢である。口径（推）31.4cm、器高12cm、底径（推）15cmを測る。口縁部のつくりは、外縁帯の幅が大きく、内面口縁部の端部には凸帯がみられないタイプのものである。外面調整として、底部際から口縁部外縁帯の直下まで回転ヘラケズリ調整を施している。内面の擂目は９本単位である。白神典之氏の分類Ⅰ類（白神1990年）に属する。

出土遺物を概観すると、18世紀後半～19世紀初頭と考えられ、Ⅲ－３ａ期に属する。

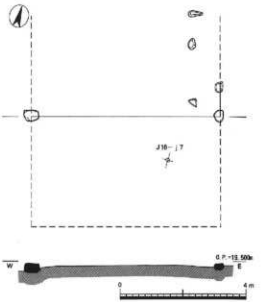
４．第１次面の遺構と遺物

第１次面では、三和土は検出できなかったが、礎石を検出した。この礎石に伴うものが、試掘調査でも確認しており、南側の小道を間口とする建物（ＳＢ01～03）を把握できた。建物については順に説明したいと

思う。そのほかには、北東部を中心に19世紀代の遺構を多く検出した。このあたりは、昭和二十三年に撮影された航空写真（図版１）では裏庭的空間になっていたが、昭和三十六年の航空写真（図版１）では建物が建てられていた。このことから、19世紀代から昭和二十三年までは裏庭的空間であったが、昭和三十六年までには建物が建てられたと思われる。

ＳＢ01

ＳＢ01は、調査区東側に位置する（第13図・図版６）。南側を間口とする礎石建物である。この建物は東側に続いており、東側の調査区Ｂ－６区ＳＢ01はそれに当たる。全体の規模は、桁行３間半（東西7.5m）、梁行３間半（南北7.5m）を測る。間取りについては、東側間口から1.5mまでの間で、埋甕や竈を検出したことから、それより東側に居室が２室あったと思われる。西側については分からなかった。年代については、礎石の掘形遺構（ＳＫ217）やＢ－６区で確認した三和土下の包含層の遺物の年代観から、19世紀中頃に建てられたと考えられる。また、この建物は、昭和二十三年の航空写真（図版１）では確認されたが、昭和三十六年の航空写真の段階には見られず、東側は路地になっていることがわかった。おそらく、昭和三十年に起こった北側に隣接する市場の火災によって、被害に遭ったのではないかと考えられる。その後、この建物の東側は路地に替わったと思われる。Ⅲ－３ｂ～Ⅳ期に属する。



第14図　ＳＢ02遺構図

ＳＢ02

ＳＢ02は、ＳＢ01の西側に位置する（第14図）。南側を間口とする礎石建物である。先に試掘調査した際に、礎石を検出したが、今回の調査ではその続きは確認できなかった。建物の大きさは、桁行３間（東西5.9m）、梁行半間（南北0.9m）以上を測る。ＳＢ02の年代であるが、礎石直下の遺構（Ｅトレンチ第３次面ＳＫ40）の年代観が、18世紀末～19世紀前半であるため、これもＳＢ01と同様19世紀中頃に建てられたと思われる。Ⅲ－３ｂ～Ⅳ期に属する。

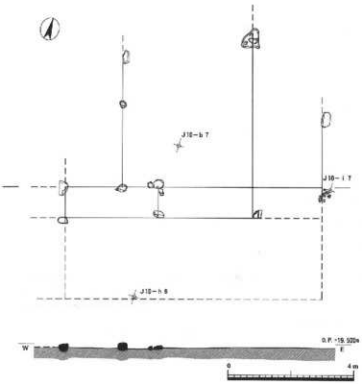
ＳＢ03

ＳＢ03は、調査区西側に位置する（第15図・図版６）。南側を間口とする礎石建物である。これも先に試掘調査した際、礎石を検出しており、北側で続きを確認した。建物の大きさは桁行４間（東西8.12m）以上、梁行３間（南北5.9m）以上を測る。礎石下の土壙（ＳＫ120・123）の年代観が18世紀後半～19世紀前半であることから、19世紀中頃には建てられたと考えられる。Ⅲ－３ｂ期～Ⅳ期に属する。

ＳＵ01・ＳＵ02

ＳＵ01・02は、調査区北東部に位置する（第18図・図版６）。便槽桶遺構である。木材の残存状態は悪く、薄く残っていた。ＳＵ02の掘形の平面形は円形を呈し、直径0.5m、深さ0.25m、内垣の直径0.42m、深さ0.22mを測る。ＳＵ02の東隣にはＳＵ01を検出し、２基一対として使用されていたと思われる。２ヵ所の掘形の埋土は、褐色系であった。

第19図－１は、ＳＵ02出土の肥前系磁器赤絵鉢である。口径（推）10.4cm、器高2.4cm、高台径（推）6.4



第15図　ＳＢ03遺構図

cmを測る。口縁部が輪花形を呈し、その先には赤色釉が施されている。見込みにみられる葉文は印刷によるものと思われる。よって、これらの便槽桶遺構はⅣ期に属すると考えられる。

ＳＫ33

ＳＫ33は、調査区北東部に位置する（表６）。平面形は円形を呈し、直径0.45m、深さ0.16mを測る。この遺構は、本来３次面に属する遺構と思われる。

第19図－２は、唐津焼皿である。高台径4.6cmを測る。高台内側の削りが浅いため、高台内の中心が高台より突き出ている。内面から外面体部にかけて灰釉が施されている。大橋康二氏の編年Ⅱ期に属する。このことから、Ⅲ－１ａ期に属する遺構である。

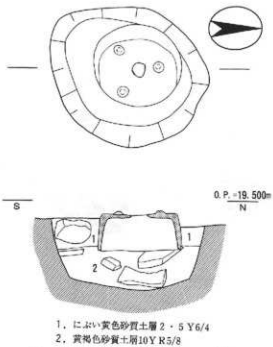
ＳＫ217

ＳＫ217は、調査区南壁沿いの東側に位置する（表６）。平面形は不整形を呈し、長さ0.5m、幅0.3m、深さ0.17mを測る。第１次面ＳＢ01の礎石掘形遺構であるが、第２次面でとらえた。

第17図－１は、京焼系陶器猪口である。口径５cm、器高3.5cm、高台径2.6cmを測る。高台内外面以外に灰釉が掛けられている。２は、萩焼ビラカケ碗である。口径（推）7.6cm、器高4.8cm、高台径3.2cmを測る。内面は薬灰釉、外面は長石釉を最初に掛け、その上に鉄釉を横方向に施している。器形は口縁部が外側へ端反りし、腰部がやや膨らんでいるタイプである。高台内は渦巻き状高台になっているが、削りは浅い。横崎彰一氏（横崎1990年）の分類小碗Ⅶ類Ⅴ期に属する。３・４・９は、肥前染付磁器である。３は、広東型碗である。口径（推）10.6cm、器高6.1cm、高台径６cmを測る。全体的に厚手の作りであるが、呉須の発色は良い。外面には楼閣山水文が描かれ、見込みには岩文がみられる。また、高台内に朱書が施されている。高台畳付は露胎である。４は、色絵皿である。口径（推）12.4cm、器高2.4cm、高台径7.8cmを測る。文様は、口縁部は朱釉で「○×」文を、見込み中央の菊文にも朱釉で描いている。蛇ノ目釉ハギ部には黒色釉で菊弁文を描き、花びら部を緑色釉・紫色釉で施している。蛇ノ目釉ハギ部の回りに朱釉で宝文を描いている。高台は蛇ノ目凹形高台である。９は、瓶である。高台径8.2cm、残存高19.8cmを測る。鶴首形瓶で外面に笹文が描かれている。この瓶と同様のものが、波佐見永尾本登窯跡から出土している（世界・森の博覧会波佐見町運営委員会）。３・４・９は、大橋康二氏の編年Ⅴ期に属する。５は、丹波焼系仏花瓶である。口径（推）12.6cm、器高14.2cm、底径8.5cmを測る。外面体部に黒色の釉土が掛けられている。首部には２つ耳がハリツケてある。６は、柿釉灯明皿である。口径（推）5.4cm、器高0.8cmを測る。内面から外面口縁部まで透明釉が掛けられている。底部に右回転糸切り痕がみられる。７は、三田青磁皿である。内面口縁部に雷文帯、体部に唐人と星座（北斗七星）が印刻によって施されている。８は、交趾写寿字文兜鉢である。口径（推）

21.7cmを測る。文様は型打ちによって施され、体部全面に黄色釉が掛けられている。この兜鉢と同型のものが、紀州藩御庭焼箱楽園焼みられる（和歌山県立博物館1995年）。10は、寛永通寶である。銭径2.4cm、厚さ0.15cm、重さ3.3gを測る。裏は無文であり、『寶』の第18・19面が「ス」となっており、古寛永である。11は、軒丸瓦である。全長（残）15.4cm、瓦当部径13.8cm、文様区径9cm、周縁幅2.1cm、瓦当部厚2.2cmを測る。瓦当文様は内区に右巻き三ッ巴文、外区に連珠文を配する。連珠数は16個である。調整は、瓦当部側面と瓦当部裏面部は周縁に沿ってナデ調整を施している。丸瓦部は、凸面は縦方向にヘラナデ調整、凹面には布目痕と叩板のタタキ痕がみられる。

出土遺物を概観すると、19世紀前半～19世紀中頃と考えられ、Ⅲ－３ｂ期に属する遺構である。よって、第１次面ＳＢ01は、19世紀中頃に建てられたと思われる。



第18図　ＳＫ91遺構図

ＳＫ91

ＳＫ91は、ＳＢ01の北側に位置する（第16図・図版６）。平面形は円形を呈し、直径0.41m、深さ0.15mを測る。ＳＢ03の裏に位置する。

第17図－12は、土師質土器鉢である。底径19.2cmを測る。成形は、体部を粘土紐輪積み成形し、その後、全体に回転ナデ調整し、底部に型押しされた脚を３足張り付けている。また、底部に直径4.5cmの穿孔を施している。その他に、桟瓦などが出土し、これらの年代観から、19世紀前半～19世紀中頃と思われ、Ⅲ－３ｂ期に属する遺構である。

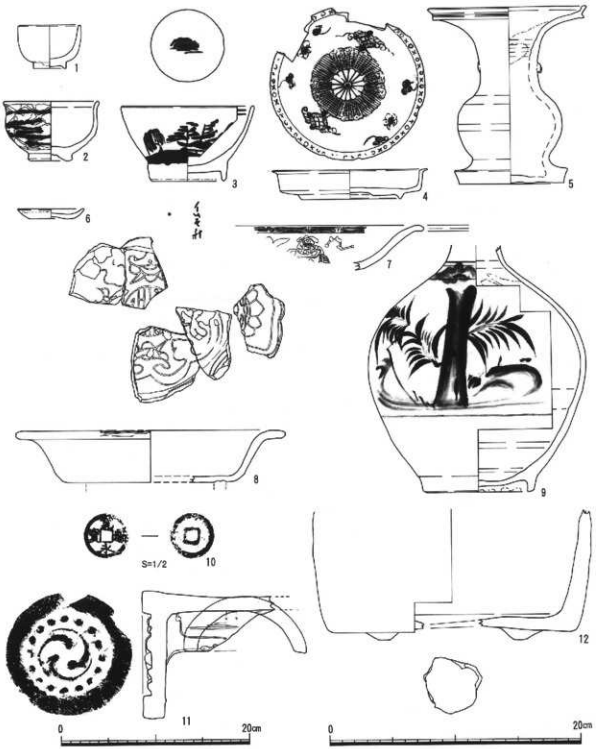
第１次面包含層出土遺物

第19図－４は、白丹波焼徳利である。残存高13.8cm、底径７cmを測る。体部は３カ所に窪みを施し、全体に白化粧掛けされている。底部には、縦0.9cm、横0.6cmの長方形内に「亦」に半菊花形文の刻印がみられる。「白丹波」は、江戸時代後半から始まったと考えられている（青木1993年）。

５．ま と め

Ｂ－１－３区は、16世紀代～現代の遺構を確認した。時代を追ってまとめたいと思う。

16世紀中頃～16世紀後半は、南北に延びる溝と土壙が数ヵ所みられたが、建物は検出されず、建物は建てられていなかったと思われる。建物が建てられはじめるのは、『元禄七年（1694）柳沢吉保領伊丹郷町絵図』（第159図）にみられたように、17世紀末と思われるが、今回の調査では確認できなかった。しかし、享保十四年（1729）の大火災の際の処理土壙（ＳＫ192・200）の西側ラインが、第１次面の屋敷境とほぼ一致することから、18世紀前半以降、屋敷境に変化はなかったと考えられる。その後、19世紀中頃に建物は建てられるが、一番東側の建物だけは昭和三十六年段階ではなくなっていた。これは、北側の市場が昭和三十年に火災に遭っており、その影響を受けたためではないかと考えられる。その後ここは路地となったのであろう。また、調査区北側は、路地が造られた後に、建物が建てられるが、遺構の検出状況からみて、それ以前はず



第17図　ＳＫ217（１～11）・ＳＫ91（12）出土遺物

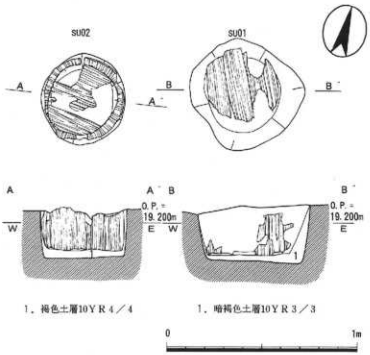
っと裏庭的空間だったと思われる。この様に、16世紀代の遺構を確認できたことや、享保年間の火災痕および屋敷境を検出できたことは大きな成果であった。

6．第86次調査トレンチ調査

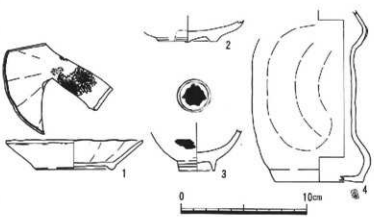
トレンチ調査は、猪名野神社参道から西側の万町通りに通じる東西方向の小道内で、小道がいつ出来たかを探るために行なったものである。（第３図）。小道の西側にＡトレンチ（Ｂ－１－３区南側）、東側はＢトレンチ（Ｂ－１－１区南側）と２ヵ所のトレンチを設定した。トレンチ別に土層の説明をしたいと思う。

Ａトレンチ東壁土層（第20図）

Ａトレンチは、猪名野神社参道から西へ22mの地点に位置する。地山面は中央で嵩り上がる。道路面は現在の面を除いて３時期のものを確認した。一番古い第１次道路面は、第８層上面で、次いで第２次道路面第12層、第３次道路面第11層と続く。これらの道路の整地土は、黄褐色系の砂礫土層によって構成され、硬くしまっている。また、第13層はこの道路の南側側溝で、検出状況からみて、第11層の時期に使用されていたと思われる。第14層は、南側側溝（第13層）の裏込土である。その反対側の北側側溝は第２層である。第３次道路面以降使用されていたと思われる。このことから、第３次道路面以降に道路幅が広がっていったと考えられる。



第18図　ＳＵ01・02遺構図

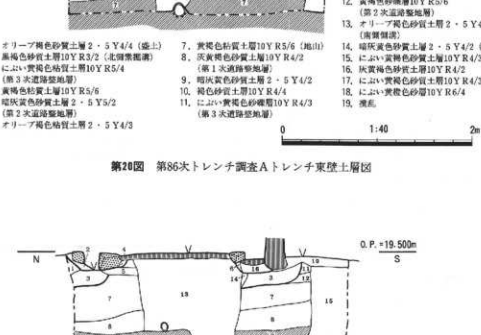


第19図　ＳＵ02（１）・ＳＫ33（２）・ＳＫ70（３）・第１次面包含層（４）出土遺物

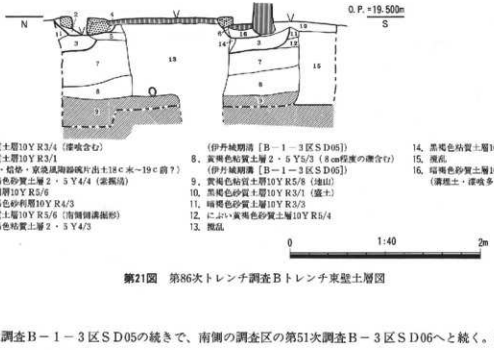
以上の結果、この小道東側は、『元禄七年（1697）柳沢吉保領伊丹郷町絵図』（第159図）に登場する。トレンチ調査では、地山直上にすでに第１次道路面が成立しており、元禄七年以前にすでに存在していた可能性がある。しかし、その年代を特定することはできなかった。

Ｂトレンチ東壁土層（第21図）

Ｂトレンチは、万町通りから東へ4.65mの地点に位置する。土層の中央が攪乱されているため、道路面は確認できなかった。地山直上に、褐色系の粘質土層が２層みられる（第７・８層）。この２層は、北側調査



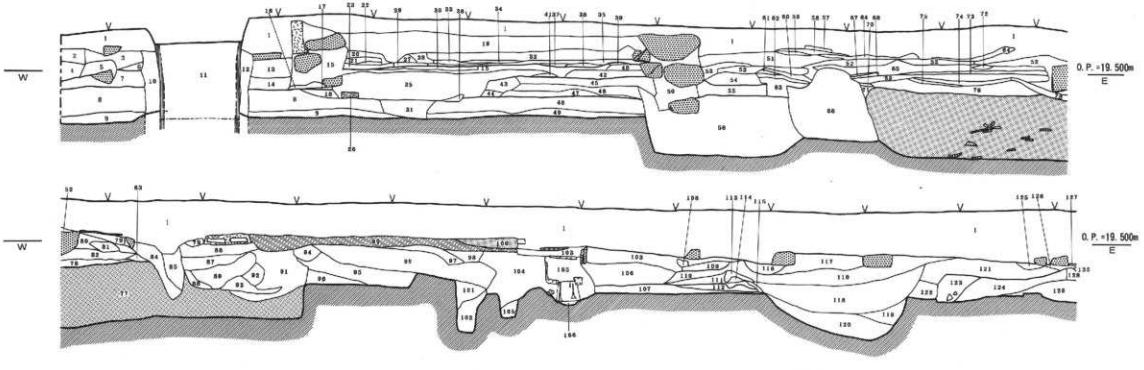
第20図　第86次トレンチ調査Ａトレンチ東壁土層図

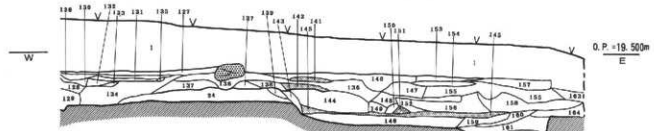


第21図　第86次トレンチ調査Ｂトレンチ東壁土層図

区の第51次調査Ｂ－１－３区ＳＤ05の続きで、南側の調査区の第51次調査Ｂ－３区ＳＤ06へと続く。伊丹城期の溝と考えられている。伊丹城時代の溝の埋土層（第７・８層）の上層に、オリーブ褐色砂質土層（第３層）がみられる。この第３層は北側および南側の素掘側溝の埋土層である。この側溝土層の直上にみられる石積溝（第16第層・第２層）の一時期前の溝と思われる。

以上の結果、小道西側は、伊丹城期にはなく、その後に造られたことがわかったが、トレンチ調査では、その時期を特定することができなかった。前述のように『元禄七年（1697）柳沢吉保領伊丹郷町絵図』では小道は描かれておらず、享保二十年（1735）～明和元年（1769）の『北少路村絵図』(第160図）に登場する。今のところ、その成立は、この絵図の年代を手掛かりにする他ない。





1. 表土
2. 暗オリーブ褐色砂質土層２・５Y3/3
3. オリーブ褐色砂質土層２・５Y4/3
4. オリーブ褐色粘質土層２・５Y4/6
5. オリーブ褐色粘質土層２・５Y4/4
6. 黄褐色粘質土層10Y R5/6
7. 褐色砂質土層10Y R4/4
8. 褐色砂質土層10Y R4/6
9. 明褐色粘質土層７・５Y R5/8
10. 黄褐色粘質土層10Y R5/6
（S E02の堆積）
11. S E02
12. 褐色粘質土層10Y R4/6
（S E02の堆積）
13. 黄褐色砂質土層10Y R5/6
14. 黄褐色砂質土層10Y R5/8
15. におい黄褐色砂質土層10Y R4/3
（１～３cmの礫含む，S B01の西側基礎掘削）
16. におい黄褐色砂質土層10Y R3/3
17. 褐色砂質土層10Y R4/4
18. 黄褐色粘質土層10Y R5/6
19. におい黄褐色粘質土層10Y R5/4
20. 黄褐色砂質土層10Y R5/6
21. におい黄褐色粘質土層10Y R5/3
22. 明褐色粘質土層７・５Y R5/8
23. におい黄褐色粘質土層10Y R5/4
（炭化物多量に含む）
24. 黄褐色粘質土層10Y R5/4
25. オリーブ褐色粘質土層２・５Y4/3
26. 黒色炭化物層10Y R１・7/1
27. 黄褐色粘質土層10Y R5/6
28. 褐色砂質土層10Y R4/4
29. 暗褐色砂質土層10Y R3/4
30. 暗褐色粘質土層10Y R3/3
31. オリーブ褐色粘質土層２・５Y4/6
32. 褐色砂質土層10Y R4/6
33. 明褐色粘質土層７・５Y R5/6
34. 黄褐色粘質土層10Y R5/6
35. オリーブ褐色粘質土層２・５Y4/6
36. 黒褐色砂土層７・５Y R2/2
37. 褐色砂質土層７・５Y R4/4
38. 黄褐色砂質土層10Y R5/8
39. 褐色土層７・５Y R4/3
40. 褐色砂質土層10Y R4/6
41. におい黄色砂質土層２・５Y6/4
42. におい黄褐色粘質土層10Y R5/4
43. 褐色砂質土層10Y R4/4
44. におい黄褐色粘質土層10Y R5/4
45. 褐色砂質土層10Y R4/6
46. 黄褐色砂質土層10Y R5/6
47. におい褐色粘質土層７・５Y5/4
48. におい黄褐色粘質土層10Y R5/4
49. 明赤褐色粘質土層５Y R5/8
50. 褐色砂質土層７・５Y R4/4
（S B02の東側基礎礫の抜形）
51. オリーブ褐色砂質土層２・５Y4/6
52. 褐色粘土層７・５Y R4/3
53. 明黄褐色砂質土層10Y R6/8
54. 褐色砂質土層10Y R4/6
55. 暗褐色砂質土層10Y R3/4
56. 暗褐色粘土層７・５Y R3/4
57. 灰黄褐色粘質土層２・５Y6/2
58. 褐灰色粘質土層10Y R5/1
59. 明黄褐色粘質土層10Y R6/8
60. 黒褐色土層10Y R2/3
61. 灰黄褐色粘質土層２・５Y6/2
62. 黄褐色粘質土層10Y R7/8
63. におい黄褐色粘質土層10Y R5/3
64. 黄褐色砂質土層２・５Y5/6
65. におい黄色粘質土層２・５Y6/4
66. 暗褐色粘質土層10Y R3/4
67. 褐灰色粘質土層10Y R4/1
68. 浅黄色粘質土層５Y7/3
69. 明黄褐色粘質土層２・５Y6/8
70. 明黄褐色粘質土層10Y R6/6
71. 明黄褐色砂質土層２・５Y6/8
72. 明黄褐色粘質土層10Y R6/6
73. 褐色砂質土層10Y R4/6
74. におい黄褐色粘質土層10Y R5/2
75. 明黄褐色粘質土層10Y R6/6
76. 暗灰黄色粘質土層２・５Y5/2
77. 暗褐色粘土層７・５Y R3/4
（炭多量に含む）
78. 暗褐色粘質土層10Y R3/4
79. におい黄褐色砂質土層10Y R7/4
80. 灰褐色粘質土層７・５Y R4/2
81. 明褐色粘質土層７・５Y R5/8
82. におい黄褐色粘質土層10Y R5/3
83. 褐色粘質土層７・５Y R4/4
84. 褐灰色土層10Y R4/1
85. におい黄褐色粘質土層10Y R4/3
86. 暗褐色粘質土層７・５Y R3/4
87. 褐色粘質土層10Y R4/4
88. 褐灰色粘質土層５Y R5/1
89. 灰褐色粘質土層５Y R4/2
90. 黒褐色泥層10Y R2/2
91. におい黄褐色粘質土層10Y R4/3
92. 灰褐色粘質土層７・５Y R4/2
93. におい黄褐色粘質土層10Y R5/3
94. 褐色粘質土層10Y R4/4
95. 褐色粘質土層７・５Y R4/3
96. 明褐色粘質土層７・５Y R5/6
97. 暗赤灰色粘質土層５R4/1
98. 明褐色粘質土層７・５Y R5/8
99. におい黄褐色粘質土層10Y R5/3
100. 褐暗赤褐色粘土層５Y R2/3
101. 灰黄褐色粘質土層10Y R4/2
102. 明褐色粘質土層７・５Y R5/6
103. 褐色粘質土層10Y R4/6
104. 暗灰黄色粘質土層２・５Y4/2
105. 褐灰色粘質土層10Y R6/1
106. におい黄褐色粘質土層10Y R4/3
107. 明褐色粘質土層７・５Y R5/6
108. 黄褐色粘質土層10Y R5/6
109. におい黄褐色粘質土層10R4/3
110. オリーブ褐色粘質土層２・５Y4/4
111. オリーブ褐色粘質土層２・５Y4/6
112. 黄褐色粘質土層10Y R5/6
113. オリーブ褐色粘質土層２・５Y4/3
114. 黄褐色粘質土層10Y R3/6
115. 暗オリーブ褐色粘質土層２・５Y3/3
116. 黄褐色砂質土層２・５Y5/6
（１～３cm大の礫多く含む）
117. 暗褐色粘質土層10Y R3/3
118. におい黄褐色粘質土層10Y R5/4
119. 明黄褐色粘質土層10Y R6/8
120. 黄褐色粘質土層10Y R5/6
121. 褐色粘質土層10Y R4/6
122. オリーブ褐色粘質土層２・５Y4/6
123. オリーブ褐色粘質土層２・５Y4/4
124. 黄褐色粘質土層２・５Y5/4
125. におい黄褐色粘質土層10Y R5/4
126. オリーブ褐色粘質土層２・５Y4/6
127. 黄褐色二枚土層２・５Y5/4
128. におい黄褐色粘質土層10Y R5/4
129. 明褐色粘質土層７・５Y R5/6
130. 黄褐色粘質土層２・５Y5/6
131. におい黄色砂質土層２・５Y6/4
132. オリーブ褐色粘質土層２・５Y4/6
133. 黄褐色粘質土層10Y R5/6
134. 黄褐色粘質土層10Y R5/6
（１cm大の礫含む）
135. オリーブ褐色粘質土層２・５Y4/3
136. におい黄褐色粘質土層10Y R5/4
137. 黄褐色砂質土層２・５Y5/6
138. 暗オリーブ褐色粘質土層２・５Y3/3
139. 暗灰黄色粘質土層２・５Y5/2
140. オリーブ褐色粘質土層２・５Y4/6
141. 黒褐色粘土層10Y R2/3
142. 暗褐色粘土層 10Y R3/3
143. におい黄色砂質土層２・５Y6/4
144. 褐色粘質土層10Y R4/6
145. 黄褐色粘土層２・５Y5/4
146. オリーブ褐色粘質土層２・５Y4/3
147. オリーブ褐色粘質土層２・５Y4/4
148. 黒褐色粘質土層10Y R2/3
149. オリーブ褐色砂質土層２・５Y4/6
150. におい黄色砂質土層２・５Y6/3
151. オリーブ褐色砂質土層２・５Y4/3
（炭化物多量に含む）
152. 暗灰黄色粘質土層２・５Y4/2
153. におい黄褐色粘質土層10Y R5/4
154. 黄褐色粘質土層２・３Y5/3
155. オリーブ褐色粘質土層２・５Y4/3
156. 暗オリーブ褐色粘質土層２・５Y3/3
157. オリーブ褐色粘質土層２・５Y4/6
158. 黄褐色砂質土層２・５Y5/6
159. におい黄褐色粘質土層10Y R5/4
160. におい黄色砂質土層２・５Y6/4
161. オリーブ褐色粘質土層２・５Y4/6
162. 明黄褐色粘質土層10Y R6/8
163. 黄褐色砂質土層２・５Y5/4
164. におい黄褐色粘質土層10Y R5/4
165. 褐色土層７・５Y4/4
166. 褐色土層10Y R4/6

0　1:40　2m

第22図　B―４区北壁土層図

第４節　第63次調査Ｂ－４区

Ｂ－４区は、猪名野神社参道沿いの西側に位置し、第86次調査Ｂ－12区の南側にあたる。『天保十五（1844）伊丹郷町分間絵図』（第159図）によると、旧「北少路村」にあたることが分かる。『元禄七年（1694）柳沢吉保領伊丹郷町絵図』（第159図）では、庄右衛門の屋敷地に相当する。調査面積は220㎡である。

１．基本層序

調査面は４面である。地山面は東端でＯ．Ｐ．＝18.900m、西端でＯ．Ｐ．＝18.950m、北端ではＯ．Ｐ．＝19.100m前後を測り、東西から中央に向かって浅い谷状地形が認められる。この谷状地形より西側では、７世紀代の遺物を含む包含層（第22図北壁第９層・49層、現地表面より0.9m下）が堆積していた。北壁土層断面図を下層から観察すると、地山直上に、７世紀代の遺物を含む包含層が堆積し、それを除去した地山面を第４次遺構面とし捉えた。その上に、第３次遺構面（第22図北壁第８層・48層、現地表面より0.8m下）、その上層には、第２次遺構面（第22図北壁第７・45・145層、現地表面現地表面より約0.6m下）がみられた。その上に、第１次面三和土直下の整地層（第22図北壁第138層現地表面より0.55m下）、その上層には、第１次面三和土層（第22図北壁第121・127層、現地表面より0.5m下）を検出した。

２．第４次面の遺構と遺物

第４次面では、三和土・礎石は検出できなかった。しかし、東側間口から７m付近で柱穴を数ヵ所検出し、１棟の掘立柱建物（ＳＢ04）が復元できた。その西側でも16世紀前半～16世紀中頃の柱穴痕（ＳＰ223表６・図版19－９・10）を検出しており、この時期には掘立柱建物が建っていたことがわかった。その他の柱穴には出土遺物はなかったが、上面の遺構の年代が元禄年間（1699年・1702年）の火災面であることから、第４次面の下限は17世紀代と考えられ、この頃の掘立柱建物も含まれていたと思われる。その他は、全体的に上面の掘り残し遺構が目立った。また、基本層序でも述べたが、調査区西壁から東へ6.2m付近で７世紀代の遺物を含む包含層を検出した。この包含層下の地山面で、７～８世紀代の掘立柱建物が、猪名野神社参道沿い（第51次調査Ｂ－１－１区ＳＢ13・第199次調査Ｂ－17－２区ＳＢ02）で確認されている。今回は、遺構は検出できなかったが、この時代の包含層の広がりを知る上で大きな成果を得られた。

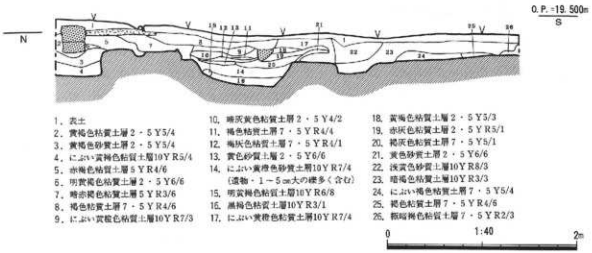
ＳＢ04

ＳＢ04は、調査区東側に位置する掘立柱建物である（第24図・図版11）。柱穴の掘形の平面形は楕円形を呈する。柱穴には、花崗岩製組合せ五輪塔の蓮華座や火輪部を根石に転用していた。柱間距離は４～５mで、東西の桁行約４m以上、梁行約５m以上である。後でも述べるが、柱穴（ＳＰ214・222）より出土した遺物の年代観から、16世紀前半～16世紀中頃と考えられ、この頃に建物が建てられたと思われる。Ⅰ期に属する。

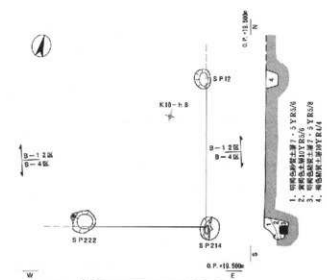
ＳＰ214

ＳＰ214は、調査区東側間口より西へ３mの付近に位置する（第24図）。平面形は楕円形を呈し、長径0.73m、短径0.6m、深さ0.77mを測る。ＳＢ04に伴う柱穴である。

第25図－１は、花崗岩製組合せ五輪塔の蓮華座である。一辺27.6cm、高さ10.7cmを測る。上部に薄い座を造り、そのまわりに、簡略化した反花を刻んでいる。上面の一部から底部にかけて火を受けた跡がみられる。この他には、須恵器片や瓦質土器羽釜片・岡崎正雄氏の分類（岡崎1989年）３ａ類に属する丹波焼擂鉢が出土しており（図版19－６・７）、これらの年代観から16世紀前半～16世紀中頃と考えられる。Ⅰ期（伊丹城



第23図　B－4区東壁土層図



第24図　S B04遺構図

期）に属する。

S P 222

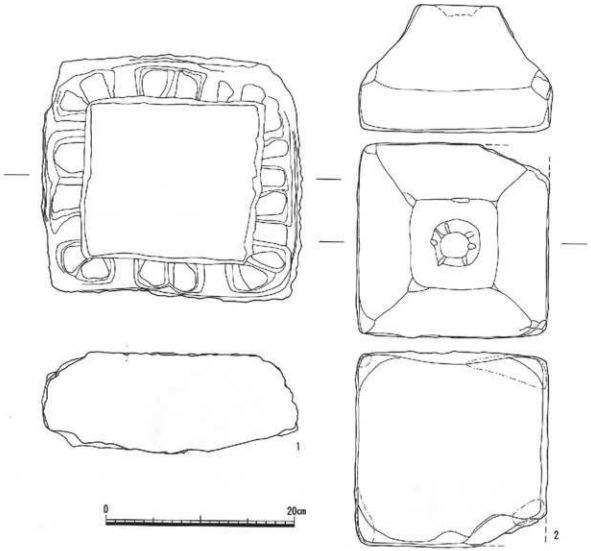
S P 222は、S P 214の東側に位置する（第24図）。平面形は不整形を呈し、長径0.8m、短径0.76m、深さ0.71mを測る。S B04に伴う柱穴である。

第25図－2は、花崗岩製組合せ五輪塔火輪部である。上部長8.6cm、下部長20.1cm、高さ13.5cmを測る。上部には直径5cm、深さ1cmのくり込みが施されている。底部には、火を受けた跡がみられた。そのほかに、小片ではあったが、岡崎正雄氏の分類3ａ類に属する丹波焼擂鉢が出土した。よって、16世紀前半～16世紀中頃の年代観と考えられる。Ⅰ期（伊丹城期）に属する遺構である。

S K 236

S K 236は、調査区中程に位置する（表6）。平面形は不整形を呈し、長さ0.85m以上、幅0.6m以上、深さ0.52mを測る。埋土は、褐色粘質土層が1層堆積する。

第26図－1は、萩焼輪花鉢である。口径（推）11.9cm、器高6.4cm、高台径4.9cmを測る。成形は、ロクロ成形後、型打ち成形を施し、内面から外面体部に掛けて、たっぷりと薬灰釉が掛けられている。高台は無釉である。楢崎彰一氏の分類（楢崎1990年）小鉢Ⅴ類に属する。2は、丹波焼徳利である。残存高13.5cm、底部径4.3cmを測る。体部全体に塗土を施し、外面底部には窯道具痕がみられる。3は、軒平瓦である。全長（残）27cm、瓦当部高4cm、瓦当部厚1.85cm、文様区幅2.21cm、文様区厚1.9cmを測る。文様は、退化した均整唐草文である。文様構成は、中心飾が花冠と萼でＹ字状若葉が端文様にみられるものである。調整は、平



第25図　ＳＰ214（1）・ＳＰ222（2）出土遺物

瓦部凹面は横方向にナデ調整後、両側縁を縦方向にナデを施している。凸面は、瓦当部との接着部にはナデ調整がみられるが、それ以外は不定方向にナデが部分的にみられる。その他にも、19世紀代の遺物が多量に出土している。

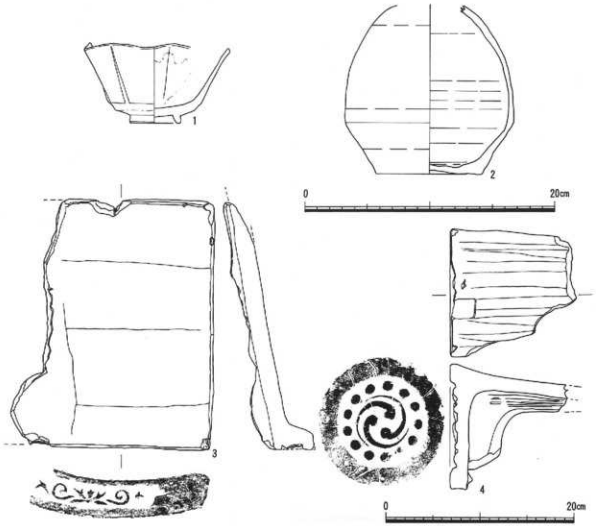
出土遺物を概観すると、19世紀前半～19世紀中頃と考えられる。Ⅲ－３ｂ期に属する。

ＳＫ260

ＳＫ260は、南壁沿い西端に位置する（表６）。平面形は不整形を呈し、長さ4.59m以上、幅1.6m以上、深さ0.75mを測る。19世紀代の遺物が多量に出土した。上面でこれと重複して検出したＳＫ46・107・186は、遺物の年代観から同遺構と思われる。

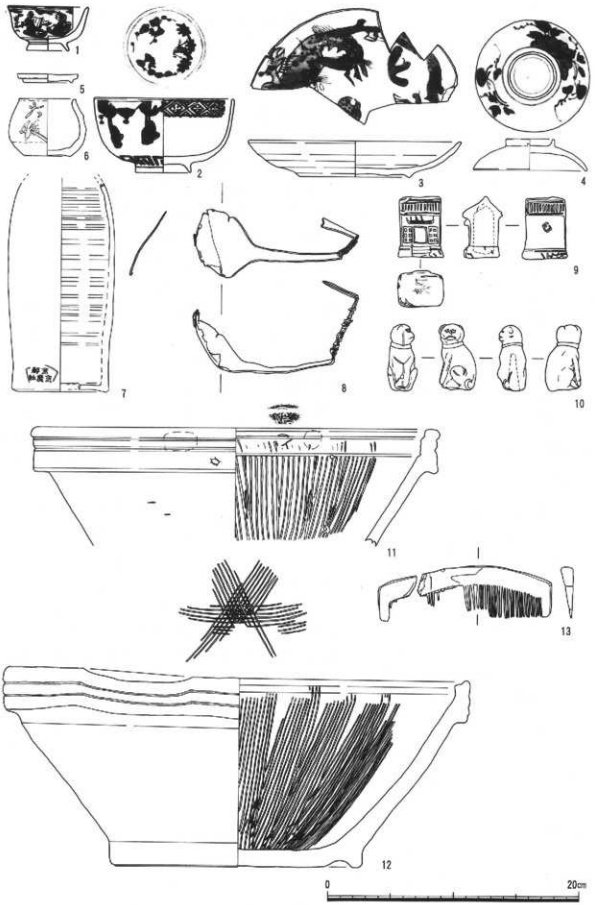
第26図－４は、軒丸瓦である。全長（残）12.4cm、瓦当部径13.4cm、文様区径10.1cm、内区径8.4cm、周縁幅２cm、瓦当部厚1.9cmを測る。瓦当文様は内区に右巻き三ツ巴文、外区に連珠文を配する。連珠数は13個である。調整は、瓦当部側面と瓦当部裏面は周縁に沿ってナデ調整を施している。丸瓦部は、凸面は縦方向にヘラナデ調整、凹面は叩板調整がみられる。

第27図－１・２・４は、肥前磁器である。１は、赤絵小杯である。口径（推）6.5cm、器高3.6cm、高台径

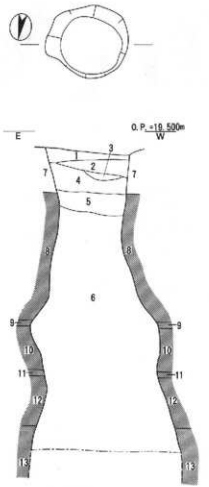


第26図　ＳＫ236（１～３）・ＳＫ260（４）出土遺物

3.3cmを測る。口縁部と高台底部が外側に反るタイプのものである。外面体部には、人物文が描かれている。高台畳付は露胎である。２は、染付碗である。口径（推）11.3cm、器高６cm、高台径4.5cmを測る。外面に宝文、見込みに松竹梅文、内面口縁部に四方襷文が描かれている。高台畳付は露胎である。４は、染付蓋である。口径（推）9.1cm、器高2.6cm、つまみ径3.9cmを測る。外面体部に牡丹文が描かれている。１・２・４は、大橋康二氏の編年（大橋1988年）Ｖ期に属する。３は、中国製青花皿である。口径（推）16.8cm、器高2.9cm、高台径4.4cmを測る。全体的に呉須の発色が悪く、内面全体に飛龍文が描かれている。高台にはハナレ砂が付着している。漳州窯の製品と思われる。５・６は、京焼系蓋物である。６の身部は、口径（推）4.6cm、器高4.6cm、底径3.6cmを測る。体部内面から外面体部にかけて灰釉を掛け、外面体部に白泥によるイッチン掛けによって「大坂」の名が記されている。底部には左回転糸切り痕がみられる。５の蓋は、口径４cm、器高0.7cmを測る。外面全体に灰釉を施しているが、内面は無釉である。また、これらと同じものが第３次面ＳＫ186でも出土した（図版19－11・12）。こちらの方が残存状態がよく、体部に「大坂心斎橋通」の文字がみられた。７は、白磁徳利である。器高（残）16.7cm、底径7.8cmを測る。体部下部に扇形窓内に「京都東廣社」の刻印がみられる。８は、銅製杓である。残存長13.2cm、厚さ0.2cmを測る。一枚の銅板から造られており、握手の部分には木の皮のようなものを巻き付けている。９・10は、ミニチュア土製品である。



第27図　ＳＫ260出土遺物



第28図　ＳＥ04遺構図

９は、箱庭道具で蔵形である。高さ4.8cm、幅3.7cmを測る。胎土は白茶色（9Y R9/2）を呈する。型合わせ成形で、合わせ目にはヘラケズリ後、ナデ調整を施している。また、屋根の部分には黒色の彩色がみられる。底部には「新」の墨書があった。10は、狛犬形人形である。高さ5.4cm、最大幅2.7cmを測る。胎土は明色（9Y R8/9）を呈する。これも型合わせ成形で、合わせ目にはヘラケズリ調整を施している。底部に直径0.9cm、深さ３cmの穿孔がみられる。11・12は、塀焼擂鉢である。11は、口径（推）31cmを測る。口縁部外縁帯の張りが強いタイプである。外面調整として、口縁部外縁帯直下まで回転ヘラケズリがみられる。擂目は右回りで７本単位で施している。内面口縁部に「極」の刻印がみられる。白神典之氏（白神1990年）の分類Ⅱ類に属する。12は、口径36.5cm、器高15.7cm、高台径19.5cmを測る。高台を持つタイプのもので、外面調整は、底部際から口縁部外縁帯やや下まで回転ヘラケズリを丁寧に施している。内面の擂目は右回りで10本単位である。白神典之氏の分類Ⅰ－２類に属する。12は、木製櫛である。復元長13.1cm、幅4.1cmを測る。深川形を呈し、水櫛（水をつけて髪をなで整える梳櫛）と思われる。歯は密にみられ、１㎜間隔で74歯あると想定される。

出土遺物を概観すると、19世紀前半～19世紀後半と考えられる。Ⅲ－３ｂ期に属する。

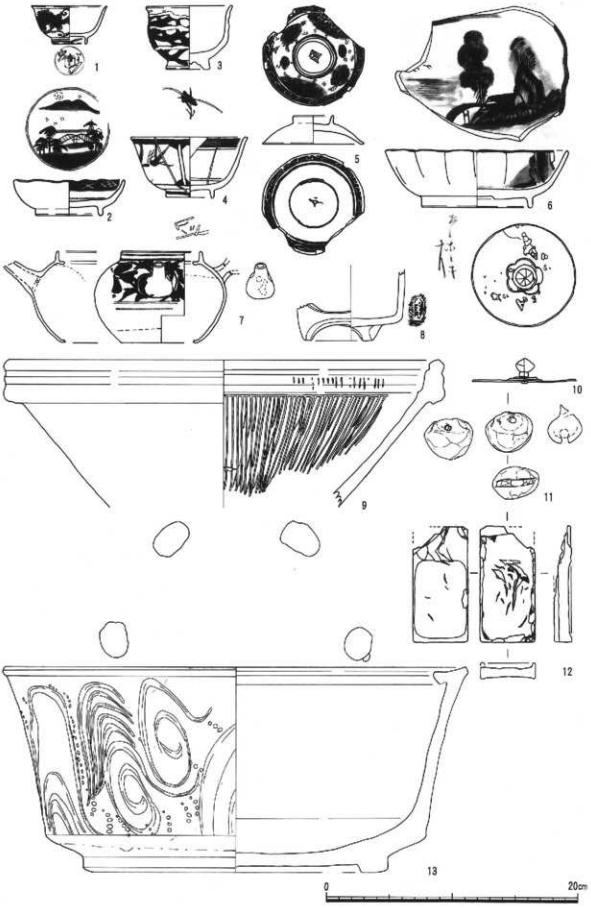
３．第３次面の遺構と遺物

３次面では、三和土・礎石は検出されなかった。調査区東側間口付近と、北壁沿い中央で大型の焼土処理土壙を検出した。検出した焼土処理土壙は、本来は第２次面の遺構に属するものである。

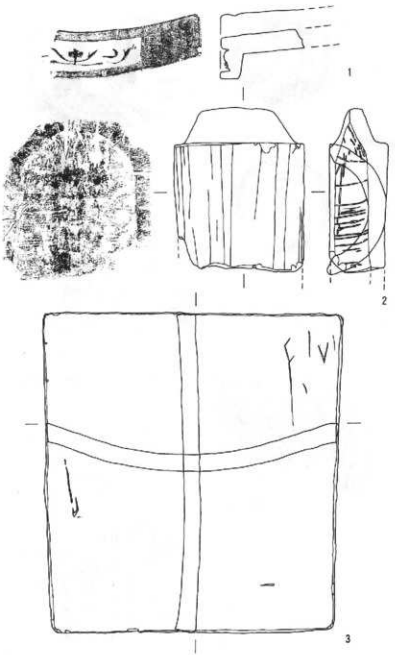
ＳＥ04

ＳＥ04は、調査区中央よりやや西側に位置する（第28図・図版11）。平面形は不整形を呈し、長さ1.34m、幅1.15m、深さ５m以上を測る。素掘りの井戸である。筒型に掘られ、下方はラッパ状に広がっている。湧水層は確認できなかった。第２次面で上面を確認していたが、この面でとらえた。19世紀代の遺物が多量に出土した。

第29図－１・２・５・６は、肥前磁器である。１は、染付小杯である。口径（推）６cm、器高3.1cm、高台径3.1cmを測る。体部は非常に薄造りで、呉須の発色も良好である。文様は、花唐草文である。高台部に焼き継ぎ痕がみられ、高台内には朱書が施されている。２は、染付皿である。口径（推）９cm、器高2.9cm、高台径5.4cmを測る。口縁部は、輪花形を呈する。文様は内面に山水文を描き、内面口縁部には墨弾きによって文様を施している。見込みに目痕がみられ、高台畳付は露胎である。５は、赤絵壺である。口径（推）



第29図　ＳＥ04出土遺物(1)



第30図　ＳＥ04出土遺物(2)

8.1cm、器高2.3cm、つまみ径3.2㎝を測る。口縁部内外面に墨弾きによる唐草文を描き、外面体部には花弁文がみられる。6は、染付輪花鉢である。口径（推）14.6cm、器高4.6cm、高台径8.8cmを測る。内面に楼閣山水文が描かれている。高台は蛇ノ目凹型高台で、高台内には墨書がみられる。1・2・5・6は、大橋康二氏の編年Ⅴ期に属する。3は、萩焼ビラカケ碗である。口径6.9cm、器高5.1cm、高台径3.3cmを測る。口縁部が外側に強く反るタイプのものである。高台削りは深い。橋崎彰一氏の編年小碗Ⅵ期に属する。4は、瀬戸・美濃磁器染付端反碗である。口径（推）9.3cm、器高4.9cm、高台径3.7cmを測る。口縁部の外反度は弱く、器厚は全体的に厚いタイプである。文様は、外面体部を3つに分け松竹梅をそれぞれ描いている。体部には焼継ぎ痕があり、高台畳付は露胎である。藤澤良祐氏（藤澤1998年）のⅣ期第10小期Ⅰg類に属する。7は、関西系染付磁器急須である。口径（推）6.5cm、器高7.3cm、底径6.6cmを測る。外面体部に花唐草文が描かれている。外面底部と内面口縁部は無釉である。8は、京焼涼炉である。底径8㎝を測る。胎土はpale yellow（5.5Y9/1.5）を呈し、精良な白色土を用いる。外面は右回転ナデ調整。外面底部の3足の脚はヘラナデによる。また、底部縁をヘラケズリよって面取りを施している。体部には「あわた」の刻印がみられる。9は、堺焼擂鉢である。口径（推）34.6cmを測る。口縁部外縁帯の張りが強いタイプである。外面調整は、口縁部外縁帯直下まで回転ヘラケズリ調整を施している。内面の擂目は右回りで9本単位である。白神典之氏の分類Ⅱ類に属する。10は、銅製蓋である。直径8.2cm、器高2㎝を測る。大阪府文化財研究センターの協力によるＸ線写真調査の結果（図版16－16）で、つまみ内に体部と飾りを繋ぐ芯があることが分かった。11は、土師質土器土鈴である。高さ3.3cm、幅3.8cm、厚さ2.5cmを測る。手づくね成形で、最初に粘土を袋状に作り、その中に土製玉を入れ、釣鐘状に作っている。その後、底部にヘラで口を開けている。12は、硯である。

残存長さ9.2cm、幅4.4cm、高さ1.4cmを測る。材質は粘板岩である。色調はdeep orange（5YR5/10）を呈し、赤間石ではないかと思われる。13は、瀬戸・美濃焼水甕である。口径36.6cm、器高16.8cm、高台径19.9cmを測る。口縁部上端面が平坦で、外端部が水平方向に張り出すタイプのものである。外面体部には流水文が彫られ、高台以外に灰釉を掛け、外面の文様部の上に、鉄釉と緑釉を流し掛けしている。藤澤良祐氏の本業焼編年（藤澤1987）の第9小期に属する。

第30図－1は、軒平瓦である。全長（残）13.5cm、上弧幅（推）27.2cm、瓦当部高4.5cm、文様区幅13.6cm、文様区厚2.5cmを測る。文様は、退化した均整唐草文で、中心飾が花冠、端文様にY字状若葉がみられる。瓦当部と平瓦部の凹面はヘラナデ調整、平瓦部凸面はナデ調整を施している。瓦当部に長さ3.1cm、幅1cmの「金岡瓦宗」の刻印がみられる。2は、丸瓦である。全長（残）17.2cm、丸瓦部幅13.9cm、玉縁部長3.8cm、玉縁部幅12.5cmを測る。丸瓦部凸面は縦方向にヘラナデ調整、後端縁部には面取りを施している。丸瓦部凹面はコビキB痕がみられ、玉縁部凹面は布目が残る。玉縁部凸面にはヨコナデ調整を施している。3は、平瓦である。全長33.8cm、後端部幅29.7cm、前端部幅31.9cmを測る。凹面は丁寧にヘラミガキ調整、凸面は横方向にナデ調整している。ここから出土した遺物は計測分析されており、その結果、産地別をみると、京焼系が肥前系よりやや多く、在地製品が全体的に少なかった。用途別では、京焼系の調度具が目立ち、食膳具は肥前系が主流であるという結果がでた。

出土遺物を概観すると、19世紀前半～19世紀後半と考えられる。Ⅲ－3b期に属する遺構である。

SW07

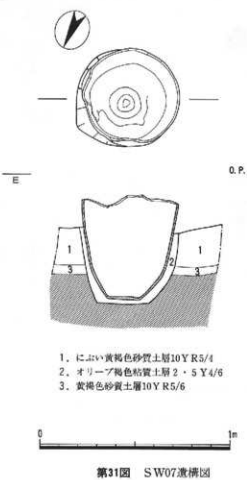
SW07は、調査区西壁沿いに位置する（第31図・図版11）。便槽桶遺構である。掘形の平面形は楕円形を呈し、長径0.58m、短径0.52m、深さ0.35mを測る。外面口縁部から体部にかけて、火に遭った痕があった。

第32図－1は、丹波焼甕である。口径（推）47cm、器高64.5cm、底径20cmを測る。口縁部上面に3条の沈線を巡らせ、肩部に不遊環を張り付けている。内面には輪積み痕がみられ、外面には塗土を施している。このほかには、大橋康二氏の編年Ⅴ期に属する肥前磁器染付碗などが出土しており、18世紀末～19世紀前半と考えられる。よって、Ⅲ－3a期に属する。

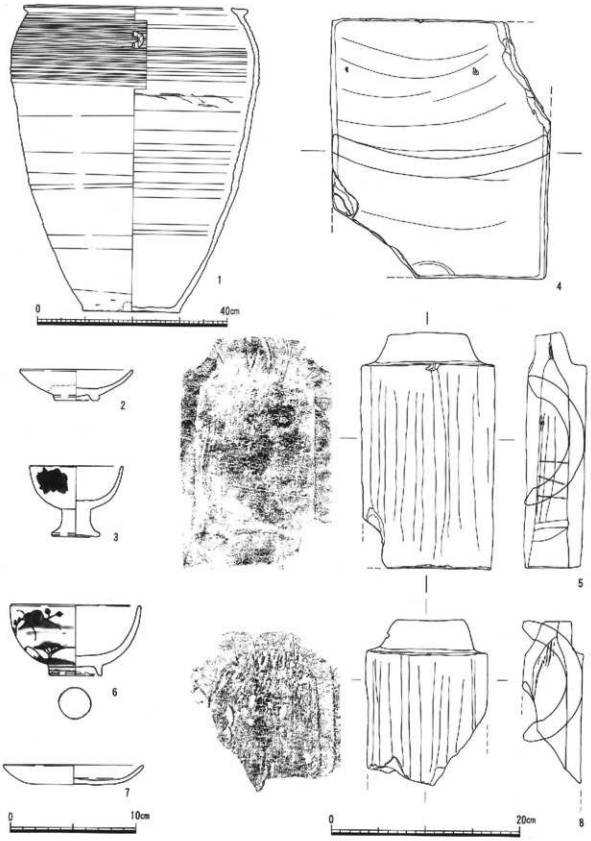
SK156

SK156は、調査区北壁沿い中程に位置する（表6）。平面形は不整形を呈し、長さ3m、幅1.54m、深さ0.5mを測る。北側が調査区外に延びており、北側の調査区B－12区SK107につながる。埋土は、暗褐色焼土層が堆積する、焼土処理土壙である。出土遺物から享保十四年（1729）の大火災の際の処理土壙と思われる。

第32図－2・3は、肥前磁器である。2は、白



第31図　SW07遺構図



第32図　SW07（1）・SK156（2～5）・SK196（6～8）出土遺物

磁皿である。口径（推）9.1cm、器高2.5cm、高台径3.5cmを測る。見込みに蛇ノ目釉ハギがみられる。高台は無釉である。3は、染付仏飯具である。口径（推）7.4cm、器高5.7cm、底径3.8cmを測る。外面の文様はコンニャク印判によって、蓮と楓が描かれている。底部は無釉である。2・3ともに、大橋康二氏の編年Ⅳ期に属する。4は、平瓦である。全長27.8cm、幅（最大幅）18.2cm、厚さ2cmを測る。凹面はヨコナデ調整、凸面は未調整で周縁部のみナデ調整を施している。5は、丸瓦である。全長23.4cm、丸瓦部幅14cm、高さ6.2cm、玉縁部長3.2cm、玉縁部幅11.2cmを測る。調整は、丸瓦部凸面は縦方向にヘラミガキ調整、丸瓦部凹面は叩板調整が行われ布目痕もみられる。玉縁部凸面はヨコナデ調整、玉縁部凹面には布目痕があった。出土した瓦類は、火災痕がみられ、火災の激しさが感じられる。

出土遺物を概観すると、18世紀初頭と考えられる。Ⅲ－２ａ期に属する遺構である。

ＳＫ196

ＳＫ196は、調査区東側間口に位置する（表６）。平面形は不整形を呈し、長さ3.19m以上、幅1.73m、深さ0.51mを測る。北側に接している第２次面ＳＫ70は、遺構の切合いが複雑で別に検出したが、これと同遺構と考えられる。埋土は１層で、暗オリーブ褐色土層内に炭化物が多量に含んでいた。出土遺物から元禄年間（1699年・1702年）の大火災の際の処理土壙と思われる。この大火災痕は、これまでにも猪名野神社参道を挟んで両側で検出されている。

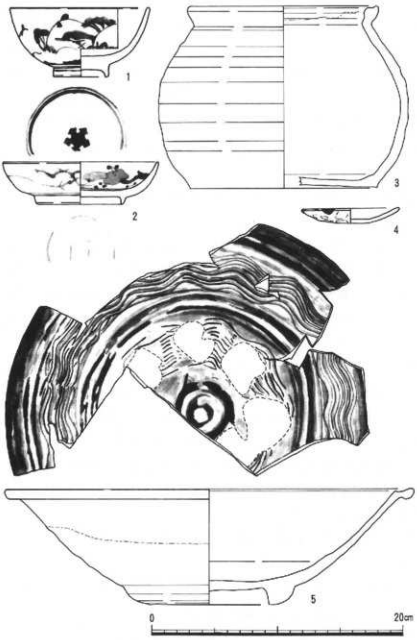
第32図－６は、肥前磁器染付碗である。口径（推）10.4cm、器高5.8cm、高台径3.9cmを測る。外面体部に、草花文が描かれているが、呉須の発色は悪い。高台畳付は露胎である。大橋康二氏の編年のⅣ期に属する。７は、土師質土器皿である。口径（推）11cm、器高1.6cmを測る。手づくね成形で、口縁部内外面にヨコナデ調整、内面底部はナデ調整、外面底部は指頭圧調整を施している。内面には煤が付着している。８は、丸瓦である。全長（残）17.2cm、丸瓦部幅13cm、高さ6.3cm、玉縁部長３cm、玉縁部幅8.2cmを測る。調整は、丸瓦部凸面は縦方向にヘラミガキ調整、丸瓦部凹面は叩板調整があり、布目痕もみられる。玉縁部凸面はヨコナデ調整、玉縁部凹面には布目痕がみられる。

出土遺物を概観すると、17世紀末～18世紀初頭と考えられ、Ⅲ－２ａ期に属する。

ＳＫ135

ＳＫ135は、北壁沿いの中程、ＳＫ156の東側に位置する（表６）。平面形は不整形を呈し、長さ2.27m、幅1.94m、深さ0.21mを測る。18世紀前半～18世紀中頃までの遺物が多量に出土した。

第33図－１・２は、肥前磁器である。１は、染付碗である。口径（推）11.2cm、器高5.5cm、高台径4.3cmを測る。外面に呉須と鉄釉で松文を描いている。見込みに蛇ノ目釉ハギがみられ、高台畳付は露胎である。２は、染付皿である。口径（推）12.8cm、器高3.3cm、高台径7.4cmを測る。全体的に呉須の発色が悪い。内面体部に雪輪草花文、見込みにはコンニャク印判によって五弁花が描かれている。外面体部は連続唐草文が描かれ、高台内には省略化した「太明年製」の銘がみられる。１・２ともに大橋康二氏の編年Ⅳ期に属する。３は、丹波焼壺である。口径（推）14.8cm、器高14.5cm、底径14.8cmを測る。外面全体に塗土が施されている。４は、土師質土器皿である。口径（推）7.7cm、器高1.3cmを測る。手づくね成形で、内面はナデ調整、外面は指頭圧調整を施している。口縁部には２ヵ所灯芯痕がみられる。川口宏海氏の分類（1997年ｂ）ＩＴ（伊丹郷町期）１型式Ａ類に属する。５は、唐津系陶器刷毛目鉢である。口径（推）32.4cm、器高9.3cm、高台径9.6cmを測る。高台つくりは、内外面ともに直立に立ち上がるタイプのものである。内面の文様は、刷毛目文による。外面口縁部から体部中程まで鉄釉が掛けられている。見込みには砂目痕がみられる。大橋康二氏の編年Ⅳ期に属する。そのほかの肥前陶磁器の様相をみても、Ⅴ期に属するものは出土していなかった。



第33図　ＳＫ135出土遺物

よって、18世紀前半～18世紀中頃に属する遺構と思われる。Ⅲ－２ｂ期に属する。

４．第２次面の遺構と遺物

第２次面では、礎石もみられたが、これらは第１次面の建物（ＳＢ01）に伴うものである。また、北壁沿いに検出した三和土も、この三和土の直下の遺構の年代観から、第１次面の三和土を張り替える前のものと思われる。中央よりやや東側で17世紀末～18世紀後半の便槽桶（ＳＵ01）と便槽壅（ＳＷ06）を検出した。これらは、遺物の年代観が17世紀末～18世紀初頭と考えられ、ＳＢ01よりは古く、１時期前の建物に伴うものと思われる。この建物に関しては、三和土・礎石を検出できなかった。しかし、元禄年間の大火災の焼土処理土壙を東側間口より７ｍ付近で検出した。このような大型の焼土処理土壙は、建物の床下で検出される例が多くあり、床下の湿気取りのような意味があると考えられている。このことから、少なくとも、東側間口から西へ７ｍのところまでは、建物が建っていたと考えられる。また、調査区中央から西側では廃棄土壙が多くみられることから、裏庭だったと思われる。調査区西端より検出したＳＢ05は、土蔵建物の基礎の一部である。この続きは、第51次調査Ｂ－２－２区・第63次調査Ｂ－５区でも検出している。

ＳＢ05

ＳＢ05は、調査区西端に位置する（第34図・図版11）。土蔵建物の基礎である。この続きは前回報告した第51次調査Ｂ－２－２区と第63次調査Ｂ－５区で検出している（藤井直正他『有岡城跡・伊丹郷町Ⅴ』1997年）。大きさは、東西4.33ｍ×南北４ｍ以上を測る。北側の調査区第86次調査Ｂ－12区では確認できなかった。この建物の年代は、19世紀後半～20世紀初頭と考えられている。Ⅳ期に属する。

ＳＹ02

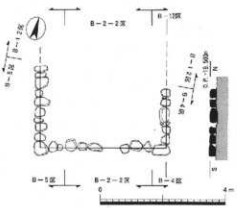
ＳＹ02は、調査区中央に位置する（第35図・図版11）。水琴窟である。掘形の平面形は楕円形を呈し、長径0.55m、短径0.52m、深さ0.25mを測る。丹波焼植木鉢を逆さまに使用した簡単なものである。

第38図－１は、丹波焼植木鉢である。口径（推）28.4cmを測る。口縁は綾花状で、頸部に一条の帯を貼りつけしている。体部にはカンナケズリによって、蔓花文と沈線を施している。そのほかに遺物は出土しなかったが、このタイプの丹波焼植木鉢が伊丹郷町遺跡においてみられ始めるのは、19世紀前半～19世紀中頃である。よって、Ⅲ－３ｂ期に属する。

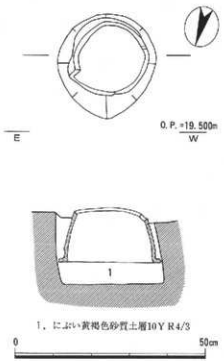
ＳＵ01

ＳＵ01は、調査区北壁沿いやや東側に位置する（第36図・図版11）。堀桶遺構である。掘形の平面形は楕円形を呈し、長径0.77m、短径６m、深さ0.32mを測る。掘形から出土した遺物より、17世紀後半～18世紀初頭と考えられる。

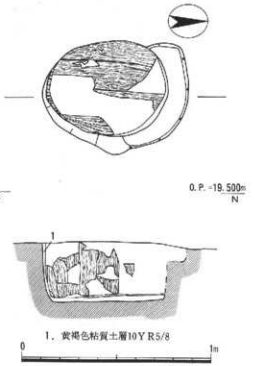
第39図－１は、瀬戸焼皿である。口径（推）9.1cm、器高2.5cm、高台径3.3cmを測る。内面は青緑釉、外面体部は透明釉、高台は無釉である。見込みには蛇ノ目釉ハギがみられる。２は、肥前磁器染付皿である。口径9.8cm、器高2.1cm、高台径5.6cmを測る。全体的に薄作りである。内面に梅樹文、外面体部に雲流文が描かれている。高台畳付は露胎である。１・２ともに、大橋康二氏の編年Ⅳ期に属する。３は、煙管吸口部である。吸口長5.3cm、吸口部に直径0.6cmの穿孔を有する。肩部は無く、体部にくぼみがあるタイプである。古泉弘氏の編年（古泉1983



第34図　ＳＢ05遺構図



第35図　ＳＹ02遺構図



第36図　ＳＵ01遺構図

年）Ⅳ期に属する。４は、土師質土器焙烙である。口径（推）36cmを測る。口縁部と底部が直立するタイプである。調整は、口縁部内外面はヨコナデ調整、内面底部はナデ調整、外面底部は未調整である。内面に焙痕、外面に煤が付着している。難波洋三氏の分類（難波1992年）Ｅ類に属する。

出土遺物の年代は、17世紀末～18世紀初頭と考えられる。Ⅲ－２ａ期に属する。

ＳＷ06

ＳＷ06は、調査区中央やや東側に位置する（第37図・図版12）。掘形の平面形は円形を呈し、直径0.65m、深さ0.41mを測る。掘形から出土した遺物の年代観から18世紀前半～18世紀後半と考えられる。よって、北側で検出した埋桶ＳＵ01より新しく、ＳＵ01廃棄後、陶器製便槽甕に造り替えられたと思われる。

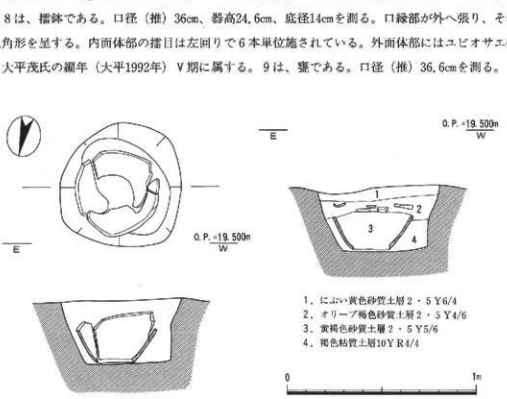
第38図－２は、丹波焼甕である。底径19.7cmを測る。全体に釉土が施されている。内面底部には白色の付着物と煤がみられる。

出土遺物を概観すると、18世紀前半～18世紀後半と考えられ、Ⅲ－２ｂ期に属する遺構である。

ＳＫ69

ＳＫ69は、東側間口北側に位置する（表６・図版12）。平面形は不整形を呈し、検出長1.90m、幅1.78m、深さ0.53mを測る。埋土は４層で、褐色系の土層に焼土が多量に含まれていた。焼土処理土壙である。

第39図－５・７は、肥前磁器である。５は、白磁皿である。口径（推）13.6cm、器高3.2cm、高台径（推）4.7cmを測る。見込みに蛇ノ目釉ハギを施しており、高台は無釉である。７は、染付皿である。口径（推）14.2cm、器高2.4cm、高台径9.6cmを測る。全体的に薄手で、呉須の発色も良好である。見込みに花束文、内面体部に松竹梅文、外面体部に唐草文が描かれている。６は、肥前京焼風陶器碗である。口径（推）9.2cm、器高5.7cm、高台径5.1cmを測る。高台の削りはやや浅いタイプである。外面体部に山水文の鉄絵が描かれ、高台内には「森」刻印がみられる。５～７は、大橋康二氏の編年Ⅳ期に属する。８・９は、丹波焼である。８は、擂鉢である。口径（推）36cm、器高24.6cm、底径14cmを測る。口縁部が外へ張り、その断面形が正三角形を呈する。内面体部の擂目は左回りで６本単位施されている。外面体部にはユビオサエ痕がみられる。大平茂氏の編年（大平1992年）Ⅴ期に属する。９は、甕である。口径（推）36.6cmを測る。口縁部



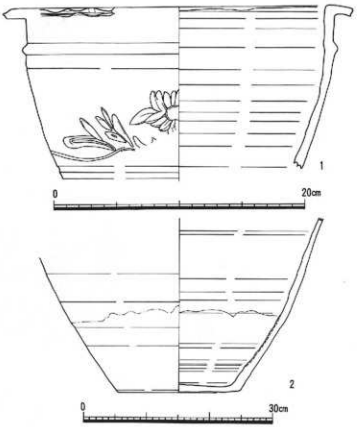
第37図　ＳＷ06遺構図

は直線的に伸び、外面にヨコナデによる沈線が２本みられる。外面には塗土を施し、火災に遭ったためか黒色炭化物が付着している。

第40図－１は、丹波焼甕である。口径（推）24.6cm、器高27.7cm、底径15cmを測る。体部は大きく膨らみ、口縁部端が外へ張るが、上部に沈線をもたないタイプである。外面体部には塗土が施されているが、内面・底部は無釉である。火災に遭ったためか黒色炭化物が付着している。

ここから出土した遺物は計測分析されている。その結果、丹波系の製品が目立った。用途別でも丹波系の甕類が27.29％と肥前系の食膳具50.87％に次ぐ量であった。

これらの出土遺物の年代観から、17世紀後半～18世紀初頭と考えられ、この遺構も元禄年間（1699年・1702年）の大火災の際の処理土壙と思われる。Ⅲ－２ａ期に属する。

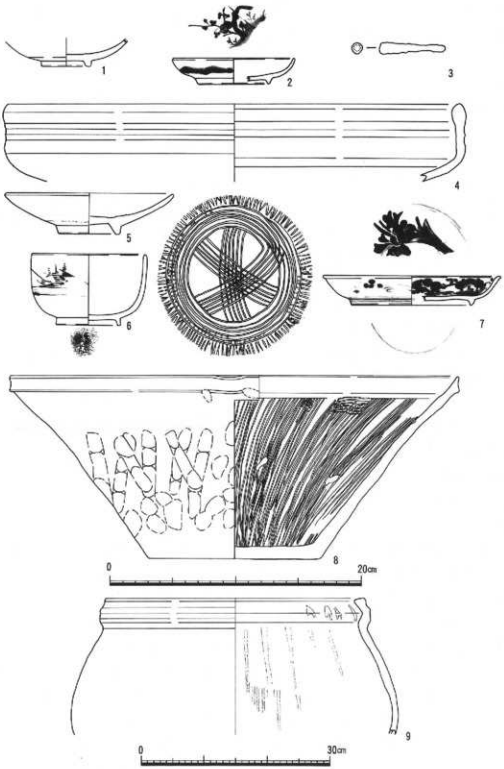


第38図　ＳＹ02（１）・ＳＷ06（２）出土遺物

ＳＫ70

ＳＫ70は、ＳＫ69の南側に位置する（表６）。平面形は不整形を呈し、検出長4.8m、幅2.85m、深さ0.65mを測る。焼土処理土壙である。先にも述べたが、第３次面のＳＫ196と同遺構である。

第41図－１は、唐津焼碗である。高台径3.9cmを測る。高台の削り出しはやや浅く、内面から外面体部にかけて灰釉が掛けられている。大橋康二氏の編年のⅡ－１期に属する。２・３は、肥前磁器である。２は、染付碗である。高台径4.4cmを測る。全体的に厚みがあるもので、「くらわんか手」タイプである。全体的に火を受けたのか白く変色している。３は、青磁皿である。口径（推）13.4cm、器高3.5cm、高台径4.6cmを測る。見込みは蛇ノ目釉ハギを施し、高台は無釉である。２・３は、大橋康二氏の編年のⅣ期に属する。４は、土師質土器皿である。口径10.8cm、器高1.5cmを測る。器高は低く、口縁部はやや内湾する。口縁部内外面はヨコナデ調整、内面底部はナデ調整、外面底部は指頭圧調整を施す。川口宏海氏の分類ＩＴ（伊丹郷町期）１型式Ｂ類に属する。５は、丹波焼徳利である。底径11.2cmを測る。外面に光沢のあるいわゆる薬皮釉を施している。この遺物は、新しい時期のもので、混入品と思われる。７は、丹波焼擂鉢である。口径（推）34.8cm、器高14.8cm、底径15.8cmを測る。体部は直線的に外傾し、先端で水平に開き口縁部が直立する。外面体部には、ロクロナデによる凸凹はみられるが、ユビオサエ痕はない。内面体部の擂目は左回りで７本単位で施している。大平茂氏の編年のⅦ期に属する。８は、寛永通寶である。直径2.45cm、厚さ0.15cm、重さ３gを測る。裏は無文であり、『寶』の形から古寛永と思われる。９は、土壁片である。残存長14cm、残存幅11.75cm、厚さ４cmを測る。直径0.5～１cm位の竹材を芯にして木舞として入れ、両側に厚さ約1.5cm



第39図　ＳＵ01（１～４）・ＳＫ69（５～９）出土遺物

位の壁土を塗っている。全体的に橙色や赤色に変色しており、火災の大きさがうかがえる。その他には、図版19－13にみられる中国製青花碗なども出土している。

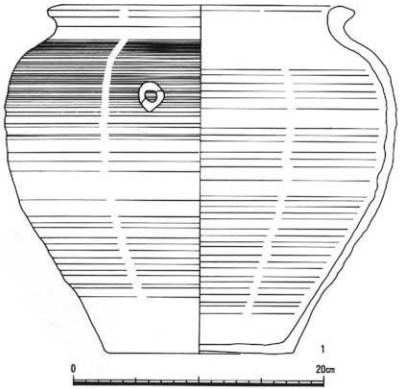
出土遺物を概観すると、17世紀後半～18世紀初頭と考えられる。Ⅲ－２ａ期に属する。

ＳＫ71

ＳＫ71は、ＳＫ70の西隣に位置する（表６）。平面形は不整形を呈し、検出長2.28m、幅1.23m、深さ

0.61mを測る。埋土は2層で、炭化物層が堆積していた。焼土処理土壙である。

第41図－6は、丹波焼鉢である。口径（推）12.6cm、器高6.1cm、底径9.2cmを測る。火入れと考えられる。全体的に釉が白っぽく変色していた。10は、軒平瓦である。全長（残）11.2cm、瓦当部高4.7cmを測る。文様は、均整唐草文。文様の出はあまりよくない。中心飾は花冠で、下向きに反転する唐草を配する。調整は、平瓦部凹面は、ヘラナデ調整、凸面は未調整である。上外区上端は5mm程度面取りしている。



第40図　ＳＫ69出土遺物

出土状況を概観すると、この焼土処理土壙も元禄年間（1699年・1702年）の大火災の処理土壙と思われる。よって、Ⅲ－２ａ期に属する遺構である。

ＳＫ93

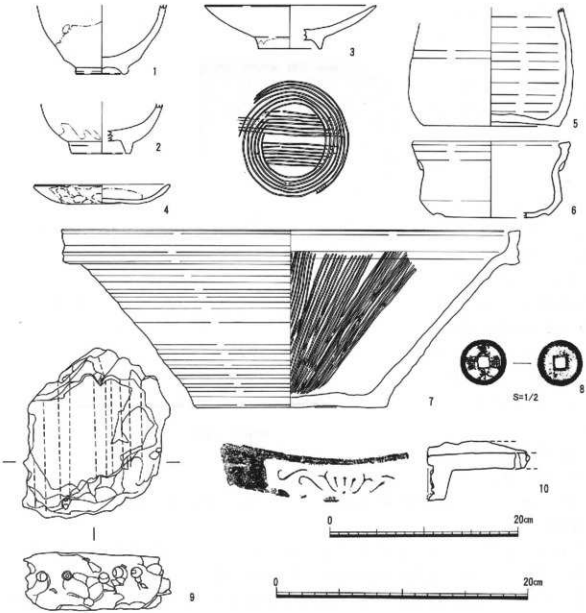
ＳＫ93は、北壁沿いの西北隅に位置する（表６）。浅い土壙である。第１次面ＳＢ03の床下にあたる。平面形は不整形を呈し、検出長1.65m、検出幅0.76m、深さ0.19mを測る。

第42図－１・２・４は、肥前磁器である。１は、染付筒型碗である。口径（推）7.2cm、器高5.3cm、高台径3.7cmを測る。内面口縁部に四方襷文、外面体部には海岩文・海松文が描かれている。高台畳付は露胎である。２は、染付皿である。口径13.8cm、器高3.8cm、高台径８cmを測る。内面体部に雪輪草花文、外面体部には連続唐草文が描かれている。また、見込みにはコンニャク印判によって五弁花を施し、高台内には渦福の銘がみられる。４は、白磁皿である。器高2.7cm、高台径4.5cmを測る。型作り成形で、内面に布目痕がみられる。口縁部には口錆が施されている。２は、大横康二氏の編年のⅣ期、１・４はⅤ期に属する。５は、見込みに放射状の擂目を施す、明石焼擂鉢である。口径（推）38.6cm、器高13.8cm、底径16.6cmを測る。口縁部のつくりは外縁帯の張りが大きい。外面の調整は、回転ヘラケズリが底部際から口縁部外縁帯の直下までみられる。内面の擂目は、右まわりで７本単位で施している。白神典之氏の分類Ⅱ類に属する。

出土遺物を概観すると、18世紀後半～19世紀前半と考えられる。Ⅲ－３期に属する。よって、後述するＳＢ03は、19世紀前半以降に建てられたと思われる。

５．第１次面の遺構と遺物

第１次面では、東側間口から西へ10mで三和土・礎石を検出した。昭和二十三・三十六年の航空写真（図

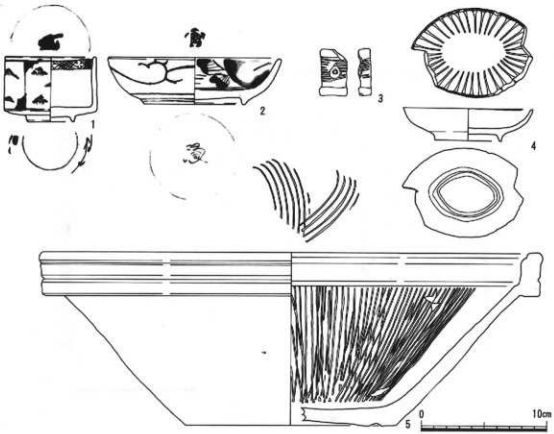


第41図　ＳＫ70（１～５・７～９）・ＳＫ71（６・10）出土遺物

版１）に、猪名野神社参道沿いを間口とする平入りの瓦葺建物（ＳＢ01）が写っており、検出した三和土は、その建物に伴うものと思われる。主屋建物の裏側には、北西側に土蔵があり、真南西裏には離れがみられるが、これらの建物も確認できた。

ＳＢ01

ＳＢ01は、調査区東側に位置する（第43図・図版12）。この建物の北端の礎石は、北隣のＢ－12区で検出した。この建物の規模は、桁行３間半（南北7.5m）、梁行６間（東西12m）を測る。礎石建物である。建物の解体時に上面が攪乱され、第２次面で礎石を検出したところもあったが、建物のだいたいの範囲を掴むことができた。建物の構造は、礎石の検出状況や建物の裏側の井戸や便甕の位置から、北側に居室が３室あり、南側が通り庭だったと想定される。後で述べる土蔵（ＳＢ03）もこの建物に伴うものと思われ、広い敷地だったことが分かる。また、ＳＢ01とＳＢ03との間には、航空写真から中庭であったことが分かっており、それを裏付けるように、庭石が多数検出し、水琴窟も２ヵ所検出した。



第42図　ＳＫ93（１・２・４・５）・ＳＶ01（３）出土遺物

ＳＢ01の年代観であるが、三和土直下から出土した便甕（ＳＷ06）や廃棄土壙の年代観から、19世紀前半頃には建てられていたと思われる。そして、再開発による解体まで現存していたものである。Ⅲ－３ｂ期～Ⅳ期に属する。

ＳＢ02

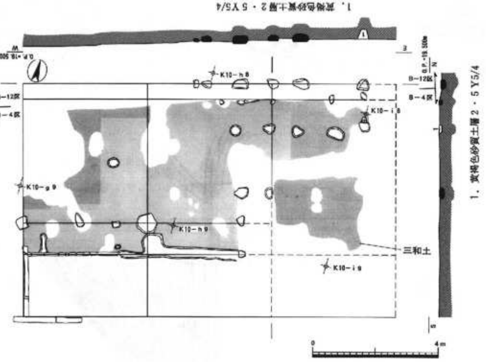
ＳＢ02は、ＳＢ01の南西側裏手に位置する（第44図・図版12）。桁行４間（東西8.5m）、梁行１間半（南北３m）を測る。井戸や４基連続の便槽甕（ＳＷ01～04）に伴う上屋建物である。昭和三十六年の航空写真（図版１）でも瓦葺建物が確認された。建物の年代観は、下面の遺構の年代観から、Ⅲ－３ｂ～Ⅳ期に属する。このことから、ＳＢ01が建てられた後、拡張されたと思われる。

ＳＢ03

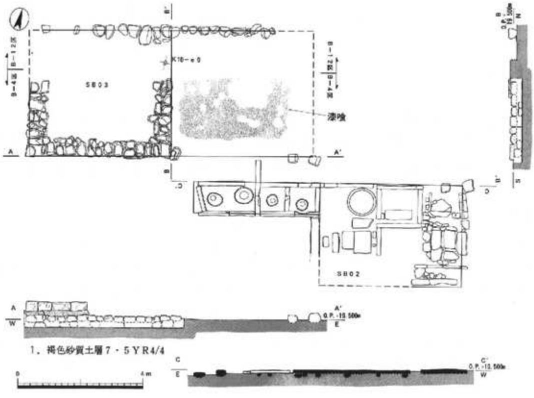
ＳＢ03は、調査区北西隅に位置する（第44図・図版13）。土蔵である。北側は調査区外に伸びており、北側の調査区Ｂ－12区で北端を確認している。建物の規模は、桁行４間半（東西９m）、梁行２間半（南北4.5m）を測る。床下の遺構（ＳＶ01・ＳＷ05・ＳＫ37など）の年代観や基礎の出土状況から、始めは東側半分の土蔵が19世紀後半に建てられ、その後、19世紀後半以降に西側半分を建て増し拡張したと考えられる。昭和二十三・三十六年の航空写真でも東西に長い続き棟の瓦葺土蔵がみられ、再開発による解体時まで建っていたと思われる。Ⅲ－３ｂ～Ⅳ期に属する。

ＳＶ01

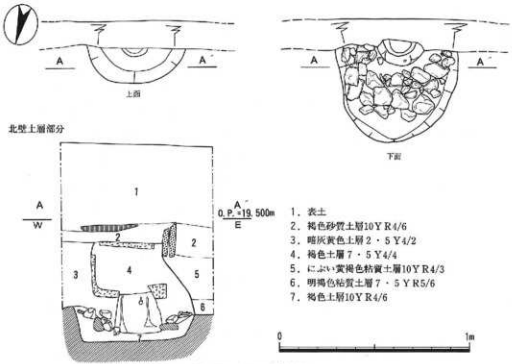
ＳＶ01は、北壁沿い西側に位置する（表６・図版13）。竈である。平面形は不整形を呈し、長さ0.41m、幅0.37m、深さ0.06mを測る。竈の底部のみで、上部は検出できなかった。



第43図　ＳＢ01遺構図



第44図　ＳＢ02・03遺構図

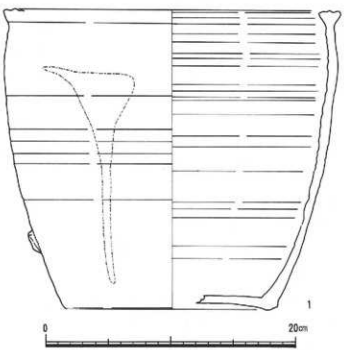


第45図　ＳＹ01遺構図

第42図－３は、ミニチュア土製品の芥子面子である。長さ3.8cm、幅2.2cm、厚さ１cmを測る。型押し成形で、器形は太鼓か？出土遺物がこの１点だけだったが、下面の遺構の年代観から19世紀中頃以前と考えられる。よって、Ⅲ－３ｂ期に属する。

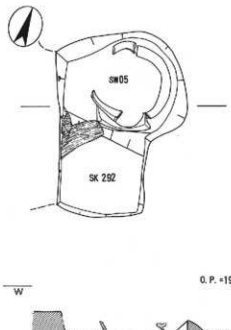
ＳＹ01

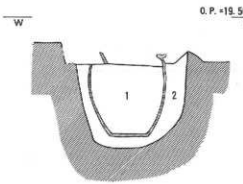
ＳＹ01は、北壁沿い中程に位置する（第45図・図版13）。水琴窟である。掘形の平面形は半円形を呈し、直径0.65m、深さ0.2mを測る。調査範囲の関係上、全体を確認できなかった。水琴窟の構造は、甕を逆位に埋め、水が上部の窟口以外に流れないようにそのまわりを漆喰でかためていた。また、甕のまわりには長さ11cm程度の小石を敷いていた。



第46図　ＳＹ01出土遺物

第46図－１は、丹波焼甕である。口径23.4cm、器高24.2cm、底径16.3cmを測る。口縁部上面は水平で２条の沈線を有する。胴部は直線的に伸び桶型タイプである。内面に灰釉、外面には鉄釉の上から灰釉を流しかけしている。底部は、水琴窟に利用される際に直径５cmの穿孔を施されている。掘形からは、小片であったが、京・伊賀・信楽焼土瓶などが出土し、これらの年代観から19世紀前半～19世紀中頃と考えられる。Ⅲ－





1．褐色土層10Y R4/6
2．黒褐色土層2・5Y3/2

第47図　ＳＷ05遺構図

３ｂ期に属する。

ＳＷ05

ＳＷ05は、北壁沿いの中央より西側に位置する（第47図・図版13）。便槽甕である。掘形の平面形は不整形を呈し、長さ0.67m、幅0.6m、深さ0.45mを測る。

第49図－１は、信楽焼甕である。口径40cm、器高44cm、底径20cmを測る。口縁部は肥厚で内傾している。内外面に丁寧に鉄釉が施され、随所に灰釉が掛けられている。外面底部は無釉で、陶片の目跡が７ツみられる。出土遺物の年代は、19世紀中頃～19世紀後半と考えられる。Ⅲ－３ｂ期に属する遺構である。

ＳＷ03

ＳＷ03は、調査区中央よりやや西側に位置する（第48図・図版13）。掘形の平面形は円形を呈し、直径0.7m、深さ0.4mを測る。４基一列に設置されているうちの、東から３基目の便槽甕である。検出状態をみると、ＳＷ01とＳＷ02の間とＳＷ02とＳＷ03の間には仕切り石があり、使用目的別に分けられていたと思われる。また、ＳＷ03は、その他の甕の掘形埋土を切っており、遺物の年代観も新しく、造り替えられていると思われる。さらに、ＳＷ03の下からは便槽桶の底部が残存しており（第48図第14層）、２回造り替えられていたことが分かった。

第49図－２は、大谷焼碗である。口径59.5cm、器高38.8cm、底径27.5cmを測る。鉢型で大型タイプのものである。内面全体に鉄釉を横方向にハケ塗りしている。外面は無釉で、底部にはハナレ砂がみられる。また、口縁部上面に「尖」の刻印があり（図版19－２）、内面底部には白色の付着物が付着していた。川口宏海氏の分類（川口1990年）２型式に属する。

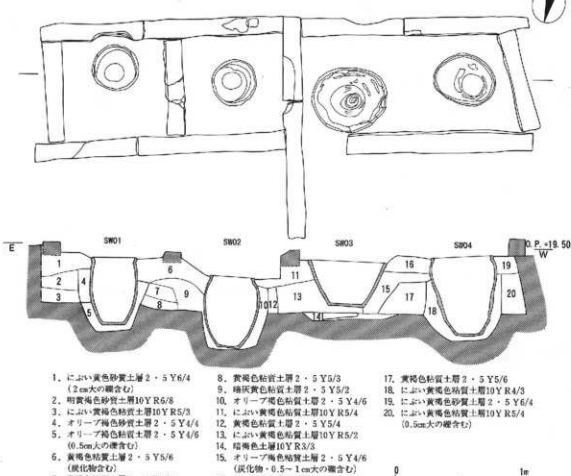
出土遺物を概観すると、19世紀末～20世紀初頭と考えられ、Ⅳ期に属する。

ＳＷ04

ＳＷ04は、ＳＷ03の西隣で４基一列に設置されている一番西側に位置する（第48図・図版13）。掘形の平面形は円形を呈し、直径0.6m、深さ0.5mを測る。

第49図－３は、丹波焼甕である。口径51.5cm、器高61cm、底径22.6cmを測る。口縁部上面が水平で３条の沈線を呈する。肩部はやや張りがあり、不遊環を貼り付けている。外面底部以外に塗土を施している。内面体部には白色の付着物が付着している。

出土遺物の生産年代は、18世紀前半～18世紀後半で、便槽として利用したのは、ＳＷ02の年代観から19世紀前半で、ＳＢ01の建物と共に設置されたと考えられる。従って遺構の構築時期はⅢ－３ｂ期～Ⅳ期に属する。



第48図　SW01・02・03・04遺構図

SW02

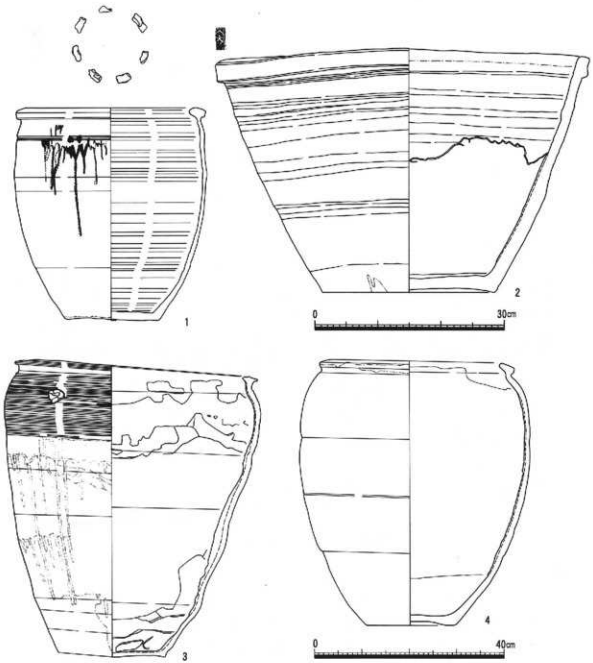
SW02は、SW03の東隣に位置する（第48図・図版13）。掘形の平面形は円形を呈し、直径0.52m、深さ0.51mを測る。SW02は、4基一列に設置されている東側から2番目に位置する。

第49図－4は、丹波焼甕である。口径35.8cm、器高51.6cm、底径19.1cmを測る。肥厚した口縁部が内傾するタイプのものである。体部内外面に鉄釉が丁寧に掛けられ、口縁部には灰釉を施している。内面体部には白色の付着物がみられる。

出土遺物の年代は、19世紀前半～19世紀中頃と考えられる。Ⅲ－3ｂ期～Ⅳ期に属する。

6．まとめ

B－4区では、18世紀後半～19世紀中頃の遺構を中心に、飛鳥・奈良時代～20世紀までの遺構を検出した。年代を追ってまとめると、第4次面では7～8世紀頃の包含層を西側半分で確認できた。それ以後は、16世紀前半まで遺構はなく、16世紀前半～16世紀中頃と考えられる掘立柱建物が猪名野神社参道沿いに建てられはじめることがわかった。宮ノ前地区では、16世紀代の遺物は検出されているが、建物が確認された例は少なく、この時期の様相を知る上で好資料を得られた。17世紀末の『元禄七年（1694）柳沢吉保領伊丹郷町絵図』では、「庄右衛門」の屋敷地となっている。今回の調査で「庄右衛門」の建物は確認されなかったが、



第49図　SW05（1）・SW03（2）・SW04（3）・SW02（4）出土遺物

絵図にみられた東側間口の大きさは、現代まで続いていることが分かった。その後、元禄年間（1699年・1702年）と享保十四年（1729）の2度の大火災に遭う。火災後は、東側間口から西へ7mの範囲で建物が建てられる。19世紀前半～19世紀中頃には、桁行3間半、梁行6間の礎石建物に建て替えられ、裏庭には、土蔵と中庭が造られる。その後、昭和三十六年以降に、建物はなくなり駐車場に替わってしまう。このように、古い時期からの建物の変遷を確認できたことは大きな成果であった。また、元禄年間（1699年・1702年）と享保十四年（1729）の北少路村の大火災痕を確認できたことで、郷町内の火災の広がりを知ることができた。

第５節　第63次調査Ｂ－６区

Ｂ－６区は、猪名野神社に通じる宮ノ前参道から西側に延びる小道に面している。近年では、当調査区は、小道から直交して北側に通じる路地となっていた。ここは『天保十五年（1844）伊丹郷町分間絵図』（第159図）によると、「北少路村」にあたることが分かる。『元禄七年（1694）柳沢吉保領伊丹郷町絵図』（第159図）によれば、庄屋太郎左衛門の屋敷地東端に相当する。調査面積は130㎡である。

１．基本層序

調査面は４面である。地山面は、平均してＯ．Ｐ．＝18.800m前後である。その直上には、７～８世紀代の遺物を含む包含層（第50図東壁第８層、現地表面より105cm下）が、調査区全体に10～20cm堆積する。その上に、暗灰黄色粘質土層（第50図東壁第16層、現地表面より80cm下）、その上層には、第３次遺構面（第50図東壁第７・45層、現地表面より70cm下）がみられた。その上に、享保十四年（1729）の火災層（第50図東壁第21層、現地表面より50cm下）、さらにその上層には、第１次面三和土層（第50図東壁第20・22層現地表面より20cm下）が堆積する。

２．第４次面の遺構と遺物

第４次面では、７～８世紀の掘立柱建物と16世紀後半～17世紀代の遺構を検出した。建物は、７～８世紀の掘立柱建物以外は検出されず、16世紀後半～17世紀中頃は建物が建っていなかったと思われる。また、調査区北側では、遺構の重複が激しかったので、上面の遺構を最終面でとらえたものもあった。

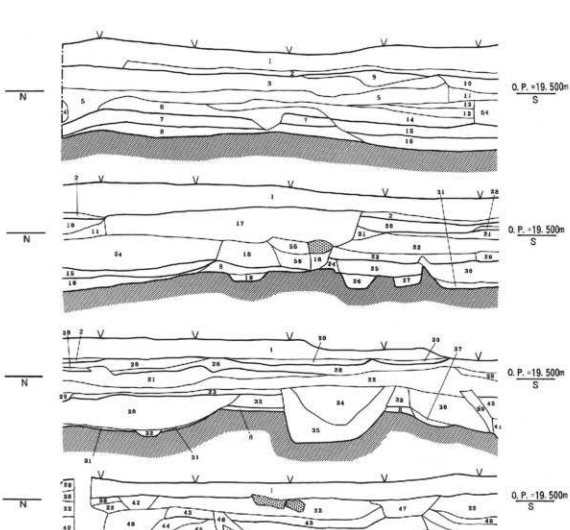
ＳＢ05

ＳＢ05は、調査区中程やや北東側に位置する（第51図）。掘立柱建物である。この建物の北東方向の続きが、東隣のＢ－１－１区ＳＢ13である。柱穴の掘形の平面形は方形を呈し、一辺0.8m、深さ0.35mを測る。柱痕は判明したもので直径0.2m、深さ0.6mを測る。柱間は1.5m～1.7mで４間×３間の建物である。梁行の方位は、真北に対してＮ９°10Ｅである。７世紀後半～８世紀前半の遺物を含む包含層直下で検出している。これと同様な建物が第199次調査（未報告）で検出している。第199次調査では、Ｂ－17－２区ＳＢ02・Ｂ－17－３区ＳＢ09など数棟検出しており、この建物の柱穴痕から、７世紀後半～８世紀前半頃の遺物が出土している。ＳＢ05も出土遺物はなかったが、おそらくその建物と同時期のものと考えられる。

ＳＥ02

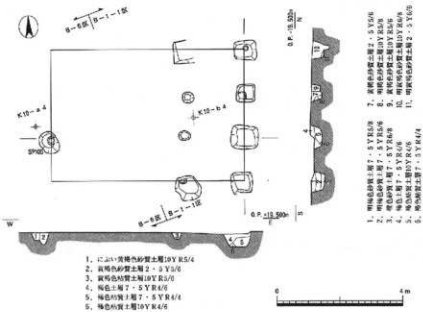
ＳＥ02は、調査区南側の間口近くに位置する（第52図・図版22）。平面形は不整形を呈し、長径１m、短径0.64m、深さ1.78m以上を測る。素堀りの井戸である。筒型に真っすぐに掘られている。第３層が湧水層である。出土遺物は豊富であった。

第54図－１～５は、中国製品である。１は、白磁輪花皿である。高台径（推）4.6cmを測る。器壁は厚く、高台の削りも浅い。高台畳付は露胎で、砂が付着している。森田勉氏の分類（森田1982年）Ｅ－４類に属する。２は、白磁皿である。高台径（推）5.6cmを測る。高台は低く断面は三角形を呈する。外側下端はヨコ方向に面取されている。高台畳付は露胎である。森田勉氏の分類のＥ－１類に属する。３は、白磁端反皿である。口径（推）11.4cmを測る。器壁は薄く、体部を緩やかに内湾させながら立上がり、口縁端部を小さく外反させている。森田勉氏の分類Ｅ－２類に属する。４は、青花皿である。高台径（推）5.6cmを測る。見込み部分はかなり厚みがある。高台は低く、ヘラケズリにより斜めに緩く面取りされ、細かい砂が付着して

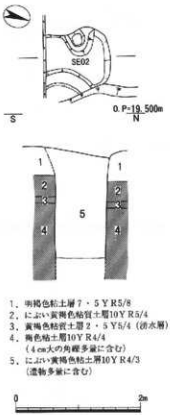


1. 表土
2. オリーブ褐色砂質土層2・5Y4/4
   (炭化物・焼土を多く含む)
3. 暗オリーブ褐色砂質土層2・5Y3/3
4. 黒褐色砂質土層10Y R3/1
5. 褐色砂質土層10Y R4/4
6. 黄褐色粘質土層2・5Y5/6
7. オリーブ褐色砂質土層2・5Y4/6
8. 黄褐色粘質土層10Y R5/8
9. にぶい黄色砂礫層2・5Y6/4
10. 黒褐色砂質土層2・5Y3/2
11. 黄褐色砂質土層2・5Y5/4
12. 明黄褐色砂質土層2・5Y6/8
13. 黄褐色砂質土層2・5Y3/4
14. 黄褐色砂質土層2・5Y5/6
15. 暗灰色砂質土層10Y R4/1
16. 暗灰黄色粘質土層2・5Y4/2
17. 灰黄褐色粘質土層10Y R4/2
   (5～10cm位の礫・瓦を多く含む)
18. オリーブ褐色砂質土層2・5Y4/6
19. 黄褐色粘質土層2・5Y5/6
20. 黄褐色砂質土層2・5Y5/4
21. 褐色焼土層7・5Y R4/4
22. オリーブ褐色砂質土層2・5Y4/6
23. にぶい黄褐色砂質土層10Y R5/4
   (2.0cm位の礫を少量含む)
24. 黄褐色粘質土層2・5Y5/3
25. にぶい黄褐色砂質土層10Y R5/4
   (0.5cm位の礫を少量含む)
26. 黄褐色粘質土層2・5Y5/6
27. 黄褐色粘質土層2・5Y5/6
28. にぶい黄色砂質土層2・5Y6/4
29. にぶい黄褐色砂質土層10Y R4/3
30. 黒褐色炭化物層10Y R2/1
31. 暗灰色砂質土層10Y R4/1
32. オリーブ褐色粘質土層2・5Y4/6
33. 黄褐色砂質土層2・5Y5/6
34. オリーブ褐色砂質土層2・5Y4/4
35. 黄灰色粘質土層2・5Y4/1
36. 黄褐色砂質土層2・5Y5/6
37. 褐色砂質土層10Y R4/4
38. 明黄褐色砂質土層2・5Y6/6
39. 明褐色粘質土層7・5Y R5/8
40. 褐色砂質土層10Y R4/4
41. オリーブ褐色粘質土層2・5Y4/4
42. オリーブ褐色砂質土層2・5Y4/3
43. オリーブ褐色砂質土層2・5Y4/4
44. 黄褐色砂礫層2・5Y5/6
45. 黄褐色砂質土層2・5Y5/6
46. にぶい黄色砂質土層2・5Y6/3
47. 黒褐色炭化物層10Y R3/1
48. 褐色焼土層10Y R4/4
49. にぶい黄色砂質土層2・5Y6/4
50. 黄灰色粘質土層2・5Y4/1
51. 褐色粘質土層10Y R4/4
52. 黄褐色粘質土層10Y R5/8
53. 黄褐色粘質土層2・5Y5/4
54. 暗灰黄色粘質土層2・5Y4/2
55. 灰オリーブ色粘質土層5Y5/2
56. にぶい黄褐色粘質土層10Y R4/3

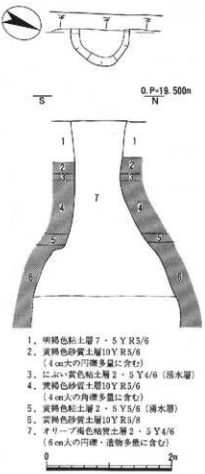
第50図　B－6区東壁土層図



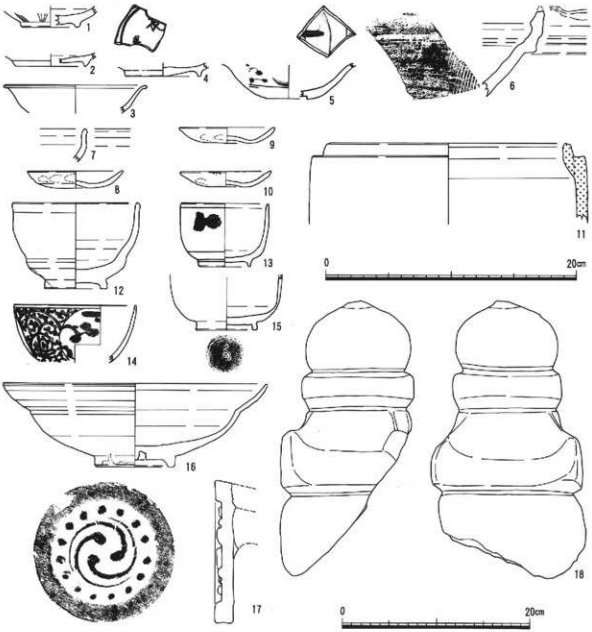
第51図　ＳＢ05道構図



第52図　ＳＥ02道構図

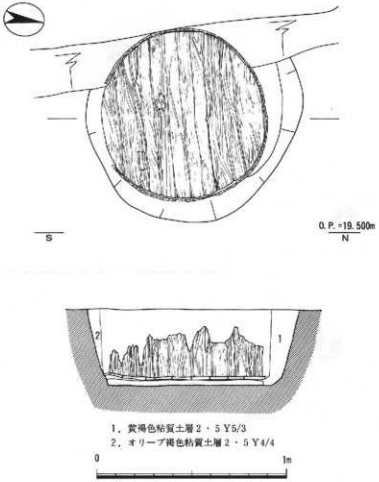


第53図　ＳＥ01道構図



第54図　ＳＥ02（１～11・18）・ＳＫ115（12）・ＳＥ01（13～17）出土遺物

いる。また、高台内には、「長」・「貴」の文字がみられ、「長命富貴」の吉祥句が描かれていたと思われる。高台畳付は露胎で離れ砂が付着している。小野正敏氏の分類（小野1982年）染付皿Ｂ２群Ⅳ類に属する。５は、青花皿である。高台径（推）4.4cmを測る。外面の文様は草花文である。器形は、体部に丸みをもち、口縁部は端反になる。底部は碁笥底である。小野正敏氏の分類の染付皿Ｃ群Ⅰ類に属する。６は、備前焼擂鉢である。立ち上がった口縁上面を内傾ぎみに水平に切った形で、体部の内外にロクロ成形を思わせる凸凹を巡らしている。胎土に0.05～0.1cmの白色礫を含む。内面は10本１単位の擂目を施している。間壁忠彦氏の編年（間壁1991年）Ⅴ期に属する。７は、瀬戸・美濃焼天目茶碗である。口縁部は垂直に立上がり口縁端近くでＳ字状に少しくびれる。小片で分類するのは難しいが、藤澤良裕氏の大窯編年（藤澤1986年）第４段階第８小期に属する。８～10は、土師質土器皿である。８は、口径7.6cm、器高1.4cmを測る。胎土は浅黄橙



第55図　SU02遺構図

色（10YR8/4）を呈する。調整は、外面は指頭圧調整、内面はナデ調整を施す。9は、口径7.6cm、器高1.35cmを測る。胎土は浅黄橙色（10YR8/3）を呈する。調整は、内面はナデ調整、外面は指頭圧調整の後、軽くナデを施している。10は、口径7cm、器高1.3cmを測る。胎土はにぶい黄橙色（10YR7/3）を呈する。内面はナデ調整、外面には指頭圧調整がみられる。口縁部から外面にかけて灯芯痕がみられることから、灯明皿として使用していたと思われる。8～10は、川口宏海氏の分類（川口1997年b）のAR（有岡城期）2型式B類へそ皿タイプに分類される。11は、瓦質土器火鉢である。口径（推）9.4cmを測る。口縁部と体部は分割成形で、内面体部はヘラナデ調整、外面体部はヘラミガキ調整を施している。18は、一石五輪塔である。残存高29.7cm、最大幅16cmを測る。水火風空輪部が残存する。「空」は宝珠上部が欠損している。材質は花崗岩である。

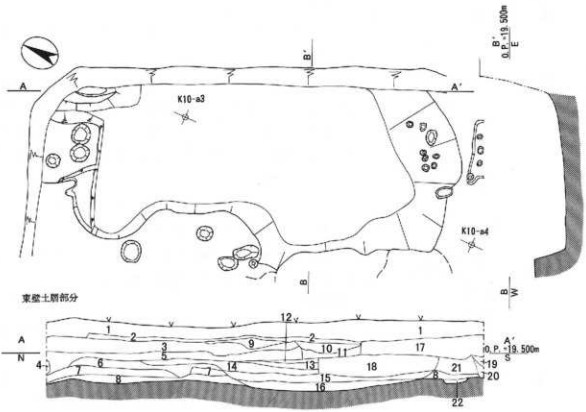
ここから出土した遺物は、計測分析されている。その結果、産地別では、在地産のものが大半で、次に中国産磁器と続く。用途別では、食膳具がほとんどで、中心は土師質土器皿で中国製品少量含むという結果がでた。くわしくは、第5章で述べる。

出土遺物を概観すると、16世紀後半と考えられる。Ⅰ～Ⅱ期に属する。

SE01

SE01は、西壁沿い中程に位置する（第53図・図版22）。平面形は半円を呈し、西側に伸びる。長さ0.9m、深さ2.8m以上を測る。素掘りの井戸である。断面形は、下方にいくほど広がっている。第3・5層が湧水層である。

第54図－13・14は、肥前磁器染付碗である。13は、口径（推）6.8cm、器高5.1cm、高台径3.9cmを測る。全体的に器厚は薄く、筒型の小碗である。外面体部の文様は、コンニャク印判によって菊花文が施されてい

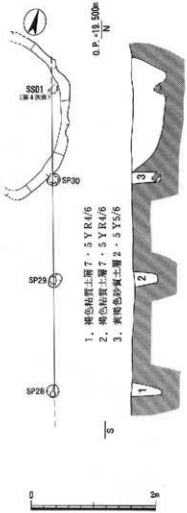


第56図　ＳＸ109遺構図

る。高台畳付は露胎である。14は、口径（推）9.5cmを測る。これも体部は薄く、呉須の発色も良好である。文様は、窓内に松竹文が描かれ、その間を蛸唐草文でうめている。13・14は大橋康二氏の編年（大橋1989年）Ⅳ期に属する。15は、京焼風陶器碗である。高台径4.8cmを測る。高台内の削りは浅く、高台脇に張りがある。高台内には「清水」の刻印がみられる。16は、唐津系陶器皿である。口径20.1cm、器高6.7cm、高台径6.1cmを測る。高台の削りは浅く、断面形は台形を呈する。内面から外面体部にかけて灰釉が掛けられている。また、見込みは蛇ノ目釉ハギが施され、その部分に鉄釉を塗付している。15・16も大橋康二氏の編年のⅣ期に属する。17は、軒丸瓦である。瓦当部径15.3cm、文様区径11.2cm、内区径10.6cm、周縁幅2.1cm、周縁高0.75cm、瓦当厚2cmを測る。内区に左巻き三ツ巴文を、外区は15個の連珠が配されている。調整は、円周に沿ってナデ調整、瓦当部は未調整である。瓦当部裏面は不定方向にナデ調整、瓦当部裏面周縁部は周縁に沿ってナデ調整を施している。

ここから出土した遺物は計測分析している。その結果、産地別では、肥前磁器が半数を占め、次に唐津系陶器が続く。用途別では、食膳具が74％と大半を占め、その中心は肥前磁器であった。

出土遺物を概観すると、17世紀後半～18世紀初頭と考えられる。Ⅲ－２ａ期に属する。



第57図　ＳＡ01遺構図

ＳＵ02

ＳＵ02は、西壁沿いで、ＳＥ01の北側に位置する（第55図・図版22）。埋桶である。掘形の平面形は楕円形を呈し、長径1.12m、短径0.91m、深さ0.4m、内矩は直径0.85m、深さ0.37mを測る。樽の底部を切り取って利用している。掘形からは、18世紀後半頃の肥前青磁染付蓋が出土し、埋土からは大橋康二氏の編年のⅤ期に属する肥前磁器染付碗が出土した。また、第３次面で検出したＳＵ01（表８）は、出土遺物からみてもＳＵ01の方が若干古く、位置的にも少々離れているので、同時に使用されていたとは考えにくい。このようなことから、短期間の間に造り替えられたと思われる。

出土遺物を概観すると、18世紀後半頃に造られ、19世紀初頭には埋め戻されたと思われる。Ⅲ－３ａ期に属する。

ＳＫ115

ＳＫ115は、調査区北西隅に位置する（表６）。平面形は不整形を呈し、検出長1.54m、幅1.3m以上、深さ0.27mを測る。

第54図－12は、唐津焼碗である。口径（推）9.8cm、器高6.8cm、高台径4.9cmを測る。内面から高台脇まで灰釉が掛けられている。大橋康二氏の編年のⅡ期に属する。よって、17世紀前半と考えられる。Ⅲ－１ｂ期に属する遺構である。

ＳＸ109

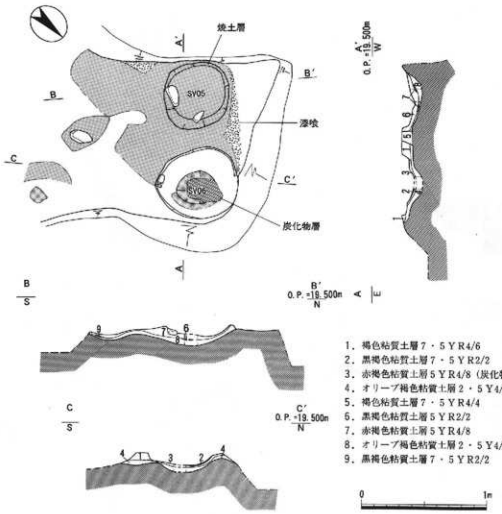
ＳＸ109は、調査区北東隅に位置する（第56図・図版22）。池状遺構である。平面形は不整形を呈し、検出長6.5m、幅３m以上、深さ0.60mを測る。上面は攪乱されていたが、スロープ状に落ち込んでおり、底部には細い木杭痕がみられた。このような池状遺構は、他の宮ノ前地区の調査でも確認され分類されている（川口1997年ａ）。それによると、検出される位置は、だいだい裏庭部分にみられることが多い。用途については、畑か裏庭の用水か、大火災防止のための貯水ではないかと考えられている。形状も長方形で石積みのタイプや、素掘りタイプのものなどがあるようである。時期的にみても、18世紀代で廃絶したものが大半である。ここの遺物に関しても、図化はしなかったが、大橋康二氏の編年Ⅳ期に属する肥前磁器染付碗・皿や、難波洋三氏の分類（難波1992年）Ｅ類に属する土師質土器燈炉などが出土し、18世紀前半～18世紀後半と考えられる。このようなことから、川口宏海氏の分類２型式に属するのではないかと思われる。Ⅲ－２ｂ期に属する。

３．第３次面の遺構と遺物

第３次面では、三和土・礎石は検出されず、廃棄土壙が調査区中程を中心に多く検出された。その中で、屋敷境の柵列（ＳＡ01）や16世紀末～17世紀初頭の廃棄土壙（ＳＫ60）など興味深い遺構を検出した。

ＳＡ01

ＳＡ01は、調査区南側に位置する（第57図・図版22）。柱穴は根石をもっており、柱間は1.5～1.8mである。柱穴の平面形は円形を呈し、平均直径0.2m、深さ0.3m位である。この柵列は、第１次面で検出したＳＢ01の東側ラインとほぼ一致することが分かった。従って、屋敷境の背割線の柵列と考えられる。遺物は出



第58図　ＳＶ05・06遺構図

土しなかったが、第２次面の三和土の直下に位置することから、17世紀後半～18世紀中頃と考えられる。Ⅲ－２ｂ期に属する。

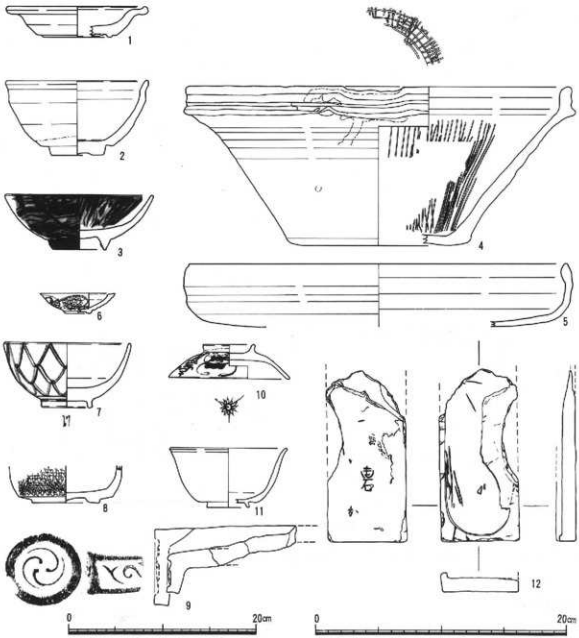
ＳＶ05・06

ＳＶ05・06は、調査区南側間口に位置する（第58図・図版22）。竈である。燃焼室の大きさは、ＳＶ05は直径0.5m、深さ0.1m、ＳＶ06は直径0.6m、深さ0.1mを測る。２基１組の竈である。燃焼室内には、薄くではあるが、粘土を張っていた。焚口は南側と思われる。出土遺物はなかったが、検出状況から第２次面の三和土に伴うものと思われる。Ⅲ－２ｂ期に属する竈である。また、南側間口に接しており、商業的な意味があったかも知れない。

ＳＤ06

ＳＤ06は、東壁沿い中程に位置する（第59図・図版23）。長さ1.5m以上、幅1.1m、深さ0.14mを測る。屋敷境石積溝である。40cm位の花崗岩が１～２段積み上げられていた。東隣の第51次Ｂ－１－１区ＳＤ05の続きである。ＳＤ05は、19世紀前半には埋められたと考えられており、ＳＤ06も出土遺物の年代観からみて、ＳＤ05と同時期に埋められたと思われる。Ⅲ－

第59図　ＳＤ06遺構図



第60図　ＳＫ60（１・２）・ＳＫ63（３～５・12）・ＳＫ81（６～９）・ＳＤ06埋土（10・11）出土遺物

３ａ期に属する。

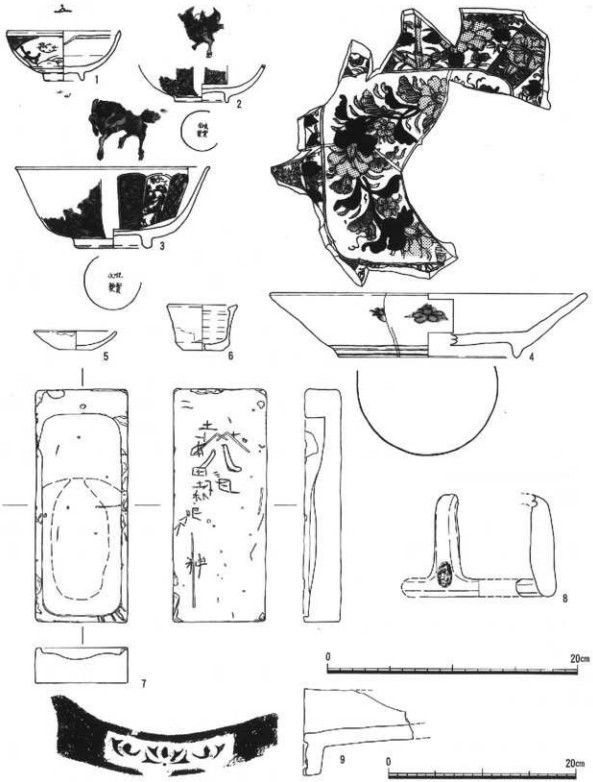
第60図－10は、肥前磁器染付蓋である。口径9.7cm、器高2.7cm、つまみ径4.2cmを測る。外面の文様は草花蔣字文が描かれている。大橋康二氏の編年のⅣ期に属する。11は、京焼系端反碗である。口径（推）9.1cm、器高3.4cm、高台径（推）3.4cmを測る。高台を除く内外面に灰釉が掛けられている。

出土遺物を概観すると、18世紀後半～19世紀初頭と考えられ、Ⅲ－３ａ期に属する。

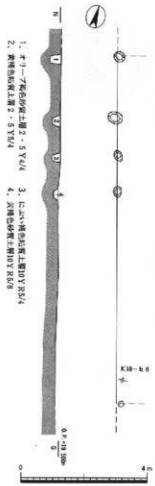
ＳＫ60

ＳＫ60は、調査区中程やや南側に位置する（表６）。平面形は不整形を呈し、検出長2.63m、幅1.72m、深さ0.36mを測る。遺物の年代観から、16世紀末～17世紀初頭と思われる。

第60図－１は、瀬戸・美濃焼折縁皿である。口径（推）10.8cm、器高2.5cm、高台径（推）5.5cmを測る。器壁は厚く、体部は扁平気味で、内側に口縁部を折り反す。高台はケズリダシである。全体に灰釉が掛けら



第61図　ＳＫ71出土遺物



第62図　ＳＢ04遺構図

れている。２は、瀬戸・美濃焼天目茶碗である。口径（推）11cm、器高６cm、高台径4.1cmを測る。体部は全体的に丸味があり、口唇部のくびれは大きい。高台はケズリダシである。１・２とも藤澤良祐氏の大窯編年（藤澤1986年）第４段階第７小期に属する。１は下層から出土し、その他には、中国製青花碗がみられた。２は、上層から検出し、丹波焼擂鉢小片・唐津焼皿（大橋康二氏の編年Ⅰ期）などが共伴していた。このことから、一気に埋められたというよりは、徐々に埋没していったと思われる。Ⅲ－１ａ期に属する遺構である。

ＳＫ63

ＳＫ63は、東壁沿いの中程に位置する（表６）。平面形は不整形を呈し、検出長0.54m、幅0.48m、深さ0.42mを測る。出土した遺物には、火に遭ったものが多くみられた。遺物の年代観から、上面で検出したＳＫ47の掘り残し遺構と思われる。

第60図－３は、唐津焼刷毛目文碗である。口径（推）11.6cm、器高4.4cm、高台径４cmを測る。内外面全体に白土によって刷毛目文様を施している。見込みには蛇ノ目釉ハギがみられる。高台畳付は露胎で、砂が付着している。大橋康二氏の編年のⅣ期に属する。４は、丹波焼擂鉢である。口径（推）30.4cm、器高12.7cm、底径14.7cmを測る。内面口縁部に鈍い稜をもたせ、口縁部内外面はナデ調整、外面体部はヘラケズリ調整を施している。内面の擂目は左回りで８本単位である。大平茂氏の編年（大平1991年）Ⅵ期に属する。５は、土師質土器焙烙である。口径（推）30.1cmを測る。口縁部から底部にかけて丸みをおび肩曲するタイプである。口縁部内面はヘラケズリ調整、内面底部はナデ調整を施し、外面底部は未調整である。外面には煤が付着している。難波洋三氏の分類Ｅ類に属する。12は、硯である。残存長13.7cm、幅6.3cm、厚さ1.5cmを測る。粘板岩製の近江の高島硯である。体部に刃物傷のようなものがみられ、砥石として転用されたと思われる。また、裏面には「□石」の字が釘書きされている。

出土遺物を概観すると、17世紀後半～18世紀初頭と考えられ、Ⅲ－２ａ期に属する。

ＳＫ81

ＳＫ81は、東壁沿いのやや北側に位置する（表６）。平面形は不整形を呈し、検出長3.42m、幅1.37m、深さ0.41mを測る。

第60図－６・７は、肥前磁器である。６は、白磁紅皿である。口径（推）6.1cm、器高1.7cm、高台径（推）1.8cmを測る。型押し成形で、外面の文様は蜻唐草文である。外面体部から底部は、無釉である。７は、染付碗である。口径9.9cm、器高5.2cm、高台径3.7cmを測る。外面体部に二重網目文が描かれ、高台内には簡略化された「太明年製」の銘がみられる。６は大橋康二氏の編年のⅤ期で、７はⅣ期に属する。８は、瀬戸・美濃焼碗である。高台径（推）5.2cmを測る。外面体部にはトビカンナによって文様が施されている。また、内面には黒釉、外面には灰釉が掛けられている。９は、軒桟瓦である。軒丸瓦部は瓦当径8.1cm、文様区径6.1cm、周縁幅１cm、瓦当部厚1.5cmを測る。右巻き三ッ巴文で、瓦当周縁部にはナデ調整がみられる。軒平瓦部は文様区厚3.2cm、上周縁幅0.5cm、顎下部厚2.3cm、瓦当厚4.4cmを測る。均等唐草文で、軒丸瓦部と軒平瓦の接合部にヨコナデ調整がみられる。また、両瓦当部には雲母が付着していた。

出土遺物を概観すると、18世紀前半～19世紀初頭と考えられ、Ⅲ－２ｂ～Ⅲ－３ａ期に属する遺構である。

ＳＫ71

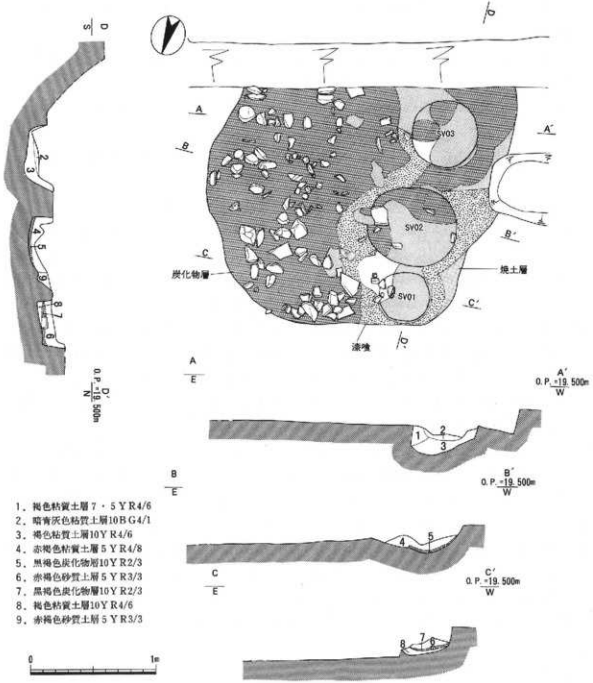
ＳＫ71は、調査区中央にに位置する（表６）。平面形は不整形を呈し、検出長2.37m、幅0.59m、深さ0.66mを測る。19世紀末～20世紀初頭の遺物が多量に出土した遺構である。

第61図－１は、肥前磁器色絵碗である。口径（推）９cm、器高4.1cm、高台径2.8cmを測る。器壁は薄く、半球形のような丸碗である。文様は赤絵が主体で、鳥文と草花文が描かれ、見込みと高台内には銘がみられる。高台畳付は露胎である。また、体部には焼継ぎ痕がみられる。２・３は、瀬戸・美濃焼染付碗である。２は、器高（残）３cm、高台径４cmを測る。外面の文様は銅版摺りによって施されている。文様は、外面体部に菊弁形区画割文に青海波文・松文・襷文がそれぞれ描かれ、見込みには麒麟文がみられる。また、高台内に「唯實園製」の銘がみられる。３は、口径（推）15.2cm、器高6.5cm、高台径5.4cmを測る。２と同じ文様で、セットで使用されていたと思われる。４は、肥前磁器赤絵角皿である。口径（推）25.2cm、器高5.3cm、高台径14cmを測る。胎土は焼成が悪く全体的にgreenish white（5G9/0.5）を呈する。内面の文様は牡丹文で、花弁部が赤絵で葉部には呉須を使用している。また、体部には焼継ぎ痕がみられる。大橋康二氏の編年のⅤ期に属する。５は、京・伊賀・信楽焼灯明皿である。口径6.3cm、器高1.6cmを測る。見込みに３ヵ所の目痕があり、底部には左回転糸切り痕がみられる。灯明皿に使用していたためか内面全体が白色に変色している。６は、土師質土器乗燭である。口径5.3cm、器高3.7cm、底径3.1cmを測る。中央の芯立ては欠損していた。体部全体に黒色釉が掛けられている。また、底部には行灯や灯籠の底板に打ち付けてある釘に差し込むための穴がみられる。７は、硯である。全長18.6cm、幅7.4cm、高さ2.9cmを測る。茶縞入りの荒い粒度の花崗岩質で象牙色（2.5Y9/2）を呈する。裏面には「穴」や「田」・「神」などの文字が線刻される。愛媛県伊予市の虎間石か？８は、京都深草焼五徳である。直径（推）12.4cm、器高（残）8.2cmを測る。胎土はやや粗く0.05～0.1cm位の礫を多く含む白色の土である。手づくね成形で、三足の先端が内方向に曲がる。足の付け根部分に篆書及び楷書による「深草」の刻印がみられる。９は、軒桟瓦である。全長（残）11.9cm、瓦当区厚4.6cm、周縁上幅0.9cm、周縁高0.5cm、顎上部厚2.5cmを測る。中心飾は花冠十弩で太いＹ字状若葉が端文様に加わるものである。調整は、瓦当周縁部及び周縁部上面はナデ調整、顎下部から瓦当裏面、平瓦部との接合部までヘラナデ調整、平瓦部凹面はナデ調整、凸面は未調整である。

出土遺物を概観すると、19世紀後半～20世紀初頭と考えられる。Ⅳ期に属する。

４．第２次面の遺構と遺物

第２次面では、南側間口から北へ9.5m付近で三和土状のものを検出した。第１次面で検出した三和土の範囲とほぼ同範囲だったので、同じ規模の建物が建っていたと思われる。この建物の時期であるが、この三和土を切って掘られた廃棄土壙（ＳＫ34）の年代観が、19世紀前半の遺構が中心であった。また、下面の遺構（ＳＫ60など）も18世紀前半までのものがみられ、このことから、18世紀中頃～18世紀後半と考えられる。北西部でも三和土を検出し、それについては後で述べたい。その他に、東壁付近では、ＳＢ04と享保十四年（1729）の北少路村の大火災の処理土壙（ＳＫ47）を検出した。ＳＢ04の礎石列とＳＫ47の西側端はほぼ一致することが分かる。また、17世紀後半～18世紀初頭につくられた第３次面ＳＤ04もこれらと一致し、17世紀後半以降、屋敷境は変わっていないことがわかった。さらに、このラインから第51次調査Ｂ－１－３区ＳＢ02の東端ラインまでは9.4mを測り、『元禄七年（1694）柳沢吉保領伊丹郷町絵図』（第159図）にみられる庄屋太郎左衛門の屋敷地の南側の東西方向の距離は、４間４尺８寸（9.44m）とも一致する。このことから、



第63図　ＳＶ01・02・03遺構図

この屋敷境は、すくなくとも17世紀末以降から続くことが分かった。

ＳＢ04

ＳＢ04は、東壁沿い南側から中程に位置する（第62図・図版23）。柱穴が南北に並んで検出し、第３次面で検出したＳＡ01と平行しいることと、これら柱穴と切り合っている焼土処理土壙の出土状況から建物遺構と思われる。柱間は1.2～2mで、桁行（南北４m）以上である。柱穴から出土した遺物をみると、18世紀末～19世紀前半と考えられる。ＳＢ04に伴うと思われた第51次調査Ｂ－１－１区ＳＢ15は、20世紀初頭に建てられた土蔵と考えられており、ＳＢ15より一時期古い建物跡であることが分かった。Ⅲ－３ｂ期に属する。

ＳＶ01～03

ＳＶ01～03は、調査区北西部に位置する（第63図・図版23）３連の半地下式竈である。ＳＶ01は、平面形は不整形を呈し、長径1.35m、短径0.9m、深さ0.2mを測る。ＳＶ02は、平面形は楕円形を呈し、長径1.45m、短径1.25m、深さ0.2mを測る。ＳＶ03は、平面形は円形を呈し、直径1.09m、深さ0.45mを測る。東側のＳＸ08は、焚口と思われ、炭化物が堆積していた。また、この竈は、北西部で検出した三和土に伴うと思われる。検出した三和土は検出状況が悪かったがだいたいの範囲を掴めた。三和土の範囲は非常に狭く、これに伴う礎石は検出されなかったが、まわりの検出状況から、竈屋のような上屋が建っていたのではないかと思われる。

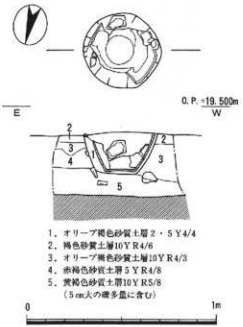
第71図－１は、軒丸瓦である。周縁幅2.3cm、瓦当部径（推）14cm、瓦当部厚２cmを測る。内区に左巻き三ツ巴文がみられ、外区には連珠文が10個配されている。瓦当部裏面には不定方向にナデ調整が施されている。そのほかには出土遺物はなかったが、直上の第１次面の遺構（ＳＫ23）の年代観から、18世紀後半～19世紀初頭頃と考えられる。Ⅲ－３ａ期に属する。

ＳＷ05

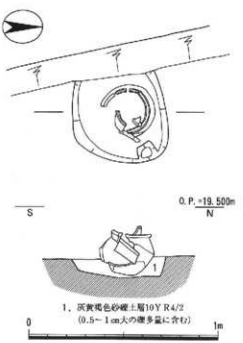
ＳＷ05は、南側間口西端に位置する（第64図・図版23）便槽甕である。掘形の平面形は円形を呈し、直径0.4m、深さ0.2mを測る。内面に白色の付着物がみられる。

第66図－１は、丹波焼甕である。底径8.2cmを測る。外面体部には塗土が施され、外面口縁部外縁帯の直下より灰釉を流し掛けしている。外面底部は無釉である。底部には胎土目跡が５ヵ所みられる。

出土遺物を概観すると、19世紀前半～19世紀後半と考えられ、Ⅲ－３ｂ期に属する遺構である。



第64図　ＳＷ05遺構図

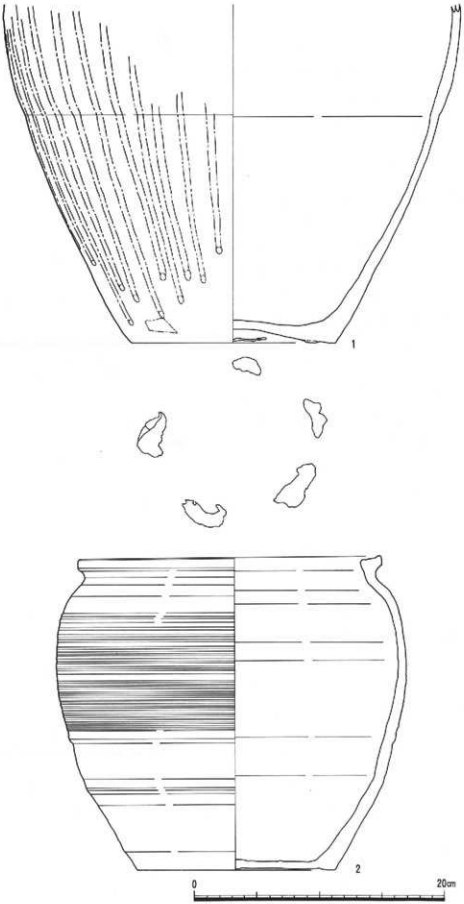


第65図　ＳＷ06遺構図

ＳＷ06

ＳＷ06は、西壁沿い中程に位置する（第65図・図版23）埋甕である。掘形の平面形は不整形を呈し、検出長0.55m、幅0.5m、深さ0.1mを測る。第１次面の床下に埋められており、胞衣壺の可能性がある。

第66図－２は、丹波焼甕である。口径４cm、器高25cm、底径15.2cmを測る。内外面に塗土が施されている。外面底部は無釉である。外面口縁部下から体部中央にかけて細かい沈線がみられる。



第66図　SW05（1）・SW06（2）出土遺物

出土遺物を概観すると、18世紀後半～19世紀初と考えられ、Ⅲ－３ａ期に属する遺構である。

ＳＫ47

ＳＫ47は、東壁沿いに位置する（表６）。平面形は不整形を呈し、検出長2.94m、幅0.98m以上、深さ0.2mを測る。焼土処理土壙である。出土遺物の年代観から、享保十四年（1729）の北少路村の大火災の際の処理土壙と思われる。この遺構は、東側に延びていると思われるが、第51次調査Ｂ－１－１区では確認できなかった。

第71図－２・４は、肥前磁器染付碗である。２は、口径（推）８cm、器高5.1cm、高台径（推）3.3cmを測る。呉須の発色は悪い。外面体部の文様は笹文である。高台畳付は露胎で砂が付着している。大橋康二氏の編年Ⅳ期に属する。４は、口径（推）9.9cmを測る。これも呉須の発色が悪い。外面体部には一重網目文が描かれている。大橋康二氏の編年Ⅲ期に属する。３は、京焼風陶器碗である。高台径4.6cmを測る。全面に灰釉が掛けられている。高台畳付は露胎である。その他には、図版28－９にみられる肥前磁器色絵水滴なども出土している。この水滴は、器高（残）3.1cmを測る。器壁は薄く、文様も丁寧に描かれている。文様は小片で分かりにくいが、唐子と麒麟と思われる。

出土遺物を概観すると、17世紀後半～18世紀初頭と考えられる。Ⅲ－２ａ期に属する遺構である。

ＳＫ49

ＳＫ49は、調査区北側に位置する（表６）。平面形は円形を呈し、直径0.5m、深さ0.19mを測る。

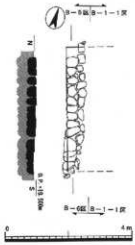
第71図－５は、肥前磁器染付猪口である。口径6.6cm、器高3.8cm、高台径2.4cmを測る。器壁は薄く、呉須の発色は良好で、笹文と菊文が描かれている。高台畳付は露胎で砂が付着している。大橋康二氏の編年Ⅳ期に属する。６は、銅製簪である。金長（残）13cm、厚さ0.2cmを測る。喜多川守貞の『近世風俗志』によると、「京坂ノ銀簪、古製六寸余、今世同レ之、或ハ五寸余。天保中ヨリ、銀釵ノ表ヲ鍍金ニ製シ、コレニ珊瑚其他ノ珠玉ヲ付ケ、或ハ、銀紋、或ハ玉モ紋モ無レ之物ヲ用フ。」とある。また、「京坂、耳カキ長ク、江戸ハ短カシ。」と書かれており、今回の簪は耳部分は欠損しているが、恐らくなかったと思われる。　出土遺物を概観すると、18世紀後半～19世紀初頭と考えられる。Ⅲ－３ａ期に属する。

５．第１次面の遺構と遺物

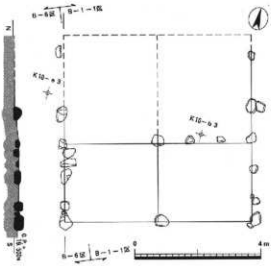
第１次面では、19世紀代以降の遺構面である。三和土を検出した。残存状態が悪かったが南側間口から北へ９mの範囲で三和土を確認した。これに伴う礎石からＳＢ01が復元できた。また、東側で検出した礎石列（ＳＢ02・ＳＢ04）は、東隣Ｂ－１－１区に続く建物である。調査区中程より北側では、廃棄土壙を多く検出しており、裏庭的空間だったと思われる。

ＳＢ01

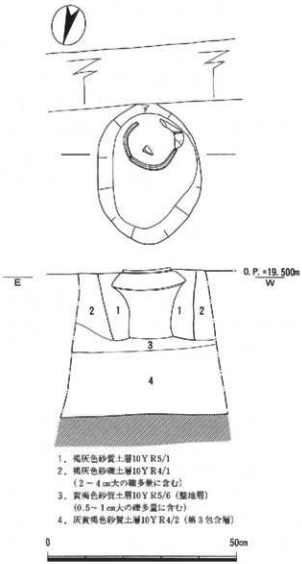
ＳＢ01は、調査区南側に位置する（第13図・図版23）。三和土の検出状況から、この建物は西側へ続いていることがわかった。西隣のＢ－１－３区では、上面の攪乱により三和土は検出されなかったが、礎石を確認することができた。建物の大きさは、桁行３間半（東西7.5m）、梁行３間半（南北7.5m）を測る。この建物の西側奥に、便槽桶や廃棄土壙が多くみられることや、三和土や礎石の出土状況から、西側が通り庭だったと思われる。三和土直下の遺構の年代観が、18世紀末～19世紀前半であり、ＳＢ01は、それ以降に建てられたと思われる。また、ＳＢ01の東端礎石ラインは、第３次面で検出したＳＡ01のラインと一致し、17世紀後半以降、屋敷境が替わっていないことが分かった。Ⅲ－３ｂ～Ⅳ期に属する。



第67図　ＳＢ02遺構図



第68図　ＳＢ03遺構図



第69図　ＳＩ07遺構図

ＳＢ02

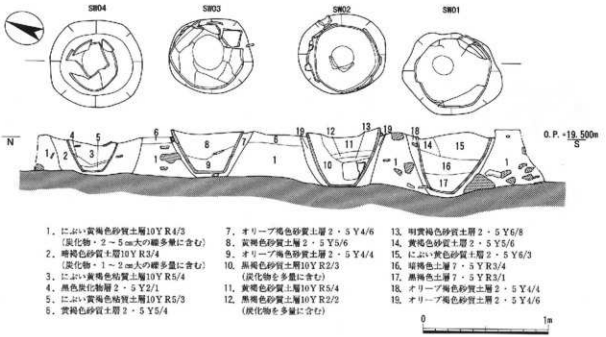
ＳＢ02は、東壁沿いの南側に位置する（第67図・図版23）。礎石の検出状況から、土蔵建物と思われる。基礎は、外側に10～40cm位の花崗岩を置き、内側には10～20cm位の花崗岩を２列配置している。東側調査区第51次調査Ｂ－１－１区に延びると思われるが、近年の攪乱により確認できなかった。基礎の下に、18世紀後半～19世紀初頭の柱穴痕（第２次面ＳＰ18）があり、これ以降に建てられたものである。また、昭和二十三年の航空写真（図版１）では、ここには建物はみられず、20世紀前半にはなくなっていることが分かった。Ⅲ－３ｂ～Ⅳ期に属する。

ＳＢ03

ＳＢ03は、東壁沿い北側に位置する（第68図・図版24）。第51次調査Ｂ－１－１区ＳＢ09の西面の礎石列である。今回の調査で建物の規模が確定できた。桁行３間（東西5.9m）、梁行３間（南北5.9m）の正方形の建物である。この建物は、19世紀前半以降に建てられ、20世紀中頃には取り壊されていたと考えられている。Ⅳ期に属する建物である。

ＳＩ07

ＳＩ07は、調査区北西部に位置する（第69図・図版24）脇衣壺である。掘形の平面形は楕円形を



第70図　SW01・02・03・04遺構図

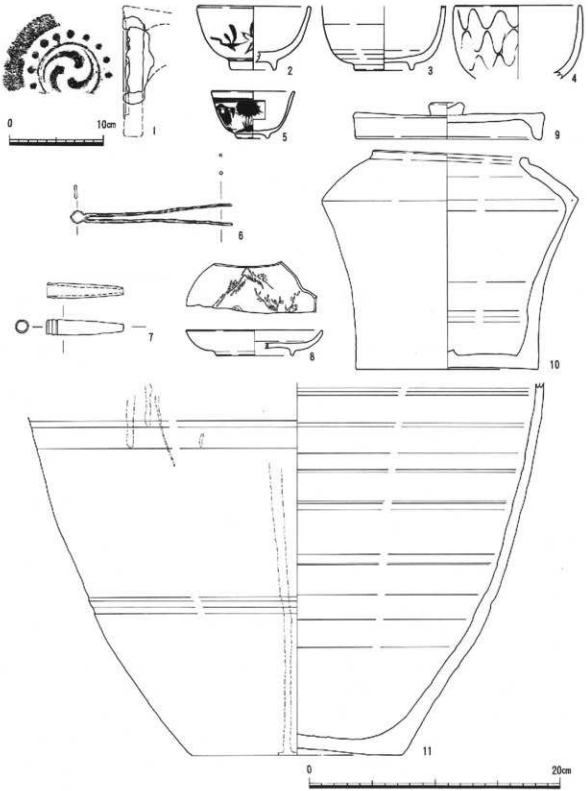
呈し、長径0.37m以上、短径0.27m、深さ0.19mを測る。まわりに廃棄土壙が多くみられることから、裏庭に埋められたと思われる。

第71図－10は、土師質土器火消壺である。口径（推）12.4cm、器高17.6cm、底径14.4cmを測る。算盤玉形を呈する。ロクロ成形で、外面は回転台を利用し丁寧にヨコナデ調整を施している。また、接合部と外面口縁部をヘラケズリ調整している。9は、蓋である。口径（推）19.4cm、器高2.9cm、つまみ径2.3cmを測る。粘土円盤に粘土紐輪積み成形し、天井部内面と口縁部にヨコナデ調整を施している。その後、つまみ部をハリツケし、その周辺をナデ調整している。川口宏海氏の編年（川口1996年b）Ⅱ－2期に属する。よって、19世紀前半～20世紀初頭と考えられ、Ⅲ－3b～Ⅳ期に属する遺構である。

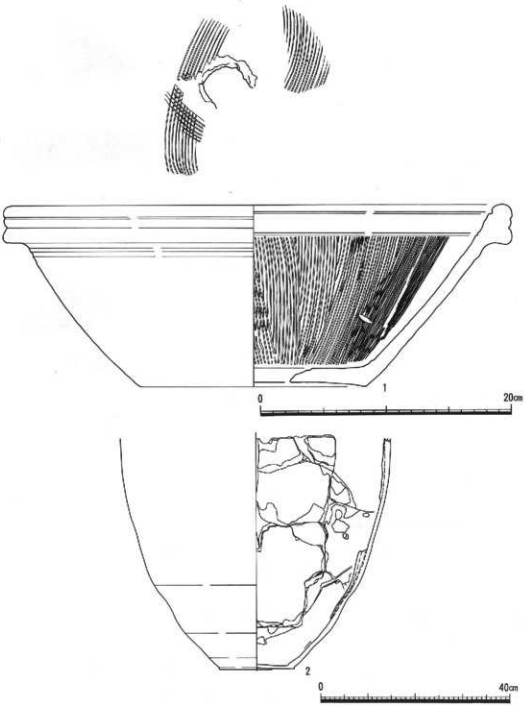
SW01

SW01は、調査区北東部に位置する（第70図・図版24）。掘形の平面形は不整形を呈し、長さ0.8m、幅6.5m、深さ0.5mを測る。4基一連の便甕である（SW01～04）。東側に接しているSB03に関係するものと考えられる。4基の甕内の堆土から、20世紀中頃には埋めもどされたと考えられ、SB03が取り壊される際、いっしょに埋めもどされたと思われる。

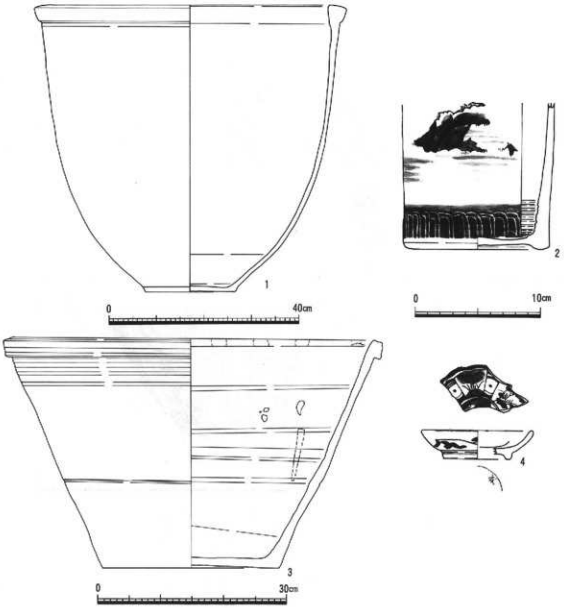
第72図－1は、堺焼擂鉢である。口径（推）40.8cm、器高14.8cm、底径18cmを測る。外面調整は、底部際から口縁部外縁帯直下まで回転ヘラケズリ調整を施している。内面体部の擂目は15本単位で、見込みにも三角形に、10本単位で擂目を施している。底部に直径5cmの穿孔があり、植木鉢として再利用されたものと考えられる。白神典之氏の分類Ⅲ類に属する。2は、丹波焼甕である。器高（残）49cm、底径16cmを測る。外面は塗土が施されているが、内面は無釉である。また、内面体部には白色の付着物が付着している。先に述べた堺焼擂鉢は、甕内から出土しており、19世紀前半～19世紀後半の年代が与えられるが、そのほかに土師質土器植木鉢やガラスなどが共伴している。従って、下限は20世紀中頃に下る。Ⅳ期に属する。



第71図　ＳＶ02（1）・ＳＫ47（2～4）・ＳＫ49（5・6）・ＳＩ07（9・10）・ＳＷ04掘形（7・8）・ＳＷ04（11）出土遺物



第72図　ＳＷ01出土遺物

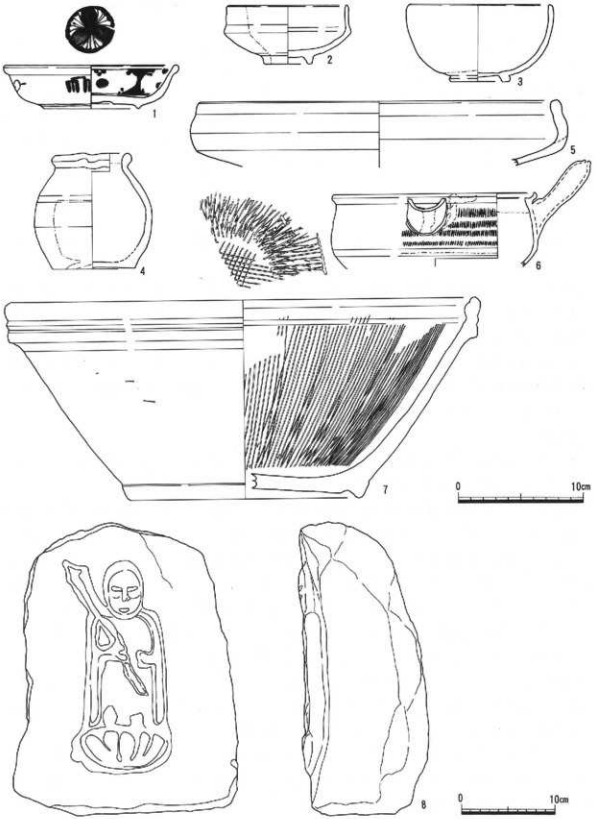


第73図　ＳＷ02（１・２）・ＳＷ03（３・４）出土遺物

ＳＷ02

ＳＷ02は、ＳＷ01の北隣に位置する（第70図・図版24）。掘形の平面形は円形を呈し、直径0.7m、深さ0.5mを測る。

第73図－１は、土師質土器甕である。口径60cm、器高60.7cm、底径19cmを測る。口縁部の断面がＴ字状に呈するタイプである。外面には塗土が施されているが、それ以外は無釉である。２は、肥前磁器色絵瓶である。器高（残）11.7cm、底径11.2cmを測る。外面体部に山水文が描かれている。高台畳付は露胎である。２の他には、丸瓦やガラスが甕内から出土しており、これもＳＷ01同様、20世紀中頃には廃棄されたと思われる。Ⅳ期に属する。



第74図　ＳＫ14（１～７）・表採（８）出土遺物

ＳＷ03

ＳＷ03は、ＳＷ02の北隣に位置する（第70図・図版24）。掘形の平面形は円形を呈し、直径0.65m、深さ0.3mを測る。

第73図－３は、大谷焼鉢である。口径60.1cm、器高36.4cm、底径27.9cmを測る。大型タイプのものである。内面から外面にかけて黒色釉を横方向にハケ塗りしている。内面には白色の付着物が付着している。川口宏海氏の型式分類（川口1992年）２型式に属する。４は、堀土出土の肥前磁器染付皿である。口径（推）8.8cm、器高2.3cm、高台径5.2cmを測る。口縁部は稜花とし、内面には芙蓉手文様としている。外面には連続唐草文が描かれている。高台内には「成」の銘がみられる。大橋康二氏の編年Ⅴ期に属する。また体部には焼継ぎ痕があった。これもＳＷ01・02と同じ出土状況であるため、20世紀中頃には廃棄されたと思われる。Ⅳ期に属する。

ＳＷ04

ＳＷ04は、ＳＷ03の北隣に位置する（第70図・図版24）。掘形の平面形は円形を呈し、直径0.73m、深さ0.3mを測る。

第71図－７は、堀土出土の銅製煙管吸口部である。吸口長5.6cm、吸口部の直径0.8cmを測る。肩部は無いタイプで、体部には接合痕がみられる。古泉弘氏の編年（古泉1983年）Ⅵ期に属する。８は、クロム青磁皿である。口径（推）10.8cm、器高2.1cm、高台径６cmを測る。内面に縁釉と白土によって草花文が描かれている。高台畳付は露胎である。10は、便槽に使用した丹波焼甕である。器高（残）29.7cm、底径17cmを測る。体部に鉄釉がに施され、さらに灰釉を流し掛けしている。７・８の年代観から19世紀後半～20世紀中頃のうちに廃棄されたと思われる。Ⅳ期に属する。

ＳＫ14

ＳＫ14は、調査区中程やや北側に位置する（表６）。平面形は不整形を呈し、長さ1.9m、幅1.17m、深さ0.85mを測る。18世紀代の遺物が多量に出土した。

第74図－１は、肥前磁器染付深皿である。口径（推）13.6cm、器高3.5cm、高台径7.4cmを測る。内面体部の文様は草花文で、見込みには三方割銀杏文が描かれている。器形は蛇ノ目凹型高台で、口縁部が玉縁状を呈する。大橋康二氏の編年Ⅳ期に属する。２・３は、瀬戸・美濃焼陶器碗である。２は、口径（推）9.4cm、器高4.7cm、高台径3.8cmを測る。体部中程から真直ぐに立上がり、鋭い陵をもつ。真中から半分づつ灰釉と鉄釉とを掛け分けている。高台畳付は露胎である。３は、口径（推）11cm、器高6.2cm、高台径4.8cmを測る。高台断面は台形状で、体部は半球型を呈する。全体に灰釉が掛けられ、高台は無釉である。見込みに３ヵ所の目跡を残す。４は、丹波焼片口壺である。内面口縁部から外面体部にかけて塗土が施されている。５は、土師質土器焙烙である。口径（推）28cmを測る。内面底部はナデ調整、口縁部内外面はヨコナデ調整、外面底部は未調整である。難波洋三氏の分類のＥ類に属する。６は、京・伊賀・信楽焼行平である。口径（推）８cmを測る。把手は合わせ型成形後、体部にハリツケ、口縁部の注口もハリツケしている。外面体部には、トビカンナによって文様を施し、それ以外のところには鉄釉が掛けられている。７は、堺焼擂鉢である。口径（推）37cm、器高16cm、高台径18.6cmを測る。高台をもち、口縁部先は真直ぐに立上がるが外縁帯は外へ張り出すタイプである。外面調整は、底部際から口縁部外縁帯よりやや下側まで回転ヘラケズリ調整を施している。内面体部の擂目は右回りで９本単位みられ、見込みには左回りで８本単位の擂目を施している。白神典之氏の分類１類に属する。

出土遺物を概観すると、18世紀前半～18世紀後半と考えられる。Ⅲ－２ｂ期に属する遺構である。

採集遺物

第74図－８は、船形光背型石仏である。全長31.5cmを測る。右手に宝寿、左手には錫杖をもつ僧形を浮き彫りにしている。材質は花崗岩である。

ＳＫ18

ＳＫ18は、北壁沿いに位置する（表６）。平面形は不整形を呈し、長さ3.35m、幅0.83m、深さ0.59mを測る。

図版28－10は、中国製青花散り蓮華である。第１次面ＳＫ18から出土したものである。器壁は薄く、呉須の発色も良好である。これと同じものが以前報告した第97次調査Ｄ－６区ＳＫ300で出土している（藤井直正他『有岡城跡・伊丹郷町Ｖ』1997年）。伊丹郷町遺跡において、散り蓮華の出土量は少なく大手前女子大学の調査では総数で５点位である。ほとんどが18世紀後半以降の遺構から出土している。

ＳＫ15

ＳＫ15は、西壁沿いのやや北側に位置する（表６）。平面形は不整形を呈し、長さ1.43m、幅0.6m以上、深さ0.25mを測る。

図版28－11は、肥前系磁器染付急須である。口径7.6cm、器高5.8cm、底径7.5cmを測る。体部には、折り枝草文と「都無□去・一鮎・□逢雪□来鼈」の漢詩が記されていた。

６．まとめ

Ｂ－６区では、奈良時代から現代までの遺構を検出した。時代を追ってまとめたいと思う。

７～８世紀頃ここに建物が建てられたが、それ以後、16世紀後半まで遺構はない。16世紀後半～17世紀初頭では、建物はみられず、井戸や廃棄土壙が中心であった。これは、まわりの調査区でも同じ傾向で、猪名野神社参道沿い以外は、建物が建っていなかったようである。この傾向は、17世紀末までつづく。17世紀末以降、遺構は急激に増加する。建物が建てられ始めるのは、18世紀前半以降である。南側を間口とするもので、この調査区の南側に、猪名野神社参道から西側に抜ける小道が造られたことが大きく影響したと思われる。この小道は、『元禄七年（1694）柳沢吉保領伊丹郷町絵図』（第159図）では、西側には抜けていないが、享保十二年（1735）～明和元年（1759）頃に作成された『北少路村絵図』（第160図）には、西側に通じる小道がみられ、この小道が18世紀前半には造られていることが分かる。19世紀前半に建物は建て替えられるが、昭和三十六年の航空写真（図版１）には写っておらず、この頃までに建物は取り壊される。おそらく、昭和三十年に起こった北側に隣接する市場の火災によって、被害に遭ったのではないかと考えられる。その後、この調査区全体が小道から北側奥に通じる路地に替わる。このように、狭い調査区ではあるが、古い時期からの土地利用の変遷を確認できたことは大きな成果であった。さらに、南側で確認した２ヵ所の屋敷境は、屋敷地を復元するにあたって大きな手掛かりになった。

第６節　第78次調査Ｂ－７区

Ｂ－７区は、猪名野神社参道の西側で、今回報告するＢ－11－１区とＢ－１－３区に挟まれた調査区である。ここは、『天保十五年（1844）伊丹郷町絵図』(第159図）によると、「北少路村」にあたり、『元禄七年（1694）柳沢吉保領伊丹郷町絵図』(第159図）では、庄屋太郎左衛門の屋敷地内に比定できる。調査面積は24㎡である。

１．基本層序

調査面は４面である。地山面は、Ｏ．Ｐ．＝18.900m前後を測る。西壁を観察すると、地山直上に第３次遺構面（第75図第７層明黄褐色砂質土層（2.5Y5/6)、現地表面より40cm下）がみられ、その上に、第２次遺構面を構成する黄褐色砂質土層（10Ｙ R5/6)(第75図第５層、現地表面より25cm下)、その上に、第１次遺構面を構成するオリーブ褐色砂質土層（2.5Ｙ4/6)(第75図第４層現地表面より10cm下）が堆積していた。

２．第４次面の遺構と遺物

第４次面は、建物はみられず、東西に延びる溝と廃棄土壙を数ヵ所検出した。

ＳＤ04

ＳＤ04は、調査区北側に位置する（第77図・図版29)。検出長3.11m、幅１m、深さ0.28mを測る。断面形は、溝端が緩やかに傾斜する。埋土は１層で、オリーブ褐色粘質土層が堆積する。上面で検出したＳＤ03は、同位置あり、土層断面を観察するとＳＤ04の後身であることが分かった。ＳＤ04の埋土から出土した遺物の年代観から、16世紀末～17世紀初頭の溝と考えられる。

第80図－１は、中国製青花碗である。残存高1.9cmを測る。呉須の発色は良好で、器壁も薄い。文様は小片であるが、見込みに連弁文がみられ、高台内と脇に１重の円圏が描かれている。小野正敏氏の分類（小野1982年）の染付碗Ｅ群に属する。２は、唐津焼碗である。高台径4.8cmを測る。外面高台部以外に、灰釉が掛けられている。大橋康二氏の編年（大橋1989年）Ｉ期に属する。

出土遺物は前述のように、16世紀末～17世紀初頭と考えられる。Ⅲ－１ａ期に属する。

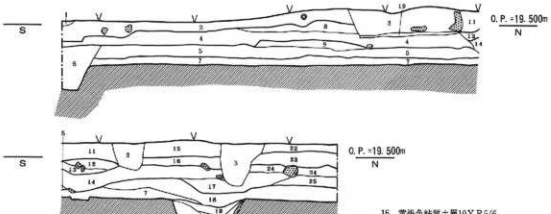
３．第３次面の遺構と遺物

第３次面でも建物の存在は確認されず、東西に延びる溝と大型の廃棄土壙を検出した。

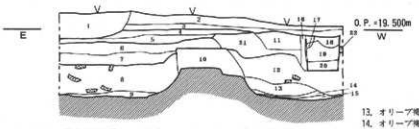
ＳＤ03

ＳＤ03は、調査区北側に位置する（第78図・図版29)。検出長3.11m、幅2.11m、深さ0.30mを測る。埋土は１層で、黄褐色砂質土層2.5Y5/6である。この溝は、東西に延びており、東隣Ｂ－１－３区ＳＤ04、西隣Ｂ－11－１区ＳＤ05で続きが確認されている。先にも述べたが、第４次面で検出したＳＤ04の後身である。また、ＳＤ04が幅を狭めつつ引き続き利用され、ＳＤ03となったと考えられる。この溝は、『元禄七年（1694）柳沢吉保領伊丹郷町絵図』(第159図）でみられる庄屋太郎左衛門と太郎左衛門の借家（住人塩ウリ作兵衛と糸引さくの屋敷地）との北側屋敷地境が、この溝に当たると考えられたが、一致しなかった。出土遺物を検討すると、元禄七年（1694）以前には、この溝は埋め戻されたと思われる。

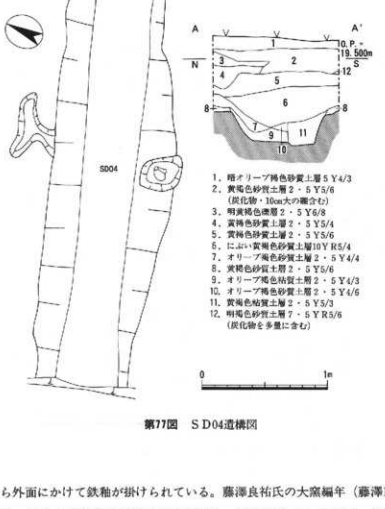
第80図－４は、肥前磁器染付碗である。高台径（推）4.2cmを測る。全体的に発色が悪い。外面に文様がみられる。高台畳付は露胎である。５は、唐津焼碗である。高台径は4.4cmを測る。高台内の削りは丁寧で、



第75図　B－7区西壁土層図



第76図　B－7区南壁土層図



第77図　ＳＤ04遺構図

高台脇にケズリ痕がみられる。内面と外面体部に灰釉が掛けられている。4は、大橋康二氏の編年Ⅱ－１期、5は、Ⅰ期に属する。

出土遺物を概観すると、17世紀前半～17世紀後半と考えられる。Ⅲ－１ｂ期～Ⅲ－２ａ期に属する。

ＳＫ10

ＳＫ10は、西壁沿い中程に位置する（表６）。平面形は不整形を呈し、検出長1.58m、幅0.72m、深さ0.17mを測る。北側に接しているＳＤ03は、この遺構より古い時期のものと思われるが、出土遺物がこちらの方が古いものが出土している。おそらく、下の遺構（ＳＤ04）から遺物が混入したと思われる。

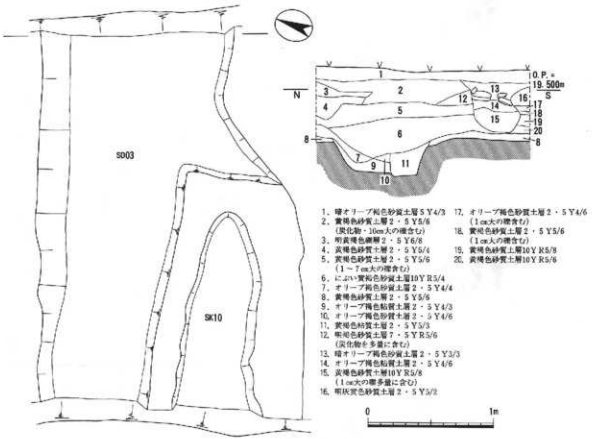
第80図－６は、瀬戸・美濃焼天目茶碗である。口径（推）11.2cmを測る。口唇部はほぼ直立し、口縁部がやや外反するタイプである。内面から外面にかけて鉄釉が掛けられている。藤澤良祐氏の大窯編年（藤澤1993年）Ⅳ期第４段階第７小期に属する。７は、肥前磁器初期伊万里皿である。口径（推）14cmを測る。全体的に発色が悪い。内面に草花文様が施されている。大橋康二氏の編年Ⅱ－１期に属する。混入品の６を省くと、17世紀前半～17世紀中頃と考えられ、Ⅲ－１ｂ期に属する遺構である。

ＳＫ12

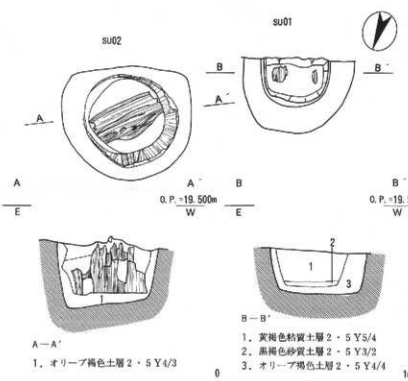
ＳＫ12は、調査区南東隅に位置する（表６）。平面形は不整形を呈し、検出長3.1m、幅2.34m、深さ0.34mを測る。18世紀代の遺物が多量に出土した。

第80図－３は、花崗岩製下石臼である。直径33.3cm、高さ14.3cmを測る。上面の目は、４条１単位とし８単位彫られていたと思われる。８・９は、肥前磁器である。８は、染付碗である。口径（推）10cm、器高5.5cm、高台径4.1cmを測る。外面体部に二重網目文が描かれている。高台畳付は露胎である。９は、染付瓶である。口径（推）7.4cm、残存高13.7cmを測る。ラッパ状の口をもち、型押しされた耳が２ツハリツケされている。外面体部には文様がみられる。８・９ともに、大橋康二氏の編年Ⅳ期に属する。10は、京・伊賀・信楽焼土鍋である。口径（推）19.2cm、器高9.1cm、底径7.6cmを測る。内面から外面体部にかけて鉄釉が掛けられている。外面底部は無釉で、煤が付着している。12は、土師質土器十能である。全長（残）16.2cm、幅14.2cmを測る。身部外型成形で、上面にはナデ調整がみられる。把手部は身部成形後ハリツケされ、ナデ調整を施している。

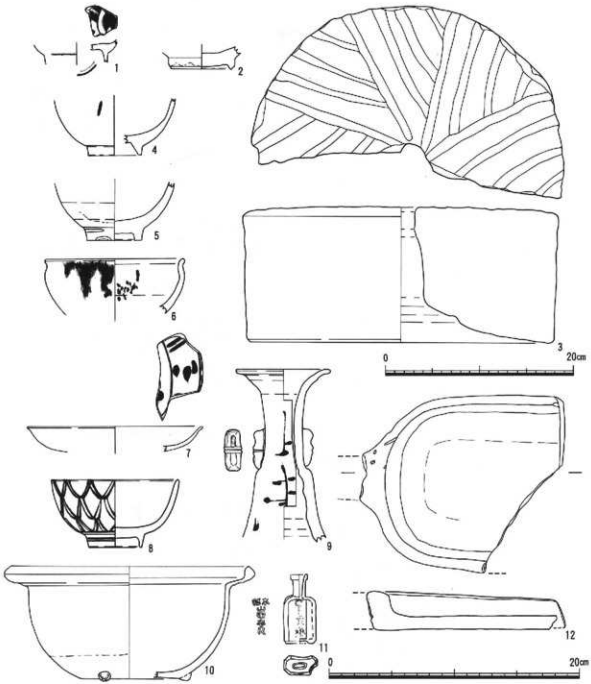
出土遺物を概観すると、18世紀前半～18世紀後半と考えられる。よって、Ⅲ－２ｂ期に属する。



第78図　ＳＤ03遺構図



第79図　ＳＵ01・02遺構図



第80図　ＳＤ04（１・２）・ＳＤ03（４・５）・ＳＫ10（６・７）・ＳＫ12（３・８～10・12）・ＳＵ02（11）出土遺物

４．第２次面の遺構と遺物

第２次面では、18世紀後半～19世紀代の遺構を中心に検出した。

ＳＵ02

ＳＵ02は、南壁沿い中程に位置する（第79図・図版29）。便槽桶遺構である。掘形の平面形は楕円形を呈し、長径0.67m、短径0.6m、深さ0.32mを測る。この便槽桶遺構の西側で、ＳＵ01を検出した（第79図・図版29）。位置的にみて、２基１組で使用されていたと思われる。南隣のＢ－１－３区ＳＢ02（第14図）の裏庭に位置し、この便槽桶の年代観が19世紀後半～20世紀初頭と考えられることから、ＳＢ02に伴うものと

思われる。

第80図－11は、ガラス製瓶である。口径1.4cm、器高5.5cmを測る。色調はdeep purplish blue（6PB 2.4/8）を呈す。合わせ型で、体部には「木舗　山田安民」と「ロート目薬」の銘がみられる。そのほかには、桟瓦が出土している。

出土遺物を概観すると、19世紀末～20世紀初頭と考えられる。Ⅳ期に属する。

5．第１次面の遺構と遺物

第１次面では、土壙を調査区全体にわたって確認したため、裏庭空間だったと思われる。１次面の年代は、第１次精査時出土遺物から、19世紀末～20世紀初頭と思われる。

6．ま と め

Ｂ－７区では、建物遺構は検出されず、溝や土壙が中心であった。Ｂ－７区は、表道や路地から奥まったところに位置し、長い間、裏地空間であったと思われる。昭和二十三年の航空写真（図版１）をみても裏地空間になっており、この頃まで建物が建っていなかったようである。昭和三十六年の撮影時（図版１）には建物が建っていたので、その時期までには建てられたと思われる。このように、調査区が狭く全体を掴むのは難しかったが、16世紀末～17世紀初頭までの溝（ＳＤ04）を検出できたことは大きな成果であった。

第７節　第83次調査Ｂ－９区

Ｂ－９区は、猪名野神社参道から西側に延びる小道に面している。東・西・南側は、前回の『有岡城跡・伊丹郷町Ⅴ』(藤井直正他1997年）で報告した第51次調査Ｂ－１－４区・Ｂ－３区・第63次調査Ｂ－５区とそれぞれ接している。この地区は、『天保十五年（1844）伊丹郷町分間絵図』(第159図）によると、「北少路村」にあたり、『元禄七年（1694）柳沢吉保領伊丹郷町絵図』(第159図）では、「屋敷主善兵衛」、住人は「町代佐兵衛」の屋敷地の東側にあたると考えられる。調査面積は73.8㎡である。

１．基本層序

遺構面は４面検出した。地山面は、Ｏ.Ｐ.＝＋19.000～＋19.100mを測り、全体的に平坦である。堆積層は0.6m前後で、Ｂ－３区・Ｂ－１－４区とほぼ同じである。地山直上に第４次遺構面（現地表面より約55㎝下）を検出した。北壁中央では、炭化物・焼土を多く含んだ褐色砂質土層（第81図第９層、現地表面より約50㎝下）が見られた。これは、元禄年間の火災（元禄十二年（1699）か十五年（1702））の処理土壙と考えられる、ＳＫ98・100の埋土である。北壁東側では、第４次遺構面の上に黄褐色砂質土層（第81図第21層、現地表面より約45㎝下）が堆積しており、この上面を第３次遺構面として捉えた。その上層の褐色粘質土層（第81図第13層、現地表面より約35㎝下）を第２次遺構面とした。その上層に、整地層と考えられるにぶい黄褐色砂質土層（第81図第11層、現地表面より約25㎝下）が堆積、この上面を第１次遺構面とした。

２．第４次面の遺構と遺物

第４次面では、三和土や柱穴などは検出できなかった。しかし、調査区西部に地割溝と思われるＳＤ17、北壁沿いに元禄十二年（1699）あるいは元禄十五年（1702）の火災の処理土壙と考えられるＳＫ98を検出した。

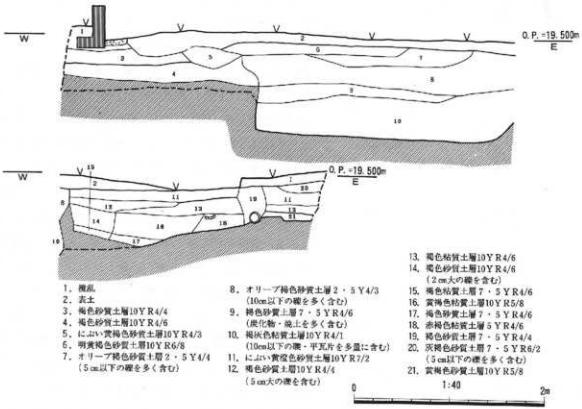
ＳＤ17

ＳＤ17（第82図・図版33）は、調査区西部を南北に延び、南端は調査区外へ達する溝である。検出長6.3m、幅0.3m、深さ0.18mを測る。埋土は１層で、にぶい黄褐色粘質土であった。この溝からはあまり遺物は出土しなかった。

第83図－１は、肥前磁器染付碗である。口径（推）10.8㎝、器高（残）4.7㎝を測る。外面には草花文が描かれている。大橋康二氏の編年（大橋1989年）によると、Ⅳ期に属する。他にも肥前磁器二重網目文碗（大橋氏の編年Ⅳ期）が出土している。

出土遺物の年代観から、18世紀前半～後半と考えられる。Ⅲ－２ｂ期に属する遺構である。このＳＤ17は、後述する第３次面のＳＤ03（表６）とほぼ同じ位置で検出されている。ＳＤ03で出土した遺物の年代観も同じであることから、このＳＤ17はＳＤ03の下層であると考えられる。またこの溝は、『元禄七年（1694）柳沢吉保領伊丹郷町絵図』(第159図）では町代佐兵衛の屋敷地東端のラインと一致し、地割溝であることが判明した。

また、この溝は南側の第63次調査Ｂ－５区ＳＤ05に続くと考えられる。しかし、このＳＤ05の埋土から元禄年間の火災の焼土が検出され、ＳＤ17の年代観と差が出ている。構築年代は同時期である可能性もあるが、廃絶年代には時期差があると考えられる。



第81図　B－9区北壁土層図

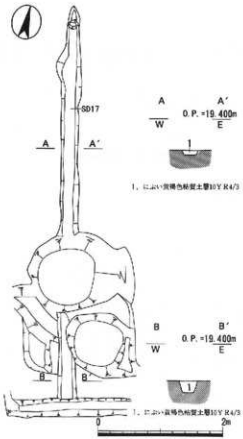
ＳＫ97

ＳＫ97（表６）は、調査区北東部北壁沿いに位置する。平面形は不整形を呈し、長さ2.1m以上、幅1.55m、深さ0.29mを測る。出土遺物は少なかったが、この遺構の直上にあたる第２次面ＳＫ16（表６）から肥前磁器―重網目文碗（大橋氏編年Ⅲ期）や嬉野焼灰釉皿などが出土しており、17世紀後半～末頃（Ⅲ－２ａ期）と考えられる。そうすると、この遺構は、それ以前と考えられる。ＳＫ97と西側に接するＳＫ98・100の北壁土層を観察すると、同遺構と思われ、ＳＫ98・100の年代観が17世紀後半～18世紀初頭であることから、ＳＫ97も同時期の遺構と考えられる。また、ＳＫ16の出土遺物は、ＳＫ97からの混入したものと思われる。Ⅲ－２ａ期に属する遺構である。

第83図－２は、軒丸瓦である。全長（残）13.6cm、瓦当部径13.4cm、文様区径10cm、内区径6.9cm、周縁幅2.1cm、瓦当部厚2.3cmを測る。瓦当文様は、内区は右巻き三ツ巴文、外区は連珠を16個配する。瓦当周縁部はナデ調整、周縁側面及び瓦当部裏面周縁は周縁に沿ってナデ調整が施されており、周縁側端部は面取りが施されている。瓦当部裏面には丸瓦部との接合の際のクシ目が見られ、接合部分は横方向にナデ調整が施されている。丸瓦部凸面は縦方向にヘラナデ調整、凹面には布目痕が見られる。凹面両側端は、縦方向にヘラケズリ調整が施されている。

ＳＫ98

ＳＫ98（表６・図版33）は、調査区中央部北壁沿いに位置する。平面形は不整形を呈す。長さ1.4m以上、幅1.4m、深さ0.54mを測る。埋土に炭化物や焼土が多くみられ、焼けた瓦片も出土している。出土遺物の年代観から、元禄十二年（1699）あるいは元禄十五年（1702）の火災の処理土壙ではないかと考えられる。



第82図　ＳＤ17遺構図

北側の北壁土層を観察すると、ＳＫ98とＳＫ100は、同遺構の可能性がある。

第83図－３・５は、肥前磁器染付碗である。３は、口径（推）10.4cm、器高5.6cm、高台径3.7cmを測る。外面に草花文が描かれている。呉須の発色は悪い。高台畳付には砂が付着している。見込みには、焼成時に窯壁が溶けて落ちたと思われる痕跡がみられる。大橋氏の編年Ⅳ期に属する。５は、器高（残）1.2cm、高台径（推）3.4cmを測る。やや薄手のものである。外面には文様が描かれているが、小片だったため解らなかった。大橋氏の編年Ⅳ期に属する。４は、現川焼刷毛目文碗である。口径（推）9.7cm、器高4.9cm、高台径（推）3.8cmを測る。胎土は小豆色（10R3/5）に近く、内面は刷毛目文を施し、外面には円文を施した「蛍手」と呼ばれるものである。高台部は薄く、高台畳付は無釉で平坦に削られている。６は、京焼風陶器碗である。口径（推）12.8cm、器高4.9cm、高台径4.7cmを測る。高台部断面は、台形を呈し、高台内の削りが深いタイプである。内面には鉄絵の山水文が描かれ、高台は無釉、高台内には刻印がみられた。「清」の文字を崩したものと思われる。大橋氏の編年Ⅲ期に属する。７は、唐津系陶器刷毛目文皿である。口径（推）18.3cm、器高４cm、高台径（推）9.4cmを測る。高台部断面は厚く、台形を呈し、高台内の削りが深い。内面には刷毛目文が施され、見込みは蛇ノ目釉ハギがなされ、その上に砂が付着している。大橋氏の編年Ⅳ期に属する。

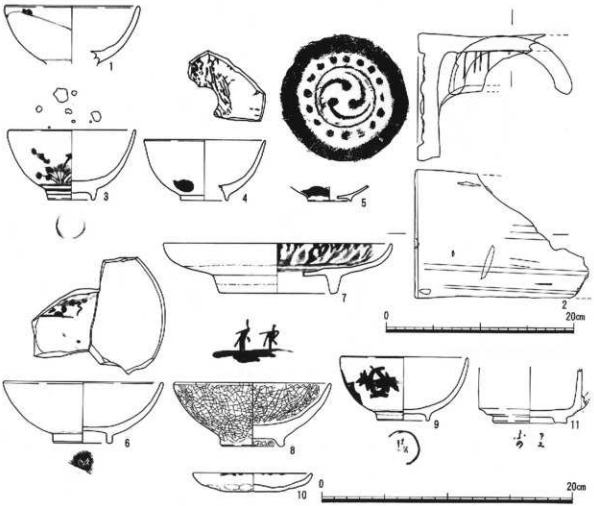
出土遺物を概観すると、17世紀後半～18世紀初頭と考えられる。Ⅲ－２ａ期に属する遺構である。この遺構は出土遺物が多く、計測を行った。計測結果は第５章で詳しく述べる。

ＳＫ100

ＳＫ100（表６・図版33）は、調査区中央部北壁沿いに位置する。不整形を呈し、長さ1.4m以上、幅1.1m以上、深さ0.55mを測る。これは前述のように、ＳＫ97・98と同時期で、元禄年間の大火災の焼土処理土壙と考えられる。

第83図－８は、産地不明陶胎染付碗である。口径12.5cm、器高5.1cm、高台径5.1cmを測る。全体的に器壁は厚いが、高台部はやや小ぶりである。見込みには、呉須で帆をあげた船が描かれている。９は、肥前磁器染付碗である。口径10cm、器高5.2cm、高台径4.1cmを測る。器壁は薄く、器型はやや丸みを帯びている。高台部のつくりも薄い。外面には、松竹梅文をコンニャク印判で施している。また、高台内に「太明年製」の銘が見られる。大橋氏の編年Ⅳ期に属する。10は、土師質土器皿である。口径（推）9.6cm、器高1.5cmを測る。胎土はにぶい橙色を呈し、手づくね成形で、外面は指頭圧調整、内面はヨコナデ調整、内面底部にはナデ調整が施されている。口縁部に煤が付着していることから灯明皿として使用されていたと考えられる。

出土遺物を概観すると、17世紀後半～18世紀初頭と考えられる。Ⅲ－２ａ期に属する遺構である。



第83図　ＳＤ17（1）・ＳＫ97（2）・ＳＫ98（3～7）・ＳＫ100（8～10）・
ＳＫ93上層（11）出土遺物

ＳＫ93

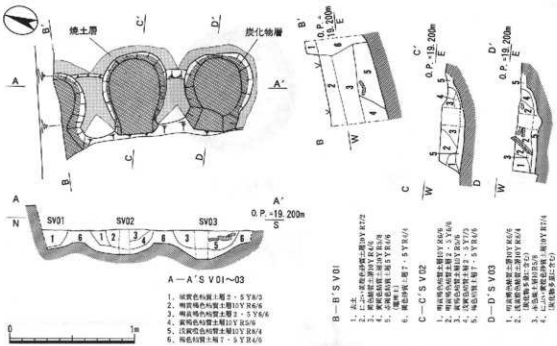
ＳＫ93（表６）は、調査区東部西壁沿いに検出した。平面形は不整形を呈し、長さ1.3m、幅0.9m、深さ0.36mを測る。

第83図－11は、上層で出土した丹波焼水注である。器高（残）4.4cm、高台径5.9cmを測る。高台内の削りは浅い。内外面には鉄釉が施されているが、高台部は無釉で、高台内に「中上」(進上の意味か)「ふの」の墨書がある。体部には把手の痕跡が残る。その他には、肥前磁器コンニャク印判文碗・草花文碗（大橋氏編年Ⅳ期）や京焼系陶器碗、難波洋三氏の分類（難波1992年）Ｇ類の土師質土器焙烙など幅広い年代の遺物が出土した。

出土遺物を概観すると、18世紀前半～19世紀初頭と考えられる。Ⅲ－２ｂ期～Ⅲ－３ａ期に属する遺構である。

３．第３次面の遺構と遺物

第３次面は、前述したように調査区西部に南北に走る地割溝ＳＤ03（表６・図版33）を検出した。出土遺物の年代観から、18世紀後半頃まで使用されていたと考えられる。また、調査区北東部からＳＶ01～03を並んで検出した。



第84図　ＳＶ01・02・03遺構図

ＳＶ01・02・03

ＳＶ01～03（第84図・図版33）は、調査区北東部に位置する竈である。燃焼室が３基並ぶ。燃焼室の大きさは、ＳＶ01は直径（推）0.5m、深さ0.15m、半分は北側調査区外へ広がる。ＳＶ02は直径0.5m、深さ0.16m、ＳＶ03は直径0.5m、深さ0.15mを測る。焚き口の痕跡は見られなかったが、おそらく西側にあったと考えられる。骨材はなく、粘土によって壁面を構築している。燃焼室内には、炭化物が薄くたまり、周辺は若干赤く変色していた。

第85図－１は、ＳＶ03の埋土から出土した丸瓦である。全長（残）15.2cm、丸瓦部幅（残）8.2cm、高さ８cm、厚さ1.8cmを測る。玉縁部は欠損していた。全体に白く変色していた。丸瓦部凸面は縦方向のヘラナデ調整で、一部煤が付着している。凹面にはわずかに布目痕が見られ、側縁部はヘラケズリ調整が施されている。

出土遺物は少なく、年代を決めるのが難しいが、18世紀中頃と考えられ、Ⅲ－２ｂ期に属する遺構と思われる。この遺構に伴う建物などは、確認できなかった。隣接する第51次調査Ｂ－１－４区でも半地下式の３基１組の竈（ＳＶ01・02・03）が検出されている。年代は18世紀前半代とされており、燃焼室の大きさもほぼ同じであることから、当時の竈の一形態としてとらえられる。

ＳＫ45

ＳＫ45（表６）は、調査区南西部に位置する。不整形を呈し、長さ2.05m、幅0.85m、深さ0.81mを測る。

第85図－２は、軒丸瓦である。小型であり、飾瓦であろう。８弁の菊花文が施されている。丸瓦部は欠損している。瓦当部径7.9cm、文様区径5.4cm、周縁部幅1.2cm、瓦当部厚２cmを測る。瓦当部上部から丸瓦部凸面にかけて縦方向のナデ調整の後、瓦当部周縁側面にナデ調整を施している。瓦当部周縁は周縁にそってナデ調整、瓦当部裏面もナデ調整が見られる。３・４は、肥前磁器染付碗である。３は、口径（推）10.8cm、器高５cm、高台径4.2cmを測る。高台部は薄づくりである。外面に草花文を描き、見込みは蛇ノ目釉ハギが

施され、アルミナ砂が付着している。高台畳付は無釉で砂が付着している。4は、口径10.2cm、器高5.3cm、高台径4.2cmを測る。外面に二重網目文を描く。3・4とも大橋氏の編年Ⅳ期に属する。5は、京・伊賀・信楽焼土瓶蓋である。直径9.4cm、器高2.5cm、底径3.5cm、つまみ部幅2cmを測る。上面に灰釉が施されているが、下面は無釉である。7は、丹波焼瓶である。器高（残）17.1cm、底径8.4cmを測る。外面には塗土が施され、内面は無釉である。外面肩部と内面底部に、焼成時についたと思われる自然釉が見られる。8は、瓦質土器器台である。口径35.4cm、器高11.3cmを測る。焼炉の付属品として使用されたものと思われる。上部は端部が台形をなし、半月状の切り込みが6カ所見られる。内面から外面にかけて丁寧なヨコナデ調整が施されている。体部上方には穿孔が6カ所施されている。外面下方には一条の沈線が見られる。

出土遺物を概観すると、18世紀後半～19世紀前半と考えられる。Ⅲ－3期に属する遺構である。

ＳＫ24

ＳＫ24（表6）は、調査区西部西壁沿いに検出した。平面形は不整形を呈する。長さ1.5m以上、幅0.8m以上、深さ0.08mを測る。

第85図－6は、瀬戸・美濃焼磁器色絵碗である。口径（推）9.4cm、器高4cm、高台径3.3cmを測る。腰部より口縁部にかけて緩やかに反っている。器壁は薄いが、底部は厚く作られている。外面に花文を朱色（10ＹＲ5.5/14）で描いている。高台畳付は無釉である。9は、土師質土器焼炉である。口径17.2cm、器高17.9cmを測る。外面には透明釉が施され、内面は無釉である。脚は2足のみ残っていたが、3足であると考えられる。脚は、胴部とは別に作りハリツケて、ヘラケズリ調整されている。そのうちの1脚外面に縦2.2cm、横2.2cmの「彌」の刻印が押されている。「弥七焼炉」と呼ばれる煎茶焼炉である。「弥七焼炉」は、姫路東山焼に従事していた池田弥七が安政三年（1856）に考案したものと言われている（姫路市史編集専門委員会1995年）。小林謙一氏の分類（小林1991年）ではⅡｅ1類に属すと考えられる。同様のものが脚部（刻印有）だけであるが、第51次調査Ｂ－1－3区ＳＫ138（図版7－19）でも出土している。10は、丹波焼甕である。口径（推）44.4cm、器高（残）40.7cmを測る。胎土は、grayish yellow（5.5Ｙ8/3）を呈し、0.1cm程度の小石を含む。内外面は塗土が刷毛で施されている。

出土遺物を概観すると、19世紀前半～後半と考えられる。Ⅲ－3ｂ期に属する遺構である。

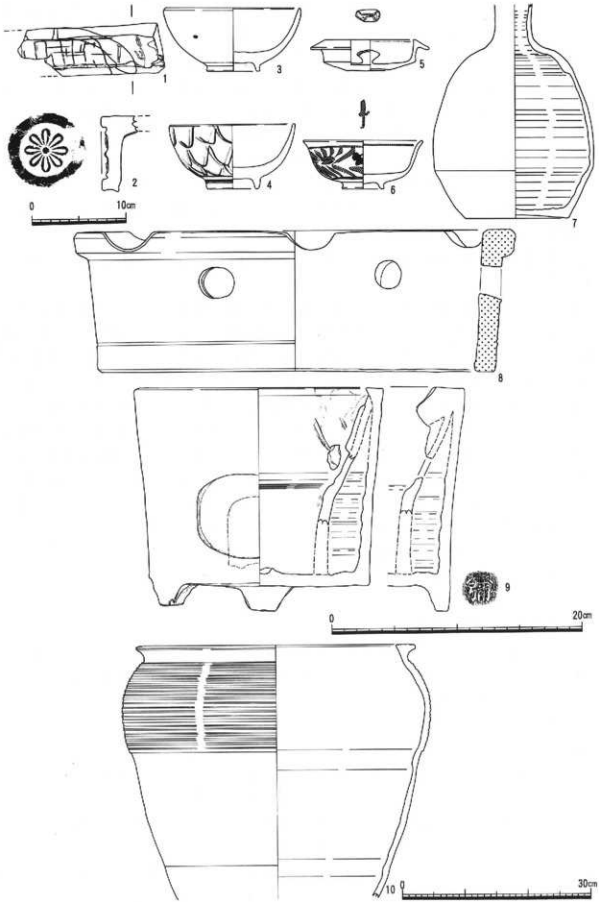
4．第2次面の遺構と遺物

この面も建物を復元することはできなかった。しかし、調査区南東部に砂利敷面を検出し、これが第51次調査Ｂ－1－4区及び第63次調査Ｂ－5区に続く路地遺構と思われる。この路地は、裏地の宅地化に伴い設けられたと思われ（川口1997年）、『文化（1804～17）改正伊丹之図』（第160図）に記されている路地Ｂに当たると考えられる。

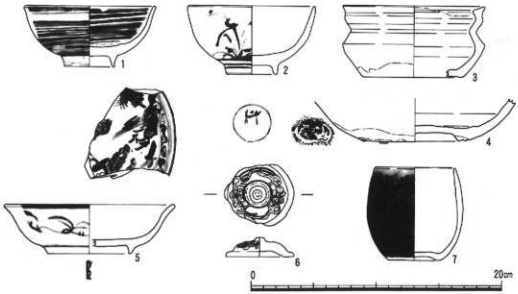
ＳＫ17

ＳＫ17（表6）は、調査区中央北壁沿いに検出した。平面形は不整形を呈し、長さ2.7m以上、幅2.5m、深さ0.31mを測る。

第86図－1は唐津系陶器刷毛目文碗である。口径（推）10.5cm、器高5cm、高台径4cmを測る。内面見込みを中心に、体部全体に白化粧土による刷毛目文を施している。高台内は深く、高台断面は三角形を呈す。見込みは蛇ノ目釉ハギで砂が付着している。大橋氏の編年Ⅳ期に属する。2は、肥前磁器染付碗である。口径（推）10.2cm、器高5.6cm、高台径4.1cmを測る。外面には草花文が描かれている。呉須の発色はあまりよくない。高台内に「太明年製」を崩した銘が見られる。高台畳付は無釉で砂が付着している。大橋氏の編年

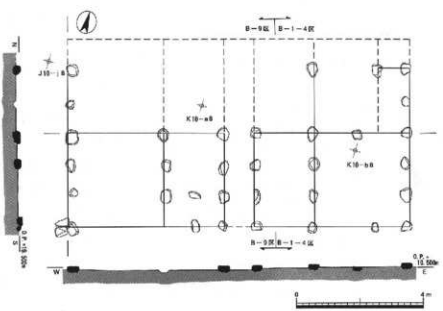


第85図　ＳＶ03（1）・ＳＫ45（2～5・7・8）・ＳＫ24（6・9・10）出土遺物



第86図　ＳＫ17（１～４）・ＳＵ01掘形（５・６）・ＳＵ01（７）出土遺物

Ⅳ期に属する。３は、丹波焼鉢である。口径（推）11.4cm、器高5.7cm、底径（推）８cmを測る。口縁部から外面体部にかけて釉土が施されている。４は、丹波焼徳利か。底部のみ残存している。底径8.6cmを測る。外面には灰釉を掛け、さらにその上から透明釉が掛けられている。内面は無釉である。底部には、目跡が見られる。底部側面には刻印が見られ、丹波窯の銘印のひとつである「吉左（衛）門」と思われる（河原1977年）。

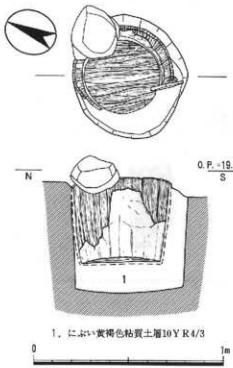


第87図　ＳＢ01遺構図

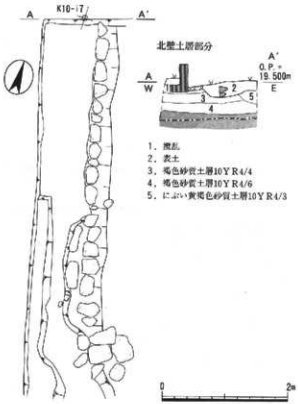
出土遺物を概観すると、17世紀後半～18世紀前半と考えられる。Ⅲ－２期に属する遺構である。

５．第１次面の遺構と遺物

第１次面は、調査区北部で一部三和土を検出した。19世紀前半～後半の遺構（ＳＫ03）に切られており、既存建物（ＳＢ01）以前の建物のものである可能性が高い。また、検出した礎石の多くは、既存建物（ＳＢ01）のものである。この建物は、第51次調査Ｂ－１－４区ＳＢ01の続きである。礎石痕と考えられるＳＫ04からは、19世紀前半～後半の遺物が見られ、19世紀後半以降に建てられたと考えられる。南壁沿いに検出した礎石も既存建物（ＳＢ02）に伴うものである。この礎石は第63次調査Ｂ－５区ＳＢ01の続きにあたる。また、西部で検出したＳＤ01は、前述した地割溝ＳＤ03・17を石積溝に作り替え、屋敷境として利用したもの



第88図　ＳＵ01遺構図



第89図　ＳＤ01遺構図

と考えられる。

ＳＢ01

ＳＢ01（第87図・図版33）は、桁行２間半（東西4.923m）、梁行３間（南北5.907m）を測る。既存建物である。前回報告した第51次調査Ｂ－１－４区ＳＢ01に続く。合わせると、桁行５間（9.845m）、梁行３間（南北5.907m）を測り、北側を間口とした２軒の長屋と考えられる。Ｂ－１－４区ＳＢ01と同じく、下面の遺構から、19世紀前半までの遺物が出土しており、19世紀後半以降に建てられたと考えられる。Ⅲ－３ｂ～Ⅳ期に属する。

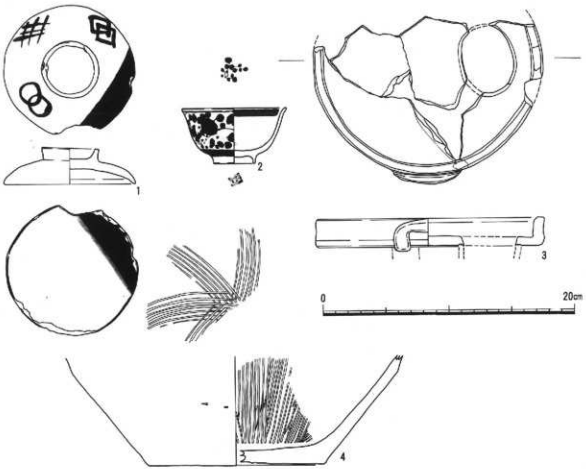
ＳＢ02

ＳＢ02（図版33）は、南壁沿いに検出した礎石列である。この礎石列は、第63次調査Ｂ－５区ＳＢ01の続きである。19世紀前半以降に建てられたと考えられており、桁行５間半（東西10.8295m）以上、梁行２間（南北3.938m）を測る。Ⅲ－３ｂ～Ⅳ期に属する。

ＳＵ01

ＳＵ01（第88図・図版33）は、調査区南西部に位置する便槽桶である。平面形は円形を呈し、木桶の直径0.52m、深さ0.45m、掘形の直径0.61m、深さ0.53mを測る。

第86図－５・６は、掘形出土の遺物である。５は、瀬戸・美濃焼染付端反皿である。口径（推）13.8cm、器高４cm、高台径（推）6.7cmを測る。外面には草文が描かれ、内面には山水文を描いている。高台内には銘が見られる。６は、ミニチュア土製品蓋物蓋である。口径（推）5.4cm、器高1.5cm、つまみ径0.8cmを測る。型押し成形で、外面全体には透明釉、花がかたどられている部分には白色釉が、その上から緑釉が掛けられている。内面は無釉で指頭圧調整されている。７は、産地不明湯呑茶碗である。完形で出土した。口径6.5cm、器高7.5cm、高台径4.1cmを測る。内面にはpale greenish yellow（10Y9/1.5）、外面には暗赤褐色（5YR3/6）の釉が掛けられている。高台



第90図　ＳＤ01埋土出土遺物

畳付は無釉である。

出土遺物を概観すると、19世紀前半～20世紀に入ると考えられる。Ⅲ－３ｂ～Ⅳ期に属する遺構である。第２次面で検出したＳＵ02は、ＳＵ01の北隣りに位置する。年代観が19世紀前半～後半であることから同時期に使用されていたと考えられる。しかし、このＳＵ02の年代観から、ＳＵ02の方が先に廃棄され、その後単独で使用されていたと思われる。

ＳＤ01

ＳＤ01（第89図・図版33）は、調査区西部に位置する。花崗岩を用い西側に面を揃える。石積溝と思われる。検出長は5.5mを測る。

第90図－１～４は、埋土より出土した遺物である。１は、瀬戸・美濃系陶器蓋物蓋である。口径10.4cm、器高３cm、つまみ径4.2cmを測る。器壁はやや厚いが、全体に透明釉が掛けられ、一部鉄釉で文様が描かれている。全体に貫入が見られる。２は、瀬戸・美濃焼染付端反碗である。口径（推）8.2cm、器高4.5cm、高台径3.2cmを測る。口縁部の反り方は弱く、高台部の断面は逆三角形を呈す。外面に立涌草花文が描かれ、見込みにも草花文が見られる。高台内には変形字を方形枠内に書き込んでいる。藤澤良祐氏の分類（藤澤1998年）ＩＥ類に属し、近世瀬戸磁器編年表（藤澤1998年）によると、Ⅱ期に属する。３は、軟質施釉陶器であるが、器種は不明である。円形に近い型になると考えられ、直径18.4cm、器高（残）2.7cmを測る。側面から内面にかけて透明釉が掛けられている。把手がハリツケられ、底部は１カ所５cm×４cmの楕円形にくりぬかれている。焼継ぎも見られる。外面底部を見ると、下に何かを張り付けていたような痕跡が見られた。

4は、明石焼擂鉢である。口縁部は欠損している。器高（残）8.8cm、底径14.1cmを測る。外面体部はロクロ右回転ヘラケズリ調整、外面底部は未調整で離れ砂が付着している。擂目は内面に8本単位で、見込みには放射状に7本単位で施されている。

第3次面ＳＤ03の年代観から、溝構築年代は18世紀後半以降と考えられる。溝埋土から19世紀前半～後半の遺物が出土しており、この埋土上に漆喰やコンクリートがみられる。このことから、19世紀後半以降に一度造り替えられたと考えられる。現代まで屋敷地として利用されていた。Ⅲ－３期～Ⅳ期に属する遺構である。

６．ま と め

Ｂ－９区は、周りを前回報告した地区に囲まれた調査区であった。そのため、前回の報告をさらに確実なものにする遺構を多く検出した。

まず、Ⅲ－１期以前の遺構は確認できなかった。Ⅲ－２ａ期になると、調査区北部に遺構が集中する。大きな遺構が多く、中には焼土や炭化物を含んだ土壙も見られた。Ⅲ－２ｂ期では、調査区西部を南北に走る溝ＳＤ17・03を検出した。この溝は元禄七年（1694）の絵図では、「町代佐兵衛」の屋敷地の東端と一致する。この溝の東側では、元禄年間の焼土処理土壙ＳＫ98・100があり、この大火災に遭った建物が建っていた可能性がある。とすれば、元禄七年以降元禄十二年（1699）あるいは元禄十五年（1702）までの間に建った建物ということになる。しかし、その後の廃棄土壙も多く見られ、空き地か裏庭的空間だった時期もあると思われる。その後、18世紀前半～後半には、竈ＳＶ01～03が築かれており、再び小規模な建物が建ったと考えられる。18世紀後半には、ＳＤ17・03は北側部分が、石積溝ＳＤ01にかわる。またＳＤ01より東側では、この時期の建物の復元はできなかったが、19世紀前半～後半の遺構に切られた三和土を一部検出し、既存建物以前の建物の存在が伺われる。Ⅲ－３ａ期に入ると、『文化（1804～17）改正伊丹之図』(第160図）に見られるように調査区の南側に「⊥」字形の東西方向に延びる路地（第160図路地Ｂ）が作られる。ＳＫ18・45などは、路地に掘られた廃棄土壙であろう。Ⅲ－３ｂ期になると、調査区北側は、ＳＤ01を屋敷境とする、既存建物ＳＢ01・02が建てられる。

第８節　第83次調査Ｂ－10区

Ｂ－10区は、猪名野神社参道から西側に延びた小道に面し、その南側に位置している。西側は、前回の『有岡城跡・伊丹郷町Ⅴ』(藤井直正他1997年）で報告した第51次調査Ｂ－１－４区、南側は今回報告する第８６次調査Ｂ－12区と接している。この地区は、『天保十五年（1844）伊丹郷町分間絵図』(第159図）によると、「北少路村」にあたり、『元禄七年（1694）柳沢吉保領伊丹郷町絵図』(第159図）では、猪名野神社参道に二間の間口を持つ「五郎兵衛」の屋敷地内の西側にあたると考えられる。調査面積は94.62㎡である。

１．基本層序

遺構面は、４面検出した。地山面は、全体的にＯ．Ｐ．＝＋19.000m前後を測り、平坦であった。堆積層は0.7m前後を測り、西隣りのＢ－１－４区とほぼ同じである。地山直上に第４次遺構面（現地表面より約60㎝下）を検出した。その上に第３次遺構面褐色砂質土層（第92図第11層、現地表面より約45㎝下）、第２次遺構面を形成する褐色砂質土層（第92図第９層、現地表面より約30㎝下）・にぶい黄褐色砂質土層（第92図第10層、現地表面より約30㎝下）が堆積する。その上層には、オリーブ褐色砂質土層（第92図第８層、現地表面より約25㎝下）、第１次遺構面のベースとなる黄褐色砂質土層（第92図第７層、現地表面より約15㎝下）を検出した。

２．第４次面の遺構と遺物

第４次面では、建物は確認できなかったが、地割溝と思われるＳＤ13・14を検出した。

ＳＤ13

ＳＤ13（第93図）は、調査区西部に位置する南北方向に延びる溝である。検出長5.95m、幅１m、深さ0.2mを測る。両端は調査区外に延びると考えられ、南側は第86次調査Ｂ－12区ＳＤ03に続くと思われる。埋土は、１層である。

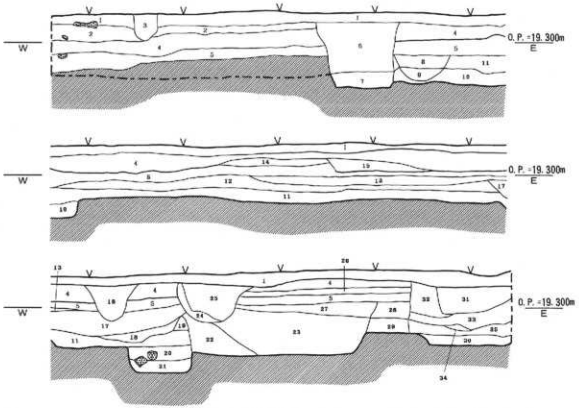
第97図－１～３は、唐津焼である。１は、皿である。器高（残）2.1cm、高台径4.4cmを測る。内面から高台脇にかけて灰釉が掛けられ、見込みには砂目が見られる。２は碗である。器高（残）3.1cm、高台径（推）5.8cmを測る。内面から外面高台内にかけて灰釉が掛けられているが、発色が悪く、全体的に白っぽく変色している。見込みと高台畳付に砂目が付着している。３は、溝縁皿である。器高（残）2.1cm、高台径（推）4.6cmを測る。内面から外面にかけて透明釉が掛けられている。見込みに砂目が付着している。１～３とも大橋康二氏の編年（大橋1989年）Ⅱ－１期に属する。４は、唐津系陶器呉器手碗である。器高（残）３cm、高台径4.6cmを測る。高台畳付に砂が付着している。大橋氏の編年Ⅲ期に属する。

出土遺物を概観すると、17世紀前半～後半と考えられる。Ⅲ－１ｂ～２ａ期に属する遺構である。後述するＳＤ14と同じ地割溝と思われる。

ＳＤ14

ＳＤ14（第94図）は、ＳＤ13の東隣りに検出した。北側は南北方向に延び、南側で「コ」字形に分流する溝である。両端は調査区外に延びると考えられるが、第86次調査Ｂ－12区では検出されなかった。南側の東西に延びる区間は、第３次面ＳＤ07とほぼ同じ位置にあり、屋敷境を表している可能性がある。検出長（南北）6.3m、（東西）5.5m、最大幅1.55m、深さ0.15mを測る。埋土は、黄褐色砂質土層の１層であった。

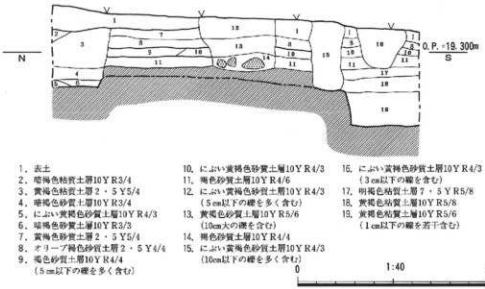
第97図－５は、唐津系陶器呉器手碗である。器高（残）3.5cm、高台径4.7cmを測る。高台畳付に砂が付着



第91図　B－10区北壁土層図

している。大橋氏の編年Ⅲ期に属する。6は、唐津焼皿である。口径（推）12cm、器高3.4cm、高台径（推）4.2cmを測る。内面から外面口縁部にかけて灰釉が施されている。見込みに砂目が見られる。大橋氏の編年Ⅱ－1期に属する。7は、土師質土器皿である。口径（推）10.9cm、器高（推）1.3cmを測る。胎土は、灰黄色（2.5Y7/2）を呈す。手づくね成形で、口縁部内外面はヨコナデ調整、内面底部はナデ調整、外面は指頭圧調整を施している。

出土遺物を概観すると、前述したSD13と同じく17世紀前半～後半であった。Ⅲ－1b～2a期に属する遺構である。

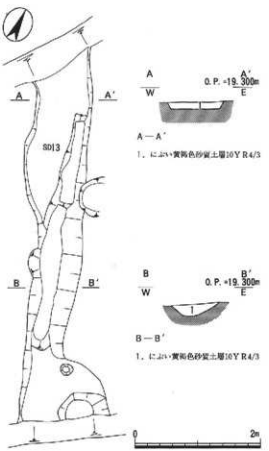


第92図　B－10区東壁土層図

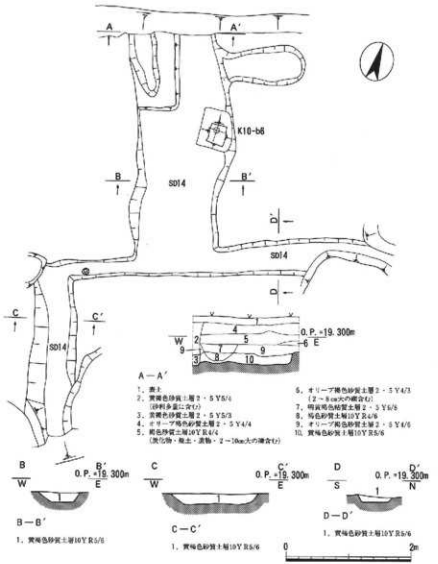
ＳＫ87

ＳＫ87（第95図・図版38）は、調査区東部南壁沿いに位置する。平面形は不整円形を呈す。長径1.1m、短径0.95m以上、深さ0.38mを測る。焼焼が多く出土した。

第97図－８は、肥前磁器染付碗である。器高（残）5.7㎝、高台径（推）4.4cmを測る。高台畳付は無釉である。大橋氏の編年Ⅱ期に属する。９～11は、土師質土器焙烙である。９は、ほぼ完形で出土した。胎土は、dull orange（7.5YR6/4）を呈す。口径23.3cm、器高６cmを測る。内面から外面口縁部にかけて炭化物が付着している。口縁部から底部にかけて丸みを帯び、屈曲するタイプである。調整は、内面底部はナデ調整、内面口縁部から外面体部はヨコナデ調整、外面体部から底部にかけては未調整である。難波洋三氏の分類（難波1992年）のＥ類に属する。10は、胎土は橙色（7.5YR7/6）を呈す。口径（推）34.7cm、器高（残）4.5cmを測る。これも口縁部から底部にかけて丸みを帯び、屈曲するタイプである。また口縁部は９よりも丸みを帯びている。内面口縁部から外面体部にかけてナデ調整、内面体部はヨコナデ調整が施されている。難波氏の分類のＥ類に属する。11は、胎土に0.1cm程の礫を含み、橙色（7.5YR6/6）を呈す。口径31.7cm、器高（残）8.6cmを測る。口縁部に若干の歪みが見られる。調整は、内面



第93図　ＳＤ13遺構図



第94図　ＳＤ14遺構図

体部から外面体部にかけてヨコナデ調整、内面底部はナデ調整、外面底部は未調整、外面体部と底部の接合部をヘラで削り面取りを施している。口縁端部に２カ所、粘土を足した把手が付される。把手は直径４mmの未貫通の２類（難波1992年）の穿孔が見られる。難波氏の分類のＤ類に属する。

出土遺物を概観すると、17世紀前半～18世紀初頭と考えられ、Ⅲ－１ｂ～２ａ期に属する遺構である。

第４次面精査時出土遺物

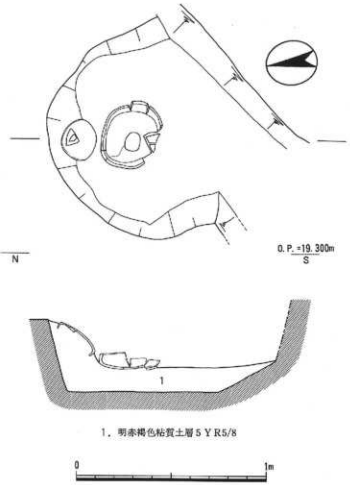
第97図－12は、中国製青花皿である。口径（推）9.4cm、器高2.35cm、高台径（推）4.8cmを測る。外面には唐草文、内面には十字花文が見られる。小野正敏氏の分類（小野1982年）Ｂ１群Ⅵ類に属す。

３．第３次面の遺構と遺物

第３次面は、Ⅲ－２期（17世紀後半～18世紀後半）の遺構を中心に検出した。建物の痕跡は検出できなかったが、第４次面に続き地割溝ＳＤ07・10を検出した。これらの溝は消滅するが、その位置は現代の地割とも一致する。また、焼土を含んだ土壙ＳＫ58や埋桶ＳＵ03・04を検出した。

ＳＤ07

ＳＤ07（第96図・図版38）は、調査区南部に東西にわたって検出した溝である。検出長9.3m、幅0.5m、深さ0.08mを測る。出土遺物に、肥前磁器染付碗（大橋氏編年Ⅲ期）や丹波焼擂鉢（大平茂氏編年のⅥ型式（大平1992年））が出土している。出土遺物を概観すると、17世紀後半～末と思われ、Ⅲ－２ａ期に属する。この溝は、『元禄七年（1694）柳沢吉保領伊丹郷町絵図』（第159図）の「五郎兵衛」の屋敷地南端ラインと一致し、地割溝であることが判明した。この地割は現代まで変わっていない。また、この溝の直下が、第４次面で述べたＳＤ14と一致する。ＳＤ14の年代観が、17世紀前半～後半であることから、17世紀後半にＳＤ14の溝の南側の東西方向に広がる部分の位置に、ＳＤ07が構築されたと思われる。



第95図　ＳＫ87遺構図

ＳＤ10

ＳＤ10（第96図・図版38）は、調査区西部を南北に走る溝である。検出長5.7m、幅0.6m、深さ0.18mを測る。南北に延びると考えられるが、南側の第86次調査Ｂ－12区では検出できなかった。出土遺物は図化できなかったが、京焼風陶器碗（大橋氏編年Ⅲ期）、肥前磁器一重網目文碗（大橋氏編年Ⅲ期）や土師質土器焙烙（難波氏分類Ｃ類）などが出土している。出土遺物を概観すると、17世紀後半と考えられ、Ⅲ－２ａ期に属する遺構と考えられる。また、ＳＤ10の直下が、第４次面ＳＤ13にあたり、地割溝と思われる。ＳＤ13も、17世紀後半までに廃絶後、ＳＤ10に造り替えられたと思われる。

ＳＵ03

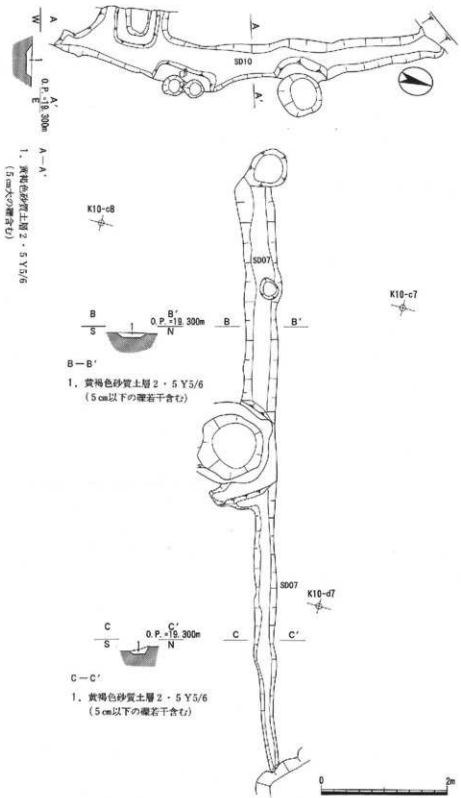
ＳＵ03（表６）は、調査区南東端に位置する。木桶底部跡のみ検出した。円形を呈し、直径2.3m、深さ0.44mを測る。

第97図－13は、肥前磁器染付碗である。口径（推）9.4cm、器高5.8cm、高台径3.8cmを測る。外面に丸文が描かれている。大橋氏の編年のⅣ期に属する。14は、土師質土器皿である。口径7.6cm、器高2.1cmを測る。口縁部は、やや直線ぎみにのびている。内面はナデ調整、外面には指頭圧調整後ナデ調整を施している。口縁部には煤が付着していることから、灯明皿として使用されていたと考えられる。川口宏海氏の分類（川口1997年ｂ）ＩＴ（伊丹郷町期）１型式Ａ類に属する。

出土遺物を概観すると、18世紀前半～中頃と考えられる。Ⅲ－２ｂ期に属する遺構である。

ＳＵ04

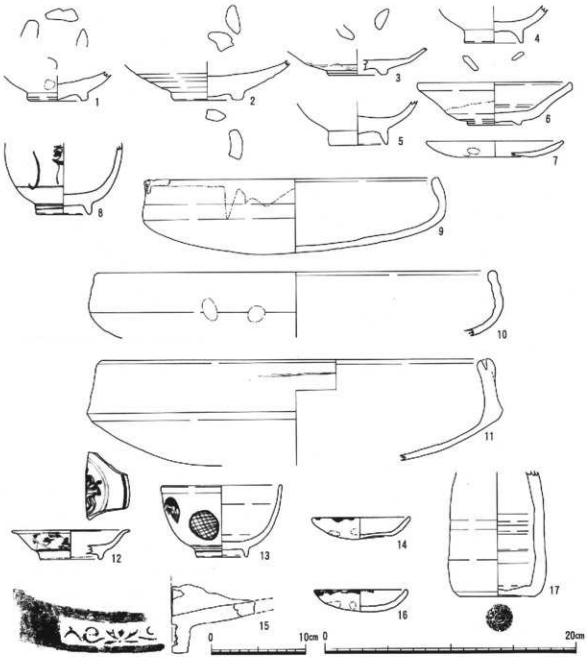
ＳＵ04（表６）は、調査区南部中央に検出した。埋桶遺構である。平面形は円形を呈する。内矩の直径１



第98図　ＳＤ07・10遺構図

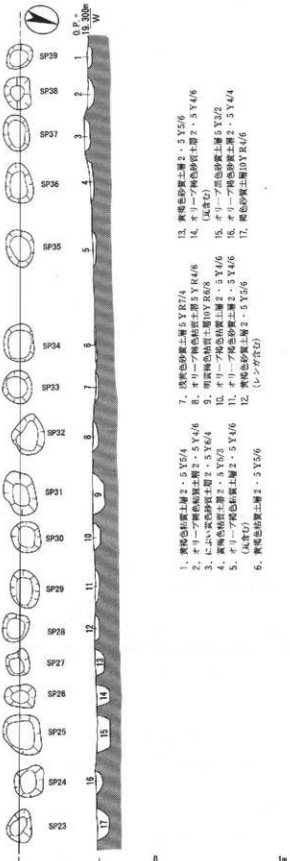
m、深さ0.55m、掘形の直径1.4m、深さ0.6mを測る。木桶の遺存状況は悪い。

第97図－15は、掘形出土の軒桟瓦である。全長（残）8.8cm、瓦当部厚4cm、文様区厚2.4cmを測る。文様は比較的伸びやかな均整唐草文である。瓦当周縁部は周縁に沿ってナデ調整、顎下部から瓦当部裏面、平瓦

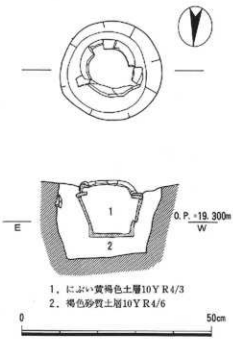


第97図　ＳＤ13（１～４）・ＳＤ14（５～７）・ＳＫ87（８～11）・第４次面精査時（12）・ＳＵ03（13・14）・ＳＵ04（15・16）・ＳＫ58（17）出土遺物

部との接合部分までナデ調整を施している。平瓦部凹面はナデ調整、凸面は未調整である。16は、土師質土器皿である。口径7.2cm、器高2.1cmを測る。内面底部はナデ調整、内面口縁部はヨコナデ調整、外面は指頭圧調整後ナデ調整を施している。口縁部に煤が付着していることから、灯明皿として使用されていたと考えられる。川口氏の分類ＩＴ（伊丹郷町期）１型式Ａ類に属する。他に図化しなかったが、肥前磁器染付碗（大橋氏編年Ⅳ期）や肥前白磁紅皿などが出土している。出土遺物を概観すると、18世紀中頃～後半と考えられ、Ⅲ－２ｂ期に属する遺構である。



第98図　ＳＡ01遺構図



第99図　ＳＩ02遺構図

ＳＫ58

ＳＫ58（表６）は、調査区北東部に位置する。平面形は長方形を呈し、北側は調査区外に広がると考えられる。長さ3.7m、検出幅1.8m、深さ0.4mを測る。埋土に若干焼土を含んでいた。

第97図－17は、備前焼瓶である。器高（残）10cm、底径６cmを測る。外面底部に「○」の刻印が見られる。備前焼の刻印に似たものはあるが、全く同じものはない（桂1973年）。時代的にも、若干の違いがみられる。他に、肥前磁器染付碗（大橋氏編年Ⅲ期）なども見られた。

出土遺物を概観すると、17世紀後半～18世紀初頭と考えられ、Ⅲ－２ａ期に属する遺構である。

４．第２次面の遺構と遺物

第２次面も、建物を復元できる礎石や柱穴を検出することはできなかった。しかし、調査区南部に、東西に多数連なる柵列と考えられる遺構を検出した（ＳＡ01）。これは前述したＳＤ07の直上にあたり、屋敷境の柵列と考えられる。

このほか、埋桶遺構ＳＵ02や胞衣壺ＳＩ02などを検出した。

ＳＡ01

ＳＡ01（第98図・図版38）は、直径0.2～0.3m、深さ0.02～0.1mの柱穴（ＳＰ23～39）が0.1m間隔で東西に並んでいる。遺物は出土しなかった。第３次面ＳＤ07のほぼ直上にあたることから、18世紀後半以降に作られたと考えられる。また、ＳＡ01の上面の第１次面にはⅣ期の遺構（ＳＫ16）があり、19世紀後半にはなくなっていたと考えられる。この柵列も屋敷境と考えられる。Ⅲ－３ａ期に属すると考えられる。

ＳＩ02

ＳＩ02（第99図・図版38）は、調査区南部に位置する。土師質土器火消壺を埋置したものである。内容物は認められなかったが、胞衣壺と考えられる。建物との関係は不明であるが、周辺に土壙が多いことから、裏庭に埋められたと考えられる。掘形の平面形は円形を呈し、直径0.27m、深さ0.2mを測る。

第101図－１・２は、土師質土器火消壺である。１は、火消壺蓋である。口径（推）14.2cm、器高3.75cm、つまみ径3.05cmを測る。粘土円盤に粘土紐輪積み成形し、天井部内面と口縁部を回転台を利用して回転ナデ調整を施している。天井部外面は、離れ砂痕が見られ、雲母が付着している。つまみ部はハリツケし、周りにナデ調整を施している。２は、火消壺身である。口径（推）11.2cm、器高14.7cm、底径11.5cmを測る。ロクロ成形である。外面は回転台を利用し、丁寧に回転ナデ調整を施している。肩部と体部の接合部及び体部と底部の接合部は、ヘラケズリ調整が施されている。外面底部には、離れ砂痕が見られる。川口宏海氏の編年（川口1995年）Ⅱ－２型式に属する。

出土遺物を概観すると、19世紀前半～20世紀初頭と考えられる。Ⅲ－３ｂ～Ⅳ期に属する遺構である。

ＳＵ01

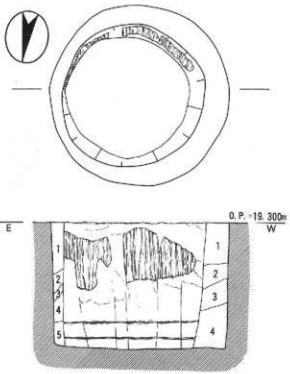
ＳＵ01（表６）は、調査区中央部のＳＵ02の東側に位置する。掘形のみ検出した。掘形の直径0.7m、深さ0.65mを測る。

第101図－３は、京焼系陶器碗である。器高（残）4.8cm、底径（推）2.3cmを測る。内面から外面下部にかけて透明釉が施されている。他には、肥前磁器丸窓文碗（大橋氏編年Ⅳ期）が出土している。

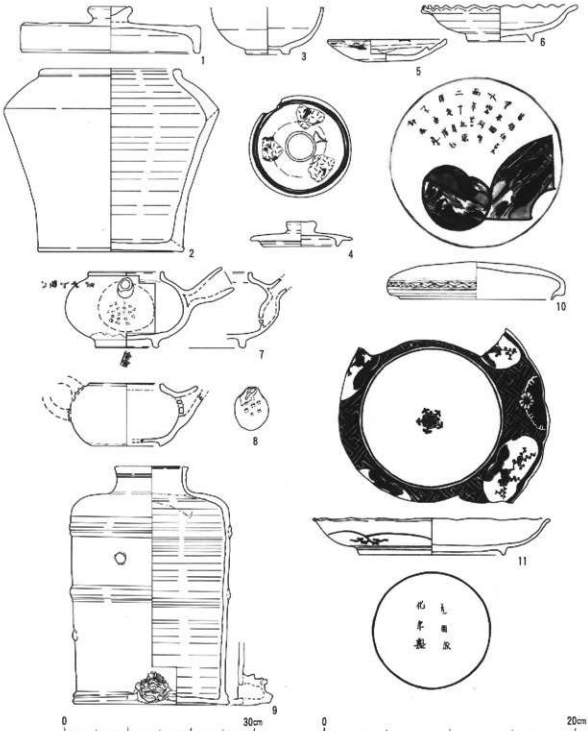
出土遺物を概観すると、18世紀前半～後半と考えられ、Ⅲ－２ｂ期に属する遺構である。

ＳＵ02

ＳＵ02（第100図・図版38）は、調査区中央部西寄りに検出した。埋桶遺構である。平面形は、円形を呈する。内矩の直径は0.75m、掘形の直径0.95m、深さは内矩・掘形とも0.66mを測る。木桶は上方のみ遺存



第100図　ＳＵ02遺構図



第101図　ＳＩ02（1・2）・ＳＵ01（3）・ＳＵ02（4）・ＳＫ38（5・6）・ＳＫ41（7～11）出土遺物

していた。また下より５cmと14cmの位置にタガの痕跡が残っていた。

第101図－４は、埋土出土の京・伊賀・信楽焼系蓋である。口径5.9cm、器高２cm、つまみ径2.3cmを測る。外面天井部には３カ所鉄釉が施されている。他には、肥前磁器染付碗・肥前青磁染付碗（ともに大橋氏編年Ⅳ期）が出土した。

出土遺物を概観すると、18世紀前半～19世紀初頭と考えられ、Ⅲ－２ｂ～３ａ期に属する遺構である。

ＳＫ38

ＳＫ38（表６）は、調査区中央部南壁沿いに検出した。平面形は不整長方形を呈し、長さ1.8m以上、幅0.4m、深さ0.09mを測る。

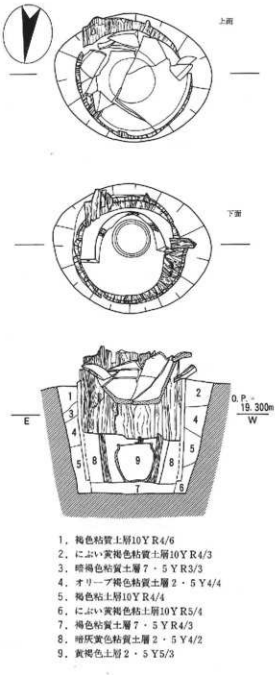
第101図－５は、柿釉灯明受皿である。口径9.3cm、器高1.9cmを測る。外面口縁部から内面にかけて透明釉が施されている。受けの部分には、半月状の切り込みが見られる。口縁部には煤が付着している。外面底部に右回転糸切り痕が見られる。６は、瀬戸・美濃焼系陶器ヒダ皿である。口径（推）12cm、器高３cm、高台径５cmを測る。口縁部がヒダ状に波打っており、内外面に透明釉が掛けられ、一部貫入が見られる。高台畳付は無釉である。他に、肥前磁器コンニャク印判文碗（大橋氏編年Ⅳ期）などが出土している。

出土遺物を概観すると、18世紀前半～後半と考えられ、Ⅲ－２ｂ期に属する遺構である。

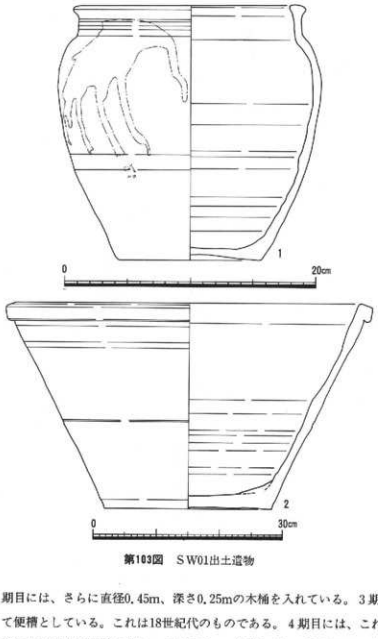
ＳＫ41

ＳＫ41（表６）は、調査区中央部に位置する。平面形は隅丸長方形を呈する。長さ1.9m、幅0.85m、深さ0.08mを測る。

第101図－７・８は、急須である。７は、産地不明である。口径（推）5.8cm、器高6.1cm、高台径5.1cmを測る。口縁端部及び高台畳付は無釉である。全体に灰釉を掛け、外面には藁灰釉が掛けられている。外面上部には文字を焼き付けた跡が見られる。また、高台内には「會寧」の刻印が見られる。「會寧」とは、北朝鮮北部豆満江中流左岸の町、会寧である。８は、肥前系青磁である。口径（推）６cm、器高5.1cm、底径5.6cmを測る。口縁部から外面下半にかけて貫入が見られる。底部と口縁端部から内面にかけて鉄錆が施されている。９は、信楽焼樽である。化学薬品を入れたものにこのような形が見られる。口径（推）9.7cm、器高38.1cm、底径24.2cmを測る。外面下部に中空の獅頭が貼り付けられ、先端に直径２mmの穿孔が見られる。外面底部は無釉である。内面から外面にかけて鉄釉が掛けられ、さらに外面にはdark blue（3PB1.5/4）の釉が掛けられている。口縁端部は釉が削られ、無釉になっている。10は、肥前磁器染付段重蓋である。口径12cm、器高３cmを測る。外面天井部には、扇形と洲浜形に山水文が描かれている。また「當相何事　爭宋回　水碧□明　兩東沓　二丁□統　□夜月　不曲膚愁　却飛来」の七言絶句が見られる。11は、肥前磁器染付皿である。口径（推）18.5cm、器高３cm、高台径11.4cmを測る。内面には洲浜形内に梅文を描き、紗綾文を曇弾きの技法で描いている。見込みには手描きの



第102図　ＳＷ01遺構図



第103図　ＳＷ01出土遺物

五弁花が丁寧に描かれている。高台内には目跡が３カ所、また「太明成化年製」の銘が見られる。大橋氏の編年Ⅳ期に属する。

出土遺物を概観すると、11は、18世紀前半の遺物であるが、他は19世紀前半～後半と考えられ、Ⅲ－３ｂ期に属する遺構である。

５．第１次面の遺構と遺物

第１次面では、調査区東部に若干三和土を検出した。礎石などは検出できず、様相を充分に復元することには至らない。時期的には、19世紀後半以降の面と考えられる。

ＳＷ01

ＳＷ01（第102図・図版38）は、調査区西部に位置する。便槽甕である。初期のものは、直径0.58m、深さ0.7mの桶を掘える。桶の掘形より肥前磁器染付碗（大橋氏編年Ⅳ期）や土師質土器焙烙（難波氏分類Ｅ類）が出土しており、遺物の年代観から18世紀前半と考えられる。２期目には、さらに直径0.45m、深さ0.25mの木桶を入れている。３期目は、さらにその中に丹波焼甕を据えて便槽としている。これは18世紀代のものである。４期目には、これを廃して大谷焼鉢を埋置している。掘形の平面形は楕円形を呈し、長径0.84m、短径0.68m、深さ0.57mを測る。このように４度流り替えられている。

第103図－１は、３期目の便槽の丹波焼甕である。口径18.7cm、器高20.4cm、底径11.4cmを測る。外面底部以外には、塗土が施され、随所に灰釉が流し掛けられている。18世紀代の遺物である。２は、４期目の大谷焼鉢である。口径（推）58.4cm、器高32.8cm、底径26.6cmを測る。内面には、白色の付着物が見られる。外面口縁部から内面にかけて、鉄釉が施されている。外面体部は無釉、外面底部は未調整である。川口宏海氏の分類（川口1992年）３型式に属する。

出土遺物を概観すると、18世紀前半～20世紀初頭と考えられ、Ⅲ－２ｂ期～Ⅳ期に属する遺構である。

第２次面精査時出土遺物

第２次面精査時より、現川焼碗片（図版40）が出土している。器高（残）３cm、高台径（推）3.5cmを測る。胎土は非常に密で、色調は小豆色（10R3/5）である。内面は刷毛目で、外面には円文を施した「蛍手」と呼ばれるものである。第７節Ｂ－９区第４次面ＳＫ98（第83図－４・図版34－３）で出土していたものと

同じである。

6．まとめ

B－10区では、時代を通して溝や廃棄土壙が中心であった。昭和三十六年の航空写真（図版1）撮影時には、建物の存在が確認されているが、19世紀末までは、裏庭的空間だったと思われる。SW01は、裏庭端に設けられた便所であるが、上屋は明確にはならなかった。このように建物遺構は確認できなかったが、多くの地割溝を確認できたことは特筆される。検出した地割溝は、17世紀前半には造られていたことが判明した。その後多少の変化はあるものの、現在とあまり変わらずに推移していることもわかった。17世紀前半に造られた南北方向の背割線SD17・03は、この調査区に隣接するB－5区SA01、B－6区SA01でも確認されている。これらに共通するのは、猪名野神社参道より、西へ30～35m入った付近で検出されていることである。また、それより東側では、人家は検出されていないことから、『延宝五年（1677）伊丹郷町地味委細絵図』（第159図）に見られるように畑であったと想定される。その後、17世紀前半に造られた溝は、17世紀後半頃にSD07・10として造り替えられ、拡張される。これは、通りから外れた場所に建物が建てられるようになったためであり、『元禄七年（1694）柳沢吉保領伊丹郷町絵図』（第159図）に見られるような町並みが成立したためと思われる。このように、小さい調査区ではあったが、地割の変遷が確認できたことは大きな成果であった。また、焙烙が多量に出土した土壙SK87など興味ある遺構も見られた。

第９節　第86次Ｂ－11－１区

Ｂ－11－１区は、猪名野神社参道と西側の万町通りの間に位置する。『元禄七年（1694）柳沢吉保領伊丹郷町絵図』(第159図）によると、庄屋太郎左衛門の屋敷地に当たる。『天保十五年（1844）伊丹郷町分間絵図』(第159図）では、「北少路村」に相当する。調査面積は、177㎡である。

１．基本層序

上面の攪乱が激しかったため、調査面は２面であった。地山面はＯ．Ｐ．＝19.000m前後を測る。西壁土層を観察すると、地山直上に、褐色系の土層（第104図第６・62・65層、現地表面より約60cm下）が堆積している。その上層に、第１次遺構面（第104図第27・55層、現地表面より40cm下）がみられた。それより、上層は主に攪乱層（第104図第２・６・３層など）である。

２．第２次面の遺構と遺物

第２次面では、16世紀末～17世紀代の溝を調査区西側で検出した。その他にも、16世紀末～17世紀代の廃棄土壙を多く確認した。

ＳＤ08

ＳＤ08は、調査区の西側に位置する（第105図・図版42)。南北方向に延びており、検出長5.6m、幅4.35m、深さ0.25mを測る。断面は、両端が緩やかに傾斜し、埋土は、黄褐色土系の土層（第104図第11～13層）が３層堆積する。人工的なものと考えられており、南側の調査区で続きが確認されている（Ｂ－１－３区ＳＤ05・Ｂ－３区ＳＤ06)。ＳＤ08の溝底は、Ｏ．Ｐ．＝＋18.700m、Ｂ－１－３区ＳＤ05ではＯ．Ｐ．＝＋18.500m、その南側のＢ－３区ＳＤ06ではＯ．Ｐ．＝＋18.600mであり、流路は北→南である。

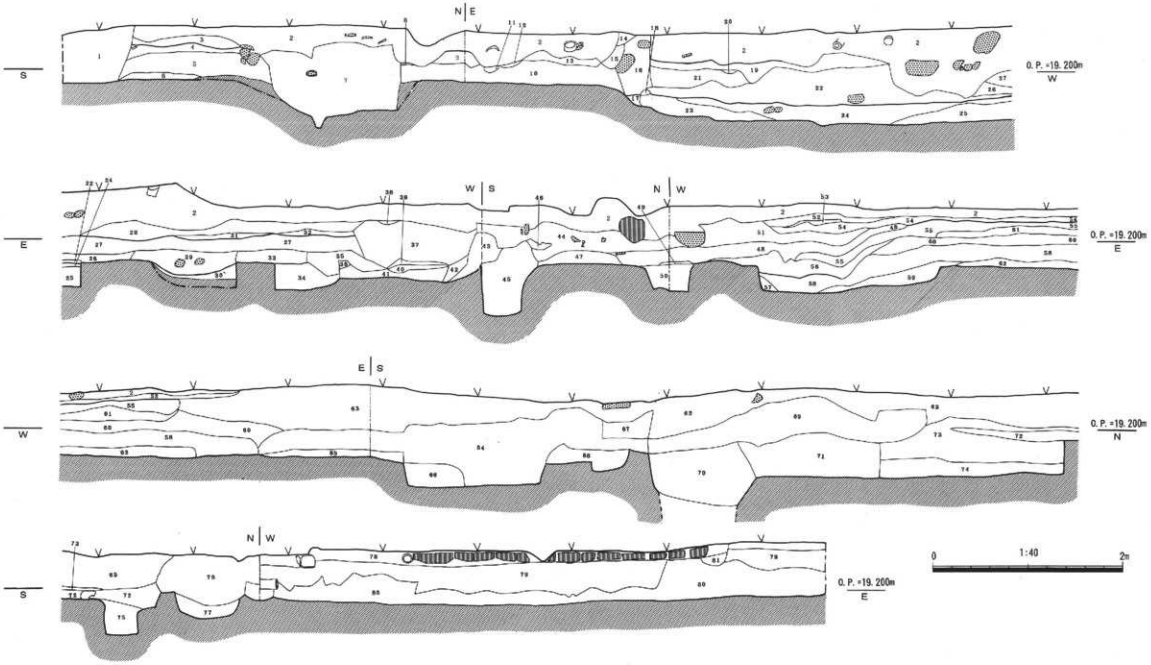
第107図－５・６は、土師質土器皿である。５は、口径（推）7.7cm、器高1.5cmを測る。ヘソ皿タイプで、胎土は、light yellow orange（7.5ＹＲ8/3）を呈する。調整は、内面はナデ調整、外面は指頭圧調整である。川口宏海氏の分類（川口1997年ｂ）ＡＲ（有岡城期）２型式Ｂ類に属する。６は、口径（推）12cm、器高1.5cmを測る。胎土は、pale yellow（2.5Ｙ8/3）を呈する。調整は、口縁部内外面はヨコナデ調整、体部内外面はヌキナデ調整である。川口宏海氏の分類ＡＲ（有岡城期）２型式Ｃ類に属する。

出土遺物を概観すると、16世紀後半と考えられる。この溝の続きからは、15世紀中頃～16世紀後半の年代観が考えられており、よって、Ⅰ～Ⅱ期に属する。

ＳＤ07

ＳＤ07は、西壁沿いに位置する（第106図・図版42)。検出長3.2m、幅1.8m、深さ0.25mを測る。上面の遺構によって上部は攪乱されていた。断面形は台形状を呈し、埋土はオリーブ褐色系の土層が２層である。万町通りに沿って設けられている。この溝は、南側へ続いており、第51次Ｂ－３区ＳＤ08・Ｂ－２－２区ＳＤ15につながっている。出土した遺物は、17世紀末頃のものも出土しており、この頃まで利用されていたと思われる。この溝の続き第51次調査Ｂ－３区ＳＤ08からは、16世紀後半の遺物がみられることから、16世紀後半には埋没するが、場所によって再び利用され、17世紀後半まで使用されたと思われる。Ｂ－８区ＳＤ04でも同じ状態であった。流路は北→南である。

第109図－４は、土師質土器皿である。口径（推）7.4cm、器高1.6cmを測る。調整は、内面はナデ調整、外面口縁部は、ヌキナデ調整、外面底部は未調整である。口縁部には、煤が付着している。川口宏海氏の分



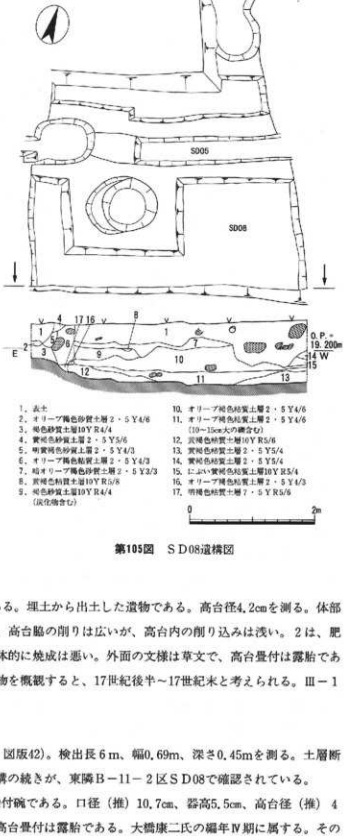
1. 撹乱
2. 表土
3. 黄褐色砂質土層10YR5/8
4. 褐色砂質土層10YR4/6
5. 褐色粘質土層10YR4/4
6. 黄褐色粘質土層10YR5/6
7. オリーブ褐色粘質土層2・5Y4/6
（炭化物・焼土・3～15mの礫多量に含む）
8. 明褐色粘質土層7・5YR5/8
9. 明褐色粘質土層7・5Y5/6
10. 褐色砂質土層10YR4/4
11. オリーブ黒色砂質土層7・5Y3/2
12. オリーブ黒色砂質土層5Y3/2
13. オリーブ褐色砂質土層2・5Y4/6
14. 黄褐色砂質土層2・5Y5/6
15. 明黄褐色砂質土層2・5Y6/8
16. オリーブ褐色粘質土層2・5Y4/3
17. オリーブ褐色粘質土層2・5Y4/6
18. オリーブ褐色粘質土層2・5Y4/4
19. 暗オリーブ褐色砂質土層2・5Y3/3
20. 黄褐色粘質土層10YR5/8
21. 褐色砂質土層10YR4/4
22. オリーブ褐色粘質土層2・5Y4/6
23. 黄褐色粘質土層10YR5/6
24. オリーブ褐色粘質土層2・5Y4/6
（10～15cm礫含む）
25. 黄褐色粘質土層2・5Y5/4
26. にぶい黄褐色粘質土層10YR5/4
27. 黄褐色粘質土層2・5YR5/4
28. 暗オリーブ粘質土層2・5Y3/3
29. 明黄褐色粘質土層2・5Y6/6
30. 黄褐色粘質土層2・5Y5/6
31. 褐色粘質土層10YR4/6
32. 暗褐色粘質土層10YR3/4
33. オリーブ褐色砂質土層2・5Y4/4
34. オリーブ褐色粘質土層2・5Y4/6
35. 明黄褐色粘質土層10YR6/8
36. 明黄褐色粘質土層10YR6/6
37. 黄褐色粘質土層2・5Y5/4
（炭化物・遺物多量に含む）
38. オリーブ褐色粘質土層2・5Y4/6
39. 黄褐色粘質土層10YR5/8
40. 褐色粘質土層10YR4/4
41. 黄褐色粘質土層10YR5/6
42. 黄褐色粘質土層10YR5/8
43. 明黄褐色粘質土層2・5Y6/8
44. 暗オリーブ褐色粘質土層2・5Y3/3
（炭化物・焼土・遺物多量に含む）
45. 明黄褐色粘質土層2・5Y6/6
46. オリーブ色粘質土層5Y5/6
47. 明褐色粘質土層7・5YR5/6
48. 褐色粘質土層10YR4/6
49. オリーブ褐色粘質土層2・5Y4/3
50. 褐色粘質土層10YR4/4
51. 灰オリーブ色粘質土層7・5Y4/2
52. 緑黒色砂質土層5G1・7/1
53. 明赤褐色粘質土層5YR5/6
54. 暗灰黄色土層2・5Y4/2
55. 明褐色粘質土層7・5YR5/6
56. 褐色砂質土層10YR4/4
57. 明褐色粘質土層7・5YR5/6
58. 褐色粘質土層10YR4/6
59. 灰オリーブ粘質土層5Y4/2
60. 黄褐色粘質土層10YR5/8
61. 明黄褐色粘質土層10YR6/8
62. 褐色粘質土層10YR4/6
63. 表土
64. 黒褐色粘質土層10YR2/2
（炭化物多量に含む）
65. オリーブ褐色粘質土層2・5Y4/3
66. にぶい黄橙色粘質土層10YR6/4
67. 暗褐色粘質土層10YR3/4
68. 黄褐色粘質土層10YR5/8
69. 黄褐色砂質土層10YR5/6
70. オリーブ褐色粘質土層2・5Y4/6
71. 灰黄色粘質土層2・5Y6/2
72. 黒褐色粘質土層2・5Y3/1
73. オリーブ褐色砂質土層2・5Y4/3
74. 黄灰色粘質土層2・5Y5/1
75. 明黄褐色粘質土層2・5Y6/6
76. 黒褐色粘質土層2・5Y3/2
77. 暗灰黄色粘質土層2・5Y4/2
78. 灰黄色砂礫土層2・5Y7/2
79. オリーブ黒色砂質土層5Y3/2
80. オリーブ黒色粘質土層5Y2/2
81. 暗オリーブ色粘質土層5Y4/3

第104図　B—11—1区西壁・北壁土層図

類ＩＴ（伊丹郷町期）１型式Ａ類に属する。その他には、京焼風陶器碗や唐津系陶器碗など、大橋康二氏の編年（大橋1988年）Ⅳ期に属するものが出土した。Ⅱ～Ⅲ－２ａ期に属する遺構である。

ＳＤ05

ＳＤ05は、調査区中央を東西に延びる溝である（第107図・図版42）。検出長17m、幅0.5m、深さ0.2mを測る。断面はＵ字形を呈し、埋土は１層である。この溝は東側に延びており、第78次調査Ｂ－７区ＳＤ03（藤井直正他『有岡城跡・伊丹郷町Ⅳ』1995年）・第51次調査Ｂ－１－３区ＳＤ04へと続く。この溝は、当初、『元禄七年（1694）柳沢吉保領伊丹郷町絵図』（第159図）にみられる庄屋太郎左衛門と太郎左衛門借家（住人作兵衛とさくの屋敷）との屋敷境に当たると考えていたが一致しなかった。出土遺物の年代観が17世紀後半～17世紀末と考えられ、元禄七年以前にはこの溝は埋めもどされたと考えられる。また、第78次調査Ｂ－７区ＳＤ03では、ＳＤ03の前身であるＳＤ04を検出した。ＳＤ04は、埋土から16世紀末～17世紀初頭の遺物が出土しており、このころには溝が存在していたことが分かった。Ｂ－７区ＳＤ04の続きは、この調査区まであったと思われるが、確認できなかった。



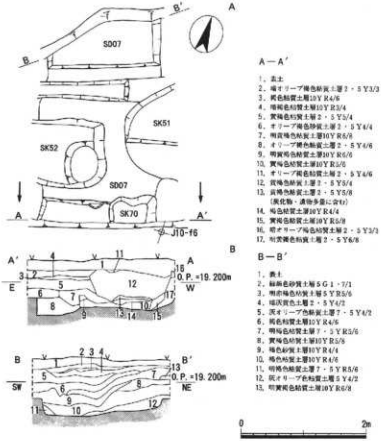
第105図　ＳＤ08遺構図

第109図－１は、瀬戸・美濃焼天目茶碗である。埋土から出土した遺物である。高台径4.2cmを測る。体部の立ち上りは強い。高台は削り出し輪高台で、高台脇の削りは広いが、高台内の削り込みは浅い。２は、肥前磁器染付碗である。高台径４cmを測る。全体的に焼成は悪い。外面の文様は草文で、高台畳付は露胎である。大橋康二氏の編年Ⅳ期に属する。出土遺物を概観すると、17世紀後半～17世紀末と考えられる。Ⅲ－１ｂ期～Ⅲ－２ａ期に属する。

ＳＤ06

ＳＤ06は、北壁沿いに位置する（第108図・図版42）。検出長６m、幅0.69m、深さ0.45mを測る。土層断面はＵ字形を呈し、埋土は１層である。この溝の続きが、東隣Ｂ－11－２区ＳＤ08で確認されている。

第109図－３は掘形から出土した肥前磁器染付碗である。口径（推）10.7cm、器高5.5cm、高台径（推）４cmを測る。外面体部に桐文が描かれている。高台畳付は露胎である。大橋康二氏の編年Ⅳ期に属する。その



第106図　ＳＤ07遺構図

他には、コンニャク印判文壺などが出土している。遺物の年代は、17世紀末～18世紀前半と考えられる。このことから、ＳＤ06は17世紀末～18世紀前半に造られたと思われる。

また、『元禄七年（1694）柳沢吉保領伊丹郷町絵図』(第159図)庄屋太郎左衛門の屋敷地の南北の規模は記載されていなかったが、この遺構の年代観から、庄屋太郎左衛門の屋敷地北側のラインに当たるのではないかと考えられる。さらに、絵図には、太郎左衛門屋敷地の南隣「塩ウリ作兵衛」のところに南北十間半と記載がある。当調査区や東隣Ｂ－７区でも、この屋敷境を示す遺構は確認できなかったが、ＳＤ06が北側のラインとすると、塩ウリ作兵衛と庄屋太郎左衛門の屋敷地の北側のラインまでは４ｍあり、約２間の大きさと想定される。また、第１次面で検出したＳＤ04と平行しており、この溝が造られた17世紀後半以降、多少の移動はあるものの、屋敷境が存続していたと思われる。Ⅲ－２期に属する。

ＳＫ71

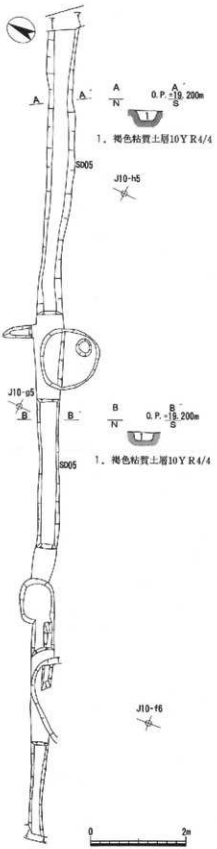
ＳＫ71は、調査区南側中程に位置する（表６）。平面形は円形を呈し、直径0.76m、深さ0.27mを測る。

第109図－７は、肥前青磁碗である。口径（推）12.8cmを測る。口縁部先がやや外反するタイプである。８は、唐津焼皿である。高台径3.8cmを測る。見込みに胎土目がみられ、内面から外面体部にかけて灰釉が掛けられている。７は、大橋康二氏の編年Ⅱ期、８は、Ⅰ期に属する。これらの遺物から、遺構の年代は、16世紀末～17世紀前半と考えられる。Ⅲ－１期に属する。

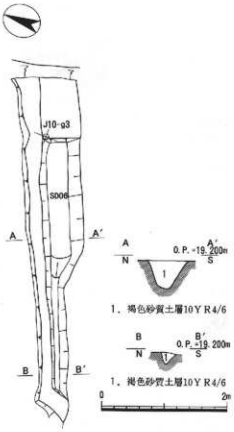
ＳＫ45

ＳＫ45は、西壁沿い中程に位置する（表６）。平面形は不整形を呈し、検出長1.1m、幅0.53m以上、深さ0.17mを測る。

第109図－９・11は、肥前磁器である。９は、染付碗である。高台径（推）４cmを測る。全体的に粗製品である。外面の文様は草花文で、高台畳付は露胎である。11は、青磁折縁鉢である。口径（推）36.7cm、器高7.7cm、高台径（推）19.8cmを測る。内面に陽刻唐草文がみられる。高台内には蛇ノ目状に釉ハギを施している。大橋康二氏の編年によると、９はⅣ期、11はⅡ－２期に属する。10は、ミニチュア土製品の水鉢形土製品である。口径6.3cm、器高2.7cm、高台径2.4cmを測る。胎土は、light yellow orange（10Y R8/3）を呈する。外型作り成形で、内面にはナデ調整が施され、口縁先部に糸切り痕がみられる。外面の型押しき



第107図　ＳＤ05遺構図



第108図　ＳＤ06遺構図

れた文様は、花唐草文である。外面体部に「○」の刻印がみられる。

出土遺物を概観すると、一部、11のような古いものもみられたが、9に代表される18世紀前半～18世紀後半と考えられる。Ⅲ－２ｂ期に属する。

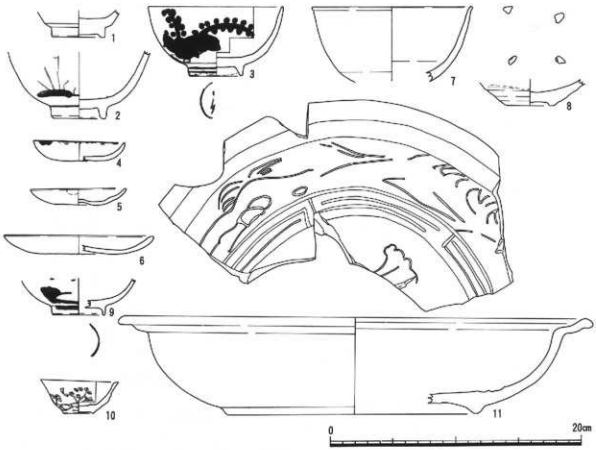
３．第１次面の遺構と遺物

第１次面は、大型の廃棄土壙や井戸などが中心であった。

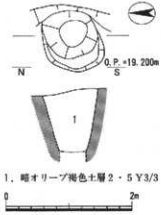
ＳＥ02

ＳＥ02は、調査区中程の西側に位置する（第110図・図版42）。平面形は不整形を呈し、長径0.89m、短径0.78m、深さ0.98m以上を測る。素掘りの井戸である。18世紀後半～19世紀後半の遺物が多量に出土した。

第113図－１は、京焼系陶器碗である。口径９㎝、器高5.7㎝、高台径３㎝を測る。半球型丸碗で、外面に鉄釉で草花文を描いている。高台は無釉である。２は、肥前磁器染付碗である。口径11.2㎝、器高6.4㎝、高台径

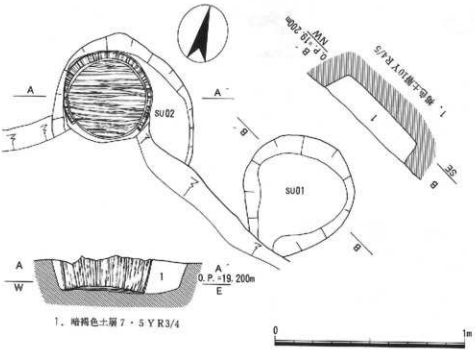


第109図　ＳＤ05（１・２）・ＳＤ06（３）・ＳＤ07（４）・ＳＤ08（５・６）・ＳＫ71（７・８）・ＳＫ45（９～11）出土遺物



第110図　ＳＥ02遺構図

4.6cmを測る。見込み部が平坦で、体部が直線的に広がるものである。文様は草花文で、高台畳付は露胎である。大橋康二氏の編年Ｖ期に属する。３は、京焼系陶器土瓶である。口径8.2cm、残存高8.1cmを測る。注口は鉄砲口形を呈する。注口・肩の双耳はハリツケである。外面体部から内面口縁部まで灰釉が掛けられている。外面の文様は、白泥によるイッチン掛けで、花唐草文様を描いている。４は、ミニチュア土製品の童児形土人形である。高さ７cmを測る。胎土は白茶色を呈する。合わせ型成形で、合わせ目をヘラケズリされ、底部には直径0.5cm、深さ2.5cmの穿孔がみられる。５は、瓦灯蓋である。器高23.5cm、上皿部径7.1cm、口径17.7cmを測る。器形は、ドーム状の休部で、窓を持ち下方が開口する。頂部に上皿部をもち、基部に数状の線刻文が施されている。成形は、粘土紐成形で、体部と肩部・頂部を別々に成形したものを合わせている。外面の肩部から体部にかけて、ヘラミガキ調整を施している。６は、丹波焼徳利である。器高（残）23.5cm、底径10.4cmを測る。体部が細長く、底部は突出している。外面全体に鉄釉が掛けられ、光沢があるタイプで



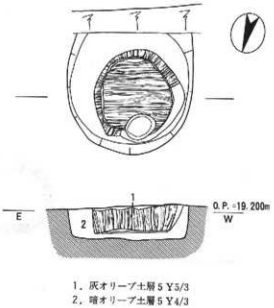
第111図　ＳＵ01・02遺構図

ある。

出土遺物を概観すると、18世紀後半～19世紀後半と考えられる。よって、Ⅲ－３期に属する遺構である。

ＳＵ02

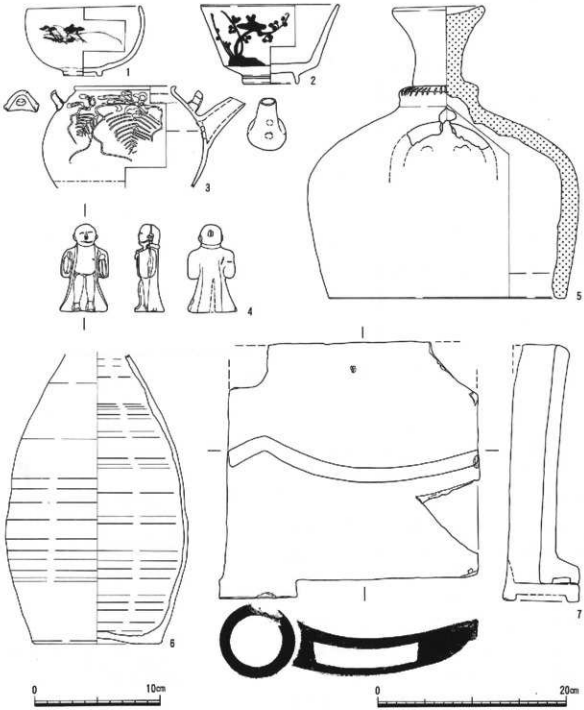
ＳＵ02は、調査区中程に位置する（第111図・図版42）。便槽桶遺構である。掘形の平面形は不整形を呈し、長径0.75m、短径0.6m、深さ0.18mを測る。この桶の東隣でも埋桶（ＳＵ01）が検出され、２基１組で使用されていたと思われる。また、これらの桶の南側でも埋桶（ＳＵ04）を検出しており、何回か造り替えられていたことが分かる。



第112図　ＳＵ03遺構図

第113図－７は埋土内出土の軒桟瓦である。軒丸瓦部の瓦当部径8.1cm、文様区径5.5cm、周縁幅1.3cm、瓦当部厚2.2cmを測る。軒平瓦部は、文様区幅1.9cm、上周縁幅1.3cm、瓦当部厚4.1cmを測る。調整は、軒丸瓦部は瓦当部周縁端はヘラケズリによって面取りされて、体部はナデ調整を施している。軒平瓦部は、瓦当面を丁寧にナデ調整し、周縁端部はヘラケズリによって面取りをしている。瓦当部裏面は軒平瓦部との接合部をナデ調整を施している。

出土遺物を概観すると、19世紀中頃～19世紀後半と考えられる。Ⅲ－３ｂ期に属する。

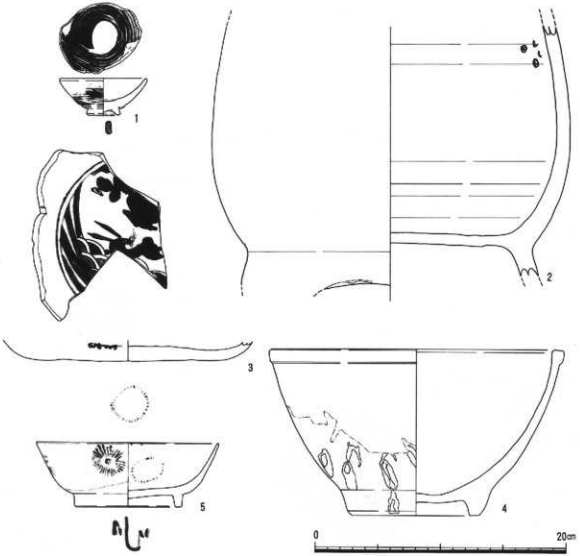


第113図　ＳＥ02（１～６）・ＳＵ02（７）出土遺物

ＳＵ03

ＳＵ03は、調査区西側に位置する（第112図・図版42）。便槽桶遺構である。掘形の平面形は不整形を呈し、長径0.65m、短径0.64m、深さ1.65mを測る。

第114図－１は、産地不明陶器小杯である。口径（推）6.8cm、器高３cm、高台径2.4cmを測る。胎土はオリーブ色を呈し、白色釉のハケ目文様を施し、その上に透明釉を掛けている。高台は無釉である。高台脇には長さ１cm、幅0.5cmの楕円形内に「□女」の刻印がみられる。２は、土師質土器風炉である。残存高20.7cmを測る。成形は、粘土円盤に粘土紐輪積み成形後、脚部を粘土紐輪積み成形している。外面体部はヘラミ



第114図　ＳＵ03（１～４）・第１次面精査時（５）出土遺物

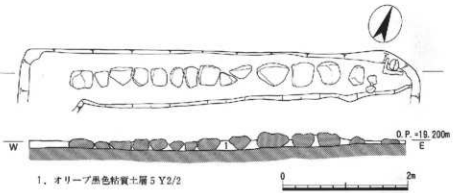
ガキ調整、外面脚部はヨコナデ調整を施している。また、内面体部は軽くヨコナデ調整、内面脚部はナデ調整を施している。脚部に半月状の切り込みがあり、体部上方には穿孔が３ヵ所みられる。３は、肥前磁器青磁染付皿である。底径10.6cmを測る。底部に蛇ノ目釉ハギがみられるが、高台はない。見込みには、兎花青海波文が描かれている。大橋康二氏の編年Ⅳ期に属する。４は、唐津系陶器鉢である。口径（推）23.6cm、器高13.3cm、高台径10.2cmを測る。高台の断面は台形で、口縁端部も台形を呈す。内面から外面上部にかけて白色釉を掛け、外面下部には鉄釉と掛け分けしている。高台部内外面は無釉である。

出土遺物を概観すると、18世紀後半～19世紀初頭と考えられる。Ⅲ－３ａ期に属する。

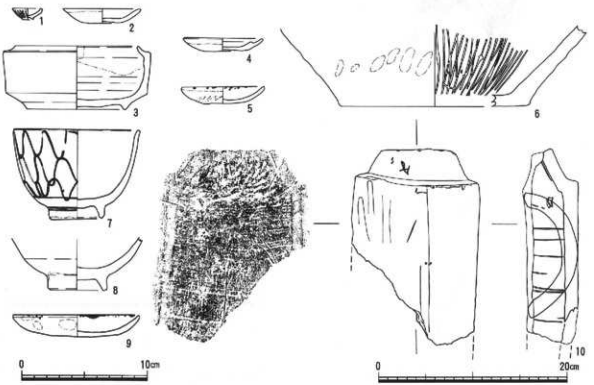
ＳＤ04

ＳＤ04は、調査区最北部に位置する（第115図・図版42）。屋敷境石積溝である。この溝の反対側は、北側調査区外にあると思われる。掘形の長さ６m以上、検出幅0.7m、深さ0.1mを測る。先にも述べたが、この溝の南隣で一時期古い溝ＳＤ06を検出しており、作り替える際、北側に移動したと思われる。

第116図－１は、肥前白磁紅皿である。口径2.4cm、器高0.9cm、高台径0.9cmを測る。型押し成形で、外面体部は無釉である。大橋康二氏の編年Ⅳ期に属する。２は、柿釉灯明皿である。口径（推）6.2cm、器高1.2



第115図　ＳＤ04遺構図



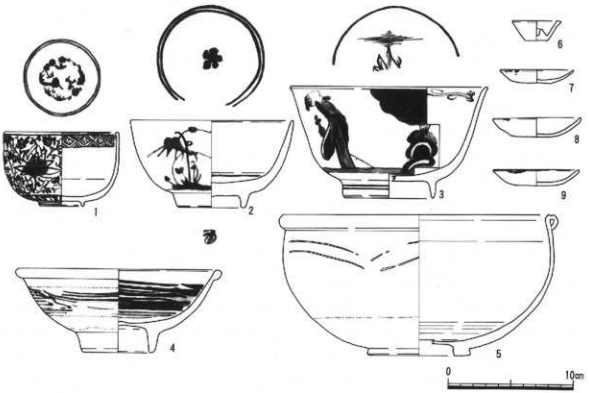
第116図　ＳＤ04掘形（１・２）・ＳＤ04埋土（３）・ＳＫ17（４～10）出土遺物

cmを測る。内面から体部上部に透明釉を掛けている。底部には右回転糸切り痕がみられる。３は、瀬戸・美濃焼蓋物である。口径（推）10.2cm、器高５cm、高台径（推）８cmを測る。高台脇より下部と口縁部を除いて、灰釉が掛けられている。

記載した１・２は、設置された石積みの掘形から出土し、遺物の年代観から、18世紀後半～19世紀初頭と考えられる。３は、溝の埋土から出土しており、遺物の年代観は、19世紀前半～19世紀中頃と思われる。このことから、ＳＤ04は、18世紀後半～19世紀初頭頃に造られ、19世紀中頃には埋め戻されたことがわかった。Ⅲ－３期に属する溝である。

ＳＫ17

ＳＫ17は、西壁端付近に位置する（表６）。平面形は不整形を呈し、長さ1.32m、幅0.45m、深さ0.71mを測る。



第117図　ＳＫ20出土遺物(1)

第116図－４・５は、柿釉灯明皿である。４は、見込みに受けがあるタイプである。口径6.2cm、器高1.1cmを測る。内面から外面口縁部にかけて、透明釉が施されている。外面底部には、右回転糸切り痕が見られる。５は、口径6.5cm、器高1.4cmを測る。内面から外面口縁部まで、透明釉が掛けられている。口縁部には灯芯痕がみられる。外面底部には右回転糸切り痕がみられる。６は、丹波焼擂鉢である。底径（推）15.2cmを測る。内面の擂目は８本単位である。外面体部にはユビオサエ痕がみられる。大平茂氏の分類（大平1992年）Ⅳ型式に属する。７は、肥前磁器染付碗である。口径（推）10cm、器高7.5cm、高台径４cmを測る。全体的に焼成が悪い。外面の文様は一重網目文で、高台畳付は露胎である。大橋康二氏の編年Ⅲ期に属する。８は、瀬野焼碗である。高台径4.7cmを測る。内面に透明釉、外面体部に青緑釉を施している。高台は無釉である。大橋康二氏の編年Ⅳ期に属する。９は、土師質土器皿である。口径7.4cm、器高1.6cmを測る。器厚は４mmとやや厚手で、器高は低く、口縁部は内湾するタイプである。色調はlight yellow orange（7.5Ｙ Ｒ 8/3）を呈する。10は、丸瓦である。全長（残）20.9cm、丸瓦部幅13.3cm、高さ5.5cm、厚さ1.6cm、玉縁部長3.5cm、玉縁部幅10.8cmを測る。丸瓦部凸面部は縦方向にヘラミガキ、凹面にはコビキＢ痕がみられ、凹面両側縁にはヘラケズリ調整が施されている。玉縁部凸面はナデ調整、玉縁部凹面には布袋紐痕がみられる。出土遺物を観察すると、17世紀中頃～17世紀後半のもの（６～10）が中心であるが、一部、18世紀中頃～18世紀後半の遺物（４）が出土している。この遺構の直下にあたる第２次面ＳＫ52の年代観から、古いものは下面の遺構からの混入の可能性がある。このことから、この遺構の年代観は、18世紀中頃～18世紀後半と考えられ、Ⅲ－２ｂ期に属する。

ＳＫ20

ＳＫ20は、調査区中央やや西側に位置する（表６）。平面形は不整形を呈し、検出長3.35m、幅2.36m、深さ0.6mを測る。

第117図－１～３は、肥前磁器碗である。１・２は、染付碗である。口径（推）９cm、器高６cm、高台径3.4cmを測る。腰張形碗で、器厚は薄く、文様も丁寧に描かれている。文様は、外面に花唐草文、内面口縁部に四方襷文、見込みには環状松竹梅文が描かれている。２は、口径12.9cm、器高７cm、高台径５cmを測る。器厚は厚く、呉須の発色も悪く、「くらわんか手」のものである。外面体部に草文に折れ松葉文、見込みにはコンニャク印判による五弁花が描かれている。３は、染付鉢である。口径（推）15.4cm、器高９cm、高台径７cmを測る。端反形鉢で、発色が悪いのか、体部が鼠色を呈する。外面に唐人立像文、内面口縁部に如意雲文、見込みには水草文が描かれている。１～３は、大橋康二氏の編年Ⅳ期に属する。４は、唐津系陶器刷毛目文鉢である。口径（推）15.8cm、器高6.7cm、高台径5.6cmを測る。高台内の削りは深く、畳付外周は面取りされている。体部は外側に反り、口縁部先は玉縁状である。胎土はdull reddish yellow（2.5ＹＲ7.5/6）を呈する。白色釉の刷毛目が横方向に施されている。見込みは、蛇ノ目状に釉ハギされている。５は、京・伊賀・信楽焼鉢である。口径（推）20.8cm、器高11.3cm、高台径８cmを測る。高台をもつタイプで、体部は張りがあり、口縁部先が折れ曲り玉縁状になっている。内面から外面体部にかけて灰釉が施されている。６は、土師質土器タンコロである。口径3.9cm、器高3.9cm、底径２cmを測る。胎土はlight orange（5ＹＲ7.5/8）を呈する。成形は、型押し成形である。７は、柿釉灯明皿である。口径5.8cm、器高1.1cmを測る。胎土は、light orange（5ＹＲ7.5/8）を呈する。内面から外面口縁部まで透明釉が掛けられているが、外面底部は無釉である。外面底部には右回転糸切り痕がみられる。８・９は、土師質土器皿である。８は、口径6.9cm、器高1.6cmを測る。器高は低く、口縁部は内湾する。調整は、内外面口縁部はヨコナデ調整、外面底部は指頭圧調整である。よって、川口宏海氏の分類（川口1997年ｂ）ＩＴ（伊丹郷町期）１型式Ａ類に属する。口縁部には１カ所灯芯痕がみられる。９は、口径6.8cm、器高1.3cmを測る。器形及び調整は８と同様であり、ＩＴ（伊丹郷町期）１型式Ａ類に属する。

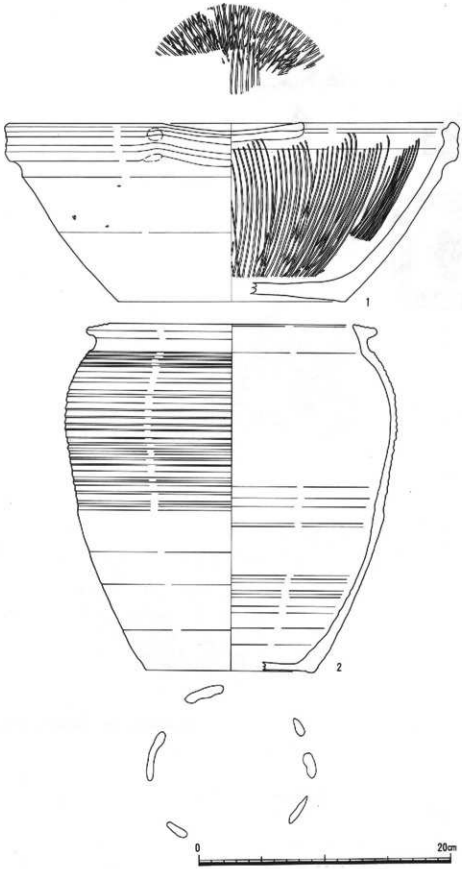
第118図－１は、堺焼擂鉢である。口径（推）35.8cm、器高14.3cm、底径18.3cmを測る。口縁部のつくりは、端部の内面に凸帯がみられ、外縁帯の張りはやや大きい。外面調整は、底部際から口縁部外縁帯直下まで、回転ヘラケズリを施している。内面の擂目は９本単位である。白神典之氏の分類（白神1990年）Ⅱ類に属する。２は、丹波焼甕である。口径19.6cm、器高27.9cm、底径13.4cmを測る。口縁部は外傾し、体部上部には沈線を施し、口縁部上面には３条の沈線が巡る。また、外面体部に光沢のある栗皮釉を掛けられている。

出土遺物を概観すると、18世紀前半～18世紀後半と考えられる。Ⅲ－２ｂ期に属する遺構である。

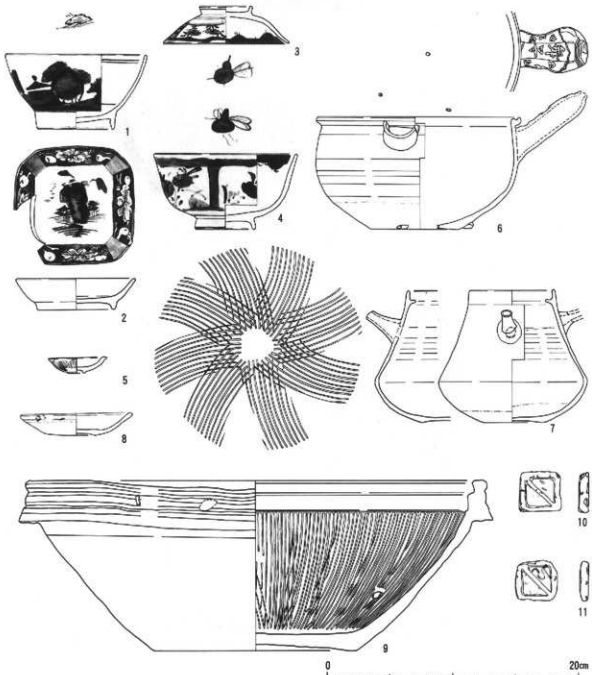
ＳＫ03

ＳＫ03は、調査区南東隅に位置する（表６）。平面形は不整形を呈し、検出長1.9m、幅1.2m、深さ0.43mを測る。

第119図－１～５は、肥前磁器である。１は、広東型染付碗である。口径11.4cm、器高６cm、高台径6.2cmを測る。器厚は薄く、呉須の発色も良好である。外面体部に楼閣山水文、見込みに岩文が描かれている。２は、染付角皿である。口径（推）9.3cm、器高2.6cm、高台径６cmを測る。内面に楼閣山水文が描かれ、内面口縁部には瓜文がみられる。高台畳付は露胎である。３は、染付蓋である。口径10cm、器高2.1cm、つまみ径4.2cmを測る。肩に張りがあり、つまみ部がＶ字状に開くタイプのものである。文様は、外面は蓮弁形の区画割に菊文・花文、内面口縁部には流雲文、内面中心部に宝文が描かれている。つまみ端部は露胎である。４、染付碗である。３の蓋に伴うものである。口径11.4cm、器高6.1cm、高台径4.8cmを測る。器形は腰に張りがあり、高台がハ字状に開くタイプのものである。文様も蓋と同様である。高台畳付は露胎である。５は、白磁紅皿である。口径５cm、器高1.3cm、高台径1.4cmを測る。型押し成形であるが、粗雑な器形である。内

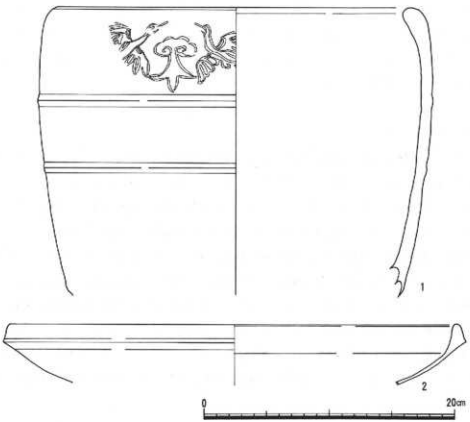


第118図　ＳＫ20出土遺物(2)



第119図　ＳＫ03出土遺物(1)

面には透明釉が掛けられているが、外面体部より下部は無釉である。１～５は、大橋康二氏の編年Ｖ期に属する。６は、舞子焼行平である。口径（推）16.2cm、器高９cm、底径７cmを測る。舞子焼は、兵庫県明石市で寛政年間（1789～1801）に京都の粟田焼に習ったものを中心に作り、舞子の浜でこれを売っていたので、その名が付いた。一時廃絶したが、天保年間（1830～1844）に再興した。茶陶器類などを焼いていたが、新たに土瓶や鍋などの日用品を作るようになったといわれている（加藤1972年）。出土した土鍋は、底部に３足の脚をもち、内面と外面体部中程までに灰釉を掛けている。口縁部と外面底部は無釉である。把手は、合



第120図　ＳＫ03出土遺物(2)

わせ型成形で、上面に「舞子」の銘がみられる。また、外面底部には煤が付着している。７は、京・伊賀・信楽焼急須である。口径6.6cm、器高10.6cm、底径4.5cmを測る。隠元形を呈し、注口と把手はハリツケである。内面体部と外面体部に灰釉が掛けられている。８は、柿釉灯明皿である。口径8.7cm、器高1.8cmを測る。内面から外面口縁部にかけて透明釉が施されている。口縁部には煤が付着している。また、外面底部に右回転糸切り痕がみられる。９は、明石焼擂鉢である。口径（推）35.3cm、器高13.6cm、底径16.2cmを測る。口縁部外縁帯は外へ張りだし、上部は直立気味である。外面の調整は、底部際から口縁部外縁帯直下まで回転ヘラケズリがみられる。内面体部の擂目は10本単位であり、見込みの擂目も10本単位で放射状に施している。白神典之氏の分類Ⅱ類に属する。10・11は、ミニチュア土製品の面子である。10は、長さ3.3cm、厚さ0.8cmを測る。11は、長さ3.2cm、厚さ0.7cmを測る。10・11ともに、型押し成形である。また、どちらにも、墨書がみられる。

第120図－１は、三田青磁鉢である。口径（推）26.8cmを測る。外面の文様は、鶴文と松文が印刻によって施されている。２は、土師質土器焙烙である。口径（推）36cmを測る。胎土は、pale reddish yellow (2.5Y8.5/3) を呈する。調整は、内面体部はナデ調整、外面口縁部はヨコナデ調整、外面体部は未調整である。難波洋三氏の分類（難波1992年）Ｇ類に属する。

出土遺物を概観すると、18世紀末～19世紀前半と考えられる。よって、Ⅲ－３期に属する。

第１次面精査時出土遺物

第114図－５は、ベトナム産花文印版手碗である。口径14.6cm、器高5.2cm、高台径8.5cmを測る。器形は、腰に張りをもち、直線的に立ち上がる。見込みは広く平担につくり、高台径も大きい。高台内の削りのロクロ回転は、右回りである。また、内面から高台脇まで施釉が掛けられ、見込みは蛇ノ目状に釉ハギされている。文様は、鉄絵でスタンプによって菊文状の花文を外面に、内面にはいわゆるお日様マーク状の丸文が描かれている。高台内には墨書がみられる。

４．ま と め

Ｂ－11－１区では、建物関係の遺構は検出されず、溝や土壙が中心であった。それは、まわりの調査区でも同じ傾向で、表道路や路地から奥まったところに位置しているためと思われる。そのなかで、多くの溝を検出した。第２次面ＳＤ08は浅く広い溝である。そのＳＤ08の西側に、現行道路（万町通）に沿って造られたＳＤ07を検出した。この溝は、有岡城期に造られており、有岡城期には町割りが施行されていたことが分かった。この様な溝は、猪名野神社参道より東側の調査区（Ｄ－２区ＳＤ401・Ｄ－４区ＳＤ301・Ｄ－６区ＳＤ301）で検出した（藤井直正他『有岡城跡・伊丹郷町Ⅴ』1997年）。現行道路に平行して設けられること、有岡城期に廃絶していることなど共通していた。また、『元禄七年（1694）柳沢吉保領伊丹郷町絵図』（第159図）にみられる屋敷境は、北側と南側のラインは一致し、現代まで続くものであった。しかし、調査区中央で検出した第２次面ＳＤ05は、元禄七年の絵図よりは前になくなっており、17世紀後半に屋敷境が替わったことが分かった。その他には、ベトナム製陶器や舞子焼の製品が出土し、遺物の方でも興味深いものがみられた。

第10節　第86次調査Ｂ－11－２区

Ｂ－11－２区は、猪名野神社参道西側に位置し、東隣はＢ－１－２区、西隣にはＢ－11－１区、南側はＢ－７区にそれぞれ接している。『元禄七年（1694）柳沢吉保領伊丹郷町絵図』(第159図）によると、庄屋太郎左衛門の屋敷地に相当する。また、『天保十五（1844）年伊丹郷町分間絵図』(第159図）では、「北少路村」に当たることが分かる。調査面積は77.3㎡である。

１．基本層序

遺構面は２面である。地山面は東端でＯ．Ｐ．＝＋19.100m、西端ではＯ．Ｐ．＝＋19.000mを測り、東に接するＢ－１－２区でもＯ．Ｐ．＝＋19.000mを測り、西及び東側に向かって傾斜している。このことから、南へ行くほど土層が厚く堆積している。北壁土層断面図（第121図）を観察すると、地山直上に灰黄色砂質土層（第121図第５層現地表面より40㎝下)、その上に、第１次遺構面（第121図第11層現地表面より11㎝下）が堆積していた。北壁土層断面図にみられる第３層・４層は、第１次面で検出したＳＤ04の掘形層である。

２．第２次面の遺構と遺物

第２次面は、調査区北壁沿いでは、屋敷境と思われる柵列（ＳＡ01）や溝（ＳＤ08）を検出した。その他に、17世紀代の遺構を南側で確認した。

ＳＡ01

ＳＡ01は、北壁沿いに位置する（第122図・図版47)。柱穴の平面形は円形を呈し、平均直径0.4m、深さ0.25mを測る。柱間は１～1.5m間隔で東西に並んでいる。遺物は出土しなかったが、埋土が一様にオリーブ褐色砂質土層を呈する。この土層は、まわりの調査結果から、16世紀末～17世紀後半のものと分かっている。また、上面で検出したＳＤ06の年代観と合わせて考えると、16世紀末～17世紀後半と思われる。Ⅲ－１ｂ期～Ⅲ－２ａ期に属する。

ＳＤ08

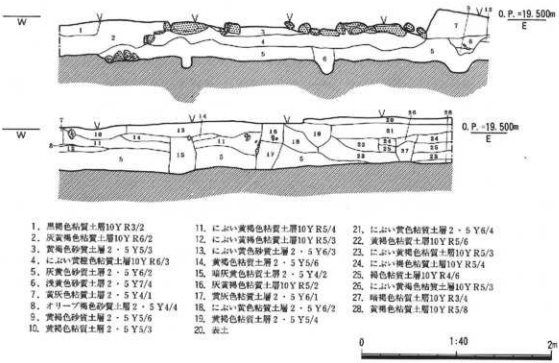
ＳＤ08は、ＳＡ01の南隣に位置する（表６)。東西に伸びる溝である。検出長4.06m、幅0.6m、深さ0.33mを測る。溝の断面形はＵ字型を呈し、埋土は１層である。この溝は西へ続いており、西隣のＢ－11－１区第２次面ＳＤ06がそれにあたる。Ｂ－11－１区ＳＤ06は、掘形からの出土遺物で、17世紀末～18世紀前半に造られたと考えられ、ＳＤ08の掘形から出土した遺物は、小片で図化しなかったが、大橋康二氏の編年（大橋1988年）Ⅳ期に属する肥前磁器染付碗がみられた。よって、ＳＤ06と同様に、17世紀末～18世紀前半と思われ、Ⅲ－２期に属する。

また、『元禄七年（1694）柳沢吉保領伊丹郷町絵図』(第159図）にみられる、庄屋太郎左衛門の屋敷地の北側ラインに当たるのではないかと思われる。さらに、Ｂ－11－２区第１次面ＳＤ06（石積屋敷境溝）と平行しており、この溝が造られた17世紀後半以降、多少の移動があるものの、この辺りに屋敷境が存在し続けていることがわかった。

ＳＫ16

ＳＫ16は、調査区南東隅に位置する（表６)。平面形は長方形を呈し、検出長2.27m、幅1.05m、深さ0.35mを測る。埋土は１層で、褐色砂質土層10ＹＲ4/4が堆積していた。

第123図－１は、唐津焼天目茶碗である。高台径4.2cmを測る。器形は、高台内の削りは浅く、高台は高く



第121図　B－11－２区北壁土層図

造られ、高台脇は竹節高台に近いが、突出度が弱い。高台は無釉で、内面から外面体部にかけて灰釉が施されている。また、小片で図化しなかったが口縁部が出土している。それを観察すると、口縁部はやや直立し、端部はゆるやかに外反していた。大橋康二氏の編年Ⅱ－１期に属する。その他には、唐津焼砂目積皿が出土していた。

出土遺物から概観すると、17世紀中頃と考えられる。Ⅲ－１ｂ期に属する。

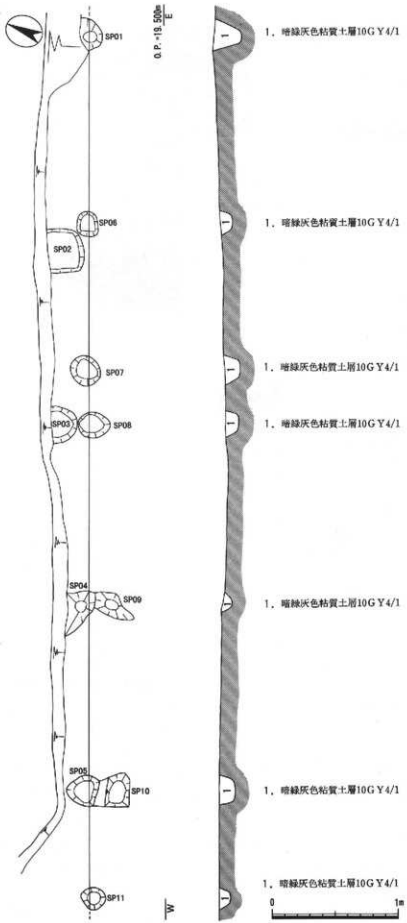
ＳＫ17

ＳＫ17は、調査区南西隅に位置する（表６）。平面形は長方形を呈し、検出長1.96m、幅1.54m、深さ0.42mを測る。埋土は１層で、褐色砂質土層10Ｙ R4/4が堆積していた。この埋土は、この遺構の東側で検出した同時期遺構ＳＫ16と共通する土質であった。

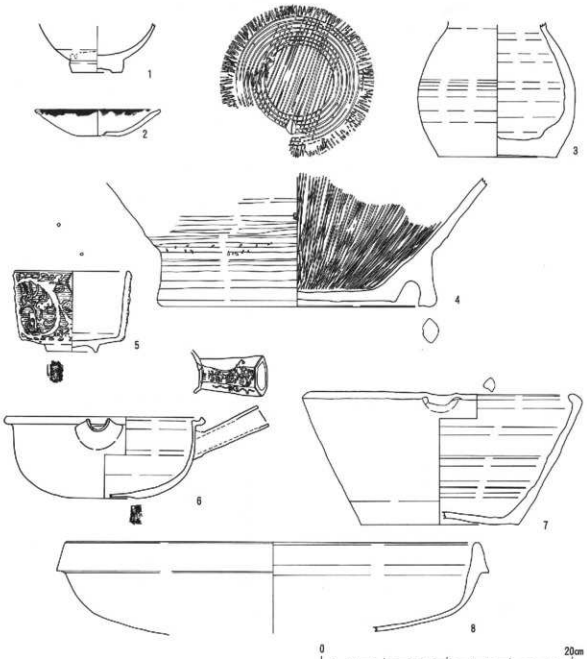
第123図－２は、土師質土器皿である。口径（推）10cm、器高2.1cmを測る。胎土は浅黄橙色（10Ｙ R 8/3）を呈する。器形は、底部と体部の境が明瞭に屈曲するタイプである。調整は、手づくね成形で、内面はヌキナデ調整、外面は指頭圧調整である。この遺物の他には、小片ではあったが、大平茂氏の編年（大平1992年）Ⅲ型式に属する丹波焼擂鉢や大橋康二氏の編年Ⅱ－２期に属する染付碗などが出土しており、このことから、17世紀中頃の年代観と思われる。Ⅲ－１ｂ期に属する。

３．第１次面の遺構と遺物

第１次面でも建物遺構は検出しなかった。調査区中央より北側では大型の廃棄土壙が多くみられ、南側では畑畝痕を検出し、その他にも17世紀後半～19世紀代の遺構がみられた。また、昭和二十三年の伊丹郷町の航空写真（図版１）では、ここには建物が建っていなかったが、昭和三十六年の撮影時（図版１）には、調査区北側半分に建物がみられることから、その時期までには既存建物が建てられたと思われる。南側半分はＬ字型の路地の北部に当たる。



第122図　ＳＡ01遺構図



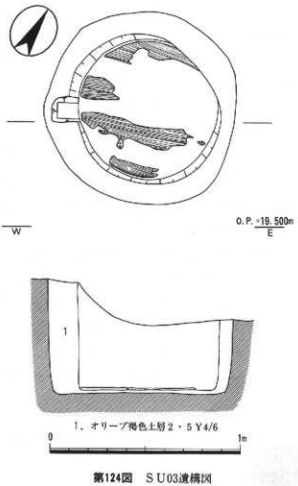
第123図　ＳＫ16（１）・ＳＫ17（２）・ＳＤ06（３・４）・ＳＫ05（５～８）出土遺物

ＳＵ03

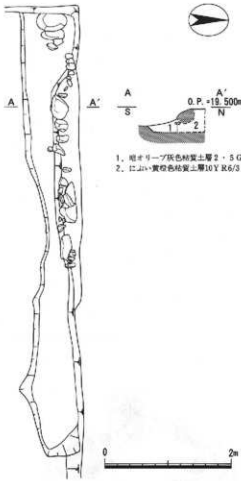
ＳＵ03は、調査区東壁沿いの中程に位置する（第124図・図版47）。便槽桶遺構である。掘形の平面形は円形を呈し、直径1.02m、深さ0.58m、木桶の直径0.87m、深さ0.55mを測る。残存状態は悪く、木桶体部は残っていなかった。底部は少しではあったが確認できた。また、遺物はみられず、畑の畝遺構（ＳＸ04）を切って造られていた。このことから畑の畝遺構（ＳＸ04）の埋め戻された年代が、17世紀後半以降と考えられているため、ＳＵ03は17世紀後半以降ということになる。Ⅲ－２期に属する。

ＳＤ06・ＳＤ09

ＳＤ06は、北壁沿いに位置する（第125図・図版47）。東西に延びる屋敷境石積溝である。検出長7.14m、幅0.86m、深さ0.19mを測る。この溝の北側端は調査区外にあり、西側Ｂ－11－１区ＳＤ04はこの溝の西続



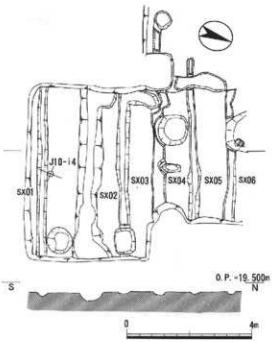
第124図　ＳＵ03遺構図



第125図　ＳＤ06遺構図

きである。土層断面を観察すると、30cm程度の花崗岩を使用し、一段ないし二段石を積み上げていた。掘形の埋土は２層である。

第123図－３～４は掘形出土の遺物である。３は、備前焼壺である。底径（推）5.4cmを測る。胎土は27mm位の礫を含み、明赤褐色（5YR5/8）を呈する。外面体部には釉土が施されている。４は、丹波焼擂鉢である。高台径21.6cmを測る。体部下にハリツケ高台をもつものである。外面調整は、帯状の粘土を体部にハリツケて高台を作り、ハリツケる際、体部に櫛目を施している。その後、底部際から体部にかけて、回転ナデ調整をおこなっている。内面の擂目は10本単位である。大平茂氏の編年Ⅸ型式に属する。掘形からはその他に、大橋康二氏の編年Ⅳ期に属する肥前磁器染付碗や唐津系陶器刷毛目碗などが出土しており、18世紀前半～18世紀中頃と考えられる。ところが、ＳＤ06の続きであるＢ－11－１区ＳＤ04の掘形の出土遺物の年代観は、18世紀後半～19世紀初頭と考えられる。このことから、上記のＳＤ06の掘形出土品（18世紀前半～18世紀中頃）は、ＳＤ06が石積溝となる以前の素掘溝の年代を示している可能性がある。したがって第２次面ＳＤ08の後、18世紀前半～中頃に第二期の素掘溝（ＳＤ09）が造られ、さらに18世紀後半～19世紀初頭に石積溝に造り替えられたと考えられる。なお、ＳＤ09の大きさであるが、土層断面図を観察しても（第125図）、はっきり分からなかったが、おそらく、ＳＤ06とほぼ同規模だったと思われる。第二期の素掘溝ＳＤ09はⅢ－２ｂ期、石積溝ＳＤ06はⅢ－３期である。

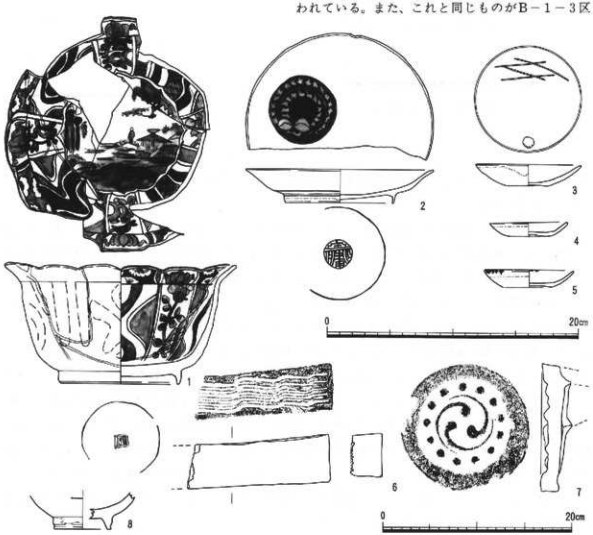


第126図　ＳＸ01・02・03・04・05・06遺構図

ＳＫ05

ＳＫ05は、調査区中程に位置する（表６）。平面形は円形を呈し、直径0.96m、深さ0.51mを測る。畑の畝遺構を切ってつくられた廃棄土壙である。

第123図－５は、岩倉焼陶器筒型碗である。口径（推）8.8cm、器高6.5cm、高台径3.8cmを測る。胎土は淡黄色（5Y8/3）を呈する。外面体部に呉須・緑色釉・白色釉・黄色釉で、孔雀羽根文が描かれている。内面には白色釉が掛けられ、見込みには目痕が２ヵ所みられる。器形は、器厚は薄く、高台の造りも丁寧で、高台内には縦1.2cm、横0.7cmの「岩倉山（いわくらざん）」の刻印がみられる。「岩倉山」は、京都粟田口焼の窯元の１つで、屋号筋屋。宝暦年間（1688～1704年）に岩倉山吉兵衛が、三条東町に陶窯を構え、色絵陶器を主に焼いており、その製品に「岩倉山」・「岩倉」の印を押したといわれている。また、これと同じものがＢ－１－３区



第127図　ＳＫ12（１～７）・ＳＸ05（８）出土遺物

（図版８－20）でも出土し、伝世品ではあるが、大阪府所蔵品の中に、同型で鋳地の同文様のものがある。（大阪府教育委員会1991年）６は、京焼系片口行平である。口径（推）15.5cm、器高6.6cm、底径（推）5.2cmを測る。全体に光沢のある栗皮色釉が施され、見込みには目痕が２ヵ所みられる。把手は、合わせ型成形で、上面には唐草文を陽刻していた。また、外面底部に縦1.2cm、横0.3cmの「音羽」の刻印がみられた。従って、これは京都音羽焼の可能性がある。音羽焼は、京焼の１つである。天正年間（1573～1592）か文禄年間（1592～1598）頃に、音六・音羽屋九七らが始め、享保年間（1716～1736）に五条坂（東山区）に移して、五条清水焼といったという上絵付による色絵陶器を中心に生産したとされる（加藤1972年）。７は、丹波焼片口鉢である。口径（推）15.5cm、器高12.6cm、底径（推）10.7cmを測る。内面全体に灰釉が掛けられ、外面は無釉である。内面には陶片の目痕が２ヵ所みられた。８は、土師質土器焙烙である。口径（推）22.8cmを測る。胎土は橙色（5Y7/6）を呈する。口縁部は直立に伸び、口縁部外縁帯が外へ張り出すタイプである。調整は、口縁部内外面はヨコナデ調整、内面体部は回転ナデ調整、外面体部は未調整である。難波洋三氏の分類（難波1992年）Ｇ類に属する。

出土遺物を概観すると、18世紀後半～19世紀初頭と考えられる。Ⅲ－３ａ期に属する。

ＳＫ12

ＳＫ12は、調査区北東部隅に位置する（表６）。平面形は不整形を呈し、長さ2.68m、幅2.56m、深さ0.71mを測る。18世紀後半～19世紀前半の遺物が多量に出土し、そのなかで、柿釉灯明皿が10個体以上出土した。

第127図－１・２は、肥前磁器である。１は、折縁輪花染付鉢である。口径（推）18.2cm、器高9.7cm、高台径9.2cmを測る。口縁部に口錆が施されている。文様は、見込みに楼閣山水文、内面体部には草花文と捻文、それに捻文内に七宝文が描かれている。内面口縁部の文様は梅文と草文である。また、体部には焼継ぎ痕がみられる。２は、染付皿である。口径（推）15cm、器高2.7cm、高台径（推）4.8cmを測る。器厚は薄く、呉須の発色も良好である。内面に丸窓文に藤文が描かれ、高台内には一重圏線内に「誉」の銘がみられる。１・２共に、大橋康二氏の編年Ⅳ期に属する。３は、伊賀・信楽焼灯明皿である。口径8.4cm、器高1.7cm、底径3.4cmを測る。外面底部以外に灰釉を掛けている。内面には楕目で文様を施し、直径１cm位の円形の浮文をハリツケている。４は、柿釉灯明受皿である。口径6.2cm、器高1.1cm、底径３cmを測る。胎土は橙色（5YR7/6）を呈し、外面口縁部から内面にかけて透明釉を施している。外面底部には右回転糸切り痕がみられる。５は、柿釉灯明皿である。口径7.2cm、器高1.4cm、底径3.4cmを測る。胎土はにぶい橙色（5YR6/4）を呈し、外面口縁部から内面にかけて透明釉が施されている。外面底部には右回転糸切り痕がみられる。６は、回り棟瓦である。残存長15.3cm、高さ5.3cm、厚さ3.1cmを測る。表面に５本単位の櫛目によって波状に文様を施している。調整は、上下部はヨコナデ調整、裏面は未調整、左右にはナデ調整がみられる。７は、軒丸瓦である。瓦当部径13.6cm、文様区径9.3cm、周縁幅1.9cm、瓦当部高1.8cmを測る。瓦当文様は、内区に左巻き三ツ巴文、外区に連珠文を配す。連珠数は13個を数える。調整は、周縁部表面は周縁に沿ってナデ調整、裏面にもナデ調整を施している。

出土遺物を概観すると、18世紀後半～19世紀初頭と考えられ、Ⅲ－３ａ期に属する遺構である。

ＳＸ01～06

ＳＸ01～06は、調査区中央より南側で検出した（第126図・図版47）。それぞれ平均で検出長5.2m、幅0.6mを測る。畑の畝遺構である。この畝を覆っていた包含層は17世紀後半～18世紀初頭の遺物を含んでおり、その頃までは畑地だったと思われる。このような畑の畝遺構は、第97次調査Ｄ－６区（ＳＸ01～04）などで

検出されている。『延宝五年（1677）伊丹郷町地味委細絵図』(第159図）には、屋敷の裏側に畑が描かれており、裏庭を畑として使用していたことが分かる。しかし、検出した畑の畝遺構は、全部、17世紀後半以降は埋め戻されている。これは、裏地が庭や建物敷地として、利用されるようになったためだと考えられる。ここでも、そのような状況が読みとれる。

第127図－８は畝間溝より出土した、肥前磁器染付碗である。高台径（推）4.8cmを測る。高台はＵ字形を呈し、無釉である。高台内の削りは深く、荒っぽい作りである。底部しか残存していないが、体部には文様がみられる。大橋康二氏の編年Ⅱ－２期に属する。その他には、大橋康二氏の編年Ⅲ・Ⅳ期に属する染付碗が出土していた。よって、Ⅲ－１ｂ期～Ⅲ－２ａ期に属する遺構である。

４．ま と め

この調査区では、上面が攪乱されていたため江戸時代後半以降の面を十分に把握できなかったが、16世紀末～19世紀後半の遺構を確認した。検出した遺構は、時代を通して溝や廃棄土壙が中心であった。このことから、既存建物が建てられる前までは裏庭空間だったと思われる。それは、まわりの調査区でも同じ状況であった。そのなかで、畑の畝遺構は、『延宝五年（1677）伊丹郷町地味委細絵図』(第159図）にみられるように、建物の裏側を畑地していたことを裏付けるものである。出土遺物でも、岩倉焼や音羽焼の製品が出土するなど興味深いものがみられた。

第11節　第86次調査Ｂ－12区

Ｂ－12区は『天保十五年（1884）伊丹郷町分間絵図』(第159図）によると北少路村の範囲にあり、猪名野神社参道西側に面した調査区である。『寛文九年（1670）伊丹郷町絵図』(第159図）を見るとこの位置には建物が描かれており、寛文年間には確実に建物が建っていたことが伺える。『元禄七年（1694）柳沢吉保領伊丹郷町絵図』(第159図）では、屋敷主は「源左衛門」、住人は「油売りの吉兵衛」と記されている屋敷地に相当する。元禄以降は屋敷地の規模を殆ど変化する事なく、面々と建物が移り変わって行く。

この調査区は基本的に、調査区東側は猪名野神社参道より西側に面して建物があり、西側は裏庭部分にあたっていたと考えられる。調査面積は284m²である。

1．基本層序

遺構面は２面検出した。地山面は、O.P.＝＋19.000mを測る。北壁・東壁土層図（第128図）を観察すると、第２次面は地山面（現地表面より0.4～0.5m下）で、これに直接掘りこまれた、16世紀前半～17世紀中頃の遺構が検出される面である。調査区南西部からは、三和土（第128図第72層、現地表面より0.5m下）が狭い範囲ではあるが観察される。この第２次面の直上に整地層（第128図第41層、現地表面より0.3m下）があり、さらにその上層が第１次面を構成する基盤層となる。

第１次面（第128図第41層などの上面、現地表面より0.2～0.3m下）は17世紀後半～18世紀初頭を中心とする面であるが、上層が撹乱されていた為、ここから調査を開始した。従って、18世紀前半以降、近代までの遺物を含む遺構も同時に数多く検出された。

このように検出面は２面であるが、第１次面より上層に、部分的に三和土が２層観察される（第128図20・50層、21・73層)。これらの三和土は、現地表面より0.1m下と0.2m下になる。この三和土面の存在などから、第１次面の上層にはさらに２時期の生活面があったことがわかる。

2．第２次面の遺構と遺物

第２次面（地山直上面）は、上記のように16世紀前半～17世紀中頃の面である。調査区東側（猪名野神社参道側）からは、16世紀前半～中頃・17世紀前半～中頃の掘立柱建物に伴うと思われる柱穴遺構を検出した。

この面では遺構の重複が激しかったこともあり、本来上面の第１次面でとらえるべき遺構が、多く検出された。その中でも、17世紀後半～18世紀初頭の時期の焼土処理土壙が調査区の各所で検出された（ＳＫ132・107など)。火災面自体は検出されなかったが、この地区でも他地区と同様に17世紀後半～18世紀初頭（元禄十二年（1699)・十五年（1702)、享保十四年（1729)）の火災の被害を受けていることを確認することができた。

ＳＰ12

ＳＰ12（表６）は、調査区東側中央に位置する柱穴遺構である。平面形は楕円形を呈し、長径1.2m、短径0.5m、深さ0.5mを測る。埋土は１層で、褐色粘質土層（10ＹＲ4/4）である。第４節第63次調査Ｂ－４区第４次面で検出したＳＢ04（第24図・図版11）に伴う柱穴の一部であると考えられる。このＳＰ12を含めると、東西桁行約４m以上、南北梁行約５m以上、の調査区東側を間口とする堀立柱建物を復元することができた。この建物については、Ｂ－４区の報告で詳しく記されているので、ここでは割愛する。今回の調査では、この時期の遺物を伴った遺構はこの遺構のみであったため、建物周辺の詳しい様相などについては不

明である。

第131図－1は、丹波焼擂鉢である。胎土は黄褐色（10YR8/6）で、0.1cm程度の礫を多く含んでいる。片口を有し、擂目はヘラ描きによる一本引きで、下から上へ口縁上部から約3.0cmを余して引かれている。口縁部の断面形は、なだらかな三角形をなす。外面体部は、指頭圧調整後にナデ調整されている。岡崎正雄氏の分類（岡崎1989年）3類に属す。同一建物として復元したB－4区SB04（第24図）の柱穴SP214からも、岡崎正雄氏の分類3類に属する丹波焼擂鉢（図版19－6）が出土している。2は、備前焼擂鉢である。胎土は青灰色（3PB7.5/1）で、0.1cm程度の礫を含んでいる。体部外縁帯直下まで回転ヘラケズリを施している。間壁忠彦氏の編年（間壁1966年）Ⅳ期に属する。

出土遺物から概観すると、16世紀前半～中頃の遺構と考えられ、Ⅰ期の伊丹城期に属する。

SV01

SV01（第129図・図版50）は、調査区東側中央に位置する竈と思われる遺構である。平面形は円形を呈し、直径0.6m、深さ0.2mを測る。第2次面検出時にはこの遺構の上にSK91があり、存在が確認されていなかったが、SK91を完掘した際に検出した遺構である。SK91に切られて遺構の残存状態は悪く、燃焼室底部のみ検出した。炊き口は、西側であると考えられる。埋土は1層で、黒褐色粘質土層（7.5YR3/2）を呈し、炭片が出土している。

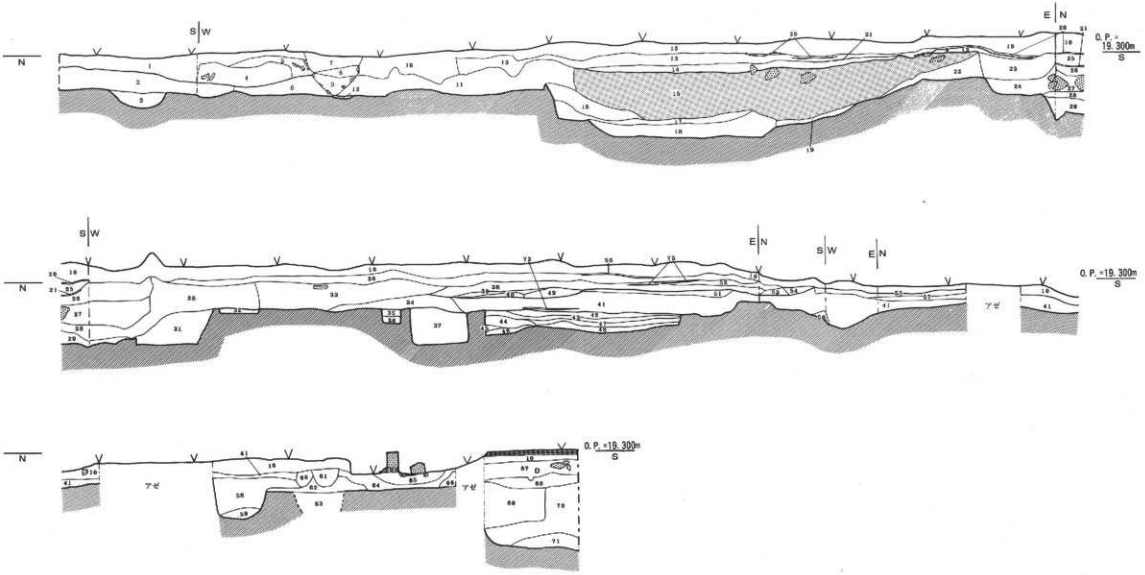
第131図－3は、土師質土器灯明皿である。口径（推）10.2cm、器高2.0cmを測る。胎土は黒褐色（10YR2/3）を呈する。手づくね成形で、外面口縁部直下から内面体部にかけて横ナデ調整。見込み部分は一定方向のナデ調整。底部は手掌圧調整が施されている。口縁部には灯芯痕が残る。

この他には、京焼風陶器碗・古寛永通寶が出土していること、直上のSK91から18世紀中頃の時期の物と思われる土師質土器焙烙が出土していることなどから、17世紀後半～18世紀初頭の遺構と考えられ、Ⅲ－2a期に属する。この時期の建物については、柱穴や礎石などを確認することができなかったが、この竈SV01や、後述する井戸SE03などの存在から、この周辺に調査区東側を間口とする建物が建っていたと考えられる。

SE03

SE03（第130図・図版50）は、調査区中央に位置する素掘りの井戸である。平面形は円形を呈し、直径0.8m、深さ0.9m以上を測る。湧水層については、深く掘り下げることができなかったため不明である。川口宏海氏の井戸の分類（川口1999年）A1a型式に属すると思われる。この遺構からは、良い一括の資料を得ることができ、計測を行った（第5章第2節参照）。

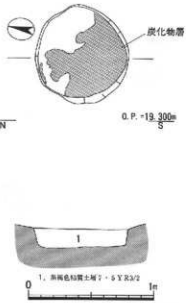
第131図－4・6は、京焼風陶器である。4は碗で、口径9.4cm、器高5.7cm、高台径5.0cmを測る。外面体部には呉須で棲閑山水文が描かれ、内面から外面高台付近まで透明釉を施している。高台は無釉で、内面の削りは浅く、外面体部際の方が高い位置にくる。高台内には、縦0.7cm、横0.8cmの楷書による「新」の銘が見られる。6は鉢で、口径（推）21.1cm、器高8.7cm、高台径7.8cmを測る。口縁部は屈曲し、立ち上がる。内面体部は呉須で蔓草文が描かれ、内面から外面腰折部まで透明釉が施される。高台は無釉で、高台際とほぼ同じ高さまで削られる。高台内には、縦0.7cm、横0.6cmの篆書による銘が見られる。5は肥前磁器染付香炉である。口径7.0cm、器高8.2cm、高台径4.6cmを測る。外面体部には菊文、唐草文が描かれるが、ひどく滲んでいる。内面と高台畳付は露胎で、畳付には離れ砂が付着している。4～6は、大橋康二氏の編年（大橋1989年）Ⅲ期に属する。7は、土師質土器灯明皿である。口径11.4cm、器高1.6cmを測る。胎土はにぶい橙色（7.5YR7/3）を呈する。手づくね成形で、口縁端部内面は横ナデ調整、見込みは不定方向のナデ調整、



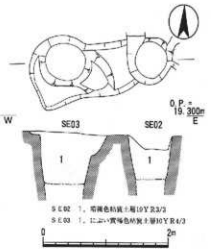
1. 表土
2. オリーブ褐色粘質土層2・5Y4/4
3. 黄褐色粘質土層2・5Y5/4
4. うすい黄色砂質土層5Y8/3
5. オリーブ色砂質土層5Y6/6
6. 明黄色砂質土層7・5YR5/6
7. うすい黄色砂質土層5Y8/3
8. 明黄色砂質土層2・5Y6/6
9. 明黄灰色砂質土層5B7/1
10. 表土
11. オリーブ褐色粘質土層2・5Y4/6
12. 黄褐色粘質土層10YR5/8
13. 黄褐色砂質土層2・5Y4/4
14. にぶい黄褐色粘質土層10YR5/4
15. にぶい黄褐色砂質土層10YR4/3
(瓦・焼土・炭化物を多量に含む)
16. オリーブ褐色粘質土層2・5Y4/3
17. 赤褐色粘質土層5YR5/8
18. 灰オリーブ粘質土層5Y5/3
19. オリーブ褐色砂質土層2・5Y4/6
20. オリーブ黒色粘質土層5Y3/1
21. オリーブ黒色粘質土層7・5Y3/1
22. 明黄褐色粘質土層2・5Y6/8
23. 黄褐色粘質土層10YR5/6
24. 褐色粘質土層7・5YR4/6
25. 黄褐色砂質土層2・5Y4/4
26. オリーブ褐砂粘質土層2・5Y4/6
27. 黄褐色砂質土層10YR4/6
(2～5cm小礫多量に含む)
28. 褐色砂質土層10YR4/6
29. 明褐色粘質土層7・5YR5/6
30. 暗オリーブ褐色砂質土層2・5Y3/3
31. 黄褐色粘質土層10YR5/6
32. にぶい黄褐色粘質土層10YR4/3
(遺物多量に含む)
33. オリーブ黄色粘質土層5Y6/3
34. 極暗赤褐色粘質土層5YR2/3
35. 黄褐色粘質土層10YR5/6
36. 明赤褐色粘質土層5YR5/8
37. 暗褐色粘質土層10YR3/3
38. 暗褐色粘質土層10YR3/4
39. 黄褐色粘質土層10YR5/6
40. にぶい黄褐色粘質土層10YR4/3
41. 褐色粘質土層7・5YR4/6
42. オリーブ褐色粘質土層2・5Y4/6
43. オリーブ褐色砂質土層2・5Y4/3
44. オリーブ褐色粘質土層2・5Y4/6
45. 褐色粘質土層10YR4/6
46. 黄褐色砂質土層2・5Y5/3
47. 黄褐色粘質土層10YR5/8
48. オリーブ褐色砂質土層2・5Y4/6
49. 黄褐色粘質土層10YR5/8
50. オリーブ黒色粘質土層10Y3/1
51. 褐色粘質土層10YR4/6
52. 赤褐色粘質土層2・5YR4/8
53. 暗褐色粘質土層10YR3/3
54. 褐色粘質土層10YR4/4
55. にぶい黄褐色粘質土層10YR4/3
56. にぶい黄褐色粘質土層10YR5/3
57. 褐色粘質土層10YR4/4
58. 褐色粘質土層7・5YR4/4
59. 暗オリーブ褐色粘質土層2・5Y3/3
60. 撹乱
61. 撹乱
62. 褐色粘質土層7・5YR4/6
(6cm大の礫含む)
63. 褐色粘質土層7・5YR4/6
64. 暗褐色粘質土層10YR3/3
65. にぶい黄褐色粘質土層10YR4/3
66. 褐色粘質土層10YR4/4
67. 褐色粘質土層10YR4/4
(5～16cm大の礫含む)
68. にぶい黄褐色粘質土層10YR4/3
69. 黄褐色砂質土層10YR5/6
70. オリーブ褐色粘質土層5Y5/6
71. オリーブ黄色砂質土層7・5Y6/3

0 1:40 2m

第128図 B—12区北壁・東壁土層図



第129図　ＳＶ01遺構図



第130図　ＳＥ02・03遺構図

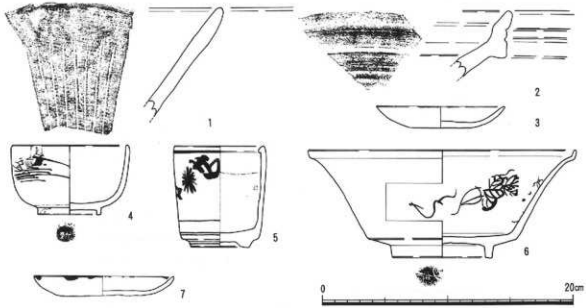
外面底部は手掌圧調整が施されている。口縁部には灯芯痕が残る。

出土遺物から概観すると、17世紀後半～18世紀初頭の遺構と考えられ、Ⅲ－２ａ期に属する。出土遺物の様相などから、上記の竈ＳＶ01とこの井戸ＳＥ03は、ほぼ同時期に使用されていたと思われる。

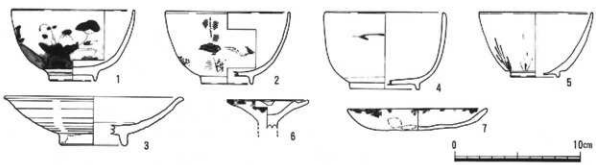
ＳＥ02

ＳＥ02（第130図・図版50）は、調査区中央のＳＥ03に隣接する位置で検出された、素掘りの井戸である。平面形は円形を呈し、直径0.7m、深さ0.9m以上を測る。ＳＥ03と同様に、湧水層については深く掘り下げることができなかったため不明である。川口宏海氏の井戸の分類（川口1999年ｂ）Ａ１ａ型式に属する。

第132図－１～３は肥前磁器である。１は、染付碗である。口径9.8cm、器高5.7cm、高台径3.8cmを測る。外面体部には梅樹文が描かれる。高台畳付は露胎で、離れ砂が付着している。２は、色絵碗である。口径（推）10.1cm、器高5.8cm、高台径（推）4.2cm測る。外面体部には色絵によって松竹梅文が描かれており、内外面共に細かい貫入が入る。高台畳付は露胎である。３は、青磁端反皿である。口径（推）13.8cm、器高3.9cm、高台径（推）5.0cmを測る。高台全体は無釉である。見込みは蛇ノ目釉ハギされ、離れ砂が付着している。４は、京焼風陶器碗である。口径9.6cm、器高6.2cm、高台径5.6cmを測る。外面体部には呉須で文様（山水文か？）が描かれている。内面から外面高台付近まで透明釉を施している。高台は無釉で、「ハ」の字状に外へ開く。全体に火を受けた跡が見られる。１は大橋康二氏の編年Ⅳ期、２・４は皿期に属する。５は、京・伊賀・信楽焼陶器碗である。口径9.2cm、器高5.2cm、高台径3.8cmを測る。外面体部には鉄釉で小杉文を描き、内面から外面腰折部まで透明釉を掛ける。高台は無釉で、小杉文の葉は少ない。内面見込みは強く落ち込み、最深部はかなり器壁が薄くなっている。６は、柿釉有脚灯明受皿である。口径6.5cm、受け部径4.2cmを測り、脚部は欠損している。ロクロ成形で、受け部は円盤状の粘土をハリツケて成形。開口部は、左右からＶ字に切り込まれている。内面から外面口縁部直下まで透明釉を掛ける。口縁部外面には油が流れて焦げた痕が残る。７は、土師質土器灯明皿である。口径11.2cm、器高1.7cmを測る。胎土は淡黄色（2.5Y 8/3）を呈しており、手づくね成形である。口縁端部内外面は横ナデ調整、底部は指頭圧痕が残る。見込みは丁寧にナデ調整され、口縁部には灯芯痕が残る。



第131図　ＳＰ12（１・２）・ＳＶ01（３）・ＳＥ03（４～７）出土遺物



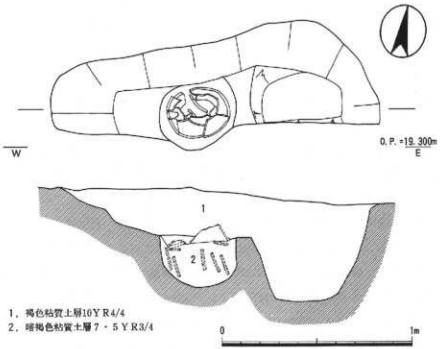
第132図　ＳＥ02出土遺物

出土遺物を概観すると、17世紀後半～18世紀初頭（第132図－１～４）と18世紀後半～19世紀前半（第132図－５～７）の遺物に分かれる。17世紀後半～18世紀初頭の年代に入る遺物の多くは、二次焼成を受けた痕が見られる。恐らく、井戸を埋める際に付近にあった焼土処理土壌の遺物が混入したと考えられる。このことからこの井戸の本来の時期は18世紀後半～19世紀前半と考えられ、Ⅲ－３期に属する。

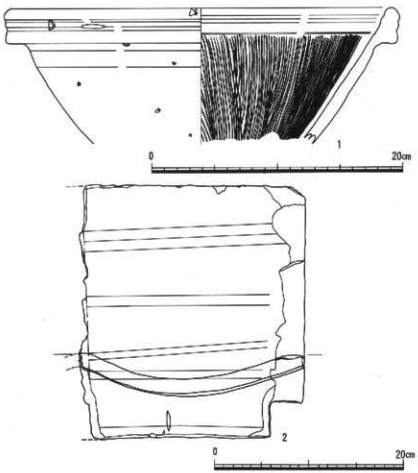
ＳＹ01

ＳＹ01（第133図・図版50）は、調査区中央南側に位置する、水琴窟ではないかと考えられる遺構である。掘形の平面形は円形を呈していると思われる。（遺構南端は調査区外へ延びている。）掘形の直径0.4m、深さ0.3mを測る。上部構造については、擂鉢を逆位に据えた水琴窟本体の上部から上が欠損しているため、不明である。下部構造は、水琴窟本体の擂鉢の下に、桟瓦を立てた状態で並べている。この調査区の南側のＢ－４区ではこのＳＹ01に接する付近から別個体の水琴窟が検出されていることや、第１次面で検出されている屋敷境と見られる溝（第１次面ＳＤ01）から南側にこの遺構が位置することなどより、ＳＹ01はＳＤ01より南側の、Ｂ－４区にかけて存在した建物に付属する遺構ではないかと考えられる。

第134図－１は、瓷焼擂鉢である。口径30.5cmを測る。擂目は19本単位で、時計回りに施している。口縁部外縁帯直下までヘラケズリ調整が施され、口縁部と内面擂目との間に、一条の沈線が入る。白神典之氏の



第133図　ＳＹ01遺構図



第134図　ＳＹ01出土遺物

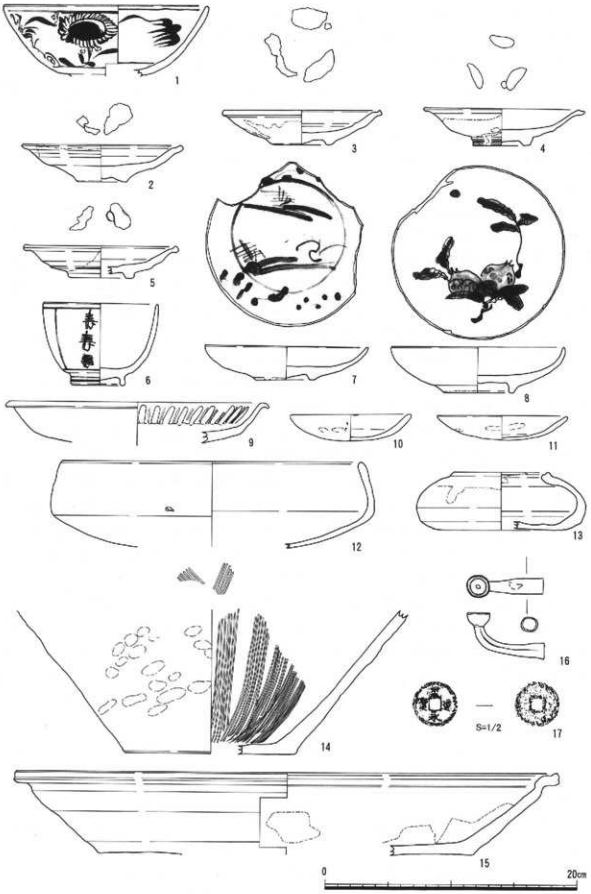
分類（白神1990年）Ⅲ類に属する。2は、桟瓦である。全長27.5㎝、厚さ1.6㎝を測る。凹面は、横方向のヘラミガキ、凸面は横方向のヘラナデ調整。側面は全てヘラナデ、凹面前方部のみ面取りされている。凹面前方部から3分の2のところまで変色しており、瓦が重なっていた痕跡であると思われる。したがって、三枚葺きと考えられる。

出土遺物から概観すると19世紀前半～後半の遺構と考えられ、Ⅲ－3ｂ期に属する。

ＳＫ66

ＳＫ66（表6・図版50）調査区北東部に位置する。平面形は円形を呈する。遺構北端は調査区外へ延びている。直径0.8m、深さ0.4mを測る。埋土は、暗褐色粘質土層（10ＹＲ3/3）で1層である。この遺構からは、良い一括資料が得られたため、計測も行った（第5章2節参照）。

第135図－1は、中国製磁器赤絵碗で、漳州窯系のいわゆる呉須赤絵碗の典型的な製品である。口径（推）16.4㎝を測る。外面体部には花鳥文、内面体部には雲文が描かれている。森村健一氏の分類（森村1995年）の五彩鉢Ａ内湾型、編年Ⅱ期に属する。2～5は、唐津焼溝縁皿である。2は、口径（推）11.7㎝、器高2.6㎝、高台径5.2㎝を測る。内面から外面口縁部直下まで鉄釉が施され、高台は露胎である。見込み、高台畳付には砂目積み痕が残る。3は、口径12.7㎝、器高2.8㎝、高台径5㎝を測る。内面から外面口縁部直下まで灰釉が施され、高台は露胎である。見込み、高台畳付には3箇所砂目積み痕が残る。4は、口径12.9㎝、器高3.1㎝、高台径4.6㎝を測る。内面から外面口縁部直下まで灰釉が施され、高台は露胎である。見込み、高台畳付には3箇所砂目積み痕が残る。この製品は、他の皿に比べて器壁が薄く、外面体部と高台の境が明瞭である。また、目痕の様相も他の3点とは違いが見られる。5は、口径（推）12.5㎝、器高3㎝、高台径（推）3.8㎝を測る。内面から外面口縁部直下まで灰釉が施され、高台は露胎である。見込み、高台畳付には砂目積み痕が残る。この2～5以外にもこの遺構からは多くの唐津焼溝縁皿が出土している。6～9は肥前磁器である。6は、染付碗である。口径9㎝、器高6.6㎝、高台径3.6㎝を測る。外面体部を六区画に区切り、寿字文を描く。高台畳付は露胎で、離れ砂が付着する。7・8は染付皿である。7は、口径（推）12.9㎝、器高2.8㎝、高台径4.7㎝を測る。見込みには海浜文が描かれている。高台畳付は露胎で、離れ砂が付着する。8は、口径13.8㎝、器高3.7㎝、高台径5.4㎝を測る。見込みには石榴文が描かれている。高台畳付は露胎で、離れ砂が付着する。9は、青磁端反皿である。口径20㎝を測る。内面体部に篦彫りと線彫りで、交互に縦筋を施している。釉薬はガラス質になっている。肥前磁器青磁製品の中でも初期段階のものである。2・5は、大橋康二氏の編年Ⅱ－1期，6・9は、Ⅱ－2期に属する。10～12は、土師質土器である。10は、灯明皿である。口径9.4㎝、器高2.3㎝を測る。手づくね成形で、胎土はにぶい黄褐色（10ＹＲ7/4）を呈する。内外面共に指頭圧調整。口縁部には灯芯痕が残る。11は、皿である。口径10.3㎝、器高2.3㎝を測る。手づくね成形で、胎土は淡黄色（2.5Ｙ8/3）を呈する。外面は指頭圧調整後ナデ調整、口縁部内外面共に横ナデ調整、見込みは不定方向のナデ調整が施されている。12は、焙烙である。口径（推）24.6㎝を測る。胎土はにぶい橙色（7.5ＹＲ7/4）を呈する。口縁部は内湾している。底部は外型作り成形で、未調整、外面には離れ砂が付着している。内面体部は横ナデ調整、外面体部は粗いナデが見られ、指頭圧調整時の凹凸が見られる。外面体部下半部から底部にかけて、煤が付着している。難波洋三氏の分類（難波1992年）Ｅ類に属する。13～15は、丹波焼である。13は、壺である。口径（推）7.3㎝、器高4.7㎝、底径（推）9.4㎝を測る。口縁上部は受け状の段を持ち、蓋を伴っていた可能性がある。外面口縁部上端から約2㎝下まで灰釉が掛けられる。外面体部下半部から底部にかけて、ヘラケズリを施す。14は擂鉢である。底径（推）13.4㎝を測る。擂目は7本単位で時計回りで施される。外面体部はユビオサエ痕が残るが、上部は回転ナデ調整が施されている。



第135図　ＳＫ66出土遺物

大平茂氏の編年（大平1992年）Ⅳ期に属する。15は、鉢である。口径（推）43cm、器高7.4cm、底径（推）18.6cmを測る。内面には、陶片を窯道具に利用したと思われる方形の痕が見られる。16は、銅製煙管の雁首部である。全長6.1cm、火皿部径1.8cmを測る。河骨形と呼ばれる形である。首部は火皿の下よりラウ接合部まで、1枚の銅板を巻いて作られている。火皿部と雁首部の接合部分に補強帯が見られる。古泉弘氏の編年（古泉1987年）Ⅲ期に属する。17は、寛永通寶である。直径2.5cm、厚さ0.2cm、重さ2.95gを測る。「寶」の貝の最終字角は、「ス」字で、古寛永通寶である。背文は持たない。

出土遺物から概観すると、17世紀前半～中頃の遺構であると考えられ、Ⅲ－1b期に属する。

ＳＫ132

ＳＫ132（表6・図版50）は、調査区北西部に位置する焼土処理土壙である。平面形は長方形を呈しており、長さ4.5m、幅2.9m、深さ0.6mを測る。

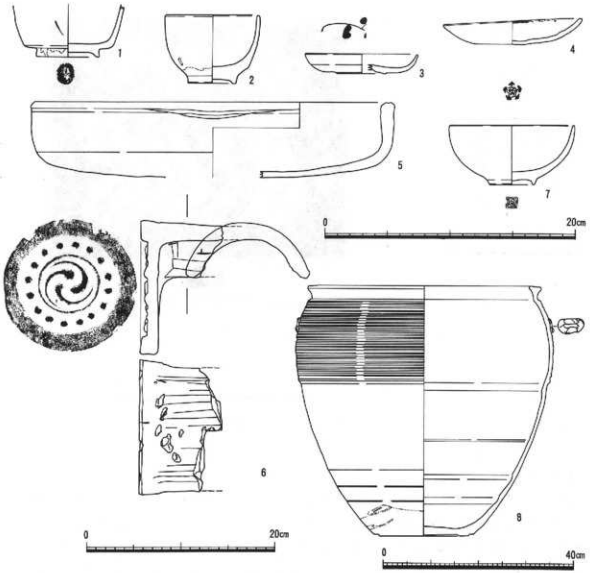
第136図－1は、京焼風陶器香炉である。高台径5cmを測る。内面は無釉であるが、外面体部には呉須で文様を描き、その上を外面高台際まで透明釉を掛ける。高台は無釉で、内面の削りは腰部より浅く、高台内中央には、縦1.3cm、横0.55cmの草書による「清水」の銘が入る。2は、唐津焼小杯である。口径7cm、器高5.1cm、高台径3.4cmを測る。内面から外面下半部分まで鉄釉を掛ける。高台は露胎で、外面下半部はヘラケズリが施されている。3は肥前磁器染付皿である。口径9cm、器高1.6cm、高台径3.8cmを測る。見込みには、花卉文が描かれている。高台畳付は露胎で、離れ砂が付着する。焼成時に変形したのか、高台ではなく、腰部の方が地についている箇所がある。1は、大橋康二氏の編年Ⅲ期、2はⅡ－1期、3はⅡ－2期に属する。4・5は、土師質土器である。4は、灯明皿である。口径10.8cm、器高2.2cmを測る。手づくね成形で、胎土は黄橙色（10YR7/8）を呈する。外面は指頭圧調整後、手掌圧調整している。内面体部は丁寧にナデ調整し、見込みは一定方向のナデ調整を施している。口縁部には灯芯痕が残る。5は、焙烙である。口径27cmを測り、胎土はにぶい橙色（7.5YR7/4）を呈する。底部は外型作り成形で、未調整、外面には離れ砂が付着している。体部内外面は横ナデ調整、見込みは一定方向のナデ調整を施す。口縁端部は、内外面共に肥大し、ヘラナデされる。耳はハリツケ後にヘラナデが施され、外面体部下半から底部にかけて、煤が付着している。難波洋三氏の分類D類に属する。6は、軒丸瓦である。全長（残）8.8cm、周縁部幅1.8cm、瓦当部圧1.9cm、瓦当部径14.3cm、文様区幅10.4cm、内区径7.1cm、厚さ1.6cmを測る。瓦当部文様は、内区に左巻き三ツ巴文、外区には一重圏線のまわりに珠文を13個巡らしている。瓦当周縁部は周縁に沿ってヘラミガキ、周縁側面及び瓦当部裏面周縁部は、周縁に沿ってナデ調整。軒瓦部前面には、離れ砂が付着している。丸瓦部凸面は縦方向にヘラミガキ調整、凹面には布目痕が残る。凹面両端部は縦方向のヘラケズリ調整、瓦当部と丸瓦部の接合部はナデ調整を施している。二次焼成を受けたと見られ、一部カーボンが飛んで赤褐色になっている。

出土遺物から概観すると、17世紀末～18世紀初頭の遺構と考えられ、Ⅲ－2a期に属する。遺物の様相から、元禄年間の火災に伴う焼土処理土壙であると思われる。

ＳＫ94

ＳＫ94（表6）は、調査区中央に位置する遺構である。平面形は不整円形で、長径0.9m、深さ0.3mを測る。

第136図－7は、肥前磁器青磁染付碗である。口径10cm、器高4.8cm、高台径3.6cmを測る。内面見込みには手描きの五弁花、高台内には二重圏内に渦福が描かれている。高台畳付は露胎である。大橋康二氏の編年Ⅳ期に属する。8は、丹波焼甕である。口径45.7cm、器高53.2cm、底径21cmを測る。口縁上部には3条の沈



第136図　ＳＫ132（１～６）・ＳＫ94（７・８）出土遺物

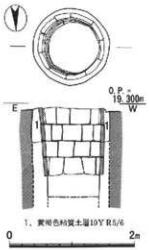
線が巡る。肩部はあまり張らないが、全体に丸い感じで、不遊環を持つ。口縁部はＴ字形でほぼ平坦であるが、若干内面に向けて内傾している。内面から外面下半部まで塗土を施している。

出土遺物から概観すると、18世紀前半～後半の遺構と考えられ、Ⅲ－２ｂ期に属する。

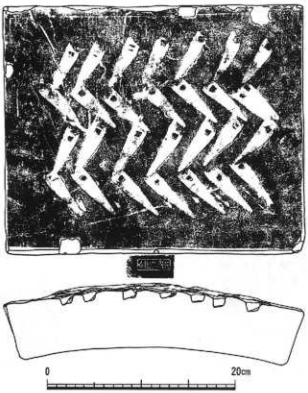
３．第１次面の遺構と遺物

この面は、17世紀後半～18世紀初頭を中心とした面であるが、18世紀後半から近代にかけての遺構も同時に確認した。第２次面で掘削した元禄・享保年間の火災の焼土処理土壙は、この面から確認される。また、調査区東側から検出されたＳＫ59（表６）は、出土遺物が少ないために時代を絞るのが難しいが、18世紀前半～後半の焼土処理土壙と思われる遺構である。

調査区北東部からは、狭い範囲ではあるが三和土（南北1.2m以上、東西2.3m）を検出した。この三和土の年代については、直下の遺構から遺物が出土していないために正確な年代は不明であるが、18世紀代のも



第137図　ＳＥ01遺構図



第138図　ＳＥ01出土遺物

のと思われる。

18世紀前半以降については、調査区南部から検出した溝ＳＤ01の南東側から、Ｂ－４区に延びる建物（Ｂ－４区第１次面ＳＢ01）の礎石列（第43図）を検出した。これによって桁行３間（南北約7.5m）、梁行６間（東西約12m）の調査区東側を間口とする建物が復元できた。また、ＳＤ01の西端の礎石からは、これもまた調査区南側のＢ－４区へと続く建物（Ｂ－４区第１次面ＳＢ03）が復元できた。桁行４間半（東西９m）、梁行２間半（南北4.5m）の棟続きの瓦葺き土蔵である。このＳＢ01・03については、Ｂ－４区で詳しく説明されている。調査区中央部からは、建物の遺構は検出することができなかったが、便所や井戸などを検出した。

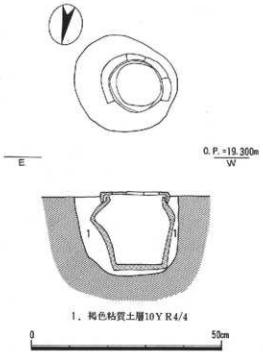
ＳＥ01

ＳＥ01（第137図・図版50）は、調査区西側中央に位置する井戸である。平面形は円形を呈し、掘形の直径0.6m、深さ0.7m以上を測る。湧水層については深く掘り下げることができなかったため不明である。井戸枠には井戸枠瓦が使用されており、一段10枚単位で４段積まれている。その下部には、直方体の延べ石を井桁に組んでいるのを確認した。井戸の様相から、川口宏海氏の分類Ａ１ｃ型式に属する。

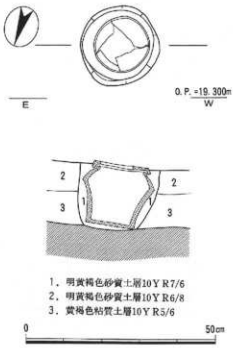
第138図は井戸枠瓦である。全長32.5cm、幅26.9cm、厚さ約5.8cmを測る。凸面には滑り止めのための楔形の除刻を１列に14箇所、「く」の字状に２列に施している。四方は面取りされ、片方の側面には離れ砂が付着している。横端面には縦3.7cm、横1.2cmを測る「金岡瓦宗」の銘が見られる。

埋土から遺物が出土していないため、確かな年代は分からないが、上記の井戸枠瓦から19世紀後半以降と考えられ、Ⅲ－３ｂ～Ⅳ期に属する。

ＳＩ04



第139図　ＳＩ04遺構図



第140図　ＳＩ05遺構図

ＳＩ04（第139図・図版50）は、調査区東部中央に位置する火消壷を胞衣容器に使用した、胞衣壷遺構である。掘形の平面形は円形を呈し、掘形の直径0.5m、深さ0.5mを測る。

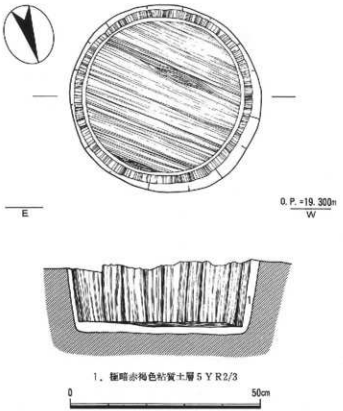
第145図－１・２は、土師質土器火消壷・蓋である。１は、蓋である。口径（推）17.8cmを測り、胎土は浅黄橙色（10YR8/4）を呈している。つまみ部は欠損している。粘土板に粘土紐を輪積みし、ロクロ成形している。蓋天井部内面と口縁部内外面を回転ナデ調整する。蓋外面には離れ砂痕が見られる。２は、口径14.4cm、器高19.3cm、高台径14.2cmを測り、胎土は淡黄色（2.5YR8/4）を呈している。算盤玉形のタイプである。外面体部は丁寧に回転ナデ調整が施され、内面体部は外面体部に比べて粗い回転ナデ調整が施されている。底部と体部の境界と、外面口縁部は回転ヘラケズリされている。肩部から体部にかけてのくびれが強い。底部は未調整で、「二」と墨書がされている。１・２は川口宏海氏の編年（川口1989年）Ⅱ－２期に属する。

出土遺物から概観すると、19世紀前半～20世紀初頭の遺構と考えられ、Ⅲ－３ｂ～Ⅳ期に属する。

ＳＩ05

ＳＩ05（第141図・図版51）調査区北西部に位置する胞衣壷遺構である。この遺構もＳＩ04と同様に火消壷を胞衣容器に使用している。掘形の平面形は円形を呈し、掘形直径0.6m、深さ0.2mを測る。この遺構も調査区東側を間口とする建物に伴う遺構であると思われるが、裏庭の隅にあたると考えられる場所に位置している。

第145図－３は、掘形から出土した柿釉灯明皿である。口径（推）8.8cm、器高1.4cmを測り、ロクロ成形である。内面から口縁部直下まで、透明釉が施されている。４・５は、土師質土器火消壷・蓋である。４は、口径13.6cm，器高3.6cmを測る。胎土は浅黄橙色（10YR8/4）を呈している。つまみ部はハリツケされ、接合部をナデ調整している。５は、口径11.5cm、器高14.2cm、底径11.1cmを測る。胎土は、浅黄橙色（10YR



第141図　ＳＵ01遺構図

8/3）を呈している。体部のラインが算盤型のタイプで、ロクロ成形である。外面体部は丁寧に回転ナデ調整が施され、内面体部は外面体部に比べて粗い回転ナデ調整が施されている。底部と体部の境界と、外面口縁部は回転ヘラケズりされている。肩部から体部にかけてのくびれが強い。底部は未調整である。

４・５は、川口宏海氏の編年Ⅱ－２期に分類される。

出土遺物から概観すると、19世紀～20世紀初頭の遺構と考えられ、Ⅲ－３ｂ～Ⅳ期に属する。

ＳＵ01

ＳＵ01（第141図・図版51）は、調査区中央部に位置する埋桶遺構である。掘形の平面形は円形を呈し、掘形の直径1.0m、深さ0.4mを測る。埋桶内からは、遺物の実測図は掲載しなかったが、瀬戸・美濃焼磁器染付朝顔型小便器の破片が出土しており、便槽用桶として使用されていたと思われる。本調査区北側での第167次調査Ｂ－15区（未報告）において、本調査区北側と接する辺りから屋敷境の溝を検出しており、後述する屋敷境の溝と考えているＳＤ01と、この溝の間に建っていたと思われる調査区東側を間口とする建物に伴う遺構であろうと思われる。19世紀後半以降であると考えられ、Ⅲ－３ｂ～Ⅳ期に属する。

ＳＵ02

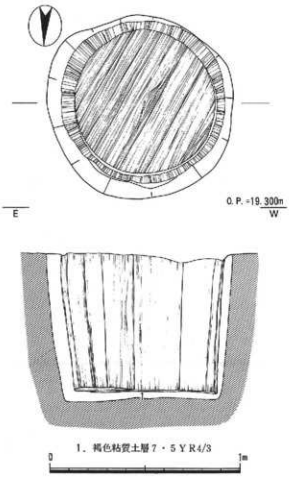
ＳＵ02（第142図・図版51）は、調査区中央部、ＳＵ01の西側に位置する埋桶遺構である。掘形の平面形は円形を呈し、掘形の直径1.0m、深さ0.8mを測る。この埋桶遺構は、次に述べるＳＷ01の直下から検出したこと、すぐ東側からも便槽用桶ＳＵ01を検出したことから、この遺構も便槽用埋桶であると考えられる。この遺構の年代については出土遺物が無いため明確ではないが、ＳＷ01の直下から検出されたことなどから、19世紀後半～20世紀の遺構であると考えられ、Ⅲ－３ｂ～Ⅳ期に属する。

ＳＷ01

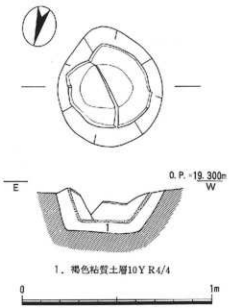
ＳＷ01（第143図・図版51）は、調査区中央部に位置する埋甕遺構である。掘形の平面形は円形を呈し、掘形の直径0.56m、深さ0.22mを測る。埋甕内側には白色物が付着しており、便槽用として使用されていたものと思われる。

第145図－６は、大谷焼鉢である。口径（推）65.4㎝、器高29.8㎝、底径29.8㎝を測る。体部の成形は三段階に分けて行われており、口縁部は外側に折り曲げられている。内面から口縁部外縁帯直下まで鉄釉が施される。底部は無釉で、離れ砂が付着している。口縁部上面には、転々と目痕が残る。底部には墨書が見られる。内面には白色物が付着している。川口宏海氏の分類（川口1992年）３型式に属する。

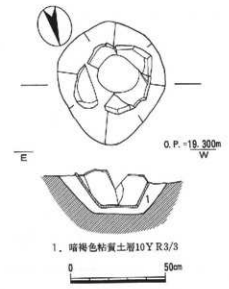
ＳＵ01・02・ＳＷ01ともに同じく、調査区東側を間口とする建物に伴う遺構であると思われる。出土遺物から概観すると、20世紀代の遺構であると考えられ、Ⅳ期に属する。



第142図　ＳＵ02遺構図



第143図　ＳＷ01遺構図



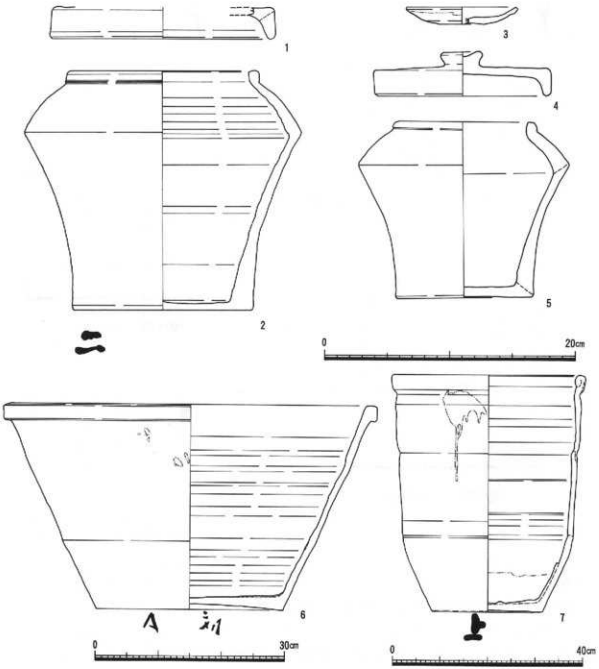
第144図　ＳＷ02遺構図

ＳＷ02

ＳＷ02（第144図・図版51）は、調査区北側中央部に位置する埋甕遺構である。掘形の平面形は円形を呈し、掘形の直径0.6m、深さ0.2mを測る。埋甕内側にはＳＷ01と同様に白色物が付着しており、便槽用として使用されていたものと思われる。この遺構のすぐ北側からも埋甕遺構ＳＷ03（表６）を検出した。ＳＷ02・03はあまり時期差は無く、セットで使用されていた可能性がある。

第145図－７は、大谷焼甕である。口径（推）37.4cm、器高50.1cm、底径23.2cmを測る。この製品もＳＷ01（第145図－６）の大谷焼鉢と同様に３段階に分けて成形されるが、口縁部は内側に折り曲げられている。底部を除いて全面に鉄釉を掛け、肩部に少し薄い色調の釉を施している。口縁部上面は釉を剥いでいる。内面体部には外面体部と違い、釉を施したときの刷毛の痕が残る。底部は離れ砂が付着している。底部には墨書が見られる。内面には白色物が付着している。川口宏海氏の分類１型式に属する。

出土遺物から概観すると、20世紀代の遺構であると考えられ、Ⅳ期に属する。



第145図　ＳＩ04（1・2）・ＳＩ05掘形（3）・ＳＩ05（4・5）・ＳＷ01（6）・ＳＷ02（7）
出土遺物

ＳＤ01

ＳＤ01（第146図・図版51）は、調査区南側で東西に延びる溝である。検出長21m、内矩幅0.4m、掘形幅1.1mを測る。溝底部の高さは、東から西にかけてスロープ状に上がっており、東側と西側とでは約0.2mの比高差が見られ、流水方向は西から東である。溝の北壁は、0.5～0.6m程度の花崗岩を積んでいる。東壁に接している石と南側の一部には、直方体の切り石が使われている。南側の一部では、石材を並べる代わりに瓦を立てた状態で一列に並べている。また、土層断面を観察すると、溝底にコンクリートが使用されており、何度か作り替えられているものと思われる。『元禄七年（1694）柳沢吉保領伊丹郷町絵図』・『天保十五年

(1844) 伊丹郷町分間絵図」に見られる屋敷境と、この溝の位置はうまく合致する。このことよりこのラインは、17世紀末より屋敷境として代わらずに近代まで使用されていたことが分かった。

この溝の西端では、屋敷境一杯に建てられた、調査区南側Ｂ－４区へと延びる建物ＳＢ03（Ｂ－４区第１次面、第44図）を復元することができた。また溝の東側からは、溝に沿って礎石列を検出した。これも調査区南側Ｂ－４区へと延びる建物ＳＢ01（Ｂ－４区第１次面、第43図）である。これらの建物の年代については、19世紀前半～20世紀の建物であると思われる。詳細については第４節Ｂ－４区に詳しく述べられているのでここでは割愛する。

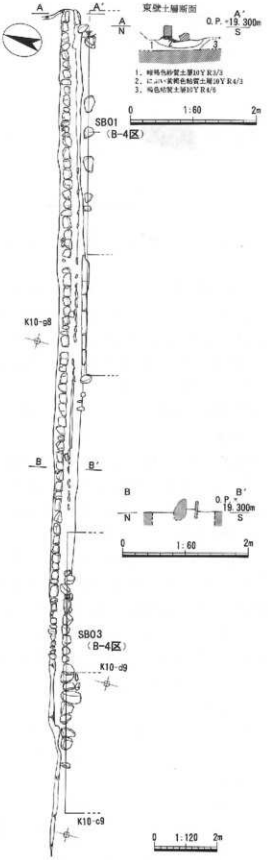
第147図－１は、溝掘形から出土した肥前磁器染付碗である。高台径（推）4.8cmを測る。「ハ」の字形高台を持ち、体部は腰が張るタイプの碗である。断面形は、見込み部分が落ち込んだゆるやかな「Ｖ」字を描く。外面体部には牡丹文（？）が描かれる。高台畳付は露胎である。大橫康二氏の編年Ｖ期に属する。２は、溝埋土から出土した均整唐草文軒平瓦である。全長（残）6.7cm、瓦当厚3.9cm、文様区厚2.1cm、上周縁部幅1cm、周縁部高0.7cm、顎上部厚1.4cm、顎上部厚2.7cmを測る。平瓦部凹面は、丁寧なナデ調整、凸面は未調整である。凹面顎部周縁は、横方向のナデ調整が施されている。

出土遺物から概観すると、18世紀末～20世紀代の遺構と考えられ、Ⅲ－３ａ～Ⅳ期に属する。

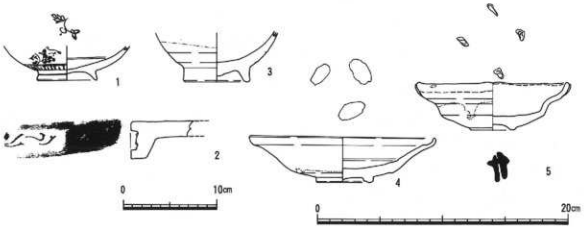
ＳＫ02

ＳＫ02（表６）は、調査区南東部に位置する土壙である。遺構の平面形は円形を呈し、直径0.9m、深さ0.2mを測る。埋土は２層からなり、上層は暗褐色（10ＹＲ3/3）、下層はオリーブ褐色粘質土層（2.5ＹＲ4/6）である。

第147図―３～５は、唐津焼である。３は、碗である。高台径（推）4.9cmを測る。内面と外面下半部に銹釉を施しているが、外面体部は二次焼成を受けた為なのか、白く濁った釉色になっている。４・５は、皿である。４は、溝縁皿で、口径14.6cm、器



第146図　ＳＤ01遺構図



第147図　ＳＤ01掘形（１）・ＳＤ01埋土（２）・ＳＫ02（３～５）出土遺物

高3.8cm、高台径4.8cmを測る。内面から腰折部まで灰釉を掛け、腰折部から高台際まではヘラケズりされている。見込み、高台畳付には３箇所の砂目積み痕が見られる。５は、口径（推）11.8cm、器高3.8cm、高台径3.4cmを測る。体部で腰が強く折れ、口縁部を４箇所（推定）押し窪めている。内面から外面体部腰折部まで灰釉が掛かる。内面見込みに、胎土目痕が４個所残る。高台内には墨書が見られる。３・４は、大橋康二氏のⅡ－１期、５はⅠ期に属する。

出土遺物から概観すると、17世紀前半～中頃の遺構と考えられ、Ⅲ－１ｂ期に属する。

ＳＫ30

ＳＫ30（表６・図版51）は、調査区北部中央に位置する焼土処理土壙である。遺構の北端は調査区外へと延びており、本調査区北側での第167次調査Ｂ－15区（未報告）で、この遺構の続きと思われる遺構が検出されている。平面形は長方形を呈し、長径4.7m、検出幅2.1m、深さ0.5mを測る。東側を間口とする建物に伴う処理土壙であると思われる。

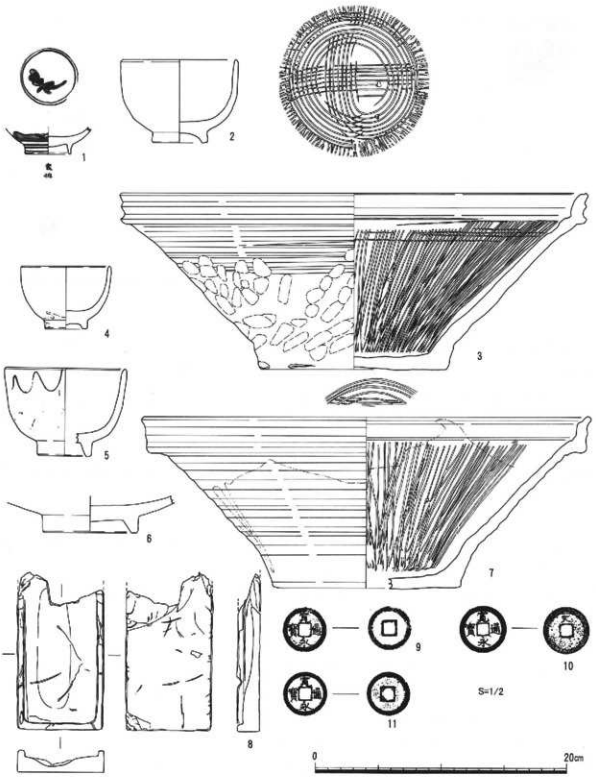
第148図－１は、肥前磁器染付碗である。２は、唐津焼碗である。口径（推）9.0cm、器高6.7cm、高台径4.4cmを測る。全体に透明釉を掛ける、いわゆる「呉器手碗」である。１・２は、大橋康二氏の編年Ⅲ期に属する。３は、丹波焼擂鉢である。口径37.2cm、器高14.1cm、底径14.8cmを測り、擂目は８本単位で時計回りに施される。外面体部にはユビオサエ痕が強く残り、口縁部外縁帯から下約4cm位の所まで回転ナデ調整を施す。底部は未調整。内面には陶片の窯道具痕が５箇所見られる。見込み擂目は中央に「＋」字に付けたあと、周囲に円形を付けている。内面口縁部下には、幾筋かの横方向の櫛目が見られる。大平茂氏の分類Ⅴ型式に属する。

出土遺物から概観すると、17世紀後半～18世紀初頭の遺構と考えられ、Ⅲ－２ａ期に属する。遺物の様相などから、元禄年間の火災に伴う焼土処理土壙であると思われる。

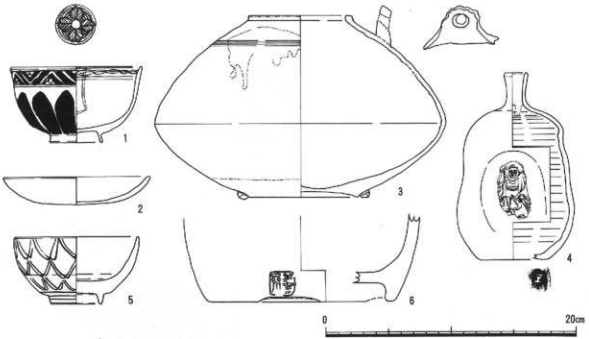
ＳＫ39

ＳＫ39（表６・図版51）は、調査区中央部ＳＫ30の南側に位置する焼土処理土壙である。平面径は不整形を呈し、長さ2.9m、幅2.1m、深さ0.4mを測る。この遺構もＳＫ30と同様に、調査区東側を間口とする建物に伴う処理土壙であると考えられる。

第148図－４は、唐津焼小杯である。口径（推）7cm、器高5.1cm、高台径3.4cmを測る。内面から外面下半部まで鉄釉を掛ける。高台は無釉である。第１次面ＳＫ132で出土した（第136図－２）と同種の製品である。



第148図　ＳＫ30（１～３）・ＳＫ39（４～11）出土遺物



第149図　ＳＫ24（１～４）・ＳＫ31（５・６）出土遺物

５は、肥前磁器染付碗である。口径（推）10.8cm、器高7.1cm、高台径（推）４cmを測る。外面体部には一重網目文が描かれている。高台畳付は露胎で、離れ砂が付着する。６は、嬉野焼鉢である。高台径７cmを測る。内面は銅緑釉、外面・高台内は透明釉を施す。高台畳付は露胎である。４は、大橋康二氏の編年Ⅱ－１期、５・６はⅢ期に属する。７は、丹波焼擂鉢である。口径35.2cm、器高13.6cm、底径15cmを測る。擂目は７本単位で時計回りに施される。外面体部は回転ナデ調整が施され、底部は未調整である。体部上半部には鉄釉が施される。大平茂氏の分類Ⅵ型式に属する。８は、粘板岩製硯である。残存長12.6cm、幅6.9cm、高さ1.8cmを測る。陸部は窪んでおり、良く使い込まれている。９・10・11は「寶」の最終角が「ハ」の字で、新寛永通寶である。９の背文は、無文である。直径2.3cm、厚さ0.1cm、重さ3.75ｇを測る。10は背文に「文」の字を持つ文銭（鋳造期間1668～1683年）である。直径2.5cm、厚さ0.1cm、重さ2.75ｇを測る。11の背文は、無文である。直径2.3cm、厚さ0.1cm、重さ2.65ｇを測る。

出土遺物から概観すると、17世紀後半～18世紀初頭の遺構と考えられ、Ⅲ－２ａ期に属する。元禄年間の火災に伴う焼土処理土壙であると思われる。

ＳＫ24

ＳＫ24（表６・図版51）は、調査区中央ＳＷ01の南側に位置する遺構である。平面形は不整形を呈し、長さ２m、幅1.7m、深さ0.2mを測る。埋土は１層で、灰褐色粘質土層（7.5ＹＲ4/2）である。

第149図－１は、肥前磁器染付媚反碗である。口径10.4cm、器高6.1cm、高台径4.2cmを測る。高台は、「ハ」の字に開き、体部は内側に抉りこまれている。外面体部にはコバルトで剣先文を描き、見込みには十字花文を描く。高台畳付は、露胎である。焼き継ぎが施されている。１は、大橋康二氏の編年Ⅴ期に属する。２・４は、備前焼である。２は皿で、口径（推）11.8cm、器高2.2cmを測る。口縁端部から内面にかけて赤どべが塗られている。外面はヘラケズリ調整が施されている。４は、徳利で、「べこかん徳利」などとも呼ばれる形態のものである。口径1.7cm、器高12.8cm、底径（推）5.8cmを測る。内面頸部から外面底部赤どべを塗る。胴部は三方向から窪みをつけ、その内の１箇所に型抜きの「大黒天」を貼り付ける。底部には縦

0.7cm、横0.5cmを測る「王」の銘が見られる。この銘から、伊部の北組窯の可能性があるが、今回参照した『原色陶器大辞典』(1972年)、『時代別　古備前名品図録』(1973年) には似通った印は見られたが、まったく同一のものは見られなかった。3は、京・伊賀・信楽焼土瓶である。口径8.2cm、器高14.5cm、底径9.2cmを測る。外面口縁部から、下半部にかけて鉄釉を施し、口縁部直下の2箇所に灰釉を流し掛けている。吊り手を装着する部分はハリツケによる。底部には三足が付く。

出土遺物から概観すると、18世紀後半～19世紀前半の遺構と考えられ、Ⅲ－3期に属する。

ＳＫ31

ＳＫ31（表6・図版51）は、調査区中央ＳＷ01の北側に位置する遺構である。平面形は不整円形を呈し、長径1.3m、短径1.1m、深さ0.5mを測る。

第149図－5は、肥前磁器染付碗である。口径9.8cm、器高5.4cm、高台径4cmを測る。外面体部は割筆で、一気に二重網目文を描いている。高台畳付は露胎である。大橋康二氏の編年Ⅳ期に属する。6は、橙色土（5Ｙ R6/6）と淺黄橙色（10Ｙ R8･3）を合わせた、練り込み手の土師質土器製品である。火鉢か。高台径14.4cmを測る。外面は丁寧に磨かれており、脚は一足残存しているが、復元すると三足になると思われる。器面全体に煤が付着しており、よく使用されていたようである。体部下半部に篆書体で銘（縦2cm、横2.1cm）が見られる。

出土遺物から概観すると、18世紀後半～19世紀前半の遺構と考えられ、Ⅲ－3期に属する。

ＳＫ06

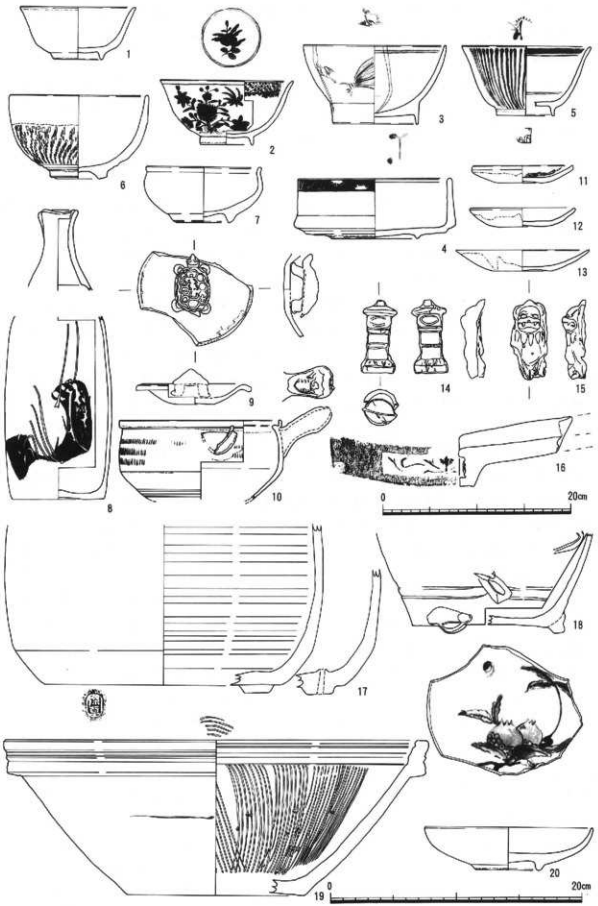
ＳＫ06（表6・図版51）は、調査区北西部に位置する遺構である。平面形は円形を呈し、直径0.5m、深さ0.2mを測る。埋土は3層からなり上層から黄褐色粘質土層（10Ｙ R5/8）・赤褐色粘質土層（5Ｙ R4/6）・暗褐色粘質土層（7.5Ｙ R5/8）、の順で堆積する。遺物が多量に出土しているため、廃棄土壙であると考えられる。

第150図－1～3・7は、肥前磁器である。1は、瑠璃釉端反碗である。口径（推）9.2cm、器高4.3cm、高台径（推）3.6cmを測る。腰が少し張り、口縁部は反っている。外面口縁部直下から高台際まで瑠璃釉を掛け、内面・高台内は透明釉を掛ける。高台畳付は露胎である。2は、染付端反碗である。口径（推）10.7cm、器高5.2cm、高台径4cmを測る。口縁部の反りは緩やかである。外面体部には花束文を描き、高台畳付は露胎である。器壁は薄手で、比較的上物である。3は、染付広東型碗である。口径11.2cm、器高6.4cm、高台径6.8cmを測る。断面形は、見込みに向かって強く落ち込む。高台畳付は露胎である。外面体部には雀文・稲束文が描かれ、見込みにも雀文が描かれている。焼成が悪く、全体にくすんだ感じであり、焼き継ぎが見られる。高台内には朱墨で文字らしいものが書かれている。4は、青磁染付段重である。口径11.6cm、器高4.9cm、高台形6.8cmを測る。外面口縁部には呉須で帯文が描かれ、その直下から腰折部まで青磁釉が施される。青磁釉は腰折部に溜っている。高台畳付・高台脇は、重ね焼の便を考えてか、青磁釉直下の窪み部は無釉である。高台・高台内には透明釉を掛ける。口縁部は露胎で、内面には透明釉が施される。1・3は大橋康二氏の編年Ⅴ期、4はⅣ期に属する。5・6は、瀬戸・美濃焼である。5は磁器染付端反碗である。口径10.2cm、器高5.6cm、高台形4.5cmを測る。高台は内側に抉りこまれ、「ハ」の字に少し開く。外面体部はコバルトで縦方向に線を描く。高台畳付は露胎である。6は陶器鐵手碗である。口径10.9cm、器高6.8cm、底径3.4cmを測る。内面から外面体部上半部まで灰釉、外面体部中央から下半部は鉄釉を掛ける。鉄釉部分にはトビカンナで装飾されている。見込みには目痕が残る。高台全体が露胎である。7は、三田焼青磁碗である。甕形の碗で、口径9cm、器高4.5cm、高台径4.2cmを測る。高台畳付を除いて全面に青磁釉が厚く掛け

られる。8・18丹波焼である。8は、燗徳利である。口径2.8cm、底径7.4cm、を測る。口縁部は注ぎ口を作る。外面体部には海老の体部を鉄釉で描き、その上に内面頸部から外面体部にかけて透明釉を施し、さらにその上から髭や脚を白土イッチンで描いている。底部は無釉であるが、製品を成形後に置いたと見られる作業台の跡がついている。18は、植木鉢である。底径11.6cmを測る。脚はハリツケで、復元すると3足になる。外面体部の文様も、ハリツケと陰刻による。9～11は、京・伊賀・信楽焼である。9は急須蓋である。口径7.2cm、器高2.8cm を測る。蓋はロクロ成形で、底部に右回転糸切り痕が見られる。蓋上面は灰釉を掛け、白色釉で装飾しており、中央部には砂を少量蒔いた上に亀をハリツケている。亀の体部は型抜き成形、頭部・足・尾は手づくねで、亀体部にハリツケている。亀にも灰釉を掛け、白色釉を掛ける。10は行平である。口径13cmを測る。外面はトビカンナで装飾され、その上には鉄釉が薄く塗られる。口縁部は、内外面共に無釉で、内面は灰釉が掛かる。把手の部分は合わせ型成形で、上部には亀が浮び上がっている。片口部と把手は、体部にハリツケられている。11は、灯明皿である。口径8cm、器高1.4cm、底径4cmを測る。内面にはヘラ状のもので「×」形の文様を付ける。外面口縁部直下から内面にかけて透明釉が掛けられるが、焼成が悪く、濁っている。灯明皿としての使用痕は見られない。12は、柿釉灯明皿である。口径8.3cm、器高1.7cmを測る。ロクロ成形で、外面口縁部直下から内面にかけて透明釉が掛けられる。底部には右回転糸切り痕が見られる。13～15・17は土師質土器製品である。13は灯明皿である。口径10.6cm、器高1.7cm、底部7cmを測る。ロクロ成形で、底部まで丁寧に削られている。内外面ともに焼けており、特に、内面はタール状の煤が付着している。14はミニチュア灯篭である。全長6cm、幅2.7cmを測る。胎土は橙色（7.5YR7/6）を呈する。型合わせ成形で、外面全体に雲母が付着している。灯篭の蓮座あたりには粘土のヨリが強く見られる。15は、ミニチュア獅子である。全長6.4cm、幅1.9cmを測る。胎土は、淡黄色（2.5YR8/3）を呈する。型合わせ成形である。前面には雲母が付着している。17は深草焼火鉢である。底径18.8cmを測り、胎土は橙色（7.5YR7/6）である。底部は粘土円板の上に粘土紐をのせ、ロクロ成形を行っている。外面体部は丁寧にミガキがかけられ、腰を折った形をしている。脚部は3足ついていたと考えられ、型作後にハリツケている。脚をハリツケ後に脚部底から体部へと直径0.3cmの穴を設けいている。底部には縦1.9cm、横1.3cmを測る「深草」の銘が見られる。また、体部下半部には焼成後に釘状のもので「可」と彫りこまれている。16は、均整唐草文桟軒平瓦である。全長（残）11.8cm、瓦当厚4.2cm、文様区厚2.3cm、上周縁幅0.9cm、周縁部高0.6cm、顎上部厚1.4cm、顎下部厚2.7cmを測る。平瓦部凹面は、丁寧なナデ調整、凸面は未調整である。凹面顎部周縁は横方向ナデ調整されている。瓦当部前面には離れ砂が付着している。19は、堺焼擂鉢である。口径32cm、器高12.4cm、高台径14cmを測る。擂目は右へ回し、9本単位で入れる。外面は口縁部外縁帯直下まで回転ヘラケズリを行う。口縁部内面は、回転ナデ調整を行う。底部には離れ砂が付着している。白神典之氏の分類II類に属する。

図版56－14・15は、土師質土器人形である。断片であるため分かりにくいが、猫ではないかと思われる。胎土は浅黄橙色（7.5YR8/3）を呈する。型合わせ成形で、外面には雲母が付着している。伏見人形か。15は、清水焼かと思われる急須である。煎茶用の急須の把手部分であると思われる。器壁は非常に薄く、0.2cmである。縦1cm、横0.9cmを測る六角形「○」の中に、「清」の文字が入る銘を持つ。この銘は、京都の陶家清水六兵衛の用いる銘と大変似通っている。しかし清水六兵衛の用いる銘では「清」の字を囲む六角の上辺は水平面「○」を持ってきており、今回出土したこの製品の銘は、上辺に角がきており、相違点が見られる。

ＳＫ08出土遺物



第150図　ＳＫ06（1～19）・表採（20）出土遺物

図版56－12は、肥前磁器色絵碗である。胎土には黒い含有物が見られる。外面体部には松竹梅文が施される。大橋康二氏の編年Ⅲ期に属する。この遺構の年代は、17世紀後半以降で、Ⅲ－２ａ期に属する。

表採遺物

第150図―20は、肥前磁器染付皿である。口径（推）13.2㎝、器高3.4㎝、高台径5.0㎝を測る。見込みには柘榴文が描かれている。高台畳付は露胎で、離れ砂が付着する。第１次面のＳＫ66の遺物（第135図―８）と同種の製品で、大橋康二氏の編年Ⅱ－２期に属する。

４．まとめ

Ｂ－12区では、16世紀前半～17世紀中頃の面である第２次面、17世紀後半～18世紀初頭及びそれ以降の遺構を検出した第１次面の２面の遺構面を確認した。これより順を追って説明したいと思う。

今回の調査で一番古い年代を示したのは、第２次面調査区東側から検出した、16世紀前半～中頃の掘立柱建物の柱穴ＳＰ12である。この柱穴は、本調査区南側のＢ―４区第４次面で検出した、ＳＢ01の柱穴の一部であると考えられる。（第24図）。この時期の遺構はこれのみである為、建物の周辺の様相については分からなかった。この建物以降、16世紀後半から17世紀前半までの間については、遺物を伴う遺構が無く、今回の調査では様相をつかむ事ができなかった。17世紀前半～中頃ではＳＫ66が見られる。この土壙からは、この時期の良好な一括資料が得られた。この他、掘立柱建物の柱穴が散在し、建物が建っていた可能性が高い。

調査区西側で検出した南北に延びる溝ＳＤ03は、本調査区北側に位置するＢ―10区の第４次面で検出されたＳＤ13から延びる溝である。Ｂ－10区のＳＤ13の出土遺物から、ＳＤ03の時期は17世紀前半～後半であると分かる。溝は、調査区北側より南へ1.7m伸びた所で終わっている。このＳＤ03の東側で検出したＳＤ02もまた、Ｂ－10区の第４面で検出されたＳＤ14に続く溝である可能性がある。ただこの遺構からも出土遺物が見られず、ＳＤ14の出土遺物から、17世紀前半～後半の遺構であるといえる。『元禄七年（1694）柳沢吉保領伊丹郷町絵図』を見ると、「油ウリ吉兵衛」の住む屋敷地の奥行きが十四間六寸（28.5m）と記述されており、調査区東側の道路から測るとＳＤ02の位置に当たることから、少なくともこの溝の示す17世紀前半～後半から、絵図の描かれた17世紀末までは同じ屋敷境を使用していることが分かった。

『寛文九年（1670）伊丹郷町絵図』や『元禄七年（1694）柳沢吉保領伊丹郷町絵図』を見ると、猪名野神社参道に沿って建物が建ち並ぶ姿が描かれており、絵図からも、この場所に建物が建っていたことが伺える。17世紀後半～18世紀初頭の主な遺構として、調査区中央部から井戸ＳＥ03と竈ＳＶ01、及び調査区の各所で焼土処理土壙（ＳＫ132・30・39）を検出した。この井戸と竈は位置的にも調査区西側を間口とする建物があり、その建物に属するものではないかと思われる。一方調査区の各所で検出された焼土処理土壙の多くは、元禄期の火災に伴う処理土壙であった。享保期のものと思われる焼土処理土壙は、Ｂ－４区で検出している焼土処理土壙の続きと考えられるＳＫ156がそうである。このことより、この調査区でも、元禄・享保期両方の火災の被害に遭っていることを確認することができた。

18世紀中頃以降の建物については、不明な点が多かった。調査区南部に検出した溝ＳＤ01は、『天保十五年（1844）伊丹郷町分間絵図』に見られる屋敷境と合致し、屋敷境の石積み溝である。この溝を境にして、東側の猪名野神社参道側を間口とする建物が建っていたものと思われる。礎石などが検出されておらず、建物の規模についてはほとんど不明であるが、第１次面の説明で触れた調査区北東部に検出した三和土は、上層から焼土層が見られないことなどから、17世紀後半～18世紀初頭の火災以降に建てられた建物に伴う三和土であると思われる。また、基本層序で触れた第１次面より上層の三和土（第128図―20・21・50・73層）

についても、細かい年代については分からないが、前の三和土よりさらに後の年代を当てることができるということになる。これらの三和土は、調査区東側の道路より13m付近まで観察することができ、確実にこの辺りまで建物が建っていたことが分かる。調査区中央部から西側に掛けて検出した井戸ＳＥ01、便槽遺構ＳＷ01・02・03、ＳＵ01・02は、19世紀後半から20世紀にかけての遺構であり、この時期の建物がこれらの遺構が位置する辺りまでを範囲としていたことがわかる。ＳＤ01より南側東部については、Ｂ－４区ＳＢ01が19世紀前半～20世紀に、西部にはＢ－４区ＳＢ03が19世紀前半から20世紀にかけて建っていたことが分かった。このように19世紀前半遺構の建物については、ＳＤ01より南側の範囲では復元できた。しかし、ＳＤ01より北側については建物が建っていたであろうことは確認できたが、建物規模や様相を示す遺構を検出することができなかった。